

運送船一隻ヲ率非テ出發シ、占守島ヲ經テペトロバウロウスク、コンマンドルスキー等ノ偵察ヲ試ミシメ、來二十三日歸著セシムル豫定ナリ、トノ返電ニ接セシカ、尙同司令長官ニ向ヒ、堪察加方面ハ西北比利内地ト電信連絡ナキヲ利用シ、艦隊歸港ノコトハ或時機迄極テ秘密ニ附シ、世人ヲシテ同分遣隊ハ恰モ堪察加方面ニ在リテ、同地方ヲ占領シ居ルモノ、如ク信セシムルヲ得策ト認メ、其ノ主旨ニ依リ諸事然ルヘク取計ヲハレタキ旨ヲ致セリ、已ニシテ二十日第四艦隊ヨリ、赤城、摩耶、鳥海、宇治、第一、第十、第十一、第二十艇隊ヲ除キテ所管鎮守府管内ノ警備ニ任セシムルコトニ定メ、此ノ旨關係ノ各司令長官ニ令セリ、次テ二十二日第三艦隊參謀長海軍少將齋藤孝至ヨリ、片岡司令長官カ現下ノ狀況ニ鑑ミ、北海ノ重要地點及ヒ新領土ノ哨戒警備ニ關シ、竝ニ敵ノ軍資輸入杜絶ニ對スル利ヲ圖リ、且教育訓練ノ便ヲ考ヘ、將ニ變更セントスル艦隊配置、(本篇第二章第三節第一目參照)及ヒ香港丸、八幡丸ヲシテ時機ヲ見テ再樺太東北岸ヲ巡航セシムル見込ナルコト、須磨和泉ハ函館ニ現出セシメ差支ナキヤ等ノ電報到リシヲ以テ、二十三日之ニ對シ、兩艦ノ函館方面ニ現出スルハ差支ナキコト、間宮海峽ノ北口ヨリ入港スル疑アル船舶ニ對シ、適宜ノ警戒ヲ加ヘラレンコトヲ望ムコト等ノ答電ヲ爲ス、二十五日伊集院軍令部次長ハ、大本營海軍參謀海軍大佐江頭安太郎、同海軍中佐子爵小笠原長生ヲ隨ヘ、樺太方面視察ノ途ニ上レリ、(軍令部次長ハ二十五日東京ヲ發シ二十七日小樽ニ著シ二十八日熊野丸ニ乗船シテ視察ノ途ニ上リ間宮海峽カストリイ灣附近樺太沿岸海豹島等ノ巡視ヲ終ヘ九月二十五日青森ニ著シ二十六日熊野丸ヲ退艦シテ同日青森ヲ發シ二十七日歸營セリ詳細ハ本篇第二章第三節第十目ニ揭ク)此ノ時既ニ八月十日ヨリポーツマウスニ開キタル日露講和談判ハ、著々其ノ歩ヲ進メ、二十九日ニハ條件ノ要領ヲ協定シ終リ、休戰議定書ノ締結ニ移リ、九月一日同書

ノ條款ヲ協定シテ即日調印セリ、其ノ休戰地域ハ兩國陸海軍司令官ニ於テ決定スヘキコト、ナリシヲ以テ、五日伊東軍令部長ハ、先ツ東郷聯合艦隊司令長官ニ、右條款ト併セテ大本營ノ希望スル海軍休戰地域ヲ通報シ、次テ七日ニ至リ愈々彼我海軍司令官ノ間ニ於テ其ノ細條ヲ協定シ、且之ヲ實行スヘキコト等ノ命ヲ發セリ、(本篇第四章ニ詳ナリ)次テ八日東郷聯合艦隊司令長官及ヒ片岡第三艦隊司令長官ニ向ヒ、十二日迄ニ上京スヘキヲ命シ、其ノ不在中朝鮮海峽方面ハ第二艦隊司令長官海軍中將上村彦之丞、北遣艦隊ハ出羽第四艦隊司令長官ヲシテ指揮セシムルコトト爲セリ、(東郷聯合艦隊司令長官ハ十二日ニ登營シ十八日東京ニ退京二十日佐世保ニ歸著敷島ニ乗艦シト爲セリ、片岡司令長官ハ十一日ニ登營シ十六日東京ヲ發シ十七日青森ニ歸著八雲ニ乗艦セリ)越エテ十月四日ニ至リ、伊東軍令部長ハ東郷聯合艦隊司令長官ニ向ヒ、竹敷要港部所屬ノ水雷艇隊ヲシテ、同要港部司令官海軍中將角田秀松ノ指揮下ニ復歸セシムヘキヲ命シ、既ニシテ十五日ニ至リ、講和條約批准交換了リシヲ以テ、十六日伊東軍令部長ハ東郷聯合艦隊司令長官ニ向ヒ、聯合艦隊ヲ東京灣ニ凱旋セシムヘキコト等ヲ命シ、又各地戰時指揮官ノ職ヲ解カレ、且戰役ノ爲メ敷設シタル各地ノ水雷防備等ヲモ撤去セリ、

第二章 樺太占領

第一節 樺太南部ノ占領及ヒ沿海州ニ對スル作動

第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

樺太占領ノ議定ルヤ、東郷聯合艦隊司令長官ハ六月十九日伊東軍令部長ヨリ、相當ノ兵力ヲ分遣

シテ樺太攻略軍ト協力セシムヘキ命ニ接シタリ、(樺太攻略軍ハ獨立第十三師團ニシテ歩兵第二十五、第二十三大隊機關砲隊(四門)一隊砲兵彈藥縱列三個步兵彈藥縱列二個糧食縱列三個野戰病院四個野戰電信隊兵站司令部六個等ヨリ成ル而テ同師團長ハ陸軍中將原口兼濟第二十五旅團長ハ陸軍少將竹內正策第二十六旅團長ハ陸軍少將內藤新二郎兵站監ハ陸軍少將山田保永ナリ附表參照スヘシ)是ニ於テ片岡第三艦隊司令長官ヲシテ、第三艦隊(第五戰隊(八雲、吾妻、春日、日進)郎兵站監ハ陸軍少將山田保永ナリ附表參照スヘシ)是ニ於テ片岡第三艦隊司令長官ヲシテ、第三艦隊(第五戰隊(八雲、吾妻、春日、日進)津洲第二驅逐隊(不知火、叢雲、夕霧、陽炎)第六驅逐隊(皐月、曉)第九艇隊(蒼鷹、雁、燕、鸛、通報艦八重)第四艦隊(第七山假裝巡洋艦八幡丸、香港丸、春日丸、水雷母艦熊野丸)軍艦十九隻水雷艇四隻計二十三隻ヨリ成ル)第四艦隊(戰隊(壹岐、鎮遠、見島、沖島)第八戰隊(嚴島、松島、橋立)第九戰隊(赤城、島海、摩耶、宇治)第十一艇隊(第七十三號、第七十二號、第七十四號、第七十一號)第二十艇隊(第六十五號、第六十二號、第六十四號、第六十三號)第十五艇隊(雲雀、鶴、鵜、鶺鴒)假裝巡洋艦臺南丸、滿州丸)軍艦十三隻水雷艇十二隻)及ヒ第一艦隊ノ第一驅逐隊(吹雪、村雨)ヲ率非テ之ニ當ラシメント欲シ、即日同司令長官ニ向ヒ左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

薩哈噠島占領ノ任務ヲ有スル獨立第十三師團ハ先ツ第一次上陸ヲ以テコルサコフヲ占領シ次テ第二次上陸隊ヲ進發セシメテアレキサンドル港ヲ攻略セントス而テ其ノ第一次上陸隊ヲ搭載セル輸送船隊ハ六月三十日迄ニ陸奥海灣ニ於テ出發準備ヲ整フル豫定ナリ

二、貴官ハ聯隊機密第四五四號聯合艦隊命令(編者曰ク同命令ハ第二章ニ掲載セリ)ニ據ル分遣艦隊ヲ率非津輕海峽哨戒ノ任務ニ服スルト共ニ獨立第十三師團ノ陸奥海灣以北ニ於ル海上輸送ヲ指導シ且獨立第十三師團長原口兼濟ト協議シテ其ノ上陸ヲ掩護スヘシ

三、貴官ハ陸奥海灣到著ノ日ヨリ其ノ任務ニ關シテハ直接大本營ノ指揮ヲ受クヘシ

四、當地點出發ノ日及ヒ陸奥海灣到著ノ日ヲ豫定セハ本職ニ報告スヘシ

（聯隊機密第
四五五號）

片岡第三艦隊司令長官ハ此ノ命ニ基キ、二十日左ノ命令ヲ麾下ニ發セリ

一、第三期作戰ノ開始ニ當リ本職ハ第三艦隊第四艦隊（第一艇隊第十艇隊ヲ除ク）第一驅逐隊及ヒ臨時指揮下ニ屬シタル特設船舶部隊ヲ率井大湊ヲ本根據地トシ北海方面ニ作戰セントス而テ先ツ津輕海峽千島水道ノ哨戒任務ヲ有ス

二、出羽第四艦隊司令長官ハ大湊到著ノ日ヨリ哨戒任務ニ服スヘシ

第三艦隊（第五戰隊及八重山缺ク）

第四艦隊

第一驅逐隊

四、本職ハ八雲ヲ率非二十一日當地出發二十五日大湊到著ノ豫定ナリ

編者曰ク第四項ハ始メ二十三日出發二十六日大湊著豫定トアリシ
カ二十一日ニ至リ丙隊機密第四八二號ヲ以テ本文ノ如ク改メラル

尙之ト同時ニ片岡司令長官ハ、出羽第四艦隊司令長官ニ向ヒ、對馬海峽警戒ノ任務ヲ上村第二艦隊司令長官ニ引繼キタル後、便宜大湊ニ回航シ、同地ヲ根據地トシテ、第三艦隊（第五戰隊及ヒ八重山ヲ除ク）

第四艦隊（第一、第十艇隊ヲ除ク）及ヒ第一驅逐隊ヲ指揮シ、津輕海峽千島水道ノ警戒ニ任スヘキコト等ヲ

命シ、（出羽司令長官ハ二十一日上村司令長官ニ引繼ヲ了シ、即日鎮遠松島臺南丸ニハ先發シテ隱岐國別府港ニ回航シ其ノ地ニテ出羽司令長官ノ到ルヲ待タシメ、第九戰隊ハ一單獨本州沿岸ヲ航シ、途次望樓ノ連絡ヲ保持ス、第十一、第十五艇隊（鷲ヲ缺ク）第二十艇隊ハ第三艦隊司令官海軍少將東鄉正路ノ指揮下ニ入り、八幡丸ハ一單獨朝鮮海峽方面ニ作戦スハ竣工次第何レモ速ニ大湊ニ回航スヘキコトヲ命シ、第一、第十艇隊ハ上村司令長官ノ指揮下ニ於テ朝鮮海峽方面ニ作戦スヘキコトヲ命シ、同司令長官ハ旗艦嚴島ヲ率非テ同日竹敷ヲ發シ、佐世保ニ回航シ、二十四日早朝同軍港ヲ發シ、二十五日午前別府沖ニテ鎮遠以下ヲ合セ、二十七日嚴島ノミ青森ニ入港セリ、他ハ大湊ニ入港セリ、而テ嚴島ハ青森ニテ片岡司令長官ノ旗艦八雲

十七

ニ會シタル後二十八日第三艦隊司令官海軍少將東郷正路ニハ、第六戰隊(千代田)母艦熊野丸、春日丸及ヒ第九、第十五第十一、第二十艇隊ヲ率テ竹敷ヲ發シ、三十日迄ニ大湊ニ回航シ、出羽司令長官ノ指揮下ニ入ルヘキコトヲ命シ、(東郷司令官ハ二十三日第六戰隊(千代田)及ヒ第九、第十五十七日大湊ニ著シ熊野丸ハ二十二日竹敷ヲ發シ舞鶴ヲ經テ春日丸ハ二二日第三艦隊ヲ率テ竹敷ヲ發シ舞鶴ヲ經テ二十三日竹敷ヲ發シ佐渡ニ見港ヲ經テ兩艦共二十七日大湊ニ入港セリ)又第三艦隊司令官海軍少將山田彦八ニハ、八重山ヲ率テ便宜吳軍港ニ回航シ、旗艦ヲ日進ニ移シ、日進、八重山ヲ率テ成ルヘク速ニ大湊ニ回航スヘキコトヲ命シ、八幡丸艦長海軍中佐川合昌吾ニハ、出羽司令長官ノ指揮ヲ受ケ大湊ニ回航スヘキコトヲ命シ、第一驅逐隊司令海軍大佐藤本秀四郎ニハ、便宜鎮海灣ヲ發シテ二十二日中ニ舞鶴軍港ニ到リ、吹雪、霞ノ二艦ヲシテ入渠艦艇塗換ヲ爲サシメ、三十日迄ニ大湊ニ回航スヘキコトヲ命シ、第五驅逐隊司令海軍中佐廣瀬順太郎ニハ、二十八日迄ニ大湊ニ回航スヘキコトヲ命シ、第三艦隊戰策ヲ定ムルコト左ノ如シ、

一、綱領

本戰策ハ第三艦隊ノ諸隊集團シテ敵艦隊ト會戰スルカ若クハ各隊單獨敵ト對戰スヘキ戰法ノ綱領ヲ策定セルモノニシテ他艦隊ト協同作戰ノ場合ニ於テモ可成本戰策ノ規定スル所ニ準據セントス然レトモ戰鬪ノ事素ト神妙ノ活劇ニ屬シ彼我ノ形勢ハ刻々變化シテ窮リナシ要ハ本戰策ヲ骨子トシテ臨機應變常ニ我カ優勢ヲ以テ敵ノ弱點ヲ打チ速ニ全局上ノ勝利ヲ得ルニアリ

二、各部隊ノ任務

一、第五戰隊ハ敵艦隊ノ主力ヲ擊滅スルニ任ス

二、第六戰隊ハ遊撃隊トシテ劣勢ナル敵ノ巡洋艦隊驅逐隊ノ擊破其ノ他敵ノ損傷艦孤立艦等ヲ擊滅スルヲ目的トシ機宜ヲ見テ我カ主力艦隊ト呼應シ敵ノ後尾ヲ脅威スヘシ又決戰期ヲ過クレハ第五戰隊ト共ニ追撃ニ任スルモノトス

三、八重山ハ戰鬪開始ト共ニ第五戰隊ノ傍ヲ去リ旗旒信號距離内ニ適宜占位ス又時機ニヨリ水雷艇隊ヲ指導セシム而テ日沒ニ至レハ戰隊ノ後方約五海里ニ占位シ敵驅逐艦ノ追尾ニ對シ警戒スルモノトス

四、香港丸八幡丸ハ戰鬪界以外ニ在リテ主トシテ戰果ヲ收ムルニ努メ又時機ニヨリ水雷艇隊ヲ指導セシム

五、各驅逐隊艇隊ハ晝戰中各其ノ所屬戰隊ノ非戰側適宜ノ所ニ占位シ敵ノ驅逐隊艇隊ノ我カ戰隊ニ迫ラントスルヲ見ハ之ヲ擊攘シ日中ハ勉メテ敵彈ヲ避ケ日沒近キニ至レハ令ナクシテ敵戰隊ニ近接シ日沒後直ニ襲撃ヲ決行スルモノトス

三、戰鬪陣形及ヒ戰鬪速力

戰鬪陣形ハ順番號單縱陣ヲ基本トシ機宜ニ應シ一齊回頭ヲ以テ單橫陣單梯陣或ハ逆番號單縱陣ヲ制ル

各隊ノ戰鬪速力

第五戰隊

十七海里

第六戰隊

微速力

半速力

驅逐隊艇隊

十五海里

四海里

戰闘速力ト微速力トノ中間

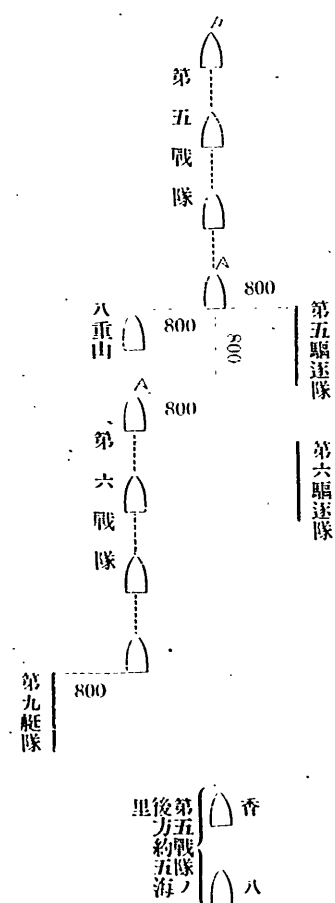
各其ノ定ムル所ニ依ル

(注意)

一、戰況ニ依リ速力ヲ加減スルコトヲ得

二、戰闘中回轉信號ハ素ヨリ速力信號モ揚クルヲ例トス

四、序 列



五、戰 法

單隊ノ戰闘ハ丁字戰法ヲ主トシ時ニ竝航若クハ反航戰ヲナサントス又劣勢ノ敵艦隊ヲ友隊ト共ニ夾撃スル時ハ乙字戰法ニ準據セントス

六、戰闘中ノ守則

- 一、敵ノ集散ニ依リ我カ隊ヲ分離スルコトアルモ勉メテ小隊單位ヲ保ツコト
- 二、損傷變災等ノタメ一時運動ヲ與ニスル能ハサル艦ハ單ニ不管旗一旒(夜間ハ赤燈)ヲ揚ケテ適宜列外ニ出ツルコト
- 三、友隊ノ運動相衝突セントスルトキハ後任部隊ハ先任部隊ニ航路ヲ讓ルコト

七、彼我ノ識別法

- 一、夜中彼我ヲ識別スルノ必要アル時ハ首席艦ニ倣ヒ(自)ノ二燈ヲ連掲ス
- 二、夜中驅逐艦水雷艇カ戰隊ニ近接スル時ハ鮮明ナル軍艦旗ト
ノ規定識別旒
ヲ掲ケ且(ト)ノ間暗號ヲ發光シ(キ)ノ答暗號ヲ見テ近ツクルモノトス

八、各部隊個々ノ戰策其ノ他砲煩水雷ノ使用ニ關スル事項等ハ各部隊指揮官ノ定ムル所ニ依ル

(丙隊機密第
四八五號)

之ト同時ニ山田第三艦隊司令官モ、亦第五戰隊ノ戰策ヲ定ムルコト左ノ如シ、
本戰策ハ第五戰隊カ單獨ニテ敵ニ當ルカ若クハ他隊ト協同シテ敵艦隊ト對戰スヘキ戰法ノ綱領ヲ豫定ス

一、艦隊區分

第二章 第一節 第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

第一小隊

(一)ロハ 雲 (二)吾 妻

第二小隊

(三)春日 (四)△日 進

艦船番號ハ戰闘中集散離合ニ關セス變更スルコトナシ

二、戰闘陣形

順番號單縱陣ヲ基本トシ機宜ニ應シ一齊回頭ヲ以テ單橫陣單梯陣或ハ逆番號單縱陣ヲ制ル

三、戰闘速力及ヒ舵角

十七節

半速力(戰闘力ト微速力トノ中間)

微速力

四節

(注意)

一、原速力ヨリ戰闘速力ニ増進スル時ハ約十回轉ツ、順次増加ス戰闘速力ヨリ減速スル時亦之ニ準ス

二、戰闘中回轉信號ハ素ヨリ速力信號モ揚クルヲ例トス

舵角十五度

四、戰 法

敵艦隊ノ勢力速力天候其ノ他ニ應シ丁字戰法竝航若クハ反航戰ヲナサントス要スルニ高速力ヲ利用シ常ニ有利ノ位置ヲ保持シ精確ナル砲火ヲ以テ變化窮リナキ對勢ニ應セン

トス

五、砲煩水雷ノ使用ニ關スル守則

(イ)發砲開始ノ時機ハ之ヲ令セス各艦長ノ所信ニ委ス然レトモ旗艦最モ敵ニ近接スル時ハ之ニ先タサルヲ要ス

(ロ)射撃ノ目標ハ自艦ノ砲力ヲ最大ニ發揮シ得ルモノヲ選擇スルニ在リ然レトモ敵ノ旗艦若クハ嚮導艦ヲ破壊スルコトハ全局上大ニ有利ナルコトヲ記憶スルヲ可トス

(ハ)當隊ノ戰法ハ砲煩ノ主用ヲ趣旨トセルカ故ニ特種ノ場合ノ外水雷發射ノ時機ヲ制ルカ爲メニ我力陣形ヲ變シ或ハ敵ニ近接スルコトナシト雖モ對戰中水雷利用ノ好機アレハ各艦任意ニ其ノ甲種水雷ヲ發射スヘシ此ノ際ニ於テハ三點以內ノ回頭ヲナスコトヲ得

六、各艦自由行動ヲ爲シ得ル場合

(イ)亂戰トナリタル時

(ロ)衝突ノ危險其ノ他艦ノ安危ニ關シ已ムヲ得サル時

自由行動ヲ採リタル後ハ番號ノ順序ニ關セス速ニ一列トナリ旗艦ニ追從スルコトヲ勸ムヘシ

七、夜間戰闘

(イ)夜中彼我ヲ識別スルノ必要アルトキハ首席艦ニ倣ヒ(四)ノ二燈ヲ連掲ス

(ロ)航海燈速力燈等ノ點滅ハ旗艦ニ準スヘシ

(丙隊機密第
四八六號)

尋テ二十一日片岡第三艦隊司令長官ハ、春日艦長海軍大佐加藤定吉ニ向ヒ、佐世保軍港ニ回航シテ揚艇機ノ取附ヲ爲シ、竝ニ其ノ期間ニ於テ完成シ得ヘキ必要ナル修理ヲ施行シ、速ニ大湊ニ回航シ本隊ニ合スヘキコトヲ命シ、北海ニ行動スル麾下艦隊ハ爾後北遣艦隊ト稱スヘキ旨ヲ達シ、同日旗艦ヲ春日ヨリ八雲ニ移セリ、偶伊集院軍令部次長ヨリ、去十二日宗谷郡サルフツ村ヘ露國人十七名漂著シ、(是等ハ皆コレサコフニテ五年乃至十年ノ入獄ヲ終ヘタル囚徒ニシテ兵役ヲ恐レ逃走シタルモノ)訊問ノ結果ノトコロ岬ヨリコレサコフ附近ノ海面ニハ水雷敷設シアルコト、コレサコフニハ常備兵四百名、義勇兵三百名、外ニ大砲七門アルコト、棧橋ヨリ日本領事館及ヒ商店等ニ至ルマテ、其ノ床下ニ地雷ヲ敷設シアルコト、ノトコロ岬コレサコフ燈臺ハ點燈セサルコト等ノ情報ヲ得タリ、トノ通報ニ接セリ、次デ二十一日片岡司令長官ハ、八雲ニテ鎮海灣ヲ發シ、青森ヲ經テ二十八日大湊ニ入り、其ノ他ノ艦艇モ漸次來會セリ、是ノ日伊集院軍令部次長ヨリ、去十九日山本海軍大臣ハ井上橫須賀鎮守府司令長官ニ向ヒ、薩哈噠島ノトコロ岬、知床岬、海馬島ノ南西端、禮文島神埼ノ四箇所ニ望樓ヲ設置シ、尙其ノ外ニ豫備トシテ三箇所分ノ望樓設置準備ヲ爲シ置クヘキコトヲ命セラレ、而テ前記四箇所ノ望樓建築ニ關シテハ、材料搭載ノ運送船ヲシテ艦隊ニ隨行セシメ著手セシムル豫定ナリ、トノ電報ヲ受ケタリ、(ノトコロ岬以下四箇望樓ノ開始月日ヲ舉グレハ下ノ如シノトコロ岬ハ七月二日、十一日禮文島ハ同月三十一日海馬島ハ八月一日知床岬ハ同月十二日ナリ)

又同二十二日艦隊附屬港務部長海軍大佐松村直臣ハ、東郷聯合艦隊司令長官ヨリ、特務艦隊ノ一部(當初北海ニ派遣セラレタル特務艦隊艦船ハ滿州、臺南臺北ノ三假裝巡洋艦熊野、春日ノ二水雷母艦關東ノ一工部作船神戶ノ一病院船及ヒ彦山紀伊川嚴島宇品萬田山加賀富士山松山山口古倫母ノ十運送船計十七隻ナリト)

ス而テ爾後多少ノ増減)北海方面ヘ派遣中ハ、適宜其ノ部下ヲ運送船ニ乗組マシメ、片岡司令長官變更アリシモ之ヲ略ス)北方面ヘ派遣中ハ、適宜其ノ部下ヲ運送船ニ乗組マシメ、片岡司令長官ノ指揮ヲ受ケ服務セシムヘキ旨ノ命ヲ受ケタリ、(第五部第四篇第二章艦隊附屬港務部ニ詳ナリ)既ニシテ二十四日片岡第三艦隊司令長官ハ、大湊ニ於ル各戰隊驅逐隊、艇隊、運送船等ノ錨泊位置ヲ定メ、(附圖ニ掲ク)館ニ津輕海峽臨時敷設隊及ヒ函館臨時敷設隊ヲ置カル)二十七日第五、第六、第七、第八戰隊及ヒ驅逐隊、艇隊ニ向ヒ、受命後二時間以內ニ出動シテ、十海里ノ速力ヲ出シ得ルノ準備ヲ爲シ置クヘキコトヲ命シ、尙出羽第四艦隊司令長官ニハ、日本丸ヲ第二艦隊ニ復歸セシムヘキコト、香港丸、八幡丸ヲ津輕海峽防禦司令官海軍大佐宮岡直記ノ區處ノ下ニ置キ、同海峽西方ノ哨戒ニ就カシムヘキコト、千島水道ノ哨戒ハ當分行ハサルコト等ヲ命シ、翌二十八日更ニ同官ニ向ヒ、滿州丸モ函館ヲ根據トシ、津輕海峽防禦司令官ト協議シテ同海峽西口ノ哨戒勤務ニ服セシムヘキコト、水雷艇一隻ヲ通信艇トシテ、青森大湊間ヲ往復セシムヘキヲ命シ、又第一次上陸地點ニ於ル第一期、第二期、第三期掃海面及ヒ掃海計畫ヲ定メ、(計畫ノ概要ハ先ツ第一期第二期掃海面ハ出羽司令長官ノ指揮下ニ於テ廣瀬第五驅逐隊司令之ヲ統率シ第五驅逐隊第九第十一、第十五第二十艇隊ノ聯合掃海ヲ以テ急速之ヲ實施シ同掃海中敵ノ機械水雷ヲ發見シテ速ニ航路ヲ開通スルノ見込ナキトキハ廣瀬指揮官ハ掃海面ヲ多少變更スルコトヲ得ヘキコトニ定メ第三期掃海面ハ第一期第二期掃海ヲ了リタル後更ニ八雲吾妻日進嚴島橋立松島鎮遠ノ七艦ノ汽艇ヲ以テ之ヲ行ヒ掃海面ノ兩側ニハ約一公里突毎ニ浮標ヲ置カントス)出羽第四艦隊司令長官モ、亦同日艦隊區分竝ニ航行中ニ五部第四篇第六章戰略地點ノ掃海ニ詳ナリ)於ル行動心得ヲ定ムルコト左ノ如シ、

一、當分ノ内第七戰隊第八戰隊及ヒ假裝巡洋艦ハ合併シテ本職之ヲ直率ス其ノ艦隊區分竝ニ微速力ヲ規定スルコト左ノ如シ

第一小隊

P(一)嚴島

(二)鎮遠

第二章

第一節

第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

第二小隊

(三)松島

ト(四)橋立

第三小隊

(五)臺南丸

(六)滿州丸

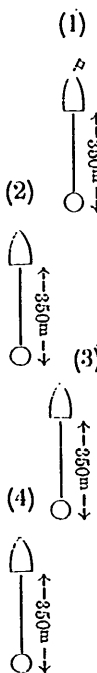
微速力

五海里

二、艦隊航行中特令ナケレハ滿州丸ハ二番艦ノ左方八百米突ニ位置ヲ執リ常ニ信號ノ受繼
キニ任シ通報艦ノ任務ヲ施行スヘシ

但日没ヨリ日出ニ至ル間ハ特令ナクシテ列ノ後尾ニ占位航行スヘシ

三、艦隊航行中濃霧ニ遭遇セハ各艦ハ令ナクシテ霧中標的ヲ入レ三百五十米突ノ曳索ヲ以
テ之ヲ曳行スヘシ此ノ時偶數艦ハ標的ヲ艦首若クハ僅ニ右舷方ニ見各奇數艦ハ之ヲ艦首
若クハ僅ニ左舷方ニ見ル如ク航行スヘシ即チ左ノ如シ



四、艦隊航行中針路變換速力變更等ヲ令スル信號ハ海軍信號書第一編第二部隱顯信號方ノ
規定ニ據リ喇叭ヲ以テスルコトアルヘシ其ノ法左ノ如シ

(イ)速力ヲ減スル場合ニ於テハ殿艦ハ信號ヲ了解スルト同時ニ汽笛ニテ發動符ヲ鳴ラシ
タル後自己ノ番號符ヲ吹キツ、速力ヲ緩ム次ニ其ノ前續艦ハ殿艦カ發動符ヲ發音スル
ヲ確メタル後チ同様ノ方法ニ依リ速力ヲ減シ斯ノ如クシテ順次嚮導艦ニ及ス

(ロ)速力ヲ増加スル場合ニハ殿艦信號ヲ了解セハ其ノ前續艦ハ通常發光信號受繼キノ方

法ニ從ヒ順次應信符ヲ吹キ返シ以テ嚮導艦ニ至ル嚮導艦ハ總艦信號ヲ了解セルヲ確メ
發動符ヲ鳴ラシタル後チ自己ノ番號符ヲ吹キツ、速力ヲ増加シ後續艦ハ同一ノ方法ニ
依リ順次速力ヲ増加シ遂ニ殿艦ニ及スモノトス

(ハ)針路ヲ變更スル場合ニ於ル信號法及ヒ其ノ運動ヲ起スヘキ順序ハ前記速力ヲ増加ス
ル場合ニ同シ

但急ヲ要スル場合ニハ總艦信號ヲ了解シ終ルヲ待タスシテ發動符竝ニ自己ノ番號符
ヲ鳴ラシツ、新針路ニ向針スルコトアルヘシ故ニ此ノ信號アリタルトキハ特ニ前續
艦ノ運動ニ注意スルヲ要ス

(丁隊日令
第二號)

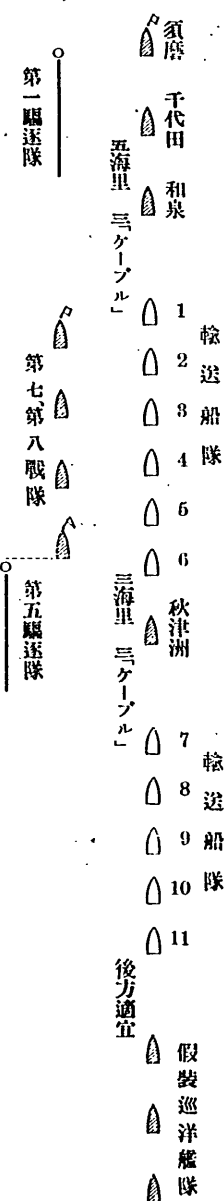
二十九日片岡司令長官ハ、北海方面各要地點ノ略號、及ヒ樺太南部占領ニ對スル北遣艦隊ノ警
戒線(第十部第九篇戰役中使用
セシ特別規約ニ詳ナリ)竝ニ大湊ヨリ上陸地點ニ至ル獨立第十三師團第一次上陸部隊ノ輸
送計畫ヲ定ムルコト左記甲號ノ如ク、其ノ海上輸送護衛及ヒ揚陸掩護ニ關シ、各隊ニ命令ヲ發
スルコト乙號ノ如シ、

(甲號)

一、獨立第十三師團第一次輸送船隊ハ來ル七月四日午前九時大湊ヲ出發シ同日午後二時平
館ノ正東三海里ヲ起程地トシ別紙航行豫定圖(附圖
參照)ニ示セル航路速力航行日程ニ準據シ
テ上陸地點ニ前進スルモノトス

二、航行序列左ノ如シ

第二章 第一節 第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動



和泉秋津洲ヲ輸送船隊ノ嚮導艦トス

三、輸送船隊ニハ軍艦ヲ先頭ニ附シテ之ヲ嚮導セシム又北遣艦隊ノ第六第七第八戰隊及ヒ
第一、第五驅逐隊ヲシテ航路ノ前方及ヒ左側ニ並航シテ之ヲ護衛セシム

四、上陸地點ニハ北遣艦隊ノ一部ヲ先發セシメ豫定ノ上陸地點附近ノ海中清掃及ヒ上陸地
點ノ選定ヲナサシム

五、上陸地點ハ先ツ北遣艦隊ノ陸戰隊ヲ以テ之ヲ占領セシメ適宜ノ時機ヲ見テ第四艦隊司
令長官ハ第十三師團ノ上陸開始ノ時期ヲ指示ス

六、第十三師團ノ上陸ヲ迅速容易ナラシムル爲メ北遣艦隊ノ端艇ヲ用ヒ上陸事業ニ助力ス
此等ノ端艇ハ先ツ橋立ニ集合セシメ武富司令官(編者曰ク第四艦隊司令官海軍少將武富那那リ)碇泊場司令官ト協
議シ順序ヲ定メ之ヲ配分スルモノトス

七、輸送船隊前進中天候ノ異變其ノ他不期ノ事變ニ際シ避泊スヘキ集合地點ヲ定ムルコト
左ノ如シ

第一集合地點

壽都港

第二集合地點

石狩河口

第三集合地點

大鹽川口南方沿岸

第四集合地點

禮文島船舶灣

第五集合地點

野寒岬南方沿岸

第六集合地點

宗谷灣

第七集合地點

知床岬ノ北北西十五海里

八、輸送船隊ノ大湊出發後大本營其ノ他通信連絡スヘキ地ヲ左ノ如ク豫定ス

第二日 正午マテ

小樽郵便局(途中八重山ヲ派遣ス)

第三日 以後

野寒望樓

九、輸送船隊ノ大湊ヨリ上陸地點ニ到ル迄ノ航海中ハ特ニ左ノ諸件ヲ嚴守スルヲ要ス

(イ) 往航路ハ圖示ノ航路ヲ取ルコト復航路ハ別ニ指定セスト雖モ成ルヘク北海道沿岸ニ
近ク航路ヲ採ルコト

(ロ) 航行中速力ヲ左ノ通り定メ嚮導艦ハ成ルヘク速力ノ變化ヲ避ケ圖示ノ時刻ニ圖示ノ
地點ニ達スル如ク之ヲ嚮導スルコト

原速八海里

半速六海里

微速四海里

(ハ) 輸送船ノ間隔ヲ約六百米突トシテ決シテ前方ノ船ヲ追越サハルコト

(ニ) 航海燈(船尾燈モ)ハ總テ之ヲ點火スルコト

第二章

第一節

第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

艦隊ノ規定ニ準ヒ右舷「ヤーダーム」ニ晝夜共ニ速力信號(夜中ハ速力信號燈)ヲ揚クルコト

(ホ)濃霧ニ遭遇スルモ可成降霧前ト同一ノ速力及ヒ針路ヲ保テ衝突豫防規則ニ從ヒ汽笛又ハ汽角ヲ鳴吹シテ進ムヘシ然レトモ航海危険ニシテ前進ヲ繼續スルコト能ハサルトキハ右方列外ニ出テ便宜投錨スヘシ(列外ニ出ツルトキハ後續船ニ危険ヲ及ササル様注意ヲ要ス)

此ノ如クニシテ霧晴レタル後他船ニ後レタリト思惟セハ豫定航路ニ依リ野寒岬ノ南方沿岸ニ向ケ進行シ同所ニ至リ護衛艦隊ニ關スル情報ヲ得タル後既ニ前方ニアルヲ聞カハ直ニ第七集合地點ニ向ヒ又自己ヨリ後方ニアルコトヲ知ラハ同泊地ニ於テ之ヲ待合スヘシ

(注意) 利尻水道ニ濃霧アル場合禮文島ノ西方ニ廻ル時ハ之ニ會セサルコトアリト云フ
(ハ)霧中ハ艦隊ニ於テ信號ノ爲メ空砲ヲ發スルコトアリ故ニ霧中砲聲ヲ聞クモ敢テ警戒ヲ要セス

(ト)萬一途上敵ニ遭遇スルモ北遣艦隊ハ之ヲ邀撃スルニ多大ノ勢力ヲ有スルヲ以テ決シテ驚クコトナク嚮導艦ニ隨行スヘシ

十、輸送船ニハ二米突大ニ白塗具ヲ以テ兩船側ニ番號ヲ記入ス
各船ノ有スル番號左ノ如シ

- (一)丹波丸 (二)加賀丸 (三)因幡丸 (四)鎌倉丸 (五)讃岐丸

- (六)博多丸 (七)土佐丸 (八)孟買丸 (九)萬里丸 (十)辰丸
- (十一)江都丸 (十二)東洋丸

十一、監督將校ノ乗船セサル左記ノ船舶ニハ北遣艦隊ヨリ尉官一名及ヒ信號兵二名ツ、ヲ各船ニ臨時乗船セシム(往航路ノミ)

讃岐 土佐 孟買 萬里 辰 江都 (北遣艦隊機密第六號)

(編者曰ク片岡司令長官ハ同日本計畫書第十一項ノ尉官一名及ヒ信號兵二名ノ派出方ヲ左表ノ如ク定メ七月三日午前中ニ發光信號燈手旗信號旗ヲ携帶シ指定船舶ニ乗組ムヘキコトヲ命セリ)

船	名	職	岐	土	佐	孟	買	萬	里	辰	江	都
尉官一名ヲ出スヘキ艦名	八	雲	同	上	吾	妻	同	上	日	進	同	上
信號兵一助手一ヲ出ス艦名	八	雲	同	上	吾	妻	同	上	日	進	同	上

(乙號)

一、敵ノ第二、第三太平洋艦隊ハ日本海海戦ニ於テ既ニ殲滅ニ歸シ敗餘ノ巡洋艦及ヒ假裝巡洋艦ハ或ハ中立國ニ武裝ヲ解キ或ハ再本國ニ向テ走り現ニ兵力トシテ東洋ニ存在スルモノナシ

浦鹽ニ在ル敗殘艦隊ハ銳意勢力ノ挽回ニ努メ今ヤ巡洋艦三隻及ヒ水雷艇並ニ潜水艇數隻ハ隨時出動シ得ルノ姿勢ニ在ルモノト認ム

六月十日陸軍參謀部調査ニ係ル樺太現在兵力左ノ如シ

コルサコフ

歩兵

一大隊

約九百銃

砲兵

一中隊半

十二門

アレキサンドロフスキー

歩兵

一大隊

約九百銃

砲兵

二中隊

十六門

ルイコフ

歩兵

一大隊

約九百銃

ツーイ

歩兵

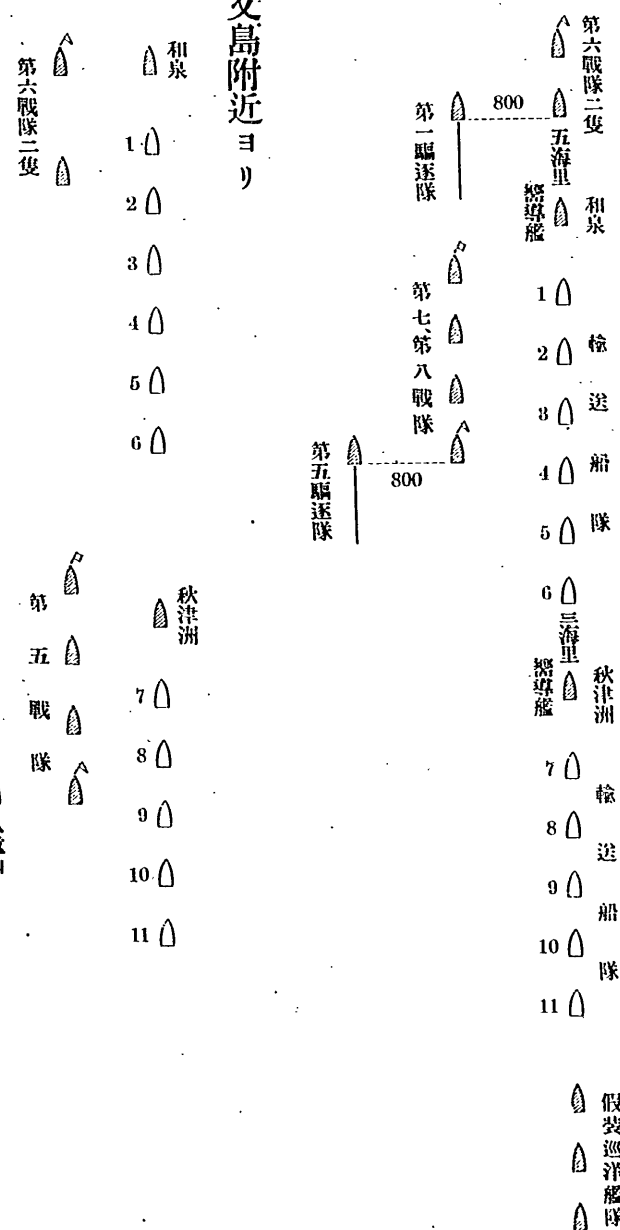
一大隊

約六百銃

外ニ志願兵歩兵三大隊義勇兵(四徒ヲ)五千人砲兵一中隊アルモ其ノ配備詳ナラス

二、北遣艦隊ハ對州方面ニ在ル聯合艦隊ノ主力ト呼應シテ海上ヨリスル敵ノ軍資輸入ヲ杜絶シ浦鹽艦隊ニ對シテハ機ヲ見テ之ヲ殲滅ヲ圖ルト同時ニ上命ニ基キ來ル七月四日樺太占領ノ目的ヲ有スル獨立第十三師團第一次上陸部隊ノ海上輸送ヲ護衛シ之ヲコルサコフニ掩護上陸セシメントス

三、航行序列左ノ如シ



禮文島附近ヨリ

四、第六戰隊ノ二隻ハ輸送船隊ノ前方ヲ警戒シ又和泉、秋津洲ハ各輸送船隊ノ一半ヲ嚮導

トス

第七戰隊第八戰隊ハ輸送船隊ノ左側ヲ警戒ス

第一驅逐隊ハ第六戰隊ノ側ニ第五驅逐隊ハ第七第八戰隊ノ側ニ竝進ス

第九戰隊第九第十五、第十一、第二十艇隊及ヒ母艦熊野丸、春日丸假裝巡洋艦臺南丸給炭船

一隻ハ中尾第四艦隊司令官指揮下ニ來ル七月二日午前大湊出發野寒岬南方ノ沿岸(或ハ宗谷灣)

第二章 第一節 第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

ニ到達シ炭水ヲ補充シ輸送船隊ノ至ルヲ待ツヘシ

(注意) 途中成ルヘク多敷ノ望樓等ヲ介シ其ノ所在ヲ本職ニ報告スヘシ

(編者曰ク本項ハ元假裝巡洋艦三隻(香港丸、臺南丸、八幡丸)ハ先任艦長ノ指揮下ニ輸送船隊ノ後方適宜ニ占位シ禮文島附近ニ到リ臺南丸ト共ニ中尾第四艦隊司令官ノ指揮下ニ第四警戒線ノ哨戒ニ任ス其ノ哨戒法ハ中尾司令官之ヲ定ム)

以上ノ諸隊ハ第四艦隊司令官之ヲ指揮スルモノトス

第五戰隊及ヒ八重山ハ本職之ヲ直率シ輸送船隊ノ左側後方適宜ノ處ニアリテ間接ニ掩護

シ野寒岬附近ヨリ速力ヲ増加シテ之ニ近接シ直接護衛ニ任ス

假裝巡洋艦二隻(滿州丸、八幡丸)ハ先任艦長ノ指揮下ニ輸送船隊ノ後方適宜ニ占位シ禮文島附近

ニ到リ臺南丸ト共ニ中尾第四艦隊司令官ノ指揮下ニ第四警戒線ノ哨戒ニ任ス其ノ哨戒法

ハ中尾司令官之ヲ定ム

中尾司令官ハ第四警戒線哨戒中左記ノ豫定望樓建設地ノ位置選定ヲナシ之ヲ第四艦隊司

令長官ニ報告スヘシ

一、禮文島神崎

二、海馬島ノ南西端

(編者曰ク本項ハ元假裝巡洋艦三隻(香港丸、臺南丸、八幡丸)ハ先任艦長ノ指揮下ニ輸送船隊ノ後方適宜ニ占位シ禮文島附近ヨリ分離シ第四警戒線ニ就クトアリシカ六月三十日北道艦隊機密第七號ノ二ヲ以テ本文ノ如ク變更セラレタリ)

五、禮文島附近ヨリ第七戰隊第八戰隊第九戰隊及ヒ各驅逐隊各艇隊ハ第四艦隊司令官指

揮ノ下ニ列ヲ離レ上陸地點ニ先發ス

第四艦隊司令官ハ上陸地點附近ニ達セハ第五驅逐隊及ヒ各艇隊ニ掃海ヲ命ス

但豫定上陸地點及ヒ掃海區域ハ別圖ノ如シ

第九戰隊ハ第四艦隊司令官ノ指揮ヲ受ケ掃海隊ヲ掩護ス

六、第四艦隊司令官ハ適宜ノ時機ヲ見テ第六、第七、第八及ヒ第九戰隊ヨリ聯合陸戰隊

(縱隊一大隊(二中隊ノ一大隊三)ノ揚陸シ上陸地點ヲ占領セシメ陸軍揚陸セハ交代歸艦セシム其ノ編制ハ第四艦隊司令官之ヲ定ム)

(注意) 聯合陸戰隊ノ作戰ハ上陸地點ノ占領ニシテ決シテ深ク前進スヘカラス

第九戰隊驅逐隊(時機ニヨリ水雷艇隊モ参加ス)ハ第四艦隊司令官ノ指揮ヲ受ケ陸戰隊ヲ掩護ス

七、第四艦隊司令官ハ輸送船隊到着セハ武富第四艦隊司令官ヲシテ其ノ碇泊位置ヲ指

示セシメ機宜ヲ見テ揚陸開始ノ時期ヲ指示シ且出來得ル丈其ノ揚陸事業ニ助力セシム

ヘシ

第五、第六、第七及ヒ第八戰隊上陸地點附近ニ至ラハ汽艇端艇ヲ橋立ニ送り同司令官ノ指

揮ヲ受ケ陸軍揚陸ニ助力ス

八、第四艦隊司令官ハ陸軍ノ前進ト策應シコルサコフ泊地ノ掃海ヲ開始セシメ又時機ヲ

見テ左記ノ豫定地點ニ望樓ヲ建設シ又宗谷ヨリコルサコフニ至ル海底電信線布設ノ時期

ヲ奉天丸ニ在ル増田海軍少佐(編者曰ク増田高頼ナリ)ニ指示スヘシ

豫定望樓建設地

(一)ノトロ岬

(二)知床岬

(三)海馬島ノ南西端

(四)禮文島神埼

九、第四艦隊司令長官ハ上陸開始ノ當日ヨリ第一驅逐隊ノ二隻ヲ第二警戒線ニ出シ哨戒セシムヘシ

十、第五戰隊ハ灣外ニ漂泊シ或ハ便宜ノ地ニ假泊スル等機宜ノ行動ヲナス

十一、輸送船ハ其ノ揚陸了ラハ單獨歸航セシム

十二、揚陸全部結了セハ第九戰隊各水雷艇隊熊野丸及ヒ給炭船一隻ハ猶止リテ先任艦長ノ指揮下ニコルサコフ泊地ノ清掃及ヒ防備ニ任シ後命ヲ待ツヘシ第五、第六、第七、第八戰隊第一、第二驅逐隊及ヒ母艦春日丸假裝巡洋艦ハ第二次輸送隊護衛ノ爲メ大湊ヘ歸航シ準備ヲ整ヘ後命ヲ待ツヘシ

(北遣艦隊機密第七號)

尙同日出羽司令長官ニ左ノ訓令ヲ發セリ、

一、北遣艦隊ハ上命ニ基キ來ル七月四日樺太占領ノ目的ヲ有スル獨立第十三師團第一次上陸部隊ノ海上輸送ヲ護衛シ之ヲコルサコフニ掩護揚陸セシメントス

二、貴官ハ第五戰隊及ヒ假裝巡洋艦特設船舶ノ外北遣艦隊ノ殘部ヲ率非北遣艦隊機密第七號北遣艦隊命令北遣艦隊機密第六號獨立第十三師團第一次上陸部隊輸送計畫書及ヒ北遣

艦隊機密第八號ニ準據シテ直接輸送船隊ヲ護衛シ其ノ揚陸及ヒ掩護ノ任務ヲ完ツスヘシ

陸軍ノ前進ト策應シコルサコフ泊地ノ掃海ヲ開始シ又時機ヲ見テ望樓建設豫定地點ニ一艦ヲ派シ位置選定ノ上之ヲ建設セシムヘシ

海底電線布設ノ時機ヲ奉天丸ニ在ル増田海軍少佐(編者曰ク増田高賴ナリ)ニ指示スヘシ

三、廣瀬第五驅逐隊司令ヘハ別紙ノ如ク訓令シ置ケリ(編者曰ク別紙ハ掃海ニ關スル訓令ナリ爰ニ略ス)

(北遣艦隊機密第九號)

四、本職ハ北遣艦隊ノ殘餘ヲ率非機宜行動セントス

次テ三十日同司令長官ハ、大湊ニ於ル陸軍運送船ノ泊地及ヒ同運送船ノ番號ヲ定メ(但番號ハ後更ニ改正シ且同日同運送船ニ對スル信號法ヲ定メタリ)七月一日出羽司令長官ニ命シ、香港丸ヲシテ滿州丸

ト交代シ、津輕海峽西口ノ哨戒勤務ニ服セシメ、藤本第一驅逐隊司令ニハ其ノ麾下ヨリ一艦ヲ出シ、日没ヨリ日出マテ陸奥灣口ニ在リテ出入船舶ニ注意シ、且敵ノ來襲及ヒ危險物沈置等ニ

對シ嚴ニ警戒スヘキコトヲ命セリ、此ノ日伊集院軍令部次長ヨリ、講和談判モ愈々來八月一日頃ヲ以テ華盛頓府ニ開カル、筈ナレハ、自然休戰問題モ提起セラルヘシ、萬一其ノ時マテ未タ

アレキサンドロフスキノ上陸ヲ終フル能ハサレハ、折衝上我ノ不利尠カラサルニ付、第二次上陸隊ノ揚陸モ本月中ニハ結了セシムルノ目的ヲ以テ、萬事計畫アランコトヲ希望ス、トノ電

報ヲ受ケ、又樺太方面作戰ニ就キ左ノ覺書ノ電報ヲ受領セリ、

一、機械水雷ニ特ニ注意ヲ拂ハレタキコト(ノトロコルサコフトノ間數箇所ニ沈設シアリトノ情報アリ)

第二章 第一節 第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

三十七

二、艦隊主力ヲコルサコフノ沖ニ示シ浦鹽艦隊ヲ威壓シ置クノ必要ナキカ
 三、上陸地點ハコルサコフノ北西灣頭若クハ南東數里外沿岸適當ノ處ヲ艦隊ニテ見立テ師團長ト協議セラルレハ可ナルコト

四、上陸點ノ偵察竝ニ其ノ一時的占領ノ爲メ陸戰隊ノ必要アランカ其ノ邊ハ御見込ニテ可ナリ

五、揚陸ヲ直接艦隊ニテ幫助スルコトハ何等打合セラレタルコトナシト雖モ都合附クニ於テハ艦隊ニテ助力セラル、方得策ナラン

六、アニヲ灣進入ニ先タチノトロノ看視人捕獲ヲ試ミルハ得策ナラン

七、安全ナルヘキ航路ノ見込附キタル上ハ打鐘浮標ヲ二三箇所ニ浮標ヲ二三箇所ニ浮置スルノ必要アラン

打鐘浮標ハ四個前送ノコト

八、海底線ハ先ツ宗谷東方ヨリノトロノ北東海岸マテ敷設シ時機ヲ見テコルサコフ迄延長スルコト

敷設ハ奉天丸之ニ從事シ増田少佐(編者曰ク増田高顯ナリ)出張監督ス敷設ノ時機等ニ就テハ尙艦隊ヨリ指示アリタキコト

今回ノ海底線敷設ハ陸軍ノ事業ナレトモ前記通り特ニ協定セルモノナリ

九、望樓ハ禮文島神埼、海馬島南西端、ノトロ及ヒ知床(無線電信)ノ四箇所ニ設置方横鎮長官ニ命

令アリ此ノ外三箇所分材料ヲ前送ノ筈望樓ノ設置地位ノ精密選定ハ艦隊ヨリ調査セシメラルレハ幸ナリ

未定三箇所分ハ艦隊ニテ必要ト認メラル、地點ニ振向クル筈ニ付必要ノ節ハ電報アリタシ

十、薩哈噠ノ陸上電信ハ都合良ケレハ東岸ニ於テ切斷セラレタキ陸軍ノ希望ナリ

十一、上陸地點ト内地トノ海底電信連絡ノ未タ附カサル内ハ無線電信ヲ以テ宗谷ヲ經テ大本營ニ連絡ヲ保ツ如ク計畫アリタキコト

以上ハ主トシテコルサコフ上陸戰ニ付申スモノナレトモアレキサンドロフスキー上陸ニ就テモ亦同様ノ振合タルコトニ承知アリタシ但韃靼海峽方面ニハ多少ノ敵水雷艇隊ノ防備アルヘキモノトスルヲ得策ト認メラル

又海豹島(ロツベ)ノ海豹ハ保護ヲ試ミルヘキ方針ニ付艦隊ノ都合良キニ於テハ之ヲ試ミラレタシ

同日出羽第四艦隊司令長官ハ、獨立第十三師團コルサコフ附近ノ揚陸ヲ掩護スルニ際シ、一時上陸地點ノ占領竝ニ守備ニ充ツルカ爲メ、第六、第七、第八、第九ノ四箇戰隊ヨリ陸戰隊ヲ編成スルコトニ定メ、(橋立副長海軍中佐町田駒次郎ヲ以テ指揮官トシ銃隊一大隊砲隊一小隊(野砲二門)等ヲ以テ編成セルモノナリ附表ニ掲グ)護送及ヒ揚陸掩護ニ對スル實施要領書ヲ左ノ如ク定メタリ、

航行

一、東郷第三艦隊司令官ハ第六戰隊及ヒ第一驅逐隊ヲ率非七月四日午前九時拔錨シ豫定

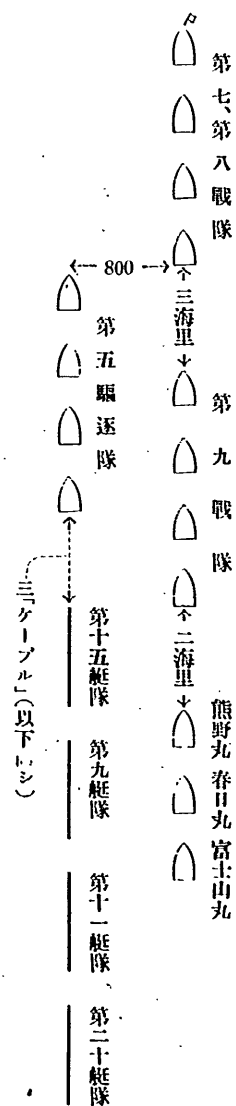
ノ航行序列ニ於テ適宜速力ヲ加減シ午後二時先頭輸送船隊ノ嚮導艦和泉ヲシテ起程地
(平館ノ正)ヲ通過セシムル如ク嚮導シ爾後豫定航路上ニ於ル變針時刻ハ常ニ和泉ヲ以テ基
準ト爲サシムヘシ

二、本職ハ第七第八戰隊及ヒ第五驅逐隊ヲ率井兩輸送船隊ノ中間列ノ左側約二海里ニ在テ
航行ス

三、假裝巡洋艦滿州丸八幡丸ノ二隻列ノ後方ニ第五戰隊及ヒ八重山ノ四隻列ノ左側後方適
宜ノ距離ニ在リテ航行スルコト北遣艦隊命令ニ規定セラレアルカ如シ

四、禮文島附近ニ至レハ第七第八戰隊及ヒ第五驅逐隊ハ速力ヲ増加シ列ノ前方ニ出テ第三
日午後六時宗谷岬ノ北方ニ於テ第九戰隊第九第十一第十五第二十艇隊及ヒ熊野丸春日
丸富士山丸ヲ合シ午後七時宗谷岬ノ正北八海里ノ地點ヲ發シ爾後豫定航路ニ沿ヒ七海
里ノ速力ヲ以テ第七集合地點ニ達セントス即チ豫定航路及ヒ航行序列左ノ如シ

豫定航路 午後七時ヨリ東四分ノ三南
午後九時ヨリ北東微東四分ノ一東



五、第六戰隊(和泉秋津)及ヒ第一驅逐隊ハ第七第八戰隊及ヒ第五驅逐隊カ列ノ前方ニ進出シ

タルヲ確知シタル後適宜列ノ左側ニ出テ規定ノ新位置ニ就キ爾後和泉ハ專ラ嚮導ノ任ニ當
ルヘシ而テ第四日早朝第七集合地點附近ニ達セハ適宜漂泊若クハ投錨シテ後命ヲ待ツヘシ
但掃海面入口ノ準備整頓セハ之ヲ招致シ春日丸ノ東方ニ假泊セシムル豫定ナリ其ノ位
置ハ豫定錨泊位置圖ニ示スカ如シ

六、輸送船隊ニ關スル信號ハ輸送船隊運動程式ニ據ルヘシト雖モ豫定地點ニ至リ針路ヲ變
スル場合ニハ特ニ左ノ信號ヲ爲スヘシ(霧ノ有無ニ關セス此ノ信
號ヲ爲ス事ト心得ヘシ)

現ニ針路ヲ變スル爲メ轉舵スルト同時ニ汽笛若クハ汽角ヲ以テ短音七發以上ヲ鳴ラシ
タル後最長音一發ヲ鳴ラシ更ニ約十秒ヲ隔テ、長音ニテ自船ノ番號ヲ吹キ鳴ラスヘシ
但嚮導タル軍艦ハ單ニ短音數發ノ後長音一發ヲ鳴ラスノミトス
例ヘハ八番船針路ヲ變スル場合ニハ

短音 最長音 (十秒) 長音

ト發音信號スルカ如シ

七、各運送船ニハ軍艦ニ使用スルト同形式ノ速力信號竝ニ霧中標的ヲ備ヘシメ該標的ハ濃
霧ニ遭遇セハ直ニ投入セシムルコトヲ命シアリ

八、各部隊ハ濃霧ニ遭フモ出來得ル限り豫定ノ如ク行進ヲ續行スヘシト雖モ潮流風候ノ模
樣ニ依リ針路變更ノ時刻ニ多少ノ遲達ヲ要スルコトアルヘキヲ以テ各艦船艇ハ能ク基準

艦タル和泉ノ行動ニ注意スヘシ

九、和泉ハ針路ヲ變更スル毎ニ其ノ時刻地點及ヒ新針路ヲ稍大ナル火花ニテ無線電信ヲ以テ東郷司令官ニ報告スヘシ自他ノ艦船ハ之ニ依リテ基準艦ノ行動ヲ承知シ出來得ル限り無線電信ヲ有セサル附近艦艇ニ通報スヘシ

掃海

十、艦隊掃海面ノ南端ニ達セハ旗信ニ依リ春日丸富士山丸ヲ圖ニ示セル豫定位置ニ碇泊シ「Y」旗一旗ヲ掲ケテ掃海面ノ入口ヲ表示セシメ次テ掃海ノ實施ヲ令シ廣瀬掃海隊指揮官(編者曰ク海軍中佐廣瀬順太郎ナリ)ヲシテ豫定計畫ニ從ヒ上陸地點ニ至ル海面ヲ清掃セシム

十一、熊野丸ハ掃海隊母艦トシテ清掃海面ノ進ムニ從ヒ第九戰隊ノ後方ニ續行シ掃海事業ニ從事スル各船舟ノ母艦タルヘシ

十二、千代田秋津洲ノ汽艇二隻ハ一對ノ掃海艇トシテ通常掃海索其ノ他諸要具ヲ準備シ廣瀬掃海隊指揮官ノ指揮下ニ入ラシメ發見シタル水雷ノ爆發ニ從事セシムヘシ

但裝藥ハ四個ヲ準備シ其ノ他乗員ノ寢食ニ應スル爲メ釣床、食器、食器鍋及ヒ貯藏食三食分ヲ用意スヘシ

日進ノ汽艇二隻モ同様ノ目的ヲ以テ掃海隊ニ附屬セシメラル、答ナリ

十三、第三期掃海ハ北遣艦隊機密第八號(編者曰ク北遣艦隊機密第八號ハ掃海ニ關スルモノニシテ第五部第四篇第六章ニ掲グ)ノ第四號記載ノ汽艇ノ外ニ第七、第八、第九戰隊ノ通常掃海艇隊ヲ使用スルコトアルヘシ

掃海隊並ニ揚陸掩護

十四、掃海事業進行スルニ從ヒ第九戰隊ハ島海艦長ノ指揮下ニ清掃海面内ヲ續行シ該掃海隊ノ掩護及ヒ續イテ揚陸セシムヘキ海軍陸戰隊及ヒ陸兵揚陸ノ直接掩護ニ從事スヘシ但距岸一海里ノ位置ニ達セハ附圖豫定ノ如ク投錨シ特別陸戰隊ヲ旗艦嚴島ニ集合セシムヘシ

十五、第一驅逐隊ノ第二小隊ハ旗信ニ依リ第二警戒線ヲ哨戒シ第一小隊ハ情況ニ應シ特令ヲ以テ掃海並ニ揚陸ノ直接若クハ間接掩護ニ任セシム

海軍陸戰隊揚陸

十六、適宜ノ時機ニ至レハ第七、第八戰隊及ヒ第六戰隊ヲ清掃海面内ニ進入シ附圖ノ如ク投錨セシム此ニ於テ第六、第七、第八、第九戰隊ノ各艦ハ特令ナクシテ丁隊機密第二三號ヲ以テ規定シタル特別陸戰隊(編者曰ク附表ニ掲グ)ヲ編制シ旗艦嚴島ニ集合セシムヘシ

十七、特別陸戰隊集合シ了ラハ指揮官ハ命ニ依リ直ニメレヤ村附近ニ上陸ヲ實施シ陸軍兵揚陸ニ必要ナル地區ヲ占領シ固ク之ヲ守備スヘシ但陸戰隊歸艦ノ時機ハ陸軍指揮官ト交渉ノ上協定實行スルヲ要ス

十八、陸戰隊揚陸ニ使用シタル汽艇端舟等ハ特令ナケレハ上陸地點ニ留メ置クヘキヲ以テ端舟司令ヲシテ豫メ荒天ニ處スルノ途ヲ講究シ部署ヲ定メシムヘシ

十九、陸戰隊ノ服裝及ヒ携行物品ヲ定ムルコト左ノ如シ

服裝

軍服

外套(揚陸前船内ニ殘シ置キ必
要ニ應シテ各自攜帶セシム)

携行物品

水筒

糧囊

辨當三食分(一食分ヲ攜帶セシム他ハ給與
隊ヲシテ保管分配ヲ司ラレム)

陸軍兵揚陸

二十、第七、第八戰隊掃海海面内ニ進入スルニ至レハ、武富司令官ハ豫定ノ錨泊位置ニ橋立ヲ投錨セシメ春日丸ヲ介シテ揚陸前後ノ順序ニ從ヒ陸軍運送船ヲ招致シ各戰隊ヨリ出セル汽艇端舟等ヲ指揮シ碇泊場司令官及ヒ上泉海軍大佐ト協商ノ上專ラ陸軍兵揚陸ニ從事スヘシ而テ掃海面ノ擴大スルニ從ヒ漸次陸岸ニ近ク錨地ヲ變シ揚陸ニ至便ノ位置ニ移ルヘシ其ノ際第九戰隊ヲシテ揚陸掩護ノ爲メ適當ノ位置ヲ占ムルコトヲ得シムルニ顧慮スルヲ要ス

但第一次上陸隊ヲ搭載スル丹波丸、加賀丸及ヒ孟買丸ハ和泉、秋津洲ノ掃海面ニ進入スル時之ヲ豫定錨泊地ニ導カシム

二十一、陸軍兵最初ノ揚陸ヲ開始スヘキ時機ハ本職之ヲ指示ス其ノ信號左ノ如シ

國旗一旛 (、、丸) 陸軍兵(若クハ材料)ノ揚陸ヲ開始セヨ

二十二、第六、第七、第八戰隊中陸戰隊若クハ掃海隊ニ使用セサル「カッター」以上ノ端舟アラ

ハ橋立ニ送り陸軍兵揚陸ニ從事セシムヘシ但其ノ員數ヲ豫メ武富司令官ニ通報シ置シヘシ

二十三、陸軍兵揚陸ニ從事スル汽艇端舟ハ特ニ必要アル時ハ夜間(或ハ晝間ト雖モ)第七、第八戰隊ノ各艦ニ配付シテ之ヲ保護セシムルコトアルヘシ

二十四、武富司令官ハ海陸ノ通信連絡ヲ保ツ爲メ橋立ヲシテ上陸地點附近便宜ノ處ニ信號所ヲ設置セシムヘシ

但之ニ要スル材料人員等ハ陸戰隊ト共ニ揚陸セシムルヲ要ス

雜款

二十五、上陸地點豫定錨泊位置左圖ノ如シ(編者曰ク本圖ハ附圖ニ掲ク)

但各艦船ノ距離ハ特ニ記入シタルモノ、外ニ鏈トス

此ノ日第四艦隊司令官海軍少將中尾雄、臺南丸ニテ青森ニ著シ(同司令官ハ六月十四日海軍少將ニ任セラレ横須賀鎮守府參謀長ヨリ第四艦隊司令官ニ轉補セラレ二十日東京ヲ發シ大湊ニテ)又片岡司令長官ハ伊集院軍令部次長ヨリ、六月二十日露國將校一名、下士卒二十六名、海馬島ニ上陸シ、在住民ニ對シテ暴行ヲ加ヘ、其ノ結果同島殖民同志會會頭志田力二義勇團ヲ編成シ、之ニ抗シテ敵二名ヲ斃シ、數名ニ負傷セシメテ擊退シ、我ニモ亦戰死一名、負傷一名ヲ出シタルコト等ノ電報ニ接セリ(備考文書第(一)號參照)二日第六戰隊、熊野丸、春日丸第一、第五驅逐隊及ヒ第九艇隊ハ、臨時出羽司令長官ノ指揮下ニ入レリ(此ノ日聯合立待信號所ノ無線電信通信ヲ開始ス)

次テ三日片岡司令長官ハ軍令部次長ヨリ、コルサコフ占領ノ上ハ、同地ニ在ル石炭庫所在地ハ海軍ニテ收容スルノ必要アルヘシト思ハル、ニ付豫メ師團長ト打合せ置カレタク、且アレキサンドロフスキー行ノ海底電線ハ、陸上ノ事情之ヲ許スニ於テハ、北緯四十八度五十分ニ位スルスチユカムビス岬(戰時中海軍ニテハ之ヲ出羽岬ト稱セリ)ニ一度陸揚ケスルコト、シ、同所ニ望樓ヲ置キタキ希望ナルニ付、此ノ旨御含アリタシトノ電報ヲ受ケタリ、

以上ハ北遣艦隊ノ樺太ニ向ヒ發進スル迄ニ於ル準備及ヒ行動ニシテ、麾下艦艇第五戰隊ノ春日、第七戰隊ノ壹岐、沖島、見島、第六驅逐隊、第十五艇隊ノ鷲ノ外、悉ク七月初メ迄ニ相合セルヲ以テ、(春日、沖島、見島、第六驅逐隊、早月ノ五隻ハ佐世保ニ於テ壹岐ハ横須賀ニ於テ鷲ハ竹)豫定ノ如ク中尾第四艦隊司令官ノ率非ル臺南丸、第九戰隊、春日丸、熊野丸、第九、第十五、第十一、第二十艇隊、富士山丸(給炭船)ヨリ成ル先發隊ハ七月二日、其ノ他ハ四日何レモ大湊ヲ發シテ北上シ、コルサコフ攻略ノ途ニ就ケリ、(樺太地點ハ附圖樺太略圖ニ掲ケ又北遣艦隊ノ海陸通信連絡法ヲ附表ニ掲ケ)

第二目 樺太南部ノ占領

七月二日中尾第四艦隊司令官ハ、臺南丸(同司令官旗艦)、第九戰隊、第九、第十五(鷲)、第十一、第二十艇隊及ヒ母艦熊野丸、春日丸、給炭船富士山丸ヲ率非テ先ツ大湊ヲ發シ、次テ片岡第三艦隊司令長官ハ、四日午前九時ヲ以テ豫定ノ如ク、第五(春日)、第六、第七(壹岐、沖島)、第八戰隊、通報艦八重山、第一、第五驅逐隊、假裝巡洋艦八幡丸、滿州丸ヲ率非、第一次輸送船隊ヲ護衛シツ、同シク大湊ヲ發シ、何レモ樺太占領ノ途ニ上レリ、已ニシテ五日同司令長官ハ通信連絡ノ爲メ八重山ヲ小樽ニ派

シ、(八重山ハ午後五時小樽ニ入り北遣艦隊行キ)六日黎明修理ヲ終ヘテ來會セシ春日ヲ合せ、八重山モ正午頃禮文島附近ニテ復隊セルヲ以テ、豫定ノ如ク第七、第八戰隊及ヒ第五驅逐隊ヲシテ、出羽第四艦隊司令長官指揮ノ下ニ前進セシメ、假裝巡洋艦隊ヲ解キ、之ヲシテ濃霧ノ爲メ同島ノ船泊灣ニ避泊シ在ル中尾司令官ノ指揮下ニ入り、宗谷海峽西口外(第四警戒線)哨戒ノ任ニ當ラシメ、同司令官ノ指揮下ニ在ル第九戰隊以下各艇隊母艦等ヲ、出羽司令長官ノ指揮下ニ移ラシメタリ、(中尾司令官ハ豫テ與ヘラレタル命令(本章第一節第一目參照)ニ基キテ五日望樓位置ヲ神崎ノ南ニ在ル一二三岬山頂ニ選定シ六日ヨリハ假裝巡洋艦臺南丸、滿州丸ヲ指揮シテ宗谷海峽西口外ヲ哨戒シ七日臺南丸ヲ率非テ海馬島ニ到リ陸戰隊ヲ上陸セシメテ山上ニ國旗ヲ樹立シ以テ正式ノ占領ヲ爲シ又豫テ與ヘラレタル命令(本章第一節第一目參照)ニ基キ同島ニ於ル望樓位置ヲ南西角ニ在ル圓錐形ノ山上ト選定セシカ十日ニ至リテ片岡司令長官ヨリ本哨戒ヲ撤去シコルサコフニ來港スヘキノ命ヲ受ケ臺南丸、八幡丸)又八重山ヲ八雲(片岡司令官旗艦)ト宗谷望樓トノ無線電信ノ仲繼ニ充テ、午後八時ヨリハ更ニ第一驅逐隊ノ第二小隊(有明)ヲシテ、宗谷海峽(第二警戒線)ヲ警戒セシメ、尙七日早朝同驅逐隊ノ第一小隊(吹雪)ニハ、メレヤ沖ニ在ル出羽司令長官ノ許ニ到ルヘキコトヲ命シタリ、而テ午前六時知床岬ノ北北西十五海里(第七集合地點)ニ達シテ一時漂泊シ、先發隊タル第五驅逐隊及ヒ各艇隊ノ掃海ヲ待チ其ノ進捗ニ伴ヒテ先ツ第六戰隊ヲシテ輸送船隊ヲ順次掃海面ニ嚮導進入セシメ、第五戰隊ニハ掃海面入口ニ達シ、汽艇端舟ヲ下シテ陸軍ノ揚陸ヲ助力スヘキヲ命シ、次テ山田司令官ヲシテ第二小隊(春日)ヲ率非、ノトロ岬知床岬ノ間(第一警戒線)方面ヲ哨戒セシメ、第一小隊(八雲)ハ依然掃海面入口附近ニ在リテ間接掩護ニ任セリ、

出羽第四艦隊司令長官ハ、六日正午第七、第八戰隊以下ヲ率非テ第五、第六戰隊等ト相分ル、ヤ、速力ヲ増シテ前進シ、午後六時宗谷海峽ニ於テ更ニ第九戰隊以下ヲ合せ、七日午前六時豫定掃

海面ノ南端ニ達シ、直ニ豫定ノ如ク驅逐隊、艇隊ヲシテ掃海セシムルト同時ニ、第一驅逐隊ノ吹雪、春雨ヲシテ上陸地點ヲ偵察セシメ、其ノ報告ニヨリテ、附近沿岸一ノ防備ナク、僅ニ監視兵ト思ハル、露兵三騎倉皇コルサコフ方面ニ疾走セルコト、及ヒ同所附近ハ海岸マテ水深ク、大船ヲ泊シ得ヘキノミナラス、端舟ノ著岸モ至テ良好ナルコト等ヲ知り得タリ、又廣瀬第五驅逐隊司令ノ率非ル掃海隊ハ強潮アリシニ拘ラス、第九戰隊熊野丸ノ掩護ノ下ニ著々作業ヲ進メ、午前八時四十分ニハ、已ニ上陸地點ヲ距ル五海里ノ所迄清掃スルコトヲ得タリ、是ニ於テ出羽司令長官ハ第七、第八戰隊次テ第六戰隊ヲ掃海面ニ入ラシメ、輸送船隊之ニ繼ギ、各隊ハ十一時頃相前後シテ距岸約二三鏈乃至三海里強ノ間ニ投錨シ、豫テ編制セル聯合陸戰隊直ニ上陸セシニ、何等ノ抵抗ナクシテメレヤ村ノ東方海岸ヲ占領セリ、仍テ午後零時五十分ヨリ、我カ陸軍ノ上陸ヲ開始シ、三時我カ陸戰隊ハ其ノ守地ヲ陸軍ニ讓リテ歸艦セリ、掃海隊ハ午後零時三十分第二期掃海面ノ清掃ヲ終リテ直ニ第三期ニ移リ、二時三十分已ニエンヅマ埼(戰時中對馬、埼ト稱セリ)附近マテ進行セシニ、突然コルサコフ南方高地ノ砲臺ヨリ砲撃ヲ受ケタルヲ以テ、(十二挺砲一門十二斤砲ト思ハル、モノ二三門ヨリ)掩護ノ任ニ在ル赤城ト共ニ應砲シツ、暫時砲火ノ下ニ掃海スルノ難境ニ陷リシモ、遂ニ善ク第三期掃海面ノ半ヲ清掃シ、陸軍ノ掩護射撃ニ必要ナル區域ノ掃海ヲ終ルヲ得タリ、(殘ハ八日各戰隊ノ艦載水雷艇汽艇ヨリ成レル聯合掃海隊ヲ以テ)而テ敵ハ遂ニ支フヘカラサルヲ覺リシモノ、如ク、砲臺、燈臺及ヒボロアントマリ村其ノ他所々ノ建築物ヲ焚キ遁逃セリ、次テ出羽司令長官ハ八日午前三時我カ陸軍ノコルサコフ占領ニ策應スルカ爲メ、和泉及ヒ第九戰隊(赤城、缺ク)第五驅逐

隊ノ不知火、夕霧ヲ既濟掃海面ノ西端對馬埼附近ニ派遣シタルニ、コルサコフハ砲火ヲ開カスシテ同日未明已ニ我カ陸軍ノ占領ニ歸セシコトヲ知り、不知火、夕霧ノ二隻ハ尙前進シテ深ク千歲灣内ニ入り、午前六時四十五分ソロウイヨフカ村沖合ニ到リシ際、同村北方高地ニ敵兵ノ出沒スルヲ認メ之ヲ砲撃セシニ、須臾ニシテ敵モ亦砲兵陣地ニ據リ、野砲二門ヲ以テ砲撃ヲ開始セリ、仍テ直ニ應戰セシニ幾モナクシテ敵ハ發砲ヲ止メ、陣地ヲ焚キテ退却セリ、蓋敵ハ七日コルサコフヲ焚キタル後、ソロウイヨフカ村方面ニ防禦陣地ヲ構成シ、以テ我カ陸軍ニ對戰セントシタルモ、我カ海上側面ヨリセル砲撃ニ潰エ、更ニ其ノ陣地ヲ焚キテ北方ニ退却セルモノナリ、此ノ日二日以來臨時出羽司令長官ノ令下ニ在ル第六戰隊第一、第五驅逐隊、第九艇隊、春日丸、熊野丸ハ其ノ指揮下ヲ離レテ片岡司令長官ノ直屬トナレリ、

是ヨリ先キ陸軍揚陸事業助力ノ任ニ當レル第四艦隊司令官海軍少將武富邦鼎ハ、七日午後零時五十分ヨリ、各艦ノ汽艇、端舟ヲ以テ陸軍ノ上陸ヲ開始セシメシニ、進行極テ迅速ニシテ、七時ニハ其ノ第一次、第二次上陸部隊ハ揚陸ヲ結了セリ、而テ其ノ第三次、第四次ハコルサコフ占領ノ後、同地ヨリ施行スルノ豫定ナルヲ以テ、當日ノ揚陸作業ヲ中止シ、翌八日早朝ヨリ各輸送船隊ヲシテ、漸次對馬埼附近ノ既濟掃海面ニ錨地ヲ變セシメ、次テボロアントマリ村沖ニ移リ、同村ヲ揚陸地點ニ選定シ、正午ヨリ揚陸ヲ開始セリ、此ノ日午後六時頃、我カ掃海隊ハ已ニコルサコフ泊地ノ清掃ヲ終リタリト雖モ、同地ニ在リタル棧橋ハ敵ノ燒棄スル所トナリ、其ノ市街モ亦殆ト灰燼ニ歸セシヲ以テ(市街棧橋等ハ七日午後敵ノ燒棄スル所トナリタルナリ)依然ボロアントマリニ於テ揚陸ヲ

續行シ、十日午後六時海軍ノ援助ヲ要スヘキ揚陸事業ノ終結ヲ告ケタリ、

東郷第三艦隊司令官ハ片岡司令長官ノ命ニ依リ、ノトロ岬及ヒ同燈臺占領ノ目的ヲ以テ、陸軍兵(步兵一)ヲ搭載セル須磨、千代田及ヒ第九艇隊ヲ率井テ、十日午前三時コルサコフヲ發シ、六時五十分ヨリ第九艇隊ヲ先發セシメテ、ノトロ岬ノ北方東海岸ノ掃海ニ任セシメ、(掃海ノ結果敷設水雷ナキコトヲ確メ)須磨、千代田ハ七時十五分同岬ノ東方ニ達シ、先ヅ數發ノ威嚇砲撃ヲ試ミタル後、九時頃ヨリ聯合陸戰隊ヲ上陸セシメシニ、一ノ抵抗ナクシテ十時五分同燈臺ヲ占領シ、(燈臺建築物等ハ皆完全ナリシヲ以テ即夜ヨリ陸軍ニテ點燈ス)捕虜二名(一名ハ燈臺監督タル少佐相當官ヲラトミスケバノウイツチデミヤン、ツエウイツチナルモノニシテ他ノセテ十五名居リタルコトコルサコフノ守備ハ八百乃至一千人許ニシテ内常備兵三百名他ハ皆囚徒ヨリ成ル義勇兵團ナリト聞及ヒ居リタルコトコルサコフ附近ニ水雷ヲ敷設セシコトハ聞知セサルコト開戦後浦鹽斯德トノ海上交通ハ絶ユ居ルコトアレキサンドロフスキーニモ水雷敷設セシコトヲ聞知セサルコトアレキサンドロフスキーノ陸上防備ハ知ラサルモ守備兵ハ千四百人位ナリ然レトモ呼集スレハ直ニ四千五百人位ハ集合シ得ヘント聞及ヘルコト等ナリ而テ此ノ兩名ハ十一日第十三師團兵)小銃二挺、號砲一門ヲ須磨ニ齎シ、(陸戰隊指揮官ハ千代田分隊長海軍大尉藤井精次ニレテ須磨千代田ノ兵員ヨリ成ル一個小隊及ヒ陸軍ノ一個小隊トヲ率井燈臺ヲ距ル北方約三千米突ノ點ヨリ上陸シ午後一時半頃占領地ヲ陸軍部隊ニ引繼キテ歸艦セリ)東郷支隊ハ午後七時頃コルサコフニ歸著セリ、

斯ノ如クニシテ樺太南部ハ、艦隊ニ一ノ死傷損害ヲモ與ヘス占領ノ實ヲ擧ケ、今ヤ艦隊ノ任務ハ測量掃海ノ殘餘作業ト、同地附近ノ警戒ト、敵情ニ應シ隨時南部沿岸ヲ偵察スルコトノミトナリ、全艦隊同地ニ在ルノ必要ナキニ至リシヲ以テ、片岡第三艦隊司令長官ハ、又十日ヲ以テ山田第三艦隊司令官ニ向ヒ、日進、春日及ヒ第一驅逐隊ヲ率井テセント、ウラジミル灣、セント、ヨリガ

灣方面ノ偵察及ヒ威嚇ヲ試ミルヘキコトヲ命スルト同時ニ、(此ノ兩灣方面偵察威嚇ハ伊東軍令部長ヨリ)第四艦隊第九艇隊熊野丸、春日丸ヲコルサコフニ留メ、第三艦隊ニハ函館回航ヲ命シ、尙各隊ヲシテ樺太北部占領軍隊輸送ノ準備ニ著手セシムルコトニ決シ、所要ノ命令ヲ發セリ、是ニ於テ第六戰隊、八幡丸ハ十二日午前三時ニ、八雲、吾妻、八重山、第五驅逐隊ハ同四時ニ何レモ函館ニ向ヒコルサコフヲ發セシニ、途中屢濃霧ニ會シ、利尻島附近ヨリハ全ク咫尺ヲ辨セサルニ至リ、八幡丸ハ十三日午前十一時十五分頃、福山ト江差トノ中央ナル小砂子附近ノ距岸約二鏈ニ在ル暗礁ニ坐礁セリ、然ルニ旗艦八雲ニ在ル片岡司令長官ハ、霧深キカ爲メ同航ノ艦船ヲ割キテ、之カ救助ニ派遣スルノ危険ナルヲ認メシヲ以テ、川合八幡丸艦長ヲシテ、自ラ宮岡津輕海峽防禦司令官ニ向ヒ、救助ノ爲メ直ニ香港丸ノ派遣及ヒ其ノ他必要ノ救助ヲ要求スヘキヲ命シ、東郷第三艦隊司令官ニハ、霧霽レ次第第六戰隊中ヨリ一艦ヲ派遣スヘキヲ命シテ依然進航ヲ續ケ、第六戰隊(秋津洲)ハ十四日午前九時四十五分、八雲、吾妻、八重山、第五驅逐隊ハ十時三十分函館ニ入り、八幡丸ハ香港丸(同艦ハ第三艦隊ニ屬スト雖モ當時宮岡津輕海峽防禦司令官ノ區處ヲ受ケ武藏、豐橋、第四艦隊等ト共ニ津輕海峽ノ警戒ニ任シツ、アルナリ)秋津洲、小倉丸、第二十四號、第二十九號艇等ノ救助ヲ得、且幸ニシテ損傷小ナリシカ爲メ、排水功ヲ奏シ、重量物ヲ陸揚ケシ石炭ノ一部ヲ投棄シタルノミニシテ、十五日午後二時離礁シ、十七日午前函館ニ入レリ、而テ同船ノ救助ニ從事セル秋津洲、及ヒセントウラジミル灣、セント、オリガ灣方面ノ偵察威嚇ニ赴ケル日進、春日、第一驅逐隊モ亦十五日同港ニ入港セリ、(日進、春日、第一驅逐隊ノ行動ハ本章第一節第四目ニ詳ナリ)

(片岡司令長官、出羽司令長官提出報告
備考文書二三、四號及ヒ附表附圖參照)

第三目 占領後樺太南部ニ於ル第四艦隊ノ行動

七月十日樺太南部占領軍ニ對シ、我カ艦隊協力任務ノ終リヲ告グルヤ、片岡第三艦隊司令長官ハ、即日第四艦隊ヲ樺太ニ留メ、第三艦隊ヲシテ順次函館ニ回航シ、炭水ヲ補充セシメ、尙兩艦隊ヲシテ、樺太北部占領ニ對スル第二次行動準備ニ著手セシメンカ爲メ、北遣艦隊機密第七號ノ第十二項(本節第一目参照)ヲ變更スルコト左ノ如シ、

十二、揚陸全部終了セハ第四艦隊第九艇隊、熊野丸春日丸ハ猶留リテ第四艦隊司令長官ノ指揮下ニコルサコフ泊地ノ清掃及ヒ警戒ニ任スルノ傍ラ北部上陸隊揚陸掩護ノ準備ヲナシ又第五、第六戰隊第一、第五驅逐隊假裝巡洋艦八幡丸ハ第二次輸送船隊護衛ノ爲メ函館ニ歸港シ準備ヲ整フヘシ

次テ翌十一日出羽第四艦隊司令長官ニ左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

一、貴官ハ第四艦隊及ヒ臨時其ノ指揮下ニ屬シタル艦艇(編者曰ク第九艇隊熊野丸、香港丸ニシテ十一日ヨリ再出羽司令長官ノ指揮ニ屬セリ)ヲ率非コルサコフ根據地トシ北遣艦隊機密第七號(編者曰ク本章第一目ニ掲ク)未濟ノ事業ヲ實施スルト同時ニ北遣艦隊機密第五四號北遣艦隊命令(編者曰ク本章第二目ニ掲ク)ニ準據シ北部上陸部隊揚陸掩護ノ準備ヲ爲スヘシ

望樓材料及ヒ人員ハ禮文島神埼ニ建設スヘキモノハ萬田山丸ニ其ノ他ハ「シヤム」號ニ在リ

宗谷ヨリ海馬島間敷設ニ要スル海底電線モ奉天丸ニ在リ

二、オパスノスト岩附近ニ打鐘浮標壹個ヲ設置スヘシ其ノ材料ハ「シヤム」號ニ在リ

三、第二次行動開始ハ七月二十日ノ豫定ナリ

(北遣艦隊機密第五五號)

是ヨリ先キ出羽司令長官ハ、九日第二十艇隊司令海軍少佐久保來復ニ向ヒ、ドブーチ灣口ノ水路竝ニ其ノ内外ニ於テ、艦艇ノ泊地ニ適スル地點ノ略測ヲ命シ(同艇隊ハ即日同作業ニ從事セシニ灣口外ニ在ル沙洲間ハ約三四十米突ニシテ三海里強ノ落潮流アリ艇ノ出入極テ困難ナルコトヲ認メシカ午後三時頃ヨリ天候險惡トナリシヲ以テ遂ニ完全ナル測深ヲ遂クル能ハスシテ中止セリ)十日宇治艦長海軍少佐金子滿喜ニ向ヒ、第九戰隊諸艦ノ航海長ヲ指揮シテコルサコフ棧橋ヨリ南北各三海里ノ海面ニシテ、對馬崎ノ東方一海里ニ至ル沿岸ヲ包含スル區域内ノ略測圖ヲ製シ、同時ニコルサコフ泊地ノ西約四海里ニ在ル淺瀬ヲ略測シ、潮信其ノ他風土ニ關スル調査モ成シ得ル限リ爲スヘキコトヲ命シ、宇治艦長ハ十一日ヨリ測量ニ著手シ十八日之ヲ終了セリ而テ淺瀬ハ海圖ニ在ル位置ヲ中心トシテ一海里半ノ半徑ヲ以テ推測セシモ遂ニ發見セシ其ノ測量作業及ヒコルサコフ附近風土ニ關スル報告ハ備考文書第五號ニ掲ク尙同日第十五艇隊司令海軍中佐近藤常松ニ向ヒ、第十五、第九、第十一、第二十艇隊ヲ率非テ、コルサコフ附近未掃海面ノ掃海ヲ行フヘキコトヲ命セリ(但第二十艇隊ハ次記ノ任務ヲ與ヘタル爲メ)又十一日久保第二十艇隊司令ニ向ヒ、我カ一帆船ソーニ岬(ノトロ岬ノ北北西)附近ニ於テ敵ノ銃火ヲ受ケタルノ報アルヲ以テ、麾下第一小隊(第六十五號司令乘艇)ヲ率非テ十二日出發シ、同岬附近ヲ偵察シ、歸路通信ヲノトロ燈臺ニ試ミテ占領後ノ情況ヲ聞クヘキコト、同第二小隊(第六十四號第六十三號ノ二艇ナリ)ハナイブーチ及ヒ海豹島偵察巡航ノ爲メ、一時春日丸艦長海軍中佐荒川規志ノ指揮下ニ入ラシムヘキコトヲ命シ、久保艇隊司令ハ本訓令ニ基キ第一小隊ヲ率非テ十二日出港セシモ風浪霧ニ會セシ爲メ途ヲ引返シテ十三日一旦コルサコフニ歸港シ十四日再出港シテノトロ岬トノ通信ヲ爲シ

同嶼占領ノ翌十一日十九名ヨリ成ル我カ陸軍ノ斥候シラヌン嶼ノ北方十二海里ノ地マテ出動セシモ雜草茫々トシテ道路ナク草上ニ敵ノ帽子外套等遺棄セルヲ發見セシコト十二日陸軍斥候ハモルシ灣附近ヲ偵察セシモ異狀ナカリシコトツニ岬附近ハ未タ偵察セサルコト通信器械ハ完備シ居ルモ電線切斷シ居ルカ爲メ未タコトヲ通信ヲ爲シ得サルコト燈臺ハ完備シ居ルコト等ノ情報ヲ得シモノニ岬ノ偵察ハ濃霧ノ爲メ目的ヲ達シ得ス 荒川春日丸艦長ニハ、春日丸及ヒ第二十艇隊ノ第二小隊ヲ率非、十二日出發シテナイブーチ泊地及ヒ海豹島ヲ偵察巡航シ、十六日迄ニ歸港スヘキコト、ナイブーチニ於テハ海路北方ニ逃走セントスル敵兵ニ對シ、機宜ノ處置ヲ執ルヘキコト、海豹島ハ豐富ナル海豹獵區ニテ、將來我カ保護ヲ加フヘキ所ナルカ爲メ、其ノ心得ニテ巡航視察スヘキコトヲ命シ、(春日丸及ヒ第二十艇隊ノ第二小隊ハ泊十三日午前出發シ十四日海豹島及ヒナイブーチヲ視察セシカナイブーチ附近ニ在リシ敵ノ守備兵ハ六月コルサコフニ引上ケタルヲ以テ同艇隊ハ同地北方ノ沿岸ヲ威嚇砲撃シ渡河點ニ於ル設備ヲ破壞シアレキサンドロフスキーニ通スル電線ヲ切斷セリ又海豹島ノ露人ハ開戦以來悉ク引上ケ今ヤ本邦人專有ノ獵區トナリ居ルコト等ヲ視察シ十五日コルサコフニ歸著セリ) 一面ニ於テハ北海方面特定兵要地點ヲ追加シ、樺太、沿海州間ニ七警戒線ヲ設ケ(第十部第九篇戰役中使用セシ特別規約ノ部ニ掲ク) 十二日ヨリハ鎮遠、松島、橋立、臺南丸(臺南丸ハ十六日ヨリ熊野丸ト交代ス)ノ順序ヲ以テ一艦ツ、晝間ハ第二警戒線附近ニ出テ、宗谷海峡ヲ警戒監視シ、夜間ハ東方ニ退キ、嚴島ト宗谷望樓無線電信トノ通信距離内ニ行動セシムルコト、爲セリ、次テ十三日ニ至リ同司令長官ハ、樺太南部占領軍司令官陸軍少將竹内正策ヨリ、我カ南部上陸部隊ハ、昨十二日敵ノ主力ヲウラジミロフカノ西方ダリネエ村ノ密林中ニ擊破シタルコト、同戰鬪ニテ二百有餘ノ敵ヲ捕虜トセシコト、殘餘ノ敵ハ西岸ナルマウカニ退却中ナルコト、此ノ退却ハ薩哈噠總督ノ訓令ニ由ルモノニシテ、之カ爲メ船舶ヲ特派シ居ルモノ、如クナルコト、又メレヤ村ノ東方チビサニ驛ニハ、敵ノ義勇兵若干アリテ、同地ニハ木工場建築用材石

炭牛馬等ノ物資ヲ集積シ居ルコト、我カ陸軍一小隊ハ之ヲ偵察中ナルコト等ノ報道ヲ得シヲ以テ、直ニ鎮遠ヲマウカ方面ニ派シテ偵察威嚇ヲ行ハシメ、第十一艇隊ヲチビサニ方面ニ派シテ陸軍ト策應セシメ、尙十五日迄ニ其ノ任務ヲ終ヘ歸港スヘキ旨ヲ命セリ、(當時鎮遠ハ濃霧ノ爲メ里ニ假泊シ居リシカ此ノ電訓ニ接シ直ニ濃霧ヲ冒シテマウカニ向ヒシニ十四日午前六時半頃ヨリ霧霽レテ陸岸ヲ認メ得十時頃同澳沖ニ達シタルヲ以テ少時威嚇砲撃ヲ行ヒ次テ同附近ニ到レル和船ヲ停メ陸上ノ狀況ヲ知ル海岸ノ家屋ハ日本及ヒアイヌノ住家ニシテ露人ノ如キハ殆ト見サル所ナリト答ヲ得十五日午後コルサコフニ歸港セリ又第十一艇隊ハ十四日午前三時三十分出港シ五時四十五分チビサニ泊地ニ投錨シテ陸軍ノ偵察隊長小畑步兵少尉ニ會シ十三日已ニ抵抗ナクシテ同村ヲ占領シ義勇兵約百三十名ハ已ニ大チビサニ湖ノ北岸ニ退キ機關砲一門ヲ有シ時々斥候ヲ放チツ、アルカ如クナルヲ以テ同少尉ハ木材多量ヲ蓄積シアル木工場ヲ有スルアラクリー村ヲ占領スヘキ任務ヲ帶フルモ其ノ退却セル敵兵ノ再出ヲ虞リテ未ダ進ムヲ得サル狀態ナリトコトヲ知リシヲ以テ同艇隊司令海軍少佐富士本梅次郎ハ直ニ第七十五號艇ヲアラクリーニ回航シ監視ニ任シシメ他ハチビサニ留リ十五日午前三時ヨリ小畑少尉ノ威力偵察聲援ノ爲メ第七十三號、第七十二號、第七十四號ノ三艇ハ空砲二發ツ、ヲ發シ小畑少尉ハ抵抗ナク午前同地ヲ占領セリ是ニ於テ午後二艇相合シ一旦コルサコフニ歸港セシモ第七十五號第七十四號ノ兩艇ハ再出港シアラクリーニ回航シテ同夜ヨリ木工場保護監視ニ任シ十六日任務ヲ赤城ニ譲リテ十七日コルサコフニ歸港シテ復隊セリ而テ赤城ハ陸軍ト協議ノ上聲援ノ必要ナキコト、ナリシヲ以テ是亦十七日午後コルサコフニ歸港シタリ)

越エテ十五日出羽第四艦隊司令長官ハ、左ノ伊東軍令部長ノ電訓(十三日附)ニ接ス、

樺太島東海岸北緯四十九度十分東經百四十三度十分チチメネフ發ニテ難破獨逸汽船「カシリ」號船長ヨリ在上海獨逸官憲ニ左ノ電報達セリト云フ

「カシリ」號ハ樺太東岸ニテ難破シ船員三十人ハ糧食二十日分ヲ有シテ尙同船内ニ在リ他ノ十人ハチチメネフニ在リ救助船送ラレタシ

右ノ電報ニ基キ在東京獨逸公使ハ帝國海軍ヨリ何等カノ救助ヲ受ケ得ヘキカヲ申出テ政府ニ於テハ成シ得ル限り其ノ救助ヲ試ミルヘキコトニ決セリ就テハ貴官ハ一二隻ノ艦船ヲ同

方面ニ分遣シ右船員ノ救助ヲ試ミラルヘシ尙其ノ難破位置ハ獨逸公使ヨリ電報問合セ中ニ付分リ次第電報スヘシ又チチメネフニ在ル船員ハ帝國軍艦ノ同地沖合ニ現ル、ヲ見ハ直ニ沖合ニ出テ來ル様獨逸公使ヨリ電訓スル筈ナリ

右行動ノ機會ニ乘シ成シ得レハ同分遣艦隊ヲシテナイブーチ、マヌーエ方面ニ威嚇運動ヲ試ミルヲ可トス

次テ幾モナク更ニ左ノ電訓ニ接セリ、

一、獨逸汽船「カシリ」號難破ノ位置ハ片岡岬附近ナリト云フ貴官ハ可成速ニ前電訓令ニ基キ艦船ヲ派遣スヘシ

二、片岡岬沖海豹島附近ニ於ル漁獵禁止ニ關シ左記ノ通り片岡司令長官ヘ訓令セリ貴官ハ右分遣艦隊指揮官ヲシテ同訓令ノ主旨ニ基キ適宜措置セシムヘシ

樺太島ノ東片海豹島附近ニ於ル漁業偵察トシテ英國軍艦ヲ同島附近ニ派遣スルコトハ

今回之ヲ謝絶スルコト、ナリタルニ就テハ今後貴官ハ麾下艦艇ヲシテ適宜同島附近ヲ

巡航警戒セシメ當分ノ内同島竝ニ同島附近ニ於テ海獸魚類等ヲ獵獲スルコトハ一切之

ヲ禁止セシムヘシ

是ニ於テ出羽第四艦隊司令長官ハ、直ニ中尾第四艦隊司令官ニ向ヒ、準備整ヒ次第臺南丸ヲ率非テ片岡岬附近ニ到リ「カシリ」號ノ船員ヲ救助收容シ、歸途海豹島ニ立寄り、同島竝ニ其ノ附近ニ於テ海獸魚類等ヲ獵獲スヘカラサル旨ヲ揭示傳達シ、十九日午後六時即チ豫定第二次行

動開始ノ以前ニ歸港スヘキコト、若シ天候等ノ爲メニ同時刻ニ歸著シ得サル場合ニハ稚内ニ直航シ、救助船員ヲ地方官吏ニ引渡シテ、速ニ本隊ニ合スヘキコトヲ命シテ出發セシム、而テナイブーチ方面ノ威嚇行動ハ、春日丸及ヒ艇隊ヲ派シ居ルヲ以テ之ヲ行ハシメサルニ決セリ、

(中尾司令官ハ本訓令ニ基キ即日港出港シ片岡岬ニ向ヒシニ十六日午前八時頃ヨリ濃霧ニ會シ咫尺ヲ辨セサルニ至リシヲ以テ十時推測ニテ海豹島ノ南東約十海里ニ投錨セシモ底質岩石ナルニ加フルニ潮流ト風向ト直角ヲナシ爲メニ走錨シテ已マサルニヨリ已ムヲ得ス拔錨進セシニ午後零時三十分頃ヨリ霧稍霽レタルモ波浪甚タ高カリシヲ以テ多來加灣(戰時中片岡灣ト稱シタルモノナリ)ニ避泊シタル上時宜ニヨリテハ先ツチチメネフニ在ル船員ヲ救助セント欲シ同灣ニ向ヒ航進中五時四十分右舷艦首ニ一帆船ヲ認メテ之ニ向ヒ海豹島ノ西南約二十四海里ノ處ニ於テ之ヲ停メ其ノ艤艚獵ニ從事スル卵之日丸ナルコトヲ知リ同船船長ニ向ヒ當地附近ニ於テ漁獵スヘカラサル旨ヲ嚴命シ且日本政府ノ命ニ依リ海豹島竝ニ附近ニ於テ魚類海獸等ヲ漁獵スルコトヲ禁ス現ニ漁獵中ノ者ハ直ニ之ヲ止メ本島ヨリ退去スヘシト記シタル標札ヲ與ヘ之ヲ海豹島ニ樹立スヘキヲ命シテ後チ同船ト分レ正子頂片岡灣内ニ投錨シ十七日早朝拔錨シチチメネフニ近ツキ汽笛ヲ鳴ラシ又前橋桁端ニ獨逸軍艦旗ヲ掲グル等其ノ救助ニ來レルコトヲ知ラシムルニ努メツ、十時頃同村沖三海里ニ投錨セシニ獨逸國旗ヲ掲ケシ一端舟ボロナイ河ヨリ出テ來リシモ長壽ノ爲メ危險ヲ感セシモノ、如ク同河口門洲附近ヨリ引返シ臺南丸ヨリハ端舟ヲ出シテ陸岸ヲ偵察セシメント欲ヒシモ艦ノ動搖甚シク端舟ノ揚ケ下シ危險ナルヲ以テ中止シテ風浪ノ收ルヲ待チシカ夜ニ入リテモ尙收ラス依テ午後九時頃拔錨シテ片岡岬ニ向ヒシニ十八日ハ終日濃霧アリテ終ニ陸影ヲ認メス推測ニテ同岬沖合ニ遊弋セシモ天候回復ノ見込ナカリシヲ以テ一先ツコルサコフニ歸港スルコトニ決シ夕刻ヨリ同地ヲ發シテ十九日午後コルサコフニ入リシカ出羽司令長官ヨリ再臺南丸ヲ率非稚内ニ回航シ「カシリ」號及ヒ得撫島ニ擱岸セル「オールドハミヤ」號ノ遭難者救助ニ關シ伊東軍令部長ノ直接指揮ヲ受ケ行動スヘキコト等ノ命ヲ受ケ直ニ出港シ展濃霧ニ會シ二十日夕刻漸ク同港ニ入レリ而テ出羽司令長官ハ伊東軍令部長ニ向ヒ今ヤ出動ノ機ニ際スルヲ以テ當隊ヨリ更ニ艦艇ヲ派スルハ頗ル困難ナルヲ以テ「オールドハミヤ」乘員救助ノ目的ヲ以テ派遣セラルヘキ艦ヲシテ「カシリ」號ノ乘員ヲモ併ヒテ救助ノ事ヲ取計ラハル、ヲ得ハ最モ都合ナリ然レトモ已ムナクハ再臺南丸ヲ派遣スヘシ何分ノ御指令直接在稚内中尾司令官ニ返電アリタシト電報セシニ軍令部長ヨリ「カシリ」號船員救助ノ爲メ速ニ再臺南丸ヲ派遣シ前訓令ニ基キ行動セシムヘシトノ電訓アリタルヲ以テ臺南丸ハ稚内ヲ出港シ二十一日夜ハ七郎灣内ニ泊シ二十二日午前六時十六分チチメネフニ投錨セシカボロナイ河ヨリ獨逸國旗ヲ掲ケテ端舟ノ來ルヲ認メ臺南丸ヨリモ端舟ヲ派シ同端舟ト會シ陸上ニ「コサツク」兵六名義勇兵六名アルコトヲ聞知シテ歸艦シ彼ハ同地ニ在ル全員ヲ乗艦セシムル爲メ引返シ幾モナク同船長以下歐人二名清國人六名ヲ乗ヒ臺南丸ニ到リシヲ以テ之ヲ收容シ同船長ヨリ「カシリ」號ハブラットコウスノ鼻ノ西方ニ坐礁シ居ルコトヲ知リタルカ故ニ臺南丸ハテルベニヤ半島ノ西方ニ回航シ直ニ

船員及手荷物等ノ收容ニ著手シ二十三日午前四時全ク之ヲ終リ(收容總人員ハ船長以下歐人七名清國人三十六名ナリ内清國人一名ハ二十四日朝死セリ)同日夕刻出港シ濃霧ノ爲メ引返シ二十四日午前八時出港シ海豹島巡視ノ上ニ十六日小樽ニ入り二十八日收容人員ヲ榮城丸ニ乗船シ海軍少尉久保勉ヲ附シテ函館ニ護送シ宮岡津輕海峽防禦司令官ニ引渡サシメ宮岡司令官ハ二日之ヲ受取り海軍大臣ノ命ニ依リ更ニ同地英國領事ニ引渡シ臺南丸ハ三十日小樽ヲ發シ本隊ニ合スルカ爲メアレキサンドロ・スキーニ向ヒタリシカ幾モナク途ニシテ小樽ニ向ヒテ來ル滿州丸ニ會シ同艦ヨリ更ニ臺南丸、香港丸ハ樺太東岸及北西部海灣ノ巡視ヲ命ゼラレタルコト香港丸ハ中尾司令官宛ノ書類ヲ携ヘ二十九日アレキサンドロ・スキーヲ發シ小樽ニ回航シタルコトノ信號ヲ得タルヲ以テ再引返シテ同日小樽ニ入り而テ香港丸モ三十一日同港ニ入り八月二日相共ニ出港シテ巡視ノ途ニ就ケリ臺南丸、香港丸ノ巡視行動ハ本章第三節第四目ニ詳ナリ中尾司令官提出「カシリー」號船員救助報告及「海」十六日出羽司令官ハ、香港丸ノ津輕海峽哨戒任務ヲ解キ、八幡丸保護ノ必要ナキニ至ラハ小樽ニ回航セシメ、熊野丸ニハ臺南丸出動中、代リテ哨艦任務ニ服スヘキ旨ヲ命シタリ、然ルニ此ノ日青森ニ在ル片岡第三艦隊司令長官ヨリ、八幡丸損傷シタルヲ以テ輸送船隊嚮導艦不足ヲ生セリ、滿州丸ハ十九日中ニ小樽港ニ回航セシムヘシ、同艦ハ本日當地ヲ發シ、其ノ地ニ向フトノ電訓ニ接シタルヲ以テ、出羽司令長官ハ十七日此ノ旨ヲ滿州丸ニ傳ヘタリ、(滿州丸ハ十七日青森ヨリコレサコフニ著シ必要ナル通信ヲ了)又同日同司令長官ハ、對馬埼ノ東方サツイナバーヂニ於テ、端舟ニテ來著セル露國海軍士官一名、水兵十三名ヲ捕ヘタリ、トノ陸軍兵站支部ヨリノ通報ヲ受ケシニヨリ、直ニ參謀海軍少佐百武三郎及ヒ通譯官ヲ派シ、之ヲ訊問セシメタル結果、同士官ハ「スウオーロフ」乘組豫備少尉候補生「トレグー」ボッフニシテ、同人等ハ五月十九日臺灣ノ南方ニ於テ拿捕シタル英國汽船「オルダー」シヤ號ノ回航員トシテ艦隊ト離レ、單獨浦鹽斯德ニ向ヒ航海中、六月二日濃霧ノ爲メ得撫島ノ東岸ニ坐礁シ、其ノ船體ヲ燒キ、助ヲ乞ハシカ爲メ、樺太ニ渡リ來リシモノニシテ、尙遭難地ニハ士官二名、卒十四名在留シ居

ルコトヲ知レリ、彼ハ糧食缺乏シ居ルヲ以テ、一日モ早ク殘留者ノ救助ヲ歎願セシモ、艦隊ハ將ニ樺太北部ノ占領ニ向ハントスルノ際ニシテ、其ノ勢力ヲ割ク能ハサルニ因リ、遂ニ當時大湊ニ在ル橫須賀鎮守府附屬運送船喜佐方丸ヲシテ救助セシムルコト、ナレリ、以上ヲ第二次出動前ニ於ル第四艦隊ノ行動ト爲ス、(因ニ記ス樺太陸上ニ於テハ十六日マノーエ方面ニ敗走セル大佐アルチンエフスキー以下准士官以上九名下士官百八十四名我カ軍門ニ投降セリ竹内南部占領軍司令官カアルチンエフスキーニ送リタル勅降文ハ備考文書第九號參照)

第四目 日進春日第一驅逐隊ノセント、ウラヂーミル灣セント、オリガ灣方面偵察

片岡第三艦隊司令長官ハ、明治三十八年七月九日伊東軍令部長ヨリ、第一次上陸隊ノ輸送上陸ノ援助ヲ終リ、南下スルノ機ニ至ラハ、一部隊ヲセント、ウラヂーミル灣セント、オリガ灣方面ニ派シ、以テ同附近ノ偵察威嚇ヲ試ミシメ、又コレサコフ方面ニ於テ我カ手ニ落チシ捕虜土民等アラハ、是等ニ就キ、堪察加方面特ニベトロパウロウスクノ防備情況等ヲ調査シ、且同方面ノ案内及ヒ通辯等ニ使用シ得ヘキモノアラハ、之ヲ收容シ置カレンコトヲ望ム、トノ電訓ヲ受ケタルヲ以テ、十日山田第三艦隊司令官ニ向ヒ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

一、貴官ハ日進、春日及ヒ第一驅逐隊ヲ率非來十二日便宜當地(編者曰コレヲ出發シセント、ウラヂーミル灣セント、オリガ灣方面ノ偵察及ヒ威嚇ヲ試ミ來十五日中ニ函館ニ歸著シ炭

水ヲ補充シ命ヲ待ツヘシ

二、此ノ任務ニ關スル報告ハ直接貴官ヨリ大本營ニ電報スルト同時ニ本職ニモ報告ス

是ニ於テ山田司令官ハ、十二日午前四時日進及ヒ第一驅逐隊ヲ率非テコルサコフヲ出發シ、十時四十五分宗谷岬ノ北東四分ノ三東十三海里^(第二〇一)ニ於テ春日ヲ合ハセ、^(春日ハ十日以來宗谷望中繼立ニ哨戒ノ任務ニ從事中ナリシカ十一日山田司令官ヨリ本任務ニ從事スヘキ電命ヲ受ケ來リ會セシナリ)十三日午前八時遙ニセント、ウラヂーミルノ沿岸ヲ望ミ得ルノ地點ニ達シ、先ツ同灣偵察ヲ藤本第一驅逐隊司令ニ命シテ急航セシメ、日進、春日^(以後本隊ト記ス)モ亦同灣口ニ向ヒ午後二時頃茲ニ達セリ、此ノ時恰モ第一驅逐隊同灣ノ偵察ヲ終リテ歸リ、フレコバー角ノ西方一鏈半^{(後チ日進副長海軍中佐秀島成忠等ノ偵察ニヨリテ同ノ所ニ於テ、敵ノ巡洋艦「イズムルード」ヲ擱坐シテ大ニ破損シ、到底引揚ケ又ハ使用ノ見込ナキコト、陸岸ニハ何等ノ防備ヲモ認メス、只一名ノ監視兵ト思ハル、モノ居リタルモ、直ニ遁走セルコト等ノ報告ヲ齎セシヲ以テ、山田司令官ハ日進副長海軍中佐秀島成忠外士官二名ヲシテ日進、春日ノ汽艇ニ分乗シ、第一驅逐隊ノ掩護ノ下ニ、更ニ「イズムルード」ノ狀態檢察ヲ命シ、同中佐等四時歸艦シテ、中央煙突ヨリ前方ハ稍原體ヲ存ストモ、後方約三分ノ一ハ全ク飛散シテ、原形ヲ知ル能ハサル迄ノ大破損ナルコト、艦隊ノ傾斜約二十度ニ及ヒ居ルコト、大砲ハ十二挺速射砲四門ヲ存シ、何レモ赤錆ヲ生シ、必要ナル一部ハ取外シアリ、尾栓孔ノ螺絲ハ少疵アレ共完全ナルコト等ノ報告ヲ爲セシヲ以テ、同三十分同灣口ヲ去リ、南下シテ是ヨリ將ニオリガ灣ヲ偵察シ、夜ニ入ラハ驅逐隊ヲシテ同方面ノ陸岸ヲ探照シ、以テ威嚇ヲ試ミシメントセシニ、濃霧來襲シテ其ノ企圖ヲ妨ケシヨリ、已ムナク驅逐隊ニハ適宜海岸ニ避泊シ、本隊ニハ南方ニ操鐵シテ沖合ニ出テ、明朝}

オリガ灣口ニ於テ兩隊相合スヘキコトヲ命シ相分レシカ、濃霧ハ依然トシテ十四日午前九時三十分ニ至ルモ霽レス、然ルニ此ノ時驅逐隊ヨリ春日ヲ介シテ、霧ノ稍薄キニ乘シテオリガ灣内ノ偵察ヲ遂ケ、何等異狀ヲ認メス、威嚇ノ爲メ灣口ニ於テ空砲數發ヲ放テリ、トノ報告到リシヲ以テ、^(第一驅逐隊ハ十三日夜ハウラヂーミル灣内ニ避泊シ同灣及ヒオリガ灣方面ヲ約三時間探照威嚇シテ、十四日午前五時三十分ニ至リ霧稍霽レタル際ニ乘シテ出港七時十分オリガ灣ニ達シタルナリ)山田司令官ハ爰ニ其ノ任務ヲ完ウシ、直ニ同驅逐隊ニ單獨歸港ヲ命シ、^(十五日午前十一時五分函館ニ歸著ス)本隊ハ午前十一時推定位置ニズメンニー燈臺ノ東方約十五海里ヨリ歸途ニ就キ、屢濃霧ニ會セシモ、十五日午後三時十五分無事函館ニ歸著セリ、^(山田司令官、第一驅逐隊司令、秀島日進副長報告、備考文書第十一、第十二號及ヒ附圖參照)

第二節 樺太北部ノ占領及ヒ沿海州ニ對スル作動

第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

樺太北部上陸隊出發ノ期漸ク近ツキタルヲ以テ、片岡第三艦隊司令長官ハ、明治三十八年七月十二日麾下ニ向ヒ、左ノ命令ヲ下シタリ、

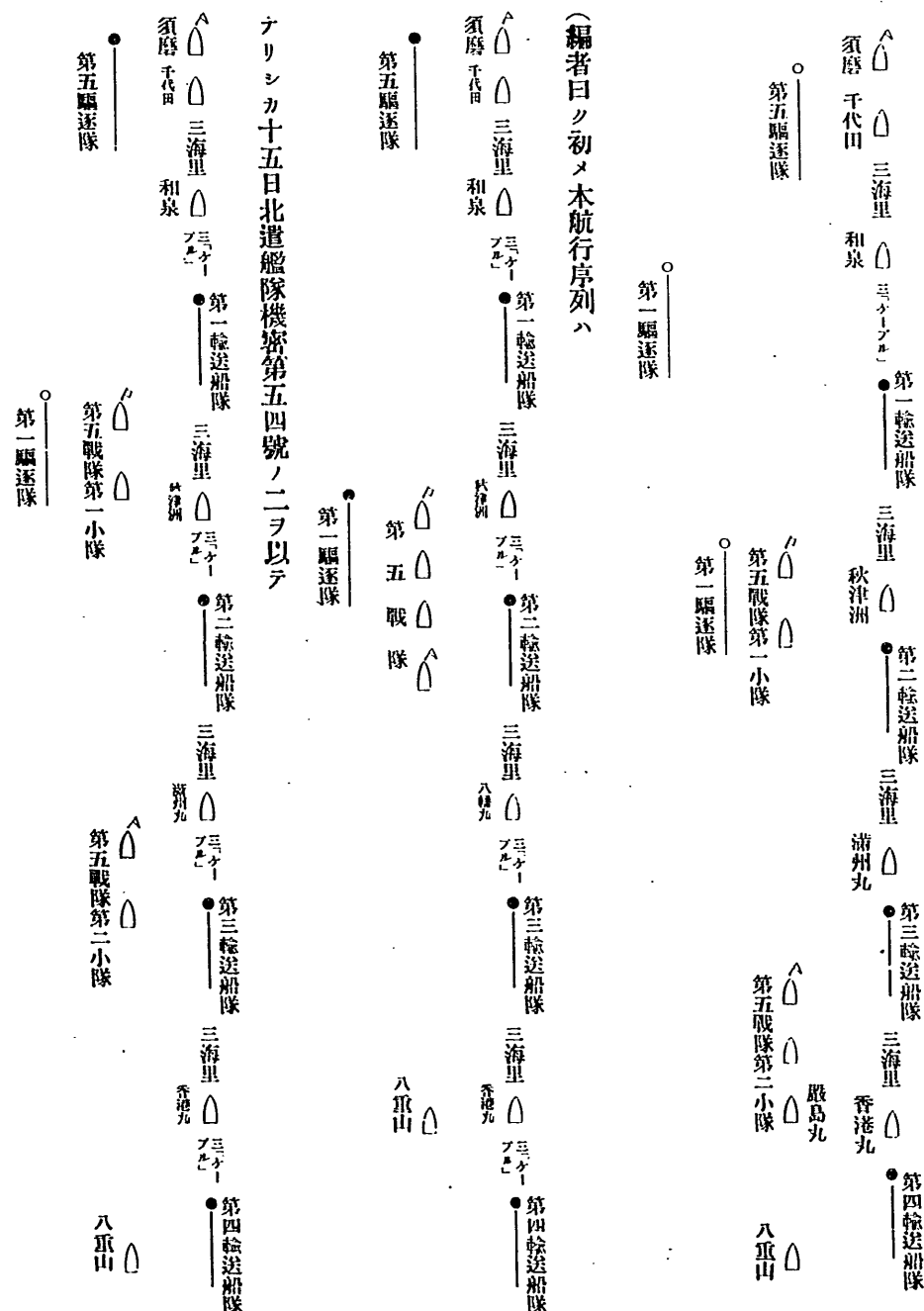
一、浦鹽艦隊ノ敵情ニ關シテハ其ノ後得ル所ナシ

コルサコフハ既ニ我カ軍ノ占領ニ歸シ其ノ敗兵ハ北方ニ向ヒ退却セリ其ノ他同島ノ兵備ニ關シテハ前命令ト大差ナキモノト認ム

二、北遣艦隊ハ第一次作戰ヲ以テ獨立第十三師團ノ南部上陸隊ヲコルサコフニ掩護上陸セシメ海陸相協同作戰シテ我カ陸軍ハ既ニ樺太南部ノ占領ヲ確實ニセリ是ニ於テ更ニ第二次輸送船隊ヲ護衛シ之ヲアレキサンドロフスキーニ掩護揚陸シ以テ樺太占領ノ目的ヲ速

成セントス

三、航行序列左ノ如シ



ノ如ク改正セラレ更ニ十七日同號ノ三ヲ以テ本文ノ如ク改正セラレタリ

四、第六戰隊ノ須磨千代田ハ輸送船隊ノ前方ヲ警戒シ又和泉秋津洲及ヒ假裝巡洋艦香港丸

(編者曰ク香港丸ハ七月一日八幡丸ハ各輸送船隊ノ一部ヲ嚮導ス
ヲ以テ滿州丸ト變更セラレ)

第五戰隊ハ輸送船隊ノ左側ヲ警戒シ八重山ハ輸送船隊ノ左方斜後ニ竝進ス

第五驅逐隊ハ第六戰隊ノ外側ニ第一驅逐隊ハ第五戰隊ノ外側ニ竝進ス

五、出羽司令長官ハ第四艦隊第九艇隊母艦熊野丸春日丸及ヒ給炭船二隻ヲ率井本

行動開始ニ先タツコト一日コルサコヲ進發シ第三日(本行動開始ヨリ云フ)間官海峽南口チユイク

岬附近ニ達シ一部隊ヲ派遣シテカストリー灣ノ偵察及ヒ威嚇ヲ爲シ又他ノ一部隊ヲ以テ

豫定上陸地點ノ選定ヲ行ヒ且敵ヲ疑惑スル目的ヲ以テアレキサンドロフスキー及ヒジ

エノ前面適宜ノ位置ニ出現セシメ終テ各其ノ本隊所在地ニ歸投セシムヘシ

六、出羽司令長官ハ第四日黎明豫定上陸地點ノ沖合ニ達シ艦隊掩護ノ下ニ艇隊ノ急行掃海

ヲ命シ又時機ヲ見テ陸戰隊ヲ出シ上陸地點ヲ占領セシメ陸軍揚陸セハ交代歸艦セシム

但本作業ハ無線電信ニ由リ本職ト氣脈ヲ通シタル後開始スルヲ要ス掃海計畫及ヒ陸戰

隊ノ編成ハ出羽司令長官之ヲ定ム

七、出羽司令長官ハ陸軍部隊揚陸ノ事業ニ任ス之カ爲メ第五戰隊及ヒ第六戰隊ノ汽艇、端艇

ハ第四艦隊司令長官ノ要スル處ニ送ルヘシ

八、輸送船隊ハ第四日早朝豫定上陸地點ニ到達シ各嚮導艦ハ出羽司令長官ノ指示ニ從ヒ之

ヲ掃海面ニ誘導スヘシ

九、第五戰隊(汽艇、端艇ヲ出シタル後)ハ機宜行動ス

第六戰隊(汽艇、端艇ヲ出シタル後)第一警戒線ノ哨戒ニ任ス

假裝巡洋艦香港丸(編者曰ク香港丸ハ七月一日ヲ以テ滿州丸ト變更セラル)八幡丸ハ先任艦長ノ指揮下ニ第五警戒線ノ哨戒ニ任ス

第五驅逐隊ハ第一警戒線ニ達シタル時ヨリ第四艦隊司令長官ノ指揮ヲ承ケシム

第一驅逐隊ハ機宜命令ノ下ニ行動セシム要スレハ其ノ一艦ヲ第四警戒線ニ、他ノ一艦ヲカストリ灣外ニ哨戒セシム

十、出羽司令長官ハ陸軍ノ前進ト策應シアレキサンドロフスキー泊地ノ掃海ヲ爲サシムヘシ

十一、輸送船隊ハ揚陸終レハ便宜單獨歸航セシム

(北遣艦隊機密第五四號)

尙同日出羽第四艦隊司令長官ニハ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

一、北部上陸部隊ノ上陸地點ハアーカプスカイヨリ北緯五十一度ニ至ル沿岸ニ於テ選定スヘシ

二、第一期掃海面ハ可成のアレキサンドロフスキーヨリ遠サカラシムルノ目的ヲ以テ上陸地點ニ向ヒ約南西微南ノ方向ヲ取ラシムルヲ要ス

(北遣艦隊機密第五六號)

既ニシテ第三艦隊ノ八雲、吾妻、八重山及ヒ第五驅逐隊ハ、十四日午前コルサコフヨリ函館ニ回

航シ、(此ノ途中八幡丸ハ小砂子附近ニテ坐礁セシモ遂ニ離礁スルコトヲ得テ十七日入港セリ前章ニ詳ナリ)片岡司令長官ハ、同日旗艦須磨ニテコルサコフニ在ル東郷司令官ニ向ヒ、左ノ如ク訓令セリ、

一、獨立第十三師團第二次輸送船二十二隻(内通信船二隻、病院船一隻)ハ來十七日午前四時以後便宜青森灣ヲ出發シ十八日午後四時迄ニ小樽回航ノ豫定ナリ

二、貴官ハ此ノ期間間接掩護ノ目的ヲ以テ第六戰隊ヲ率非十七日午前六時函館ヲ發シ普通航路ノ外方適宜ノ位置ニ哨戒シ十八日夕刻小樽ニ到著スヘシ

三、又輸送船三隻ハ來十七日コルサコフヲ發シ十八日小樽到著ノ豫定ナリ

四、輸送船ノ小樽到著ニ先タチ便宜一艦ヲ派シ其ノ錨地ヲ指示セシムヘシ

(北遣艦隊機密第七〇號)

五、山田第三艦隊司令官ニハ別紙ノ如ク訓令セリ(編者曰ク別紙略ス)之ト同時ニ旗艦日進ニテ春日及ヒ第一驅逐隊ヲ率非、ウラヂーミル及ヒオリガ灣ノ偵察ヲ終リ、炭水補充ノ爲メ函館回航ノ途ニ在ル山田司令官ニモ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ

一、東郷第三艦隊司令官ニハ別紙ノ通り訓令セリ(編者曰ク別紙略ス)

二、貴官モ亦日進、春日、吾妻及ヒ第一驅逐隊ヲ率非輸送船間接掩護ノ目的ヲ以テ來十七日便宜函館ヲ發シ十八日夕刻迄ニ小樽ニ回航スヘシ

三、貴官ハ其ノ行動ニ關シテハ東郷司令官ト協議スルヲ要ス

(北遣艦隊機密第七一號)

尋テ十五日同司令長官ハ、獨立第十三師團第二次輸送船隊ノ護送及ヒ揚陸掩護ノ要領ヲ定ムルコト左ノ如シ、

第五驅逐隊	須磨 千代田	三海里	第一輸送船隊	三海里	第五戰隊第二小隊	八重山
	相泉	三ヶ		三ヶ	嚴島丸	
		1		7		
		2		8		
		3		9		
		4		10		
		5		11		
		6		12		
				三海里		
				三ヶ		
				13		
				14		
				15		
				16		
				17		
				三海里		
				三ヶ		
				18		
				19		
				20		
				21		
				22		

三、輸送船隊ヲ四隊ニ區分シ之ニ第一、第二、第三、第四輸送船隊ノ名ヲ附シ各隊ニハ軍艦或ハ假裝巡洋艦ヲ先頭ニ附シテ之ヲ嚮導セシム又北遣艦隊ノ第五、第六戰隊(二隻缺)及ヒ第一、第五驅逐隊ヲシテ航路ノ前方及ヒ左側ニ竝航シテ之ヲ護衛セシム

四、上陸地點ニハ先ツ北遣艦隊ノ一部ヲ先發セシメ豫定上陸地點ノ選定及ヒ揚陸ニ要スル海面ノ清掃ヲナサシム

五、上陸地點ハ先ツ北遣艦隊ノ陸戰隊ヲ以テ之ヲ占領セシメ適宜ノ時機ヲ見テ出羽司令長官ハ第十三師團ノ上陸開始ノ時期ヲ指示ス

六、第十三師團ノ上陸ヲ迅速容易ナラシムル爲メ北遣艦隊ノ汽艇、端舟ヲ用ヒ揚陸事業ニ助力ス而テ武富司令官ハ碇泊場司令官ト協議シ順序ヲ定メ之ヲ配分スルモノトス

七、敵狀ニ依リ北遣艦隊ノ一部ヲ以テ海上ヨリ砲撃ヲ加ヘ以テ陸軍ノ揚陸ヲ掩護シ又陸軍ノ前進ニ策應シテ機宜作動セシムルモノトス

八、上陸地點ニ於ル掃海結了セハ陸軍ノ前進ニ伴ヒアレキサンドロフスキーニ至ル航路及ヒ同泊地ノ海面ヲ清掃シ不急ノ軍需品等ハ之ヲ同地ヨリ揚陸セシメムトス

九、輸送船隊北進中天候ノ異變其ノ他不期ノ事變ニ遭遇シタル際避泊スヘキ集合地點ヲ定ムル左ノ如シ

第一集合地點
第二集合地點
第三集合地點
第四集合地點

コスナ泊地（北緯四十八度、東經百四十二度十分）
セルツナ河錨地（北緯四十九度三十分、東經百四十二度八分）
チユイク岬南方（北緯五十一度四十分、東經百四十一度四十分）

十、輸送船隊ノ小樽ヨリ上陸地點ニ到ル航海中ハ特ニ左ノ諸件ニ注意スヘシ

(イ) 速力ヲ左ノ通り定メ基準艦ハ成ルヘク速力ノ變化ヲ避ケ圖示ノ時刻ニ圖示ノ地點ニ達スル如ク之ヲ嚮導スルコト

但基準ヲ須磨トス

原速八海里

半速六海里

微速四海里

(ロ) 輸送船隊ノ間隔ヲ約六百米突トシ決シテ前方ノ船ヲ追越サ、ルコト

(ハ) 航海燈(船尾燈)ハ總テ之ヲ點スルコト

第二章 第二節 第一目 發進前ニ於ル北遣艦隊ノ行動

六十七

(ニ)艦隊ノ規定ニ準ヒ右舷「ヤーダーム」ニ晝夜共ニ速力信號(夜間ハ速力信號燈)ヲ揚クルコト
「ヤーード」ヲ艤裝ナキ船ハ適宜ノ材料ヲ以テ之ヲ假設スヘシ

(ホ)濃霧ニ遭遇スルモ可成降霧前ト同一ノ速力及ヒ針路ヲ保チ衝突豫防規則ニ從ヒ汽笛
又ハ汽角ヲ鳴吹シテ進ムヘシ然レトモ航海危険ニシテ航行序列ヲ保持スルコト能ハサ
ル時ハ右方列外ニ出テ便宜投錨若クハ航行スル等適宜操縦シ保安ニ努ムルコト

(列外ニ出タルトキハ後續船ニ危険ヲ及サスル様注意スヘシ又護衛艦隊ハ左側ヲ進航シアルヲ以テ決シテ左側ニ出ツヘカラス)

如斯シテ霧晴レタル後他船ニ後レタリト思惟セハ豫定航路上ヲ北上シ遂ニ第四集合地
點ニ達シ先發艦隊ニ合スヘシ

(ハ)霧中ハ艦隊ニ於テ信號ノ爲メ空砲ヲ發スルコトアリ故ニ霧中砲聲ヲ聞クモ敢テ驚ク
ヲ要セス

(ト)針路ヲ變スル時ハ轉舵ト同時ニ汽笛若クハ汽角ヲ以テ短音七回以上ヲ鳴ラシタル後
最長音一回ヲ鳴ラシ之ヲ鄰艦ニ報ス

(チ)若シ途上敵ニ遭遇スルコトアルモ決シテ驚クコトナク嚮導艦ニ隨行シ其ノ指揮ヲ受
クヘシ護衛艦隊ハ敵ヲ邀撃スルニ於テ多大ノ勢力ヲ有ス

十一、輸送船隊ハ四米突方形ニ白塗具ヲ以テ兩舷側ヲ塗り之ニ番號ヲ記ス
各船ノ有スル番號左ノ如シ

- (一)安藝丸 (二)若狹丸 (三)阿波丸 (四)丹波丸 (五)加賀丸

- (六)因幡丸 (七)土佐丸 (八)鎌倉丸 (九)讃岐丸 (十)博多丸

- (十一)信濃丸 (十二)備後丸 (十三)佐渡丸 (十四)孟買丸 (十五)愛國丸

- (十六)辰丸 (十七)彌彦丸 (十八)高雄丸 (十九)鹿兒島丸 (二十)天津丸

- (二十一)江都丸 (二十二)萬里丸

十二、監督將校ノ乗船セサル左記ノ船舶ハ臨時監督トシテ特ニ北遣艦隊ヨリ往航路ニ限リ

尉官一名信號兵及ヒ助手各一名ツ、ヲ乗船セシム

- 安藝丸 若狹丸 阿波丸 因幡丸 土佐丸 讃岐丸 信濃丸 備後丸
- 佐渡丸 孟買丸 愛國丸 辰丸 彌彦丸 鹿兒島丸 天津丸 高雄丸
- 江都丸 萬里丸

(編者曰ク北遣艦隊機密第七二號ノニヲ以テ本要領書第十二號各艦ヨリ出スヘキ尉官及ヒ信號兵ノ配置表ヲ定メ尙運輸通信長官部ノ長山島北部派遣隊船舶輸送船豫定表及ヒ碇泊場司令部ノ航行序列並ニ揚陸順序表ヲ示セリ何レモ附表ニ掲グ)

此ノ日山田司令官ハ、日進春日及ヒ第一驅逐隊ヲ率非テ、セントオリガ灣ヨリ函館ニ入り、秋津
洲モ八幡丸救助ノ任務ヲ了リテ同シク入港セリ、是ヨリ先キ旗艦嚴島ニテコルサコフニ在ル
出羽第四艦隊司令長官モ十四日左ノ命令ヲ發シ、以テ第二次陸兵揚陸掩護其ノ他ニ關シテ、麾
下各隊ノ就クヘキ任務ヲ定メタリ、

一、敵情ニ就テハ更ニ新報ヲ得ス

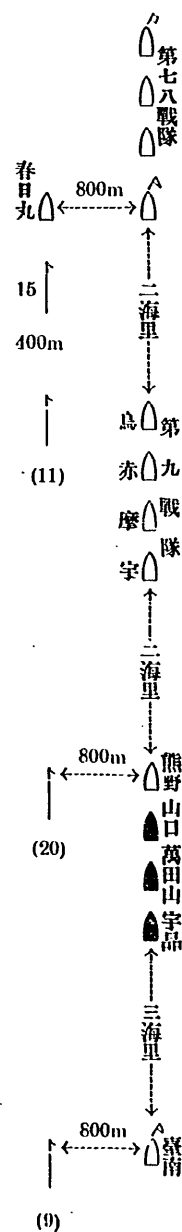
二、北遣艦隊ハ本月下旬ヲ以テ獨立第十三師團ノ北部上陸隊ヲ薩哈哩島アレキサンドロフ

スキーニ護送揚陸セシメントス此ノ目的ヲ以テ第三艦隊(第六驅逐隊及第九艦隊)ハ來二十日頃小樽港出發陸軍輸送船隊ヲ護衛シ二十三日頃上陸點ニ達スル豫定ナリ

三、本職ハ常地ニ集合シアル麾下艦艇及ヒ臨時指揮下ニ在ル第九艦隊、水雷母艦熊野丸春日丸及ヒ特務船山口丸、萬田山丸、宇品丸ヲ率井第三艦隊行動開始ノ前日午後六時コルサコフ泊地ヲ出發シ附圖第一豫定航路ヲ採リ第四日午後五時間官海峽ノ南口チユイク岬附近第十二會合點ニ達シ竝ニ諸情報ヲ蒐集シ第五日午前一時再出發シ附圖第二ノ豫定航路ヲ採リ早朝ジヨンキール岬ノ北(方位)約十四海里ニ至リ直ニ陸兵揚陸ノ作業ヲ開始セン

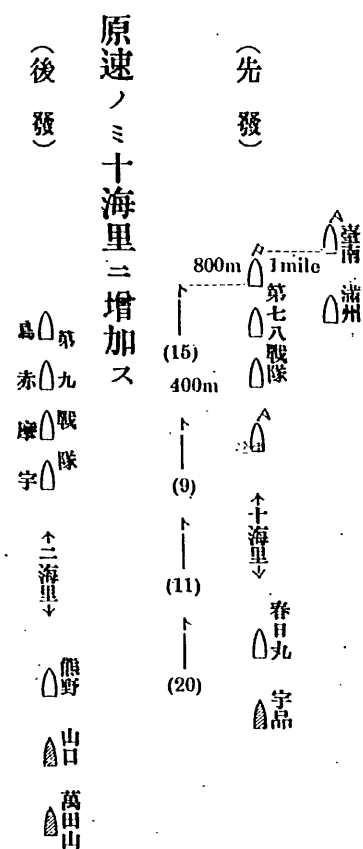
四、航行序列竝ニ速力左ノ如シ

自第一日 航行序列
至第四日 航行序列



原速 七海里半
半速 六海里
微速 四海里半

第五日航行序列



原速ノミ十海里ニ増加ス

速力前日ニ同シ

(註)本行動中摩耶ト赤城ノ艦隊番號ヲ相互交換ス

(編者曰ク原命令ニハ航行序列ノ先頭即チ第七第八艦隊ノ前方三海里ニ滿州丸アリシモ同艦ハ片岡第三艦隊司令長官ノ指揮下ニ入り輸送船隊護衛ノ任務ニ就カシメラレタル爲メ十七日丁隊機密第七六號ノ三ヲ以テ之ヲ削除セリ)

五、第三日正午艦隊ロマン岬ノ西方ニ達セル各隊漂泊水雷艇ニ炭水ヲ補給シ午後七時再ヒ行進ヲ起シ第十二會合點ニ向フ

但天候ノ模様ニ依リ時日ヲ變更スルコトアルヘシ

六、武富司令官ハ橋立及ヒ第九艦隊ヲ率井第四日午前三時列ヲ離レ速力ヲ増加シ正午カストリー灣ノ前面ニ達スル如ク行動シ該灣及ヒ其ノ附近ヲ偵察シ偽航路ヲ採リ午後五時迄ニ第十二會合點ニ歸著スヘシ(編者曰ク原命令ニハ中尾司令官ハ臺南丸及ヒ第九艦隊ヲ率井云々リ)

七、荒川春日丸艦長ハ春日丸及ヒ第十一艇隊ヲ率非第四日午前七時列ヲ離レ正午ヅエ泊地沖ニ達シ恰モ我カ軍カ其ノ附近南方沿岸ニ爲ス所アルカノ如キ擬勢ヲ示シ以テ第十五艇隊司令ノ上陸點偵察ニ對シ敵ヲ牽制スヘシ

但午後二時ニ至レハ偽航路ヲ採リ同七時迄ニ第十二會合點ニ歸著スヘシ(編者曰ク原命令ニハ矢代滿州丸艦長ハ滿州丸春日丸及ヒ第十一艇隊ヲ率非第四日午前七時列ヲ離レ正午ヅエ泊地沖ニ達シ恰モ我カ軍カ其ノ附近南方沿岸ニ爲ス所アルカノ如キ擬勢ヲ示シ以テ第十五艇隊司令ノ上陸點偵察ニ對シ敵ヲ牽制スヘシ)

八、近藤第十五艇隊司令ハ其ノ麾下ノ二艇ヲ率非第四日午前七時列ヲ離レ正午アレキサンドロフスキー泊地ノ沖合約十海里ノ點ニ達シ爾後上陸點(北緯五十度以南)附近ノ沿岸竝ニアレキサンドロフスキーニ於ル防備ノ情況ヲ偵察シ偽航路ヲ採リ午後七時迄ニ第十二會合點ニ歸著スヘシ

九、艦隊第十二會合點ニ達セハ附圖第二ノ豫定錨地ニ警戒錨泊ス

時宜ニ依リ第三艦隊ト通信聯絡ヲ執ル爲メ一艦ヲ第一警戒線附近ニ派遣スルコトアルヘシ(編者曰ク本命令ニハ第二項中通信聯絡ヲ執ル爲メ滿州丸ヲ云々トアリシヲ十七日丁隊機密第七六號ノ三ヲ以テ滿州丸ヲ一艦ト改メラレタリ)

一〇、第五日早朝艦隊豫定掃海面入口ニ達セハ春日丸及ヒ宇品丸ヲシテ附圖第四豫定位置ニ錨泊シ旗ヲ掲ケテ掃海面ノ入口ヲ表示セシム春日丸ハ投錨後掃海面入口ノ浮標ヲ碇置スヘシ

一一、前號掃海面入口ノ標識確定セハ近藤第十五艇隊司令ハ直ニ左ノ四個艇隊及ヒ掃海汽艇二對ヲ成ル特別掃海艇隊ヲ指揮シ附圖第三及ヒ第四ニ示セル第一區第二區ノ急行掃

海ヲ實施スヘシ

第十五艇隊(驚歎)

第九艇隊

第十一艇隊

第二十艇隊

臺南丸汽艇 二隻對艇

滿州丸汽艇 一隻

熊野丸汽艇 一隻對艇

第三區、第四區掃海實施ノ時機ハ更ニ令達ス

第二區掃海施行ニ際シ其ノ南北何レヲ先キニ爲スヘキカハ上陸點トノ關係位置及ヒ敵情ニ依リ特ニ之ヲ指示ス又第一區掃海面ノ方向ハ上陸點偵察ノ結果多少ノ變更ヲ爲スモ妨ナシ

一二、第九戰隊ハ掃海面ノ進ムニ從ヒ掃海艇隊ニ續行シ之カ掩護ニ任シ成ルヘク陸岸ニ接シ附圖第四ニ示スカ如ク投錨シ迅速ニ附表第一特別陸戰隊ヲ編制シ町田同指揮官ノ命ヲ受ケシムヘシ

赤城ハ嚴島ト掃海艇隊トノ通信聯絡ニ任シ特ニ時々掃海進捗ノ概況ヲ報告スヘシ

(註)附圖第四中第一區内ノ錨泊位置ハ單ニ各艦船間ノ關係位置ヲ示ス爲メニ記入セル

モノニシテ成シ得ル限り陸岸ニ接近シ最迅速ニ特別陸戰隊ヲ上陸セシメ續イテ陸兵揚陸ニ便ナラシムルヲ目的トス

一三、適當ノ時機ニ至レハ本職ハ第七、第八戰隊ヲ第一區掃海面ニ導キ附圖第四ノ如ク錨泊シ直ニ特別陸戰隊ヲ編制揚陸セシメ上陸點附近必要ノ地區ヲ占領シ固ク之ヲ守備セシム

特別陸戰隊ノ編制ハ附表第一ノ如クニシテ服裝、携帶品等ハ總テメレヤ村上陸ノ時ニ同シ陸戰隊ノ占領地域ヲ表示スルニハ軍艦旗ヲ掲揚シ又艦隊ノ掩護射撃ヲ請求スル場合ニハ「V」旗一旒ヲ掲ケシム

一四、橋立艦長ハ陸戰隊ノ上陸ト同時ニ必要ノ人員ヲ派遣シ適當ノ地點ヲ選ミ信號所ヲ設置セシムヘシ

一五、武富司令官ハ碇泊場司令官竝ニ上泉海軍大佐ト協議シ直接揚陸事業援助ノ任ニ當リ第五、第六、第七、第八戰隊ヨリ派遣スル艦載水雷艇、汽艇及ヒ機走艇ヲシテ其ノ作業ヲ援助セシメ漸次掃海面ノ擴大スルニ從ヒ輸送船隊ヲシテ揚陸ニ便宜ナル位置ニ移ラシムヘシ但第七、第八戰隊ノ端舟ハ特別陸戰隊歸艦ノ後揚陸作業ニ從事セシム其ノ準備乗員ノ給養等ハメレヤ村揚陸ノ時ニ同シ

一六、中尾司令官ハ掃海面入口ニ達セハ臺南丸ヲシテ第十一號ノ掃海汽艇ヲ掃海艇隊ニ派遣セシメ成ルヘク速ニゾーエ沖附近ニ至リ沿岸ヲ威嚇シ揚陸事業ニ對シ牽制運動ヲ執ル

ヘシ

滿州丸輸送船隊嚮導ノ任務ヲ了リ當隊ニ復歸セハ第十一號ノ掃海汽艇ヲ派遣シタル後之ニ合セシム（編者曰ク本命令ニハ臺南丸ノ次ニ滿州丸アリ又第二項ナカリシヲ十七日丁隊機密第七六號ノ三ヲ以テ滿州丸ヲ削リ第二項ヲ追加セラレタルナリ）

十七、熊野丸ハ第八戰隊ニ續イテ掃海面ニ進入シ爾後掃海艇隊ノ母艦タルヘシ

十八、山口丸、萬田山丸ハ掃海面入口ノ北方適宜ノ處ニ假泊シ命ヲ待ツヘシ

十九、第三艦隊第一警戒線到達ノ時ヨリ本職ノ指揮下ニ入ルヘキ第五驅逐隊ハ情況ニ應シテ行動セシメントス

二十、天候ノ異變等ニ際シ避泊集合ニ便ナラシムル爲メ會合點ヲ特定スルコト左ノ如シ

第一會合點 ノトロ岬ノ東側錨地

第二同 ノトロ岬ノ西側錨地

第三同 宗谷灣

第四同 野寒岬ノ西側錨地

第五同 ポロトマリ泊地

第六同 コスナ泊地

第七同 セント、イノケンチャ灣

第八同 ツイルメテヴァ灣

第九同 ブイチ岬ノ北灣（黑龍江岸州）

第十同

コルサコバ泊地

第十一同

ザゴルスカゴ岬附近(黒龍沿)
岸州

第十二同

クレスターカンブ燈臺ノ東二
度南(磁針方位)二十四海里

二十一、本行動中敵ニ出會セハ本職ハ第七、第八戰隊ヲ率非敵ノ主力ニ當ラントス爾餘ノ各隊ハ大略左ノ如ク行動スヘシ

熊野丸ハ特務船ヲシテ適宜避退セシメ第九戰隊ト共ニ一時之ヲ掩護シ時機ノ發展ヲ待ツヘシ

水雷艇隊ハ二隊宛春日丸、臺南丸ニ隨從シ中尾司令官ハ臺南丸、春日丸及ヒ各艇隊ヲ率非非戰側ニ在リテ機宜ノ運動ヲ執リ好機ヲ待ツヘシ(編者曰ク本命令ニハ臺南丸、春日丸、満州丸及ヒ各艇隊云々トアリシヲ十七日丁隊機密第七六號ノ三ヲ以テ満州丸ヲ削除セラレタリ)

二十二、本行動開始ヨリ上陸點到着迄特務船ニ左ノ如ク番號ヲ附與シ之ヲ呼稱スルニ各下記ノ號旗ヲ以テス

(一) 山口丸

(國旗ノ下)

(二) 萬田山丸

(國旗ノ下)

(三) 宇品丸

(國旗ノ下)

又特務船總體ヲ呼稱スルニハ單ニ國旗一旒ヲ掲ケテ之ヲ區別ス

二十三、霧中航行ノ際速力ノ増減針路ノ變更ニ關スル信號等ニ就テハ丁隊日令第二號ヲ參

照シ必要ノ部員ニ知悉セシメ置クヘシ特ニ特務船嚮導ノ任ヲ有スル艦長ハ豫メ監督官若クハ船員ヲ會シ十分ノ注意ヲ與ヘ必要ノ件ヲ示達シ置クヲ可トス

二十四、本行動開始ノ期日ハ更ニ示達ス(編者曰ク十七日丁隊機密第七六號ノ四ヲ以テ十九日ト示達セリ)

(注意) 本命令ニハ第七、第八、第九戰隊、特別陸戰隊編制表及ヒ 附圖四葉ヲ添フ(編者曰ク附第五部第四篇第六章戰略地點ノ掃海ニ掲クルヲ以テ略ス)

(丁隊機密第七六號)

尋テ十六日片岡司令官ハ、香港丸ノ津輕海峽哨戒任務ヲ解キテ小樽ニ回航ヲ命シ、同日小樽港ニ於ル警戒法ヲ定メ、(備考文) 青森在泊ノ第二次輸送船隊ハ、十七日午前四時ヨリ逐次出港シテ小樽ニ向ヒ、山田司令官(日進吾妻春日、第一驅逐隊ヲ率非ル) 東郷司令官(第六戰隊ヲ率非ル) モ亦訓令ニ基キ行動シ、(東郷司令官ハ) 途ヨリ和泉ヲ放テ同艦ニ命スルニ小樽ニ先著シ逐次入港ノ輸送船隊ニ鎗地ヲ指示(片岡司令官モ、八雲、八重山、スヘキヲ以テ同艦ハ十八日午前三時四十五分小樽ニ入り共ノ任務ニ從事セリ) 片岡司令官ハ東郷司令官ニ向ヒ、第二次輸送船隊ヲアレキサンドロフスキニ護送シタル後、第一小隊(須磨千) 及ヒ第一驅逐隊ノ有明、霞ヲ率非テポートイムペラトルスカヤノ偵察威嚇ヲ試ミ、又出羽岬ノ望樓建設地點ノ選定等ヲ行ヒ、二十七日夕刻迄ニ第一警戒線ノ哨戒ニ就クヘキコトヲ命シ、藤本第一驅逐艇司令官ニハ、二十三日上陸地點ニ達セハ第一小隊(吹雪) ヲ率非テ、先ツカストリー灣ニ到リ、同灣ノ偵察威嚇ヲ試ミタル後、其ノ一艦ヲ殘シテ該灣ノ哨戒ニ任シ、他ノ一艦ヲシテ間宮海峽南口ノ哨戒ニ任セシムヘキコト等ヲ命シ、(須磨千代田第一驅逐隊ノ沿海州ニ於ル行動及ヒ出羽岬望樓位置選定等ニ關スル記事ハ本節第三目第一款ニ詳ナリ) 二十日大本營並ニ東郷聯合艦隊司令官長官ニ向ヒ、アレキサンドロフスキニ占領後ニ於ル北遣

艦隊ノ豫定行動ニ關シ、左ノ如ク電報セリ、

北部陸軍輸送掩護ノ任務終了ノ上ハ第三艦隊ハ千歲灣ヲ根據地トシ宗谷海峽ノ警戒並ニ樺太警備ノ任務ニ服シ第四艦隊ハ函館若クハ大湊ヲ根據地トシ津輕海峽ノ警戒及ヒ北緯四十五度以南及ヒ四十二度以北海面ノ警備ニ任セシムルノ豫定ナリ陸軍ハ今後小樽ヲ樺太ニ對スル兵站基地ニ使用スル筈ナリ

斯ノ如クニシテ、北遣艦隊ハ二十一日午前十一時ヨリ小樽ヲ發シ、第二次輸送船隊ヲ護衛シテ北上ノ途ニ上レリ、

第二目 樺太北部占領

片岡第三艦隊司令長官ハ、明治三十八年七月二十一日午前十一時、第五、第六戰隊等ヲ率非テ小樽ヲ發シ、第二次輸送船隊ヲ護衛シテ北征ノ途ニ上レリ、先頭ニ進メル須磨ハ、二十二日午前四時禮文島北端ヲ西二分ノ一北十一海里ニ見ルノ地點ニ達シテ、針路ヲ北十四度東ニ變シ、以テ上陸地點ノ沖合ニ向フ、此ノ日天晴レテ波靜ナリ、

是ヨリ先キ出羽第四艦隊司令長官ノ率非ル先發隊ハ、十九日樺太千歲灣ヲ發シテ二十日午後七時稚内ニ入り、二十一日午後一時更ニ出港シテ目的地ニ向ヒ、(二十二日朝ヨリハ第三、第四ノ兩艦隊ヲ保持シ二十三ハ黎明ヨリ南東ノ輕風起リ終日濃霧アリ)無線電信距離内ニ入りテ絶エス聯絡ヲシモ幸ニシテ艦隊ノ航進ヲ妨クルマデニハ至ラザリキ(武官第四艦隊司令官旗艦)及ヒ第九艇隊ヲ分遣シテカストリー灣ノ偵察威嚇ヲ試ミシメ、(本節第三目第(二)款ニ詳ナリ)次テ春日丸及ヒ第十五、第十一艇隊ヨリ成ル一隊ヲ分派シ、第十五艇隊ヲシテ豫定上陸地點ノ選定ヲ行ヒ、他ヲシテ

ゾーエノ前面ニ出現シ、佯動以テ敵ヲ牽制セシメ、親ヲ其ノ殘餘ヲ率非、豫定集合地點タルチュイク岬南方ニ達シテ假泊シ、午後前記ノ分遣艇隊ハ何レモ歸著シ、其ノ齎セル報告ヲ綜合シテ、カストリー灣ニ有勢ノ兵力ナカルヘキコト、アレキサンドロフスキーニモ何等固定海岸防禦ナク、守兵モ居ラサルモノ、如クナルコト、アルコワ村ニハ騎兵ト思ハル、モノ五六騎アリシモ、幾クモナク其ノ影ヲ沒シ、住民ハ彈藥ヲ滿載セル「ライター」(三日前アレキサンドロフスキーヨリ迴送シ來レルモノナリト云フ)及ヒ人家ヲ燒キテ逃走シタルコト、アルコワハ平地廣カラス、樹木多クシテ稍展望ヲ妨クルモ、一帯ノ沿岸端舟ノ著岸ニ適シ、距岸四鏈ニシテ大船ヲ泊シ得ヘク、上陸地點トシテ最適當ナルヘキコト、ゾーエ附近ニハ敵ノ一兵タモ認メサルコト等ヲ知り得タリ、同司令長官ハ二十四日正子假泊地ヲ發シテ、午前四時三十分豫定ノ海面入口ニ達シ、直ニ近藤第十五艇隊司令ノ率非ル特別掃海隊ヲシテ、豫定計畫ニ基キテ掃海ヲ開始セシメ、第五驅逐隊(二十四日ヨリ臨時出羽司令長官ノ指揮下ニ入ルヘキ命ヲ受ケ急航來會セシナリ)ヲシテ上陸地點ニ進ミ、沿岸ヲ徐航シツ、森林ヲ搜射セシメ、第九戰隊ノ諸艦ヲシテ掃海隊ヲ掩護シツ、威嚇搜射ヲ行ハシメシカ、陸上ニハ屢敵ヲ認メ撃退セシモ、海面ニハ一ノ水雷ヲモ發見セス、掃海作業ハ極テ峻速ニ進捗シ、午後四時ニハ已ニジョンキール岬ニ至ル迄ノ豫定區域ノ掃海ヲ終ルヲ得タリ、(第五部第四篇第六章戰(略地點ノ掃海ニ詳ナリ)而テ其ノ進捗ニ伴ヒ、第七、第八戰隊ハ既濟掃海面ニ入り、次テ各嚮導艦ヲシテ順次輸送船隊ヲ掃海面ニ誘導セシメ、午後一時頃ニハ、盡ク上陸地點ノ前面一海里以内ニ投錨シ終レリ、是ヨリ先キ第七、第八、第九戰隊ヨリ、海軍中佐町田駒次郎ノ指揮下ニ特別陸戰隊(特別陸戰隊ハ銃隊一大隊砲隊一小隊及ヒ其ノ附屬部隊ヨリ成ル卷尾附表參照)ヲ上陸セシメシニ、敵ハ

已ニ退却シタルカ爲メ、一ノ抵抗ナクシテ九時十五分陸揚ケ上必要地區ノ占領ヲ終リ、(海岸ニハ散シ其ノ附近ニ少量ノ彈藥)同三十分頃ヨリ、武富司令官ノ指揮下ニ陸兵ノ陸揚ケヲ開始シテ、午後一時二十分ニハ、我カ陸戰隊其ノ守地ヲ陸軍ニ譲リ、歸艦スルヲ得ルニ至レリ、此ノ日敵ノ義勇兵一名ヲ捕虜トナセシカ、其ノ言ニ因リアルコソ海岸ヲ守備セシ敵兵ハ其ノ數四十名ニシテ、尙内方ノ村落ニ二十名内外居ルコトヲ知レリ、又沿岸ヲ徐航セル第五驅逐隊ハ、アレキサンドロフスキトノ附近ヲ偵察シ、其ノ防備ナキコトヲ認メシヨリ、砲火ヲ以テ該地ノ棧橋ヲ守護シ、之ヲ燒カントスルノ疑アル敵兵二名ヲ射殺シ、二名ヲ傷ケ、次テ出羽司令長官ハ同棧橋守備ノ爲メ、更ニ鳥海、赤城ノ二艦ヲ増派シ、陸軍ヨリモ亦同一目的ヲ以テ一個中隊ヲ出シ、(敵ハ屢我カ守備メ、更ニ鳥海、赤城ノ二艦ヲ増派シ、陸軍ヨリモ亦同一目的ヲ以テ一個中隊ヲ出シ、)夜探海燈ヲ以テ棧橋ヲ探照シ以テ敵襲ニ備ヘ同棧橋ハ遂ニ無事ナルヲ得タリ、又ニヨミ及ヒムカザニ存スル石炭積用棧橋ニハ、宇品、摩耶ヲ派シテ守備セシメタリ、(宇治ハニヨミ(舊ムカザナリ)ニ到リ直ニ防火隊ヲ上ノ消火ニ從事シ次テ陸軍ヨリモ亦一小隊ヲ派遣セシヲ以テ之ヲ協力シテ午後三時ニ鎮火セシムルコトヲ得タリ此ノ間少數ノ敵兵出現セシモ宇治ノ砲聲ニヨリ直ニ逃走セリ摩耶ハムカザニ到リ陸戰隊ヲ上ケテ石炭坑會社長ノ降伏ヲ受ケ銃器ヲ沒收シタル後該地ヲ占領ノ爲メ來レル陸軍ニ引渡セリ)

是ヨリ先キ片岡司令長官ハ、二十四日正子第五驅逐隊ヲシテ、先發シテ出羽司令長官ノ令下ニ入ラシメ、次テ第一驅逐隊ノ第一小隊(吹雪)ヲシテ、再カストリイ灣ノ偵察威嚇ヲ試ミシメ、尙其ノ一艦ニハ同灣ノ哨戒ヲ他ノ一艦ニハ間宮海峽南口外ノ哨戒ヲ命ジ、(本節第三目第(三款ニ詳ナリ)又東郷第三艦隊司令官ニ、須磨、千代田、第一驅逐隊ノ第二小隊(有明)ヲ率非、ボート、イムペラトルスカヤノ偵察威嚇及ヒ出羽岬ノ望樓位置選定ヲ命ジ、(本節第三目第(一款ニ詳ナリ)和泉、秋津洲ノ二艦ヲシテ陸軍揚陸

助力ニ要スル汽艇端舟ヲ橋立ニ送りタル後、第一警戒線ヲ哨戒セシメ、第五戰隊ヲシテ午前八時掃海面入口ニ達シテ一時假泊シ、揚陸用汽艇端舟ヲ下サシメタル後、山田司令官ヲシテ第二小隊(日進)ヲ率非、アレキサンドロフスキノ西方約二十五海里(二七)附近ヲ哨戒セシメ、香港丸ヲシテ第五警戒線ヲ哨戒セシメ、片岡司令長官ハ、八雲、吾妻、八重山ヲ率非テ掃海ノ進捗ニ伴ヒ、午後一時半掃海面ニ入り、アルコソ沖ニ投錨セリ、

敵ハ朝來ヌミナヲ焚キ、次テ又アルコソニモ放火セリ、然レトモアレキサンドロフスキハ兵燹ニ罹ルニ至ラス、歩兵第二十六旅團長陸軍少將内藤新二郎ノ率非ル前進部隊ハ、午後七時十五分全ク同地ヲ占領セリ、

二十五日アレキサンドロフスキー棧橋ノ守備ニ任セシ第五驅逐隊ハ、該棧橋附近ニ於テ、石油罐ニ綿火藥ヲ入レ、緩燃信管ヲ附シタル極テ粗造ナル假製端舟水雷四個ヲ發見シテ悉ク之ヲ除去シ、第九艇隊司令海軍中佐河瀬早治ハ、水雷艇隊及ヒ汽艇ヲ以テ、未濟掃海面ノ掃海ヲ結了シ、鳥海艦長ハ部下將校ヲ派シテシヨニキール燈臺ヲ占領シ、監守長以下海軍兵十三名ヲ捕虜トシテ之ヲ陸軍ニ引渡セリ、(燈臺ノ器具ハ總テ完全ナリ而テ其ノ後ノ調査ニ依レハ該燈臺附近ヨリ對岸カストリイ灣ニ通スル海底電信線ハ損傷ヲ生スルコト多キヲ以テ數年前ヨリ之ヲ使用ヲ停止セリト云フ)

武富司令官ノ指揮ノ下ニ助力セル陸軍揚陸作業ハ極テ迅速ニ進捗シ、二十四日(第二)午後九時第一次、第二次ヲ了ヘ、續テ第三次ニ著手セリ、而テ掃海ノ進捗ニ伴ヒ、翌二十五日輸送船ノ多數ハアレキサンドロフスキー沖ニ回航シ、二十六日ニハ復アルコソ沖ニ留ルモノナク、第

四日ナル二十七日ニハ已ニ陸揚ケノ大部ヲ終リ、海軍ノ助力ヲ要セサルニ至リタルヲ以テ、艦隊ハ午後七時全ク其ノ任務ヲ終レリ、(此ノ日午前七時陸軍ハルイコフヲ占領セリ樺太ニ於ル彼我兩軍ノ死傷者員數、主要地點ノ占領戰概要、俘虜員數及ヒ平定後ニ於ル同島守備隊ニ掲ク)

以上記載ノ如ク艦隊ニハ一ノ死傷損害ナク、茲ニ無事第二次作戰ノ目的ヲ達シ得タリ、(片岡第三長官出羽第四艦隊司令長官報告備考文書第十三、第十四、第十五、第十六、第十七號及ヒ別冊附圖表參照)越テ三十一日片岡司令長官ハ、第十三師團長陸軍中將原口兼濟ヨリ左ノ兩電報ヲ受ケタリ、

其ノ一 (午前十一時五十分
ルイコフ發電)

昨日我カ前哨線タウラン(ルイコフノ南方約七里)ニ敵ノ軍使來リ戰鬪ノ中止ヲ申込メリ師團ハ之ニ回答スルニ無條件ノ降服ヲ以テシ其ノ承諾回答ハ本日午前十時迄ニ第一ハムサダ(敵ノ主力ノ根據地ヲノールノ北方約二里)ニ出スヘキヲ命シ若シ回答ナケレハ直ニ攻撃ヲ實施スヘキヲ以テセリ之カ爲メ我カ追撃隊ヲ午前七時第一ハムサダニ進メ攻撃準備ノ姿勢ニ在ラシム

其ノ二 (午後二時
ルイコフ發電)

本日リヤブノフ中將以下將校約七十、下士以下三千二百悉ク投降ス八月七日、八日ニアレキサ(編者曰クリヤブノフ中將ハ薩哈連島軍務知事兼薩哈連島軍長官ナリ而テ參謀本部員ノ編纂セル陸戰史ニハ同中將ノ率非テ降レル敵兵ハ將校七十名下士以下四千三百十八名トアリ十三師團司令官部編纂)樺太島北部露軍投降始末書備考文書第十八號參照

七月二十九日、片岡第三艦隊司令長官ニ、左ノ勅語ヲ賜フ、

北遣艦隊ハ天候ノ障礙ヲ冒シテ陸軍ヲ護送シ其上陸ヲ完フセシメテ樺太占領ノ基礎ヲ成

セリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス

三十一日皇后宮大夫子爵香川敬三ハ、左ノ皇后陛下ノ令旨ヲ傳フ、

北遣艦隊ハ陸軍護送ノ任ヲ完クシ樺太占領ノ基礎ヲ開キタル趣

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ其將校下士卒ノ功勞ヲ深ク御感賞アラセラル

八月四日皇太子殿下ヨリ左ノ令旨ヲ賜フ、

天候ノ障礙ヲ排シ陸軍ト策應シ樺太ノ占領ヲ迅速ナラシメタル北遣艦隊將卒ノ忠勇ナル行

動ヲ嘆賞ス

五日片岡第三艦隊司令長官ハ、勅語ニ對シ左ノ奉答文ヲ奉ル、

北遣艦隊カ天候ノ障礙ヲ排シ樺太ニ對スル作戰ノ目的ヲ達成スルヲ得タルハ一ニ

陛下ノ御稜威ト天佑トニ賴ルモノナリ然ルニ特ニ優渥ナル 勅語ヲ賜ハル臣等感激ノ至リ

ニ堪ヘス尙ホ益々奮勵戰果ヲ全ウセンコトヲ期ス臣等誠恐誠惶謹テ奉答ス

六日 皇后陛下ノ令旨ニ對シ、左ノ奉答文ヲ奉ル、

北遣艦隊カ樺太ニ於ケル作戰ノ成果ヲ收メ得タルハ一ニ

天皇陛下ノ御稜威ニ因ル然ルニ斯ク優渥ナル 令旨ヲ賜ハル誠ニ感激ノ至リニ堪ヘス尙ホ

益々奮勵 令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

又同日 皇太子殿下ノ令旨ニ對シ、左ノ奉答文ヲ奉ル、
天皇陛下ノ御威徳ニ因リ北遣艦隊ノ樺太ニ於ケル作戰ノ目的ヲ達成シ得タルニ對シ特ニ優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激ノ至リニ堪ヘス尙ホ愈々勇奮努力 令旨ニ副ヒ奉ラシコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

第三目 沿海州ニ對スル作動

第一款 須磨千代田第一驅逐隊(有明)ノポート、イムベラトルスカヤノ

偵察威嚇及ヒ出羽岬望樓建設地點ノ選定

東郷第三艦隊司令官ハ明治三十八年七月十八日片岡第三艦隊司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受ク、

一、貴官ハ北遣艦隊機密第五四號北遣艦隊命令第九號ノ任務ニ就キタル時ヨリ一時其ノ任務ヲ先任艦長ニ委シ第一小隊及ヒ驅逐艦有明、霞ヲ率非ポート、イムベラトルスカヤノ偵察威嚇ヲ試ミ又スチユカムビス岬ノ望樓建設地ノ選定及ヒ附近飲料水ノ有無ヲ調査シ來
二十七日夕刻迄ニ本任務ニ復歸スヘシ

二、前號ノ任務ヲ了ラハ其ノ報告ヲ齎シ有明、霞ヲ本職ノ許ニ歸投セシムヘシ

(北遣艦隊機密第八六號)

是ニ於テ同司令官ハ二十日麾下ニ向ヒ、左ノ命令ヲ發シタリ、

一、當隊及ヒ第一驅逐隊第二小隊ハ第二次輸送船隊ヲアレキサンドロフスキーニ護送シタ

ル後第一警戒線(編者曰ク第一警戒線ハヅエ岬ノ南方ヨリ沿海州ニ引ケル警戒線ニシテ第十部第九篇戰役中使用セシ特別規約ノ部ニ掲ク)ノ哨戒ニ服スルト同時

ニイムベラトルスカヤ港附近ノ偵察威嚇ヲナシ出羽岬望樓建設地ヲ選定スルノ任務ヲ有ス

二、須磨千代田ハ直ニイムベラトルスカヤ港ニ赴キ已ニ港内ヲ偵察セル第一驅逐隊第二小隊ト共ニ港内ニ進入シ威嚇砲撃ヲ行ヒ且陸戰隊ヲ揚陸セシメ附近陸上ノ偵察ヲナシシム以上ノ任務ヲ了レハ出羽岬ニ至リ望樓建設位置ヲ選定セントス出發ノ時機ハ更ニ令ス汽艇及ヒ端舟ハ此ノ任務ヲ了リアレキサンドロフスキーニ至リタル後揚陸事業ニ從事セシムヘシ

三、和泉及ヒ秋津洲ハ汽艇端舟ヲ武富第四艦隊司令官ノ下ニ送りタル後直ニ第一警戒線ニ至リ石田先任艦長ノ指揮ノ下ニ左ノ要領ニ依リ哨戒ニ從事スヘシ

(イ)一隻ハ第一警戒線ニ近ク黒龍沿岸州又ハ樺太ノ沿岸何レカニ假泊シ一隻ハ晝夜該線上附近ヲ巡邏警戒スヘシ

(ロ)哨艦ノ交代ハ午前八時第一警戒線上附近ニ於テスヘシ

四、第一驅逐隊第二小隊ハNK地點(編者曰ク沿海州スリ)ヨリNT地點(編者曰ク沿海州ストロース灣ナリ)間ニ於テ泊地ニ適スルモノアルヤ否ヤヲ偵察シ爾後適宜ノ行動ヲ爲シ翌早朝イムベラトルスカヤ港ニ至リ港内ノ敵情ヲ偵察シ港外ニ於テ當隊(第二小隊)ニ合スヘシ

港内異狀ナケレハ須磨及ヒ千代田ト共ニ港内ニ入り北灣コンスタチノーブスキーニ上陸

第二章

第二節

第三目

第一款

(須磨千代田第一驅逐隊(有明)ノポート、イムベラトルスカヤノ偵察威嚇及ヒ出羽岬望樓建設地點ノ選定)

セシムル陸戦隊ノ掩護ニ任セシムル豫定ナリ

五、豫定陸戦隊編制左ノ如シ

備考	千代田	須磨	指揮官	小隊長	中隊下士	軍醫	看護	豫備彈藥	擔架隊	銃隊	端舟司令
			—	—	—	—	—	—	—	一小隊	—
陸戰隊員ハ水筒糧糈ノミヲ携帯シ辨當ハ一食分トス 信號兵ハ指揮官ノ出ツル艦ヨリ出ス者トス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一小隊	—

尙外ニ左ノ陸戦隊ヲ豫定シ置クヘシ

備考	須磨						
	千代田	一		一	一	豫備彈藥	銃隊
陸戰隊員ハ水筒糧糈ノミヲ携帯シ辨當ハ一食分トス 信號兵ハ指揮官ノ出ツル艦ヨリ出ス者トス							

六、出羽岬ニ到レハ望樓建設地ヲ選定セシメシ方爲メ須磨ヨリ大尉一名ヲ派遣セシムヘシ
同艦ハ之ニ要スル人員及ヒ材料ヲ豫メ準備シ置クヲ要ス
是等ノ人員ハ陸戦隊ヲ以テ掩護セシムル豫定ナリ

(六戰機密第
一二三號)

而テ翌二十一日東郷司令官ハ其ノ麾下ヲ率非、他隊及ヒ輸送船隊ト共ニ豫定ノ如ク小樽ヲ出
港シ、二十四日早朝アレキサンドロフスキニ達スルヤ、其ノ本務ヲ先任艦長タル和泉艦長海
軍大佐石田一郎ニ委ネ、先ツ午前九時有明、霞ノ二隻ニ、スタルカ灣トイムベラトルスカヤ灣ト
ノ間ニ於ル諸錨地ヲ偵察スヘキコトヲ命シ、次テ午後二時須磨、千代田ヲ率非ティムベラトル
スカヤニ向ヒ出港シ、二十五日早朝同港口ニ達シ、恰モ港内ヲ偵察シ終リテ歸リ來レル有明、霞
ヲ合セ、敵影ナキコト等ノ報告ヲ受ケ、(備考文書第
十九號參照)更ニ復同北灣内ニ入り、午前九時須磨砲術長
海軍大尉平岩元雄ヲシテ、須磨、千代田ヨリ成ル陸戦銃隊一小隊ヲ率非、有明、霞ノ掩護ノ下ニ、同
地ニ在ル兵營附近ヲ偵察セシメ、(備考文書第一
號及ヒ附圖參照)其ノ間須磨、千代田ハ更ニ南灣ニ移リ、千代田分
隊長海軍大尉加藤勁次郎ヲシテ、豫テ編成シアル他ノ陸戦銃隊一小隊ヲ指揮シ、イムベラトル
スカヤ河附近ヲ偵察セシメタルニ、何レモ敵ナク、兵營ハ荒廢シテ久シク屯兵セシ形跡ナク、交
通機關モ亦絶無ニシテ、何等敵情ニ就キ得ル所ナカリシヲ以テ、何レモ正午頃歸艦シ、(備考文書
第二十一
號參照)其ノ夜ハ南灣ニ警戒碇泊セリ、同日東郷司令官ハ左ノ訓令ヲ發セリ、

- 一、出羽岬附近ノ敵情ニ就テハ得ル所ナシト雖モ多少ノ敵兵アリト認ムルヲ安全ナリトス
- 二、須磨艦長ハ須磨及ヒ霞ヲ率非明二十六日早朝當港ヲ發シ先ツニコラヤ岬燈臺附近ヲ偵
察シ了レハ出羽岬ニ到リ望樓建設豫定地ヲ選定シ後命ヲ待ツヘシ
- 三、千代田艦長ハ千代田及ヒ有明ヲ率非明二十六日早朝當港ヲ發シ出羽岬ノ南方ヲテスカ
湖ノ前面ニ到リ附近ノ敵情ヲ偵察シ併テ湖口附近ノ水深ヲ略測シ午後七時迄ニ出羽岬ニ

第二章

第二節

第三目

第一款

須磨千代田第一驅逐隊(有明、霞)ノボート、イムベラト
ルスカヤノ偵察成績及ヒ出羽岬望樓建設地點ノ選定

四、前二項ノ作業ハ何レモ陸戰隊ヲ以テ掩護スルヲ要ス

(六戰機密第一二二四號)

乃チ右訓令ニ基キ、二十六日千代田及ヒ有明ハ、午前四時出港シテラテスカ湖ニ向ヒ、八時三十分有明ニ沿岸偵察ヲ命シ、千代田ハ十一時五十分ルダネフスカゴ河口(ラテスカ湖口ナリ)ノ西方一海里ニ投錨シ、有明ヨリ海岸人家ナキノ報告ヲ得、直ニ其ノ掩護ノ下ニ千代田分隊長海軍大尉江副九郎ヲシテ、陸戰銃隊一小隊ヲ率非テ上陸偵察セシメ、(海岸ノ沙上ニ馬蹄ノ痕跡ヲ認メシモ人家及ヒ交通機關ノ存在ヲ認メザリキ備考文書第二十二號)之ト同時ニ同艦航海長海軍大尉松岡靜雄ヲシテ同河口ノ測量ニ從事セシメ、何レモ午後四時半頃其ノ任務ヲ終ヘテ歸艦シ、(備考文書第二十三號及ヒ附圖參照)須磨及ヒ霞ハ午前四時十五分出港シ、五時ニコラヤ岬ニ達シ、須磨分隊長海軍大尉石井祥吉ハ、直ニ陸戰銃隊一小隊ヲ率非テ上陸シ、ニコラヤ岬燈臺ニ到リテ同燈臺監守及ヒ從者一名ヲ捕ヘ、公用書類物件ヲ押收シ、又交通機關トシテハ、浦鹽斯德ヨリ春秋二期糧食ヲ持チ來ル便船ニ由ルノ外ナキコト、燈臺ハ開戰當時ヨリ點火セサルコト等ノ報告ヲ齎シテ、八時五十七分歸艦セリ、(備考文書第二十四號參照)是ニ於テ兩艦ハ九時二十分同地ヲ去リ、午後零時三十分頃捕虜ヲ霞ニ移シ、之ヲニコラヤ岬ニ放還セシメ、右終ヲハアレキサシンドロフスキーニ到リ、片岡司令長官ノ指揮下ニ復スヘキ旨ヲ命シテ之ト別レ、三時出羽岬ニ達シテ距岸一公里突ノ所ニ假泊シ、須磨艦長海軍大佐枋内曾次郎ハ、直ニ同艦水雷長海軍中尉大湊直太郎ヲシテ、陸戰銃隊一小隊及ヒ工作部隊若干ヲ率非、敵情偵察ヲ兼ネ望樓建設地選定ノ任務ヲ帶ヒテ上陸セシメシニ、同中尉ハ望樓位置ヲ同岬ノ北西角略測高サ百二十呎頃ニ

選定シ、敵情ニ就テハ、稍邦語ヲ解スル土人ヨリ、數日前騎兵若干南ヨリ北ニ向ヒ通過セリトノ報ヲ得タルノミニテ他ニ得ル所ナク、七時頃歸艦セシヲ以テ、(備考文書第二十五號及ヒ附圖參照)六時三十分來リ會セル千代田及ヒ有明ヲ合セテアレキサシンドロフスキーニ向ヒ、二十七日午前九時同港ニ歸著シ、有明ヲ片岡司令長官ノ指揮下ニ復歸セシメタリ、(東郷司令官、千代田艦長、須磨艦長ノ報告ハ備考文書第二十六號第二十七號第二十八號參照)

第二款 橋立第九艇隊ノカストリー灣附近ノ偵察

橋立(武富第四艦隊)及ヒ第九艇隊(其艦司令海軍中佐河瀬早ハ、三十八年七月十九日第四艦隊、第十一、第十五、第二十艇隊等ト共ニ稚内ヲ發シテ北征ノ途ニ上リ、二十三日午前三時シルクム崎ノ東二分ノ一南約二十七海里ニ達セシ時、丁隊機密第七六號命令(本章第一節)ノ行動ニ就カンカ爲メ、諸隊ト別レテカストリー灣ニ向ヘリ、然ルニ六時頃ヨリ俄ニ霧起リ、航行頗ル危險ナリシヲ以テ、速力ヲ緩メ、艇隊ハ航路ノ保安ニ任スルカ爲メ、橋立ノ前方ニ進ミ警航中、十時頃俄然左舷艇首ニ陸岸ヲ認メシニ因リ、右方ニ轉シテ同二十分想定スシチエバ岬附近ニ投錨假泊シタリシモ、其ノ位置不安ノ慮アルヲ以テ、燕ヲ陸岸偵察ニ赴カシメ、同艇ハ陸岸ニ沿ヒ其ノ位置ヲ確メシト努メシニ、濃霧山巔ヲ蔽ヒテ僅ニ海岸ヲ認メ得ルノミナリシモ、カストリーポイント北方ノダスポイント附近ナルヘシト推定シ、十一時四十分復隊シテ此ノ旨ヲ報告ス、次テ河瀬司令ハ更ニ武富司令官ノ命ニ依リ、午後零時二十分第一小隊(其艦司令官、二隻ヲ率非テ偵察ニ赴キシニ、偶霧薄ラキテ愈々燕ノ推定確實ナリシヲ確メ、一時五十五分該角ヲ繞リテカストリー灣内ニ入り、三時五分オプサベートリー島附近ニ達セリ、時ニ左方海岸ハ、尙全ク霧ニ包マレテ望見スルヲ得サ

リシモ、右方ハ霧ナク、クリコフ半島ニ一尖塔アルコト、北灣ヲ越エテ海岸ニ電信局ト思ハル、
一個ノ建築物アルコト、オブサベートリー島ハ森林ニ蔽ハレ、其ノ南端ニ一小棧橋アルコト、
カストリーポイントヨリクリコフ半島ニ至ル一帯ノ海岸ハ、斷岸聳エテ舟ヲ寄セ難キコト等
ヲ知レリ、是ニ於テホストック淺洲トオブサベートリー島トノ間ニ於テ、兩回回轉運動ヲ爲シ
ツ、威嚇砲撃ヲ行ヒ、以テ陸上防備ヲ探ラント試ミシモ、寂トシテ應スルモノナキヲ以テ、何等
ノ防備モ存セス、又假令防備アリトスルモ極テ微弱ナルヘキモノト判定シ、五時十分ダスポイ
ント附近ニ在ル橋立ノ側ニ歸著シテ其ノ顛末ヲ報告セリ、是ヨリ先キ二時十五分第二小隊(鵜)
モ亦武富司令官ノ命ニ依リ陸岸偵察ニ赴キシモ、濃霧ニ妨ケラレ、僅ニカストリーポイントマ
テ赴キタルノミニテ、四時歸著セリ、是ニ於テ同司令官ハ、豫定ノ如ク橋立及ヒ艇隊ヲ率非テ豫
定集合地點(間宮海峽ノ南口チユイグ岬附近ナル第十二會合點ナリ)ニ向ヒ、六時五十分本隊ニ合セリ、

第三款 第一驅逐隊(吹雪)ノカストリー灣及ヒ間宮海峽附近ノ偵察

藤本第一驅逐隊司令ハ、三十八年七月十八日片岡第三艦隊司令長官ヨリ、左ノ訓令ヲ受ク、

一、貴官ハ來二十三日上陸地點附近ニ達セハ第一小隊(編者曰ク吹雪春雨ナリ)ヲ率非先ツカストリー灣

ノ偵察威嚇ヲ試ミタル後其ノ一艇ヲ殘シテ該灣ノ哨戒ニ任シ他ノ一艦ヲ派シテ間宮海峽

南口ノ哨戒ニ任セシムヘシ

但此ノ行動開始ノ時期ハ更ニ之ヲ令ス

二、第二小隊(編者曰ク有明霧ナリ)ハ別ニ與フル訓令ニ依リ東郷司令官ノ指揮下ニ作動セシムヘシ

三、第一號ノ任務遂行ニ先タチ出羽第四艦隊司令長官ニ就キカストリー灣ノ情報ヲ受クヘシ

(北遣艦隊機密第八七號)

已ニシテ第一驅逐隊ハ、二十一日第五、第六戰隊、輸送船隊等ト共ニ小樽港ヲ發シ、二十四日午前
五時三十五分アレキサンドロフスキーニ近ツキシ時、同司令長官ヨリ前記ノ行動ヲ開始スヘ
キノ命ヲ受ケタリ、是ニ於テ藤本司令ハ、六時嚴島(出羽司令長官旗艦)ニ近ツキテカストリー灣ノ情況ヲ
問ヒ、前日第九艇隊威嚇砲撃ヲ加ヘシモ應砲セサリシ情報ヲ受ケ、(第九艇隊ノカストリー灣偵察行動ハ第二目參照)七時二十
五分吹雪、春雨ノ二艇ヲ率非テ同灣ニ向ヒ、十一時五十分クレスターカンブ燈臺ニ近ツキシ
ニ、敵兵五六ノ逃走スルヲ認メ、午後零時六分南灣内ニ入りテ投錨シ、直ニ同地偵察ノ目的ヲ以
テ、吹雪乗組海軍中尉八角三郎ノ指揮下ニ陸戰隊ヲ上陸セシメシカ、八角中尉ハ上陸スルヤ、直
ニ敵情ヲ確ムルカ爲メ同燈臺ヲ襲ヒシニ、監守員等皆逃走シテ已ニ在ラス、由テ同燈臺ニ遺棄
シアリタル帽子(士官用一下士卒)、書類等ヲ押收シ、午後二時二十分歸艦セシヲ以テ、(チユイグ岬ノ電信局ト
アリ燈臺間ト聯絡ス燈臺ノ構造ハ宏大ナリ而テ糧食ハ大ナル倉庫ニ充實セリ)直ニ拔錨シ、四時十分バサルド島ニ近ツキシニ、海圖上電信局ト
記シアル附近ニ四門ノ砲座ヲ認メシヲ以テ、警戒シツ、進ミタリシカ、果然敵同砲臺ニ現レ、我ニ
向ヒテ砲撃ヲ加ヘタリ、是ニ於テ直ニ應戰シ、幾モナク沈黙セシメ、次テ同砲臺ヲ拾テ後方ノ森
林ニ向ヒ遁走スル多數ノ敵兵ヲ砲撃シタリ、尙同十五分我カ砲彈ノ爲メアレキサンドロフス
キー市街(沿海州ニ在ルモノナリ)ニ火災ヲ起シ、同四十分ニハ陸上火藥庫ト思ハルヘキモノ爆發シ、火災益、
延長シテ其ノ勢甚タ猛烈ナルヲ望メリ、(二十五日午前一時四十
五分ニ至リテ鎮火セリ)由テ五時二十分藤本司令ハ、吹雪ニハ

灣口ニ在リテ警戒スヘキコト、春雨ニハ艦隊所在地ニ赴キ、此ノ旨ヲ報告シテ後チ間宮海峽ノ南口ニ到リ、同地ニ在リテ警戒スヘキコトヲ命シ、兩艦ハ其ノ配置ニ就キ、二十五日午前八時頃相次テ樺太アレキサンドロフスキーニ歸著セリ、然ルニ同日藤本司令ハ、更ニ片岡司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

貴官ハ第一小隊ヲ率非便宜出發シ間宮海峽南部ノ偵察ヲ試ミ成シ得レハボゴビ岬ヨリ對岸ニ敷設セル海底電線ヲ切斷シ二十八日中ニ歸著スヘシ

仍テ同司令ハ、午後一時四十五分吹雪ヲ率非、春雨ニハ炭水補充ノ上エカテリナ岬ニ來會スヘキヲ命シテ出港シ、陸岸ニ沿ヒツ、北上シ、チユイク岬ニ至ルノ間ハ、ボゴビニ通スル電柱ノ海岸ニ樹立スルヲ認メタリ、而テ九時二十六分エカテリナ岬ノ南方ニ達シテ投錨警戒シ、十時五十五分春雨ヲ合セタリ、次テ二十六日午前七時三十分出港シテ間宮海峽ニ入りシカ、水深、地物共ニ海圖ト相違アルヲ以テ、測深シツ、徐航シ、午後一時二十分ボゴビ沖ニ達シテ投錨シ、直ニ兩艦ヨリ電線破壞隊及ヒ同掩護隊ヲ編制シ、兩艦ヨリノ掩護且威嚇砲撃ノ下ニ、海軍中尉小川正冬ヲシテ之ヲ率非テボゴビニ上陸セシメタリ、小川中尉カ距岸約八百米突ニ在ル電信局ニ突入セシ時ハ敵已ニ在ラス、機械ハ數分前マテ使用セラレタルモノ、如ク、同局附近ニ在ル兵舎ニハ小銃二個ヲ遺棄シ、寢臺十四個、軍服、軍帽、外套等舍内ニ散亂シテ狼狽遁走ノ跡ヲ留メタリ、又電信局兵舎ハ何レモ新築ニシテ、僅ニ一二箇月前ニ成リタルモノ、如シ、同中尉ハ海陸線ノ接續部ヲ破壊シ、電信機一臺及ヒ小銃二個(銃劍共)ヲ鹵獲シテ、二時五十分陸上ヲ引上ケ、五時

十分歸艦セリ、是ニ於テ同二十六分出港シテ歸途ニ就キ、取敢ヘス其ノ概要ヲ片岡司令長官ニ報告シ、同夜ハエカテリナ沖ニ投錨シテ海峽ヲ監視シ、二十七日藤本司令ハ春雨ヲ同地ニ留メ、吹雪ヲ率非テ報告ノ爲メアレキサンドロフスキーニ向ヒ、十時ボロニナ角沖ニ達シ、尙同地ノ電線ヲモ破壊セント欲シ、八角中尉ヲ指揮官トシテ破壞隊ヲ派遣セリ、同中尉ハ上陸スルヤ、直ニ電線約三十米突ヲ切斷棄却シ、次テ對岸電信局ヲモ占領セント欲シ、湖水ヲ涉リテ急進セシニ、同局ニハ守備兵アルモノ、如ク、數名ノ人影ヲ認メシモ、我カ近ツクヲ見ルヤ、直ニ逃走シテ其ノ影ヲ没シ、何等ノ抵抗ナク之ヲ占領シ、電信機一臺、銃劍一個、斧二挺ヲ鹵獲シ、尙附近ヲ搜索シテ、叢中ヨリ同局ノ傭人三名ヲ捕ヘシモ、捕虜トナスヘキ價值ナキヲ以テ之ヲ解放シ、海岸ニ埋沒シアル裝鎧電纜ヲ發掘シテ約二尋ヲ爆破切斷シ、午後一時十五分陸上ヲ引上ケ、同四十五分歸艦セリ、是ニ於テ直ニ出港シテ、五時アレキサンドロフスキーニ歸著セリ、(第一驅逐隊司令報告第三十號及ヒ附圖參照)

第三節 樺太占領後ニ於ル北遣艦隊ノ動作

第一目 行動概要

片岡第三艦隊司令長官ハ、其ノ麾下艦隊ニ一ノ死傷損害ナク、七月二十七日ヲ以テ樺太占領軍ニ對スル應援助力ノ任務ヲ終レリ、是ニ於テ同司令長官ハ、第四艦隊ヲシテ山羽第四艦隊司令長官ノ指揮下ニ、大湊ヲ根據地トシテ津輕海峽方面ノ警備ニ任セシメ、躬ヲ第三艦隊ヲ率非テ千歲灣ヲ根據地トシ、以テ宗谷海峽及ヒ樺太ノ警備ニ當リ、別ニ中尾第四艦隊司令長官ヲシ

テ、臺南丸、香港丸ヲ率非テ樺太ヲ周航シ、海豹島ヲ調査セシメ、併セテ海獸保護ノ方法ヲ講セシメント欲シ、(中尾司令官ノ本行動ハ本節第四目ニ概要詳記ス)同日アレキサンドロフスキニ於テ左ノ命令ヲ發セリ、

一、浦鹽艦隊ノ動靜ニ關シテハ其ノ後更ニ得ル所ナシ

我カ偵察ノ結果ニ因リセント、ウラザミル灣、オリガ灣、カストリー灣及ヒボートイムペラトルスカヤニハ敵ノ攻勢的兵力ヲ有セサルモノト認ム

二、北遣艦隊ハ樺太占領ノ目的ヲ有スル獨立第十三師團ノ南北上陸隊ヲ前後各其ノ目的地ニ掩護上陸セシメ海陸協同作戰シテ我カ陸軍既ニ樺太占領ヲ現實ニセリ是ニ於テ北遣艦隊ヲ二分シテ南北要港ニ配備シ北海ニ於ル我カ重要地及ヒ新占領地ノ哨戒警備ニ任シ傍ヲ海上ヨリスル敵ノ軍資輸入ニ對シ極力之カ杜絶ヲ圖リ且勗メテ教育訓練ヲ實施セントス又任務ノ繁閑ニ鑑ミ漸次我カ艦艇ノ完全ナル修理ヲ加ヘントス

三、第四艦隊ハ出羽司令長官之ヲ率非大湊ヲ本根據地トシ津輕海峽及ヒ北緯四十五度以南同四十二度以北ノ哨戒警備ニ任シ第三艦隊ハ本職之ヲ直率シ千歲灣ヲ本根據地トシテ宗谷海峽及ヒ樺太ノ哨戒警備ニ任スルト同時ニ北遣艦隊全般ノ作戰ヲ統轄ス

四、中尾司令官ハ臺南丸、香港丸ノ二隻ヲ率非別ニ與フル訓令ニ依リ樺太ノ周航及ヒ同島東岸海豹島ノ調査並ニ海獸保護ノ方法ヲ講セシム

五、當分ノ間母艦春日丸ヲ第四艦隊司令長官ノ指揮下ニ入ラシム

六、當方面出發ノ時期ハ更ニ之ヲ令ス

(北遣艦隊機密
第一一號)

尙片岡司令長官ハ、山田第三艦隊司令官ニハ、第五戰隊ノ第二小隊(日進春日)ヨリ便宜將校ヲ選抜シテ委員ヲ編成シ、アレキサンドロフスキ燈臺ヨリ南へ二海里、西へ二海里、北へ三海里ノ間ノ補測ヲ行フヘキコト、(兩艦ヨリハ航海長以下若干ノ士官、下士官ヲ出シテ委員トシ、二十八日ヨリ之カ測量ニ從事セシメタリ第五部第四篇第四章戰略地點測量ノ部ニ詳ナリ)及ヒ臨時出羽司令長官ノ指揮下ニ屬セシメタル第五驅逐隊、第九艇隊及ヒ母艦熊野丸ヲ第三艦隊ニ復歸セシメ、次テ二十八日出羽司令長官ニ向ヒ、第四艦隊ヲ率非テ二十九日以後便宜出港シ、大湊ニ回航スヘキコトヲ命シ、(出羽司令長官ハ二十九日第七、第九戰隊春日丸、第十五、第二十戰隊ヲ率非アレキサンドロフスキニ發セリ)滿州丸艦長海軍中佐矢代由德ニハ、通信ノ爲メ即日出港シ、稚内ヲ經テ小樽ニ回航シ、所屬本隊ニ復隊スヘキコト、(滿州丸ハ濃霧ノ爲メ稚内ニ入港スルコトヲ中止シ三十一日函館ニ入り八月五日出港シ八日小樽ニ入レリ)藤本第一驅逐隊司令ニハ、第一驅逐隊ヨリ二隻宛ヲ間宮海峽南口ニ派シ、警戒スヘキコト、及ヒウヰヤフト村電信局ニ遺棄シアル電纜ヲ押收スヘキコト等ヲ命シ、(第一驅逐隊ノ本行動ハ本節第二目ニ詳記ス)又麾下一般ニ向ヒテハ、樺太占領ニ關シ其ノ辛勞ヲ多トスル旨及ヒ益々奮勵ヲ希望スルコトヲ訓示セリ、(備考文書第三三十一號參照)是ヨリ先キ二十四日武藏(武藏ハ從來横須賀鎮守府ニ屬シ宮岡津輕海峽防禦司令官ノ指揮下ニ津輕海峽方面ノ警戒ニ任シ居タリ)ハ、測量艦トシテ第三艦隊ニ屬セラレ、爾後樺太ノ測量ニ從事ス、(第五部第四篇第四章)已ニシテ二十九日片岡司令長官ハ、香港丸艦長海軍大佐有川貞白ニハ、便宜出港シテ小樽ニ回航シ、中尾第四艦隊司令長官ノ指揮ヲ受クヘキコト、(香港丸ハ二十九日アレキサンドロフスキニ發シ三十一日小樽ニ著セリ)廣瀬第五驅逐隊司令ニハ、第五驅逐隊ヨリ便宜二隻ヲ派出シ、ゾーエ岬ト出羽岬トノ間ノ沿岸ヲ偵察シ、三十一日迄ニアレキサンドロフスキニ歸來セシムヘキコトヲ命セリ、(第五驅逐隊ノ本行動ハ本節第三目ニ詳記ス)又海豹島附近ニ於ル海獸、魚類獵獲禁止ノ軍令違背者ヲ發見セシ場合ニ於ル

處分ノ標準ヲ定ム、(違背者ニハ既述ト未述トヲ問ハス船舶獵具、獲物ヲ沒收スルカ又ハ貳拾圓以上五百圓)去十三日奥尻海峡ニ坐礁セル八幡丸ハ修理ヲ終リテ此ノ日アレキサンドロフスキーニ歸著セリ、(八幡丸ハ七月十三日奥尻海峡ニ坐礁セル)次テ三十日片岡司令長官ハ、アレキサンドロフスキーニ在ルルナリ本篇本章第一節第二目ニ詳ナリ)又テ三十日片岡司令長官ハ、アレキサンドロフスキーニ在ル東郷第三艦隊司令官ニ向ヒ、コルサコフニ到着セハ直ニ麾下ヨリ適當ノ將校及ヒ必要ノ人員ヲ宗谷望樓ニ派シ、其ノ無線電信機ヲ檢査シ、其ノ通信距離三十海里以上ニ達セサル原因ヲ調査、改善ノ方法ヲ研究シ報告セシムヘキヲ命シ、(秋津洲水雷長海軍大尉松下芳藏此ノ任務ニ當リ八月五日應急ノ處置ヲ施シテ八十海里迄ハ通信スルヲ得ルニ至ラシメタリ而テ同官ハ同望樓員ニ取扱上注意スヘキ要件ヲ諭シ尙修理改善ヲ要スル請求項目等ヲ筆記セシメ十日朝歸艦ノ途ニ就ケリ詳細ハ第四部第三篇通信ノ部ニ掲ク)又同日左ノ第三艦隊命令ヲ發シタリ、

- 一、北遣艦隊機密第一一一號北遣艦隊命令ニ依リ本職ハ第五戰隊(第二小)八重山及ヒ第五驅逐隊第一小隊ヲ率非來八月二日午後六時當地出發同四日K地點(編者曰クコル)ニ回航ス
- 二、東郷司令官ハ第六戰隊及ヒ第五驅逐隊第二小隊ヲ率非八月一日便宜當地出發ポートイムペラトルスカヤヨリ北緯四十六度ニ至ル黒龍沿岸州沿岸ヲ偵察シ五日中ニK地點ニ回航シ爾後第六戰隊及ヒ第五驅逐隊ヲ以テ宗谷海峡及ヒ同海峡西口外附近ノ警戒ニ任スヘシ其ノ警戒區域、方法及ヒ順序等ハ東郷司令官之ヲ定ム
- 三、池中熊野丸艦長ハ第九艇隊ヲ率非八月二日以後便宜出發シ小樽ニ回航シ後命ヲ待ツヘシ

編者曰ク本號ハ元左記ノ如クナリシカ八月二日北遣艦隊機密第一三七號ノ二ヲ以テ本文ノ如ク變更セラレタ

ルナリ

三、池中熊野丸艦長ハ第九艇隊ヲ率非八月二日便宜當地出發出羽岬ヨリ近藤岬ニ至ル樺太西岸ニ於ル港灣ヲ觀察シ五日中ニK地點ニ回航スヘシ又望樓豫定建設地ナル出羽岬ニ適宜兵員ヲ陸揚ケン同方面敵ノ有無ヲ偵察スヘシ

四、山田司令官ハ第五戰隊第二小隊八幡丸及ヒ第一驅逐隊給炭船彦山丸ヲ率非當分ノ間N

地點(編者曰クアレキサン)ヲ根據トシ同方面ノ警備ニ任スヘシ

又通信聯絡ノ爲メ時々八幡丸ヲK地點ニ回航セシムヘシ

五、特務船舶ハ別ニ與フル訓令ニ依リ行動ス

(北遣機密第一三七號)

此ノ日片岡司令長官ハ、カストリー灣及ヒ間宮海峡南口視察ノ爲メ八幡丸ニ搭乘シ、雁及ヒ燕ヲ率非同方面ニ向ヒ、三十一日視察ヲ終リテアレキサンドロフスキーニ歸港セリ、(此ノ日原口樺官ハ樺太全島ニ軍政ヲ布ク)次テ八月一日午前四時、東郷司令官ハ前記訓令ニ基キ、第六戰隊及ヒ第五驅逐隊ノ第二小隊(陽炎)ヲ率非、イムペラトルスカヤニ向ヒ出港セリ、(東郷司令官ハ一旦出港セシ間務中ニ彷徨シ終ニ偵察ヲ斷念シ稚内ヲ經テ五日午後コルサコフニ歸港シ第五驅逐隊ノミハ直ニ引返シアレキサンドロフスキーニ避泊セリ備考文書第三十二號及ヒ附圖參照)

二日片岡司令長官ハ、伊集院軍令部次長ヨリ左ノ電報ヲ受領セリ、

一、日本海ノ海權我ニ歸セシ以來敵ハ樺太島ノ東方及ヒ北方航路ヲ經テ軍資ヲ輸入セントスルノ形跡アルヲ以テ之ヲ妨止シ且全島ノ占領ヲ速ニスルノ目的ヲ以テ貴隊ノ都合次第成ルヘク速ニ一部隊ヲ派遣シ樺太島東方及ヒ北方沿岸ヲ巡航セシメ猶爲シ得ハオコツク沿岸ノ北西部ヲ偵察セシメラレンコトヲ望ム

二、堪察加半島へハ此ノ際占領軍ヲ派遣セサル見込ニ付適宜二三等巡洋艦、假裝巡洋艦ノ内二三隻ヲ分遣シ同半島南部沿岸ニ於ル敵兵所在地ニ威力偵察ヲ行ヒ竝ニコンマンドルスキー列島ノ現状ヲ偵察シ海獸等濫獲ノ弊ナキヤ等ヲ視察セシメラレタシ

三、昨年堪察加方面ヲ巡航セシ英國軍艦「アルゼリン」艦長ノ談ニヨレハ同官ハ同年九月二十四日堪察加長官陸軍大佐ヲベトロバウロウスクニ訪問セシ際同長官ハ軍事上ノ捕虜トシテ日本郡司大尉ヲ同地燈臺ノ營舎ニ收容シ居レリト語レリト云フ情況之ヲ許サハ臨機ノ處置ヲ以テ郡司大尉ヲ救出スルコトヲ得ハ幸ナリ

又伊東軍令部長ヨリモ左ノ電訓アリ、

- 一、堪察加方面ニ於ル敵情ニ關シテハ大海情報ニ示スノ外得ル所ナシ
- 二、占守島ニハ目下報效義會員五戸、十五名住居シ別所佐吉ナル者之カ主長タリト云フ
- 三、貴官ハ貴麾下艦隊ノ一部ヲシテ占守島ヲ經テ堪察加半島南部ベトロバウロウスク附近及ヒコンマンドルスキー列島ヲ偵察セシムヘシ

次テ三日片岡司令長官ハ、八雲、吾妻ヲ率非午後六時アレキサンドロフスキーヲ發シテコルサコフニ向ヒ、之ト相前後シテ第五驅逐隊、八重山モ亦同港ニ向ヒ、熊野丸第九艇隊ハ小樽ニ向ヘリ、既ニシテ同司令長官ハ、五日午後コルサコフニ著シ、前記軍令部長ノ訓令ニ基キ、直ニ東郷司令官ニ向ヒ、須磨和泉及ヒ給炭船「オークレ」號ヲ率非、約三週間ノ豫定ヲ以テ占守島ヲ經、堪察加半島南部沿岸ナル敵兵所在地ニ威力偵察ヲ行ヒ、竝ニコンマンドルスキー列島ノ現状ヲ偵

察シ、海獸等濫獲ノ弊ナキヤ否ヤ等ヲ調査シ、又郡司大尉ハ、捕虜トシテベトロバウロウスク燈臺ノ營舎ニ收容セラレ居ルトノ噂アルヲ以テ、爲シ得ハ救ヒ出スヘキコト等ヲ命シ、(須磨和泉ノ第五目ニ)中尾司令官ニハ、敵ハ樺太ノ東方及ヒ北方航路ヲ經テ軍資ヲ輸送シツ、アルモノ、如シ、故ニ之ヲ防止スルト同時ニ、全島ノ占領ヲ速ニスルノ目的ヲ以テ、臺南丸、香港丸ノ二隻ヲ率非、樺太島東北ノ沿岸ヲ巡航シ、東經百四十六度以西ノオコツク沿岸ヲモ偵察シ、三週間以内ニ歸港スヘキヲ命シ、(中尾司令官ノ行動ハ)熊野丸艦長海軍大佐池中小次郎ニハ、第九艇隊ヲ率非テ大湊ニ回航シ、出羽司令長官ノ指揮下ニ入ルヘキヲ訓令セリ、又同司令長官ハ同日東郷聯合艦隊司令長官ヨリ、鎮遠ヲシテ旅順口ヨリ戰利艦「バヤーン」ヲ曳航セシムヘキニ付、其ノ方面ノ作戰一段落ヲ告ケナハ、直ニ同艦ヲシテ佐世保ニ回航セシムヘキコト、母艦春日丸モ作戰終了後便宜竹敷要港ニ回航セシメ、母艦ハ熊野丸一隻ト爲スコト、(鎮遠ハ九日函館ヲ發シテ十三日佐世保ニ入り、十五日同港ヲ發シテ十七日青泥窪ニ著シ、バヤーンヲ曳航シテ二十八日舞鶴ニ入り、其ノ任務ヲ完ウシ、三十一日同軍港ヲ出テ佐世保、小樽ヲ經テ九月十日アレキサンドロフスキーニ歸著シ本隊ニ合セリ又春日丸ハ幾モナク竹敷回航ヲ止メテ横須賀ニ回航シ修理スヘキコト、ナリ八月十一日函館ヲ發シテ十三日横須賀ニ入レリ)聯合艦隊ニ於テ九月中旬迄ニ戰利艦「ノーヴ非ク」ヲ引揚クルコト、ナリ、引揚委員長ヲ海軍中佐茶山豐也ニ命シ、片岡司令長官ノ指揮ヲ受クヘキ旨ヲ訓令シ置キタルヲ以テ、出來得ル限り助力ヲ與フヘキコト等ノ訓令ヲ受ケ、又伊集院軍令部次長ヨリハ、遠洋漁業船寅丸(神奈川縣足柄郡酒匂村石井メシノ)ハ、七月六日堪察加半島ノ南端ナルロバツカ岬ノ沖合ニテ、端艇三隻ヲ出シ臘虎獵ニ從事中、露兵ニ襲ハレ、其ノ内一隻ハ行衛不明トナリシコト、在京城海軍少佐吉田増次郎ノ報告ニ據レハ、三日午前四時二十分驅逐艦三隻鏡城沖ニ現レ、我カ京城丸ニ砲

撃ヲ加ヘ、後チ一隻ハ南方ニ、二隻ハ北方ニ向ヒテ去リ、京城丸船長以下二名即死シ、二名負傷シ、船體ハ敵彈ノ爲メ大ニ傾斜セルモ沈没ハ免レタルコト、堪察加半島ニコラエフスク等ヲ經テ小樽ニ入港シタル某國汽船船長ノ言ニ據レハ、ペトロパヴロフスク附近沿岸ニハ防備ヲ見サリシコト、間宮海峡北方水道ニハ一汽船アリテ水路嚮導ヲ爲シ、標柱ハ悉ク撤去シアルコト、ニコラエフスク南東七海里ノ岬高所ニハ、數箇所ニ砲臺ヲ設ケ、河岸ニハ二臺ノ探照燈ヲ備ヘ居ルコト、ニコラエフスクニハ舊式砲艦二隻、小形水雷艇十隻アルコト、七月二十七日上流ヨリ陸兵約五百同地ニ到着シタルコト等ノ情報ヲ受ケ、六日更ニ同次長ヨリ、ジョンキール岬ヲ島海岬ト改稱シ、同地望樓ヲ島海望樓ト名ツケラレタルコト、第十四師團ノ滿洲軍ニ増加セラレタルコト、同方面ノ狀況ニ變化ナキコト、北韓方面ハ狀況ニ變化ナキモ、歩兵一聯隊補充兵等ヲ合セテ人員約七千七百、馬匹約五百、第二艦隊掩護ノ下ニ城津ニ輸送増加スヘキコト(上村第二艦隊司令長官ハ十二日出雲、常磐、淺間、音羽、千早、雷、電、第四驅逐隊ヲ率非陸軍輸送船隊ヲ護衛シテ鎮海灣ヲ發シ、城津及ヒ清津ノ陸兵陸揚ケノ掩護ヲ爲シ、十八日尾崎灣ニ歸港セリ本篇第三章第四節ニ詳ナリ)等ノ電報ニ接シ、又伊東軍令部長ヨリ、參謀總長陸軍大將元帥侯爵山縣有朋ノ定メタル樺太露國罪囚處分法(備考文書第三十三號參照)ノ通報ト同時ニ、罪囚ヲ本島外ノ露國沿岸ニ輸送スル護衛ニ關シ、獨立第十三師團長及ヒ歩兵第二十五旅團長ノ協議ニ應スヘキコトノ電訓ヲ受ケ、(協議ノ結果第一驅逐隊ヲ以テ是カ任ニ充ツルコトト爲セリ放還ニ關スルコトハ本篇第六目ニ詳ナリ)又同日東郷聯合艦隊司令長官ヨリ、旅順口戰利艦、ボルターワハ、來二十五日回航準備結了スヘキヲ以テ、之ヲ舞鶴ニ護送スルカ爲メ、麾下假裝巡洋艦一隻ヲ佐世保ニ回航セシムヘキノ電訓ニ接セリ、是ニ於テ片岡司令長官ハ滿洲丸ヲ是カ任ニ充ツルコト、シ、即日出羽司令長官ニ此ノ旨

ヲ訓令シ、(滿洲丸ハ九日小樽ヲ發シ十二日佐世保ニ著キ十八日同軍港ヲ發シ二十日青泥窪ニ入り二十四日「ボルター」ヲ護衛シテ二十九日舞鶴ニ著シ九月二日同軍港ヲ出テ小樽ヲ經テ八日アレキサンドロフスキーニ歸港セリ)七日

吾妻艦長海軍大佐村上格一ニ命スルニ、機關砲數門ヲ有スル敵ノ敗兵約四百、グナイチャ湖ノ南東ナル山谷ヲ據守シ、我カ陸軍ノ一部隊目下攻撃中ナルニ付、第二十五旅團長陸軍少將竹内正策ト協議ノ上、陸兵野砲等ヲ搭載シテ同湖ノ北岸ニ到リテ陸揚ケシ、終リテ歸路海豹島ヲ觀察シ來ルヘキヲ以テス、(吾妻ノ行動ハ本篇第六目ニ詳ナリ)同日同司令長官ハ、伊集院軍令部次長ヨリ左ノ電報ニ接セリ、

堪察加方面分遣艦隊ハ本月二十三日千歲灣歸著ノ豫定ナル旨報告ニ接ス堪察加方面ハ西北比利内地ト電報聯絡ナキヲ以テ右分遣艦隊歸港ノコトハ大本營ニ於テ公示シ差支ナシト認ムルマテハ我ニ於テ之ヲ極秘ニ附シ世人ヲシテ同分遣艦隊ハ堪察加方面ニ在リテ同地方ヲ占領シ居ルカ如ク信セシムルヲ得策トス右ノ主旨ニ依リ諸事御取計ヲヒアリタシ

是ヨリ先キ四日、見島、沖島、巖島、修理ヲ終リテ佐世保ヨリ函館ニ入り第四艦隊ニ合シ、六日驅逐艦曉モ亦、佐世保ヨリコルサコフニ入港シテ第三艦隊ニ合シ、(曉ハ佐世保ニ於テ艦裝修理中六月十七日月七日修理完成セシヲ以テ試運轉公試發射等ヲ終リ三十日佐世保ヲ出發シタルモノナリ)同日見島ハ消毒ノ爲メ舞鶴ニ向ヒ函館ヲ發シ、(見島ハ八日シ九日ヨリ消毒ニ著シテ十四日ニ之ヲ終リテ二週間ノ隔離ヲ爲シ終テ小銃射的等ヲ行ヒ九月七日出港小樽ヲ經テ十二日アレキサンドロフスキーニ歸港シ本隊ニ合セリ)第十五艇隊モ七日函館ヲ發シ、修理ノ爲メ大湊ニ到ル、(即チ七日ヨリ一艇ヲ、修理ニ著シテ九日近藤岬望樓ヨリ、去四日敵ノ敗兵約六百マツカニ現レ暴行ヲ逞シッスルヲ以テ、其ノ地ノ一漁夫來リテ救助ヲ願フトノ報ヲ受ケ、片岡司令長官ハ直ニ八重山艦長海軍大佐西山實親ニ向ヒ、明早朝出發シテ先ツマツカニ到リ、適宜ノ行動ヲ執リテ同地附近ニ在ル本邦人ノ保護ニ任スルト同時ニ、電線敷設船奉天丸及ヒ

第三辰丸(海馬島ヨリアレキサンドロフスキーマテ)ヲ間接掩護シ、歸途沿岸ノ敵情ヲ偵察シ、十七日迄ニ歸著スヘキコトヲ命シテ之ニ赴カシメ、(八重山ノ行動ハ本節第七目ニ詳ナリ)尙曉艦長海軍大尉原田正作ニハ、先ニ約百五十乃至二百ノ敵兵、オートサイ河(ナイブリーチノ附近ニ在リ)ニ添ウテ東海岸ニ出テ、更ニ北進シタルニ因リ、我カ陸軍ノ一部隊ハ之ニ對シテ作動シツ、アルヲ以テ、即日出發シ、同河附近ニ到リテ陸軍ト協力シ、敵ニ對シテ適宜ノ行動ヲ執リ、之ヲ終ラハ歸途沿岸ノ敵情ヲ偵察シ、十五日中ニ歸港スヘキヲ命シ、(曉ノ行動ハ本節第八目ニ詳ナリ)尙各指揮官ニ向ヒ、樺太沿岸ニ於テ外國密獵船ヲ認メシ時ハ、強力ヲ用ヒスシテ之ヲ遠サクルコトヲ目的トシ、且目下樺太及ヒ其ノ屬島ハ我カ軍占領中ナルコトヲ告ケ、漁獵禁止ノ旨ヲ諭シテ直ニ退去セシムヘキコトヲ訓令セリ、次テ十日午前哨艦秋津洲ヨリ、去七日マウカ附近ニテ漁舟六隻約三四百ノ敵襲ヲ受ケ、貨物ハ掠奪セラレ、船ハ燒カレ、少量ノ糧食ヲ與ヘテ追放セラレ、敵ハ後方ノ山中ニ退去セル旨漁夫ノ言ニ據リタル電報アリ、尙各方面ノ情報ニ徴シ、敵敗兵ノ一部糧食缺乏ノ爲メ屢マウカ附近ニ出テ、暴行掠奪ヲ逞シウシツ、アルコト明ナリシヲ以テ、同司令長官ハ直ニ此ノ旨ヲ八重山ニ告ケ、尙必要アラハ、増援ノ爲メ秋津洲ヲモ派遣スヘキコトヲ傳ヘタリ、(十一日八重山ヨリ敵ハノダサン(或ハノトサムトモ稱セリ)附近ニ在ル旨報告アリシヲ以テ増援ノ爲メ十二日ヨリ秋津洲ヲ派遣セリ本節第七目ニ詳ナリ)皇太子殿下ヨリ北遣艦隊ニ遣サレタル東宮武官海軍大佐黒水公三郎ハ、宇治ニテ小樽ヨリコルサコフニ著シ、同日午前片岡司令長官ニ左ノ優渥ナル令旨ヲ傳ヘ、又北遣艦隊傷病者一同ニ御菓子料ヲ賜ハリタリ、(黒水武官ハ八日函館ニ於テ出羽第四艦隊司令長官ニモ同様ノ御沙汰ヲ傳達セリ)北遣艦隊ハ樺太占領ノ征途ニ上リシ以來濃霧其他天爲ノ障碍ヲ排シテ陸兵ノ上岸ヲ掩護シ

陸軍ト策應シ遂ニ敵ヲシテ計畫キ力窮リ降ヲ乞フニ至ラシメタルハ司令長官始メ將卒ノ堅忍忠烈ノ致ス所 皇太子殿下深ク御満悦ニ思召サル時下不順ノ氣候各自自重自愛以テ將來ノ志望ヲ達セラレンコトヲ望マセ給フ

十一日阜月及ヒ曉第四艦隊ニ編入セラル、(但當分兩艦共片岡司令長官ノ指揮下ニ在リ又阜月ハ此ノ時尙未テ二十四日コルサコフニ入港ス)十二日藤本第一驅逐隊司令ハ山田司令官ノ命ニヨリ、吹雪、春雨及ヒ裝砲艇一隻ヲ率ヰテ、黒龍江口附近ノ偵察、及ヒ水路實驗ノ爲メ、アレキサンドロフスキーヲ發シ、(本節第二目ニ詳ナリ)潮ハ十三日吳ヨリコルサコフニ入港セリ、(潮ハ七月二十五日吳ニ於テ艦裝ヲ終リ二十十五日片岡司令長官ハ、近藤岬附近ノ測量ヲ武藏艦長海軍大佐花房祐四郎ニ命シ、武藏ハ開戦當初ヨリ北海警備艦トシカ七月二十四日ヨリ測量艦ト爲リ特務艦隊ニ屬セシメラレタリ是北遣艦隊艦船ノ行動ニ必要ナル地點ノ測量ニ從事セシメラル、大本營ノ主意ニシテ伊集院軍令部長ハ八月十四日第三艦隊參謀長ニ向ヒテ此ノ主旨ヲ報シ併セテ差支ナクハ先ツ近藤岬附近ノ東西沿岸及ヒ樺太西岸ナル須磨岬ノ北方ツイルメテバ海等ヲ測量セシメ宗谷海峡哨戒艦艇ニ假泊地ノ便ヲ與ヘ以テ望樓ト艦船トノ間ニ於テ交通ノ便ヲ計ラレンコトヲ望ムヘキ旨電訓セリ而テ武藏ハ十五日小樽ヨリコルサコフニ入り十七日出發シテ爾後モルシ灣及ヒツイルメテバ海等ヲ測量セシメ宗谷海峡哨戒艦艇ニ假泊量ニ從事シタリ第五篇第四章戰略地點ノ測量ノ部ニ詳ナリ)原田曉艦長ニハ、十六日出發シテマウカニ到リ、陸軍ノ陸揚ケヲ掩護シ、之ヲ終ラハ西海岸ヲ偵察スヘキコトヲ命シ、(曉ハ十六日コルサコフヲシテ十七日早朝マウカニ入り陸兵揚陸掩護ノ任務ヲ終リテ即日出發シノダサン、チカイ、ナイボ、トマリボ、グスンナイ、ハーバシス迄北上偵察ヲ爲シ二十日コルサコフニ歸港セリ)十六日村上吾妻艦長ニ向ヒ、須磨岬望樓間接掩護及ヒヲシヨロ、(須磨岬北方ツイルメテバ海ニ在リ)附近ノ守備ヲ以テ目的トスル陸軍兵一部ノ掩護輸送ヲ爲シテ、二十日迄ニ歸港スヘキコト等、(吾妻ノ行動ハ本節第六目ニ詳ナリ)ヲ訓令シ、(十七日竹内南部占南部渡航者心得及ヒ同渡航者取扱假規)越テ十八日ニ至リ、伊東軍令部長ヨリ左ノ電訓ヲ受領セリ、

一、薩哈噠島ノ占領ヲ確實ナラシムルタメ在薩哈噠島陸軍ニ於テ艦隊ノ援助ヲ要スル時ハ
貴官ハ大海令第一號(編者曰ク第一部第一篇第二章第(三)節戰闘行爲ノ開始ノ部ニ掲ク)ノ目的ト背馳セサル範圍内ニ於テ臨機協
同作戰スヘシ

二、北遣艦隊ノ薩哈噠島北部ヲ撤去スルノ時機ハ九月十五日ト豫定ス(大海訓第(二十六)號)

十九日第六驅逐隊司令海軍大佐久保田彦七横須賀ヨリ著任シテ、其ノ乗艦ヲ潮ト定ム、二十日
摩耶、赤城、鳥海、宇治ノ四隻、第四艦隊ヨリ除カレテ警備艦ト爲リ、第一、第十、第十一、第二十艇隊
ノ四個艇隊モ亦同艦隊ヨリ除カレテ警備艇隊ト爲リ、何レモ共ニ所管鎮守府管内ノ警備ニ任
セリ(警備艦艇ト爲リタル上記ノ諸艦艇ハ八月下旬又ハ九月月上旬ヨリ北海ヲ去レリ(但第一、第十艇隊ハ遂ニ北海ニ到
ラズ)即チ摩耶ハ九月二日舞鶴ニ赤城ハ同十二日吳ニ鳥海ハ同十九日横須賀ニ宇治ハ同六日吳ニ第十一艇隊ハ八
月二十六日佐世保ニ第二十艇隊ハ同日片岡司令長官ハ山田司令官ニ向ヒ、コルサコフ方面在住露國民ノ
隊ハ同三十一日舞鶴ニ著セリ)同日片岡司令長官ハ山田司令官ニ向ヒ、コルサコフ方面在住露國民ノ
歸國ヲ欲スルモノ約千五百ヲ搭載シタル陸軍輸送船江都丸、東洋丸ハ、來二十五日午後七時
アレキサンドロフスキ著ノ豫定ナルヲ以テ、右兩船ニ在ル監督護衛ノ陸軍將校ト協議シ、廳
下ヨリ軍艦若クハ驅逐艦ヲ出シテ、同港ヨリカストリー灣マテ護送シ、揚陸ノ間之ヲ掩護スヘキ
ノ訓令ヲ與フ(露國住民放逐ニ關スル行(動)ハ本節第九目ニ詳ナリ)次テ二十三日ニ至リ、同司令長官ハ伊集院軍令部次長ヨリ、
樺太ニハ歩兵第五十二聯隊、同第四十九聯隊ノ一大隊、及ヒ野戰砲兵第十九聯隊、第二大隊ヲ留
メテ守備軍トシ、北部ニ守備軍司令官中將一名、南部ニ守備隊司令官少將一名ヲ置キ、其ノ他ハ
内地ニ歸還セシメラル、コト、ナリシ旨ノ電報ニ接ス、此ノ日兩陛下ヨリ北遣艦隊ニ差遣セ
ラレタル侍從武官陸軍歩兵中佐白井二郎ハ、八幡丸ニテアレキサンドロフスキヨリコルサ

コフニ著シ(白井侍從武官ハ二十九日出發シ同(三)十日小樽ヨリ上陸歸途ニ就ケリ)二十四日片岡司令長官ニ、左ノ御沙汰及ヒ北遣艦隊傷
病者一同ヘ御菓子料ヲ賜ハリタリ、

御沙汰覺書

北遣艦隊ノ各將卒ハ曩ニ樺太軍ヲシテ同島ノ占領ヲ全ウセシメ其後引續キ同方面ニ在リテ
諸種ノ任務ニ服セルノ勤勞ヲ深ク御滿悦ニ被思召尚樺太ニ於ケル風土氣候ハ大ニ異ナルモ
ノアルニ依リ各自一層自愛勤勞センコトヲ望マセ給ヒ又戰地ニ於テ傷病ニ罹ルモノ其苦勞
一層ナルヘク折角加療速ニ恢復ニ至ランコトヲ望マセラレ特ニ御菓子料ヲ賜ル

同日齋藤第三艦隊參謀長ハ、大本營海軍參謀海軍大佐山下源太郎ヨリ、稚内、宗谷附近、樺太方
面視察ノ爲メ、伊集院軍令部次長二十七八日頃小樽著ノ豫定ナルヲ以テ、相當ノ艦船ヲ其ノ便
乗用ニ充テラル、様取計ヲヒヲ望ムトノ電報ヲ受ケ、片岡司令長官ハ即日山田司令長官ニ向ヒ
テ、軍令部次長乗用ノ爲メ、二十七日迄ニ熊野丸ヲ小樽ニ回航セシムヘキコトヲ訓令シ(熊野丸ハ
小樽ニ入り二十八日軍令部次長ノ一行ヲ乗セコルサコフヲ經テアレキサンドロフスキニ回航シ更(ニ)二十七日
ニ同官ヲ乗セ第一驅逐隊ノ吹雪、有明ト共ニ間宮海峡カストリー灣等ニ行動セリ本節第十目ニ詳ナリ)尙中尾司令官
ニハ小樽ニ回航シテ出羽司令長官ノ指揮下ニ復歸スヘキヲ命シ(中尾司令官ハ其ノ旗艦臺南丸ヲ率
日小樽ニ)且北海ニ於ル我カ重要地及ヒ占領地ノ哨戒警備竝ニ敵ノ軍資輸入杜絶ニ對スル用兵
ノ利ヲ圖リ、且教育訓練ノ便ヲ考ヘ、左ノ命ヲ發シテ艦隊ノ配置ヲ變更セリ、

一、浦鹽方面ノ敵情ニ關シテハ其ノ後更ニ得ル所ナシ

ニコラエフスク附近ニハ砲艦二隻小形水雷艇七八隻ノ現存スルコト確實ナリト認ム

其ノ他ノ黑龍沿海州港灣ニハ依然攻勢の海上兵力ノ存在セサルモノ、如シ

二、敵ハ中立國船舶ヲ利用シ米國及ヒ東洋諸國ノ港灣ヨリ樺太東方及ヒ北方航路ヲ經テ軍資ヲニコラエフスクニ輸送セントスルノ形跡アリ

三、北遣艦隊ハ現下ノ情況ニ鑑ミ北海ニ於ル我カ重要地及ヒ占領地ノ哨戒警備ニ關シ竝ニ敵ノ軍資輸入杜絶ニ對スル用兵ノ利ヲ圖リ且教育訓練ノ便ヲ考ヘ爰ニ艦隊ノ配置ヲ變更セントス

四、第五戰隊假裝巡洋艦隊香港丸、母艦熊野丸及ヒ第一、第五驅逐隊ハ本職之ヲ直率シ千歲灣ヲ本根據地トシ宗谷海峽及ヒ樺太南部ノ哨戒警備ニ任スルト同時ニ北遣艦隊全般ノ作戰ヲ統轄ス

八重山假裝巡洋艦香港丸、八幡丸、母艦熊野丸及ヒ第一、第五驅逐隊ヲ以テ宗谷海峽ノ哨戒勤務ニ服セシム

香港丸、八幡丸ハ時機ヲ見テ再本島東北岸ヲ巡航セシメムトス

五、第六戰隊(香港丸)及ヒ第九、第十五艇隊ハ東郷司令官之ヲ率非函館(編者曰ク九月十八日ヨリ大湊ニ改メラル)ヲ根據地トシテ津輕海峽及ヒ北緯四十五度以南、同四十二度以北ニ於ル日本海ノ哨戒警備ニ任ス

六、第四艦隊(鎮遠、第十五艇)及ヒ第六驅逐隊ハ出羽司令官之ヲ率非N地點ヲ根據地トシ同方面ノ警備ニ任ス

七、出羽第四艦隊司令官ハ津輕海峽哨戒任務ヲ一時第九、第十五艇隊ニ委シ山田司令官ノ任務ヲ繼承シ山田司令官ハ第五戰隊、第二小隊及ヒ第一驅逐隊ヲ率非當地點(編者曰クコレヲサコフナリ)

ニ回航スヘシ

第六戰隊當方面出發ノ時期ハ更ニ之ヲ令ス(北遣艦隊機密第二九一號)

翌二十五日片岡司令官ハ東郷司令官ニ向ヒ、第六戰隊ノ宗谷海峽及ヒ同西口外附近警戒任務ハ二十七日ヲ以テ解クヘキコト及ヒ便宜出港シテ前記命令ノ任務ニ就クヘキコトヲ訓令シ、又香港丸ニハ函館ニ、嚴島ニハ横須賀ニ各回航シテ修理ヲ爲スヘキヲ命シ、(香港丸ハ翌二十六日函館ニ入り直ニ修理ニ著手シ九月九日竣工シテ十日出港シ青森小樽ヲ經テ十五日サコフニ入ル又)嚴島ハ二十五日出發シ二十八日横須賀ニ入り直ニ修理ニ著手シ十月二日竣工シ引續キ横須賀ニ在リ、(廣瀬第五驅逐隊司令ニハ、二十七日ヨリ當分ノ内驅逐艦一隻ヲ順次宗谷海峽ニ出シ、晝夜第二警戒線(第二警戒線ハ宗谷岬トノトロ岬ト)附近ヲ哨戒セシムヘキコト等ヲ訓令ス、

又二十六日川合八幡丸艦長ニハ、薩哈噠海灣ニ便宜出動シニコラエフスクニ密輸入ヲ企ツル船舶ヲ防止スヘキコト、(八幡丸ノ行動ハ本節第十二目ニ詳記ス)東郷司令官ニハ千代田ヲ横須賀ニ回航シ、完全ナル修理ヲナサシムヘキコト、(千代田ハ二十七日サコフヲ發シテ三十一日久保田第六驅逐隊司令ニハ、潮曉、皐月ヲ率非テアレキサンドロフスキーニ向ヒ、其ノ途次ノダサン及ヒクステンナイ(クステンナイハ或ハモスナト)方面ニ在リテ、敵ノ敗兵ニ對シ作戰中ナル我カ陸軍部隊ニ向ヒ、相當ナル援助ヲ與フヘキコト(第六驅逐隊ノ行動ハ本節第十一目ニ詳記ス)ヲ訓令ス、

二十八日出羽第四艦隊司令官ノ旗艦タル松島ハ、函館ヨリサコフニ入港シ、白井侍從武

官同艦ニ至ル、是ヨリ先キ十三日臺南丸ハ、樺太北部東岸コル港附近ニ於テ、英國帆船「アンチ
 オープ」號（排水量千二百六十五噸ニシテ食鹽ヲ満載シ桑港ヨリニコライエフスクニ向フ途ニアルモノナリ）ヲ拿捕シ、監督トシテ海軍大尉阿部恆雄及ヒ
 下士卒十一名ヲ乗組マシメ、二十日北灣ヲ發シコルサコフニ回航セシメタリシニ、未タ到著セ
 サルヲ以テ、出羽司令長官ハ西山八重山艦長ニ向ヒ、海豹島附近マテ出動シテ之カ搜索ヲ爲
 シ、併セテ密獵船ナキヤ否ヤヲモ巡視シ來ルヘキヲ命セリ、（八重山ハ二十九日コルサコフヲ發シ七郎灣
 ンチオーブ號及ヒ密獵船ニ會セス九月三日コルサコフニ歸港セリ蓋「アンチオーブ」號ハ九
 月七日對馬崎ノ南東約二海里ノ所ニ坐礁シ同日無事離礁シ八日コルサコフニ入港セルナリ）
 二十九日出羽司令長官ハ、松島、橋立、沖島ヲ率非テアレキサンドロフスキーニ向フ、（三十一日アレ
 スキーニ著ス）

九月一日片岡司令長官ハ八重山ニ乗艦シ、稚内、聲間、野寒、南方泊地、近藤岬附近等視察ノ爲メ
 コルサコフヲ發シ、三日同所ニ歸港シ、直ニ八雲ニ移レリ、同日山田司令官ハ任務ヲ出羽司令長
 官ニ引繼キ、日進、春日、春雨、霞ヲ率非テアレキサンドロフスキーヲ發シ、四日コルサコフニ著
 シ、神風、初霜モ同日横須賀ヨリコルサコフニ入レリ、（神風ハ八月十九日初霜ハ二十一日第六驅逐
 隊ニ編入セラレ第三驅逐隊ニ屬セルモノナリ）
 次テ五日片岡司令長官ハ、廣瀬第五驅逐隊司令ニ向ヒ、宗谷海峡哨戒ハ六日ヲ以テ一時撤去ス
 ヘキヲ命シ、又池中熊野丸艦長ニハ、軍令部次長ヲ乗セ、其ノ指示ニ從ヒ樺太島東岸海豹島附近
 ヲ巡航スヘキコト、（熊野丸ノ行動ハ本
 節第十目ニ詳記ス）藤本第一驅逐隊司令ニハ、吹雪、霞ヲ率非熊野丸ト共ニ出動
 シ、軍令部次長ノ指示ヲ受ケテ行動シ、有明、春雨ハコルサコフニ留ムヘキコト、（吹雪、霞ノ行動ハ本
 節第十目ニ詳記ス）
 西山八重山艦長ニハ、同司令長官不在中八重山、有明、春雨ヲ以テコルサコフ方面ノ警戒ニ任ス

ヘキコトヲ命シ、七日午前七時第五戰隊、（八重山ハ）第五驅逐隊ヲ率非、訓練ノ爲メ小樽ニ向ヒ
 テコルサコフヲ發シ、同日午前亞庭灣（戰時中海軍ニテ東伏見
 灣ト稱シタルモノナリ）内ニテ艦隊運動ヲ行ヒ、日没後ヨリ
 夜間ノ襲撃演習ヲ實施シ、八日午前石狩河口沖ニ於テ各小隊ニ分レ、内膳砲反航射撃ヲ行ヒ、午
 後小樽ニ入り、直ニ春日ヲ吳ニ、叢雲ヲ佐世保ニ、各修理ノ爲メ回航セシメタリ、（春日ハ横須賀ヲ經
 入り叢雲ハ横須賀、吳ヲ）同日同司令長官ハ、伊集院軍令部次長ヨリ、日露全權委員ハ五日午後講和
 條約ニ調印シタルコト、同委員間ニ休戰條款ヲ協定シテ調印シタルコト、同條款ニ基キ東郷聯
 合艦隊司令長官ニ休戰地域ヲ劃定スヘキヲ命セラレタルコト等ノ電報ニ接シ、尙伊東軍令部
 長ヨリ左ノ電訓ヲ受領セリ、

一、貴官ヲシテ至急上京セシメラル、ニ就テハ貴官不在中第四艦隊司令長官出羽重遠ヲシ

テ北遣艦隊ヲ指揮セシムヘシ

二、聯合艦隊司令長官東郷平八郎ニ左ノ通命令セリ

貴官ヲシテ至急上京セシメラル、ニ就テハ貴官不在中第二艦隊司令長官上村彦之丞ヲシ
 テ朝鮮海峡方面ニ在ル貴麾下艦隊ヲ指揮セシムヘシ （大海令第
 二八號）

是ニ於テ片岡司令長官ハ、北遣艦隊ノ指揮ヲ出羽司令長官ニ委任シ、參謀海軍中佐山路一善副
 官同奥田貞吉ヲ隨ヘ、九日陸路上京ノ途ニ就ケリ、（片岡司令長官ハ十一日東京ニ著シ直ニ登
 營シ十六日東京ヲ發シ十七日青森ニ著ス）而テ此ノ
 日同司令長官ハ、麾下各指揮官ニ向ヒ、教育訓練ヲ厲行スヘキコト等ニ就キ懇示ヲ爲シ、（備考文書
 號參）又西山八重山艦長ニ向ヒ、香港丸來著セハ、八重山ハ修理ノ爲メ横須賀ニ回航スヘキヲ訓

令セリ、十日橋立ハ修理ノ爲メ横須賀ニ向ヒ(武富司令官)アレキサンドロフスキーヲ出發ス、(立橋ハ函館ヲ經テ十五日横須賀ニ著ス)同日出羽司令長官ハ、左ノ北遣艦隊命令ヲ發セリ、

一、休戰條件ノ細目ニ就テハ未タ何等ノ命令ヲ受領セサルモ日露兩國全權委員ハ本月五日ヲ以テ講和條約ノ調印ヲ了シ休戰ニ關スル議定書ハ同日ヨリ實施セラル

二、麾下艦艇ハ何分ノ命アル迄露國ニ屬スル領土ヲ砲撃スヘカラス

三、海上ノ捕獲ハ休戰ノ爲メニ停止セラル、コトナキヲ以テ露國軍資輸送ノ船舶ニ對シテハ從來ノ通嚴密ナル監視ヲ要ス

四、自今N地點(編者曰クアレキサンドロフスキーナリ)方面ニ於テハ哨戒勤務中ニアラサル艦ハ受命後三時間以内ニ出動シ十海里ノ速力ヲ出シ得ル如ク準備シアルヘシ

五、第六驅逐隊ハ明十一日ヨリ半數宛間宮海峽南口附近ヲ根據トシ警戒ニ任ス

(丁隊機密第一八七號)

是ヨリ先キ松島修理ノ爲メアレキサンドロフスキーヲ發シ、函館ヲ經テ佐世保ニ向ヒ、(松島ハ十六日佐世保ニ)神風、初霜ハ九日横須賀(八月三十一日横須賀ヲ發シタルナリ)ヨリアレキサンドロフスキーニ入り、第六驅逐隊ニ合シ、十一日山田司令官ハ日進、吾妻、第五驅逐隊(叢雲)ヲ率井、訓練ノ爲メコルサコフニ向ヒ小樽ヲ出發セリ、(十二日コルサコフニ入ル)次テ十二日出羽司令長官ハ伊東軍令部長ヨリ、左ノ十一日附電訓ヲ受領セリ、

休戰條約ノ全部有效ト爲リ彼我共ニ戰闘ヲ休止セサルヘカラサルノ時機ハ同條約第五條ニ

基キ日露兩司令官カ休戰ノ細條ヲ議定セル後ニ在リト解釋スルヲ適當ト認メラル、ニ付夫迄ハ何時敵襲アルヤモ知レサルモノト警戒シアルヲ得策トス

翌十三日同司令長官ハ、滿州丸、沖島ヲ率井アレキサンドロフスキーヲ發シ、カストリー灣及ヒ同地附近ヲ視察シテ十四日歸港シ、十五日左ノ北遣艦隊訓令ヲ發セリ、

一、今回樺太南部ニ於ル露國住民歸還志願者ヲカストリー灣ニ護送シタル際同地駐屯ノ露國陸軍武官ハ黑龍沿岸州總督陸軍大將フィッシャスキーノ訓令ニ依リ同地ハ内地トノ交通不便ナルノ理由ヲ以テ今後露民放還ノ場合ニハニコラエフスクニ輸送スルカ或ハ兩三日前ニ通報セラレタキ旨ヲ請求シ且後段ノ場合ニ於テハ露國ニ於テ汽船ヲ用意シカストリー灣ヨリニコラエフスクニ海上輸送ヲ爲スヘキコトヲ申出デタリ

二、然ルニ海上捕獲ノ權ハ明ニ休戰條約ニ依リテ保留セラル、所ニシテ且彼我艦艇間ニ於ル休戰狀態ノ未タ協定セラレサル今日露國艦艇ノ我カ哨戒線ヲ出入スルコトハ此ノ際不問ニ附スル能ハサル所ナルカ故ニ今十五日特ニ驅逐艦初霜ヲカストリー灣ニ派遣シ同艦長ヲシテ右陸軍武官ニ左ノ通り通告セシメタリ

休戰中ト雖モ海上捕獲ハ依然繼續ス放還露民輸送ノ事實ヲ以テ我カ軍ニ於テハ此ノ當然享有スヘキ權利ヲ放棄スルモノニアラス若シ特別ノ取除ヲ希望セラル、ニ於テハ貴國政府ヨリ我カ政府ニ協商セラル、ヲ至當トス右ノ件速ニフィッシャスキー大將ニ申報セラル、ハ雙方ノ誤解ヲ避クル最良ノ手段ナリト信ス

三、事情右ノ如ク露國ハ船舶ノ便ニ依リカストリー灣トニコラエフスク若クハ其ノ他ノ地方間ノ海上輸送ヲ開始スルヤモ計リ難キヲ以テ麾下艦艇ハ依然海上捕獲ヲ厲行スルト同時ニ若シ以上ノ目的ヲ以テ出動セル敵ノ艦艇等ニ出會シタル場合ニハ我ヨリ進ンテ挑戰的態度ヲ執ルコトナク勉メテ平和的手段ニ依リ之ヲ抑留スルカ若クハ其ノ出發シタル港灣ニ歸還セシムル等ノ處置ヲ採ルヘシ

(丁隊機密第一九三號)

是ヨリ先キ上京セル片岡司令長官ハ、十六日東京ヲ發シ、十七日青森ニ著シテ直ニ八雲ニ乘シ、(八雲ハ十一日小樽港ヲ發シテ十二日青森ニ入港シタルナリ)即日アレキサンドロフスキーニ在ル出羽司令長官ニ、其ノ安著ヲ報告ケ、尙十八日同司令長官ニ向ヒ、滿州丸ヲ率非成ルヘク速ニコルサコフニ到リ會合スヘキヲ電訓シ、同日午前十時十三分八雲ヲ率非テ出港シ、二十日コルサコフニ入り、直ニ出羽司令長官(司令官ハ十八日アレキサンドロフスキーヲ發シ二十日コルサコフニ著シタルナリ)山田司令官及ヒ各艦長等ヲ八雲ニ召集シ、外交ノ經過竝ニ海軍大臣ノ訓示ヲ傳ヘ、尙指示スル所アリ、(備考文書第三十六號參照)又東郷司令官ニ向ヒ、和泉ヲシテ第九、第十五艇隊ヲ率非テ橫須賀ニ回航セシメ、和泉ハ同地ニ於テ、第九、第十五艇隊ハ海軍次官ノ指示スル工廠ニ於テ、共ニ完全ナル修理ヲナサシムヘキコト、香港丸ヲ其ノ指揮下ニ復歸セシムヘキコト等ヲ訓令シ、(香港丸ハ二十一日コルサコフヲ發シテ二十三日日大湊ニ著シ東郷司令官ノ指揮下ニ復歸セリ)尙同日左ノ命令ヲ發セリ、

一、日露兩海軍ノ休戰條件協定委員ハ休戰區域ヲ別紙ノ如ク協定シ本月十八日ヨリ之ヲ實施スルコトニ決定セリ

二、海上ノ捕獲ハ休戰ノ爲メ停止セラル、コトナキヲ以テ露國軍資輸送ノ船舶ニ對シテハ尙監視ヲ要ス

三、北遣艦隊ハ其ノ配置ニ一部ノ變更ヲナサントス

四、本職ハ第五戰隊(春日、八重山、缺ク)第六驅逐隊及ヒ曉ヲ直率シK地點ニ留リ同方面ノ警備ニ任ス

五、出羽第四艦隊司令長官ハ滿州丸、臺南丸ノ二隻ヲ率非N地點ニ留リ同方面ノ警備ニ任シ

中尾司令官ハ見島、沖島及ヒ鎮遠ヲ率非BQ地點(編者曰ク小樽ナリ)ヲ根據地トシ同方面ノ警備ニ任ス

六、東郷司令官ハ第六戰隊(千代田、和泉、缺ク)及ヒ第一驅逐隊ヲ率非A地點(編者曰ク大湊ナリ)ヲ根據地トシ津輕海峽方面ノ警備ニ任ス

七、各指揮官ハ警備若クハ教育訓練ノ爲メ麾下艦船ヲシテ各其ノ近海ヲ巡航セシムルコトヲ得

八、各指揮官ハ航泊ヲ論セス努メテ教育訓練ヲ厲行スヘシ

(北遣艦隊機密第四五四號)

(別紙)

海軍ノ休戰協定、休戰ニ關スル日露議定書第五條ニ基キ休戰ノ條件ヲ決定スル爲メ東郷聯合艦隊司令長官ノ代表者タル島村海軍少將ハ艦隊ノ一部ヲ率非九月十八日露國ノ代表者イエスセン海軍少將ノ率非ル艦隊ト羅津浦港外ニ會シ左ノ通り海上休戰地域ヲ協定セリ

海上休戦地確定ニ關スル協約書

百十四

交戦國ノ海岸ニ沿ヒ左ノ如ク海上ヲ區劃ス即チ界線ハロザノツフ角ヨリ起リ南東ニ三十海里ヲ走り北緯四十二度東經百三十六度ノ地點北緯四十六度東經百四十度ノ地點北緯四十八度東經百四十一度ノ地點北緯五十度東經百四十一度二十三分ノ地點北緯五十一度四十八分東經百四十一度二十三分ノ地點ヲ連接スルモノニシテ之ヨリ北緯五十三度二十七分東經百四十一度二十七分半ノ地點ニ至ル間官海峽ノ最狹部ハ中立地帶トシ界線ハ再ヒ北緯五十三度二十七分東經百四十一度二十七分半ノ地點ニ起リ北緯五十六度東經百四十二度ノ地點北緯五十六度東經百四十八度ノ地點ヲ經テ占守海峽ノ中央地點ヲ過キ北緯五十度五十分ノ距離等圈ニ合ス間官海峽ハ中立地帶トス兩交戦國ノ海軍ハ互ニ前記ノ界線ヲ超ユルヲ許サス此ノ決議ハ署名ノ當日ヨリ實施シ休戦期間其ノ效力ヲ有スルモノトス各代表者ハ此ノ議定書ニ署名シ之ヲ使用ス

西曆千九百五年九月十八日

島村海軍少將

イエスセン海軍少將

又右協定以外ニ於テ堪察加半島ノ住民糧食窮乏シ今後二週間ノ後ハ海上ノ交通杜絶シ餓死スヘキヲ以テ之ヲ救済スル爲メ人道ニ基キ至急糧食及ヒ日用品ヲ搭載スル運送船一隻ヲ浦鹽斯德ヨリペトロパウルスク港ニ送ルヲ許サレタシトノイエスセン少將ノ切願ニ

對シ時日切迫ノ爲メ島村海軍少將ハ特ニ交通免狀ヲ與ヘテ之ヲ承諾セリ

二十一日片岡司令長官ハ麾下ニ命シ、北遣艦隊ハ規定ノ燈火ヲ點シ、夜舷窓ヲ蔽ハス哨兵ヲ配備セサルコト、爲セリ、是日露兩海軍ヨリ出テタル休戦條件協定委員ノ劃定シタル休戦區域ハ、十八日ヨリ實施スルコトニ決定シ、敵襲來ノ慮ナキニ至レルヲ以テナリ、(本篇第四章中立區域ノ協定參照)此ノ日第五驅逐隊(叢雲)修理ノ爲メ、コルサコフヲ發シ小樽ヲ經テ横須賀ニ向ヒ、(二十六日横須賀ニ著シ觀艦式後ヨリ著手セリ)片岡司令長官ハ、同日伊東軍令部長ヨリ左ノ電報ヲ受領セリ、

糧食ト日用品トヲ搭載シ浦鹽斯德ヨリペトロパウルスクヘ航行スルコトヲ島村第二艦隊司令官カ許諾セル敵ノ運送船一隻ハ宗谷海峽ヲ經ル航路ヲ採ルヘキコトヲ指定シアル趣ニ付同船ニシテ萬一右指定以外ノ航路ヲ取ルカ若クハ指定以外ノ物品ヲ輸送スル等ノ行爲アルトキハ之ヲ抑留シテ相當ノ制限ヲ加フルヲ必要ト認ム

是ニ於テ同司令長官ハ、直ニ川合八幡丸艦長ニ向ヒテ所要ノ訓令ヲ與ヘ、以テ此ノ任務ニ從事スヘキヲ命シ、(十月四日露國汽船「アングン」號日用品ト糧食トヲ搭載シテ次テ二十二日藤本第一驅逐隊司令ニテ到レルヲ重瀬師団ニテ臨檢シ異狀ナクシテ解放セリ)次テ二十二日藤本第一驅逐隊司令ニ向ヒ、便宜大湊ニ回航シ東郷司令官ノ指揮下ニ入ルヘキヲ命セリ、(第一驅逐隊ハ二十五日コルサコフ港ヲ經テ十月二日大湊ニ入り東郷司令官ノ指揮下ニ屬シ爾後津輕海峽警戒ノ任務ニ服セ)此ノ日修理ノ爲メ和泉(和泉以下ハ二十六日横須賀ニ著シ次テ和泉第九艇隊ハ横須賀ニ至リテ片岡司令長官ノ指揮下ニ復歸シ同日青森ヲ發シ館山灣ニ向ヘリ)第十五、第九艇隊ハ大湊ヲ發シテ横須賀ニ向ヒ、(和泉以下ハ二十六日横須賀ニ著シ次テ和泉第九艇隊ハ横須賀ニ至リ)早月ハ小樽ヲ發シテ大湊ニ向ヒ、(二十三日大湊ニ著キ二十四日ヨリ入渠修理ニ著手シ十月五日竣工六日青森宮古萩濱ヲ經テ十一日横須賀ニ入ル)驅逐艦彌生ハ二十四日第三艦隊ニ編入セラル、(彌生ハ二十九日横須賀ヲ發シ二十五日片岡司令長官ハ、十月二日コルサコフニ入ル)

アレキサンドロフスキーニ在ル中尾司令官ニ、左ノ訓令ヲ與ヘリ、

休戦地域確定ノ爲メ自今我カ艦隊ハカストリー灣等ニ入港スルコト不可能ニ付尙陸軍ニ於テ樺太ニ在ル人民ヲ對岸ニ還送スルノ必要アレハ陸軍ニ於テ船舶ノ區域線外ニ出ツルニ對シ相當ノ手段ヲ要ス右在アレキサンドロフスキー首席陸軍指揮官ニ通知シ置クヘシ

二十六日中尾司令官ハ、沖島、見島、鎮遠ヲ率非テアレキサンドロフスキーヲ發シ、二十九日小樽ニ入り、同日出羽司令官ハ滿州丸、臺南丸ヲ率非テアレキサンドロフスキーヲ發シ、十月一日コルサコフニ入りシカ、二日片岡司令官ハ出羽司令官ニ向ヒ、當分小樽ヲ根據地トシテ第四艦隊ヲ以テ同方面ノ警備ニ任シ、又勅メテ教育訓練ヲ厲行スヘキ旨ヲ訓令シ、久保田第六驅逐隊司令ニハ、第六驅逐隊及ヒ曉ヲ率非テ三日出港シ、大湊ニ到リテ東郷司令官ノ指揮下ニ入ルヘキコト、東郷司令官ニハ、第六驅逐隊及ヒ曉到著ノ上ハ、專ラ教育訓練ヲ厲行セシムヘキコトヲ訓令セリ、(第六驅逐隊及ヒ曉ハ三日コルサコフヲ發シ小樽、壽都ヲ經テ七日大湊ニ入り東郷司令官ノ指揮下ニ入りシカ十一日片岡司令官ノ指揮下ニ復歸シ同日青森出港館山灣ニ向フ)七日出羽司令官ハ、滿州丸、臺南丸ヲ率非テコルサコフヲ發シ、八日小樽ニ入り、同日片岡司令官ハ、伊東軍令部長ヨリ左ノ電報ヲ受領セリ、

一、平和克復ノ上ハ艦隊ヲ東京海灣ニ凱旋セシメ横濱沖ニ於テ觀艦式舉行ノ事ニ内定セラル
二、貴麾下艦船艇中日本海ニ對スル三海峡(津輕、宗谷、朝鮮)ノ監視ニ任スル大汽力艦船ヲ除キ其ノ他ノ艦艇ハ便宜東京海灣凱旋ノ途ニ就カシメ横濱港以外ノ東京海灣諸錨地又ハ館山灣清水港等ニ在リテ後命ヲ待タシメラルヘシ但横須賀ニハ修理其ノ他差置キ難キ必要アルモノ

ノ外到ヲシメサルヲ可トス

三、聯合艦隊司令官ハ東京海灣到著ニ先タチ伊勢灣ニ寄泊シ神宮參拜ヲ命セラル、答ナ
是ニ於テ同司令官ハ、九日左ノ命令ヲ發シ、以テ八幡丸、臺南丸ノミヲ北海ニ留メ、(八幡丸ヲ津輕海峽ノ監視ニ當ラシム)他ハ皆伊勢灣又ハ館山灣ニ回航セシムルコト、爲シ、十日ヨリ相前後シテ北海ヲ去レリ、

一、平和克復ノ上ハ艦隊ヲ東京海灣ニ凱旋セシメラレ横濱沖ニ於テ觀艦式舉行ノコトニ内定セラル

二、北遣艦隊ハ假裝巡洋艦八幡丸ヲ宗谷海峽方面ニ同臺南丸ヲ津輕海峽方面ニ留メ各其ノ海峽ノ監視ニ任セシメ其ノ他ハ來十六日ヲ期シ館山灣ニ集合セントス

三、本職ハ第五戰隊(春日、八重山)ヲ率非明十日午前六時當地點出發AV地點(編者曰ク青森ナリ)ヲ經テ館山灣ニ回航ス

東郷司令官ハ第六戰隊(千代田、和)ヲ率非便宜A地點ヲ出發シ館山灣ニ集合シ又第一、第六驅逐隊ヲ便宜館山灣ニ回航セシムヘシ

四、出羽第四艦隊司令官ハ第四艦隊ヲ率非便宜BQ地點(編者曰ク小樽ナリ)ヲ出發シ館山灣ニ回航スヘシ

五、目下各工廠等ニ在リテ修理中ノ北遣艦隊艦艇ニシテ其ノ出動シ得ヘキモノハ各便宜所

在地ヲ出發シ館山灣ニ集合スヘシ

六、横濱及ヒ横須賀ヘハ已ムヲ得サル事情アルカ又ハ修理ヲ要スルモノ、外當分入泊セサルヲ要ス

(北道艦隊機密
第四九七號)

越テ十七日ニ至リ、北道艦隊ハ其ノ編制ヲ解カレ、各其ノ所屬セル艦隊ニ復歸セシメラル、コト、爲リ、爰ニ完ク其ノ任務ヲ結了セリ、

第二目 第一驅逐隊ノウヰヤフト村カストリー灣方面黑龍江口附近ノ偵

察及ヒ同江方面ノ水路實驗

七月二十八日早朝、アレキサンドロフスキニ在ル藤本第一驅逐隊司令ハ、同地ニ在ル片岡第三艦隊司令長官ヨリ、ウヰヤフト村電信局ニ遺棄シタル電纜ヲ押收シ來ルヘキコト、及ヒ明二十九日以後、第一驅逐隊ヨリ二隻宛ヲ間官海峽南口ニ派シテ哨戒スヘキコトノ命ヲ受ケタリ、是ニ於テ同司令ハ、同日午前七時第一驅逐隊(間官海峽ニ在リテ哨戒中ナル春雨ヲ除ク)ヲ率非テ出港シ、十一時頃ボロニナ角沖ニ達シ、三艦ヨリ各下士卒十名ヲ出サシメ、聯合陸戰隊ヲ編制シテ、八角海軍中尉ニ之カ指揮ヲ命シテ上陸セシメタルニ、電信局上ニハ已ニ白旗ヲ懸シテ四人ノ露人我ヲ迎ヘ、電纜ヲ格納セシ倉庫ハ前夜露兵來リテ燒棄シタルコトヲ告ケ、又ウヰヤフト村ニハ戸々白旗ヲ掲ケ、二十名許リノ住民(露國)道路ノ兩側ニ踞ルシ、各家屋ハ開放シテ他意ナキヲ示シ、電信局員及ヒ守備兵ハ逃走シテ在ラス、押收スヘキ武器、彈藥等ノ物件ナカリシヲ以テ、陸戰隊ハ午後三時頃歸艦シ、(備考文書第三十七號及ヒ附圖參照)同驅逐隊ハ直ニ出發シテ、同夜ハタンギ沖ニ假泊シ、二十

九日午前四時出港シテ、五時四十五分アレキサンドロフスキニ歸港シ、更ニ第二小隊タル有明、霞ハ同日春雨ト交代シテ、間官海峽ノ哨區ニ就ケリ、然ルニ三十日ハ朝來海峽方面濃霧アリシヲ以テ、兩艦中ノ首席將校タル有明艦長海軍少佐九津見雅雄ハ、此ノ機ニ乘シテカストリー灣及ヒ同灣口ニ在ルクレスターカンブ燈臺ノ偵察ヲ試ミント欲シ、午前四時哨區ヲ去リテ七時頃フレデリック灣(クレスターカンブ)ニ達シ、假泊シテ兩艦ヨリ聯合陸戰隊ヲ編成シ、上陸シテ偵察セシメシニ、燈臺附近ニハ住民ナク、小屋内ニハ未タ使用セサル「ガスエンジン」二臺(約十五馬力ニシテ附屬「セメント」三十三樽及ヒ多量ノ石油ヲ發見シ、歸艦シテ之ヲ報シタルヲ以テ、九津見艦長ハ此ノ旨ヲ八雲ニ打電シテ、片岡司令長官ニ其ノ處分ヲ仰キ、其ノ儘ニ成シ置クヘキノ指令アリシヲ以テ、乃チ出港シテ哨區ニ向ヒ、霞ニハカストリー灣ノ偵察ヲ命セリ、是ニ於テ霞ハ九時三十分有明ト分レ、單獨ニテ深ク同灣内ニ入り、沿岸ヲ偵察セル中、十時十五分野砲前車二門ヲ發見シ、又其ノ前方塹壕内ニ數名ノ敵潛伏シ、頭部ヲ出シテ我カ動靜ヲ偵察スルモノノ如クナルヲ認メシヲ以テ、霞艦長海軍大尉渡邊眞吾ハ、先ツ空砲ヲ發シ威嚇ヲ試ミタル後、搜敵ノ爲メ十二斤砲數發ヲ放タシム、然レトモ敵應セザリシカ、此ノ際掩堡内ニ更ニ砲車二門ヲ發見セルヲ以テ、之ヲ鹵獲スルコトニ決シ、十一時距岸約二千米突ニ假泊シ、半舷ノ陸戰隊ヲ編制シテ掩護砲撃ノ下ニ上陸セシメシニ、敵ハ我カ端艇ノ近ツクニ及ヒテ、森林内ヨリ砲火ヲ開キ、我カ下士卒三名輕傷ヲ受ケシカ、本艦ヨリノ砲撃ニ因リ直ニ逃走シ、陸戰隊ハ同三十五分上陸シ、抵抗ナクシテ敵防禦陣地ヲ占領セリ、然レトモ火藥庫、彈藥庫ハ敵已ニ放火セシヲ以テ、危險

ヲ慮リ之ニ近ツカサリシニ、午後一時二十分ニ至リ、遂ニ轟然爆發セリ、(後ニ至リテ之ヲ檢セルニ霰ハ原形ヲ存シ居レリ)次テ陸戰隊員ハ海底電線ヲ切斷シ、野砲及ヒ其ノ屬具等ヲ鹵獲シ、午後六時頃歸艦セリ、(備考文書第三十八號參照)同夜霰ハエカテリナ角沖ニ假泊シ、三十一日アレキサンドロフスキーニ歸港シ、第一小隊タル吹雪、春雨ト交代セリ、越テ八月二日ニ至リ、片岡司令長官ヨリ、第一驅逐隊ハ同海峽ノ哨戒ヲ撤シ、爾後アレキサンドロフスキーニ警泊セシカ、同九日藤本司令ハ山田第三艦隊司令官ヨリ、左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、貴官ハ其ノ麾下第一小隊及ヒ日進裝砲艇(捕獲ノモノ)ヲ率井テ明後十一時早朝當地ヲ發シ間宮海峽ニ到リ兩三日間ノ豫定ヲ以テラザレフ角以北ニ於ル黑龍江水道ノ航路探究竝ニ同沿岸ノ敵狀偵察ヲナスヘシ

二、ヅアオレ角以北ノ探究ニハ主トシテ日進裝砲艇ヲ用ヒ其ノ他全程ヲ通シテ艦ノ坐洲ヲ招カサル様特ニ至大ノ注意ヲ要ス

三、又本行動中其ノ麾下第二小隊ヲシテ第四警戒線附近ニ出動シ第一小隊ト同泊地間ノ無線電信連絡ニ任スルト同時ニネヴエルスカゴ淺瀬周圍ノ略測ニ從事セシムヘシ

(五戰次機密)
第一四號

(附)露語通譯水嶼峻一郎ヲ臨時其ノ隊ニ乗組マシム

是ニ於テ藤本司令ハ、吹雪(同司令乗艦)春雨及ヒ裝砲艇「カラフト」(アレキサンドロフスキーニテ鹵獲セル「タグボート」ニシテ假ニ「カラフト」ト名ツケ之ニ日進ノ「マキシム」砲ヲ裝備シ日進ノ兵八名ヲ乗組マシメ海軍少尉緒方三郎之ヲ指揮ス)ヲ率井、十二日午前五時(十一日早朝出港シ一旦行動ニ就キシレアルカ天候不良ノ爲メ中止シタルナリ)アレ

キサンドロフスキーヲ發シ、午後六時十六分間宮海峽内ボボバニ假泊シ、十三日午前四時拔錨シ、五時ラザレフ岬ニ達セシニ、陸上敵影ヲ認メシヲ以テ、之ヲ威嚇砲撃シ、次テ陸上ニ於ル軍用電信所ヲ破壊シテ、ニコラエフスクトノ通信聯絡ヲ絶タンカ爲メ、吹雪ニテ破壊隊ヲ編成シ、七時五十五分裝砲艇掩護ノ下ニ、吹雪乗組海軍上等兵曹林市之進ヲシテ、之ヲ引率シテ發進セシメシカ、同隊ハ八時二十五分將ニ上陸地點ニ達セントスル時、前方密林中ニ隠レテ我ヲ待ちタル約一小隊ヨリ成ル敵ノ守備兵突然我ヲ猛射セシカ、吹雪、春雨及ヒ裝砲艇ノ掩護射撃ノ下ニ、上陸ヲ遂ケ、奮闘シテ遂ニ敵ヲ撃退シ、電信所ヲ破壊燒却シテ八時五十分歸艦セリ、此ノ戰闘ニ於テ下士一名ノ戰死者、卒三名ノ負傷者ヲ出セリ、(備考文書第三十九號參照)是ニ於テ藤本司令ハ間宮海峽南口ニ在ル霰ヲ招キ、之ニ死傷者ヲ託シテアレキサンドロフスキーニ後送セシメ、一面ニハ測量隊ヲ編成シテオグビ嶼附近ノ險礁ヲ實測セシム、(午前八時ニ開始シ正午頃終了セリ)既ニシテ九時四十分頃吹雪ハコルサコフヨリニコラエフスクニ避難スル露人約三十名ヲ乗セタル一帆船ヲ臨檢シ、怪シムヘキ點ナカリシカ、直ニ解放スル時ハ、或ハ我カ任務遂行上支障アラントヲ慮リ、二日間ノ進航停止ヲ命シ、藤本司令ハ午後一時三十分兩艦ヲ率井、轉シテ黑龍江口ニ向ヒ徐航シツッ水深ヲ測リ、水路ヲ研究スルト同時ニ潮流ノ狀態ヲ究メ、實地ト海圖トノ對照ヲ爲シツ、オグビ島ノ東側ヲ過キ、北三十度西ニ變針シ、オブラビスチ角ヲ左舷正横ニ見ルマテ進ミ、更ニチヨーメ島ノ中央部ニ向ヒ、クルイコバ、バンクヲ通過シ終リタル時、北八度東ニ變針シ、ジャミフ島ノ南端トウアーク岬ト一線トナリタル時、ヅアオレ角ニ向ヒ北三十二度西ノ針路ニテ進

ミ、七時三十分同角沖四海里ノ地ニ投錨假泊シ、(終夜ニコラエフスク方面ニ探海燈光ヲ認メタリト云フ)十四日午前四時拔錨シ、同角ヲ距ル約一千里突ノ所ニ移リテ陸上電信所ヲ砲撃破壊シ、次テ五時四十六分、吹雪艦長海軍少佐東島乙吉郎外五名ヲ裝砲艇ニ乗セ、敵狀偵察水路探究ノ爲メブロンデ岬ニ向ヒ出發セシム、是ニ於テ東島少佐以下ハ、水路ヲ探究シツ、先ツフジニ到リ、住民「ギリヤーク」人ヲ訊問シタル結果、ブロンデニハ二箇月前マテハ多數ノ守備兵アリシモ、今ハ六七名ニ過キサルコト、ゾアオレ及ヒブロンデニハ電信局アルコト、ブロンデニ至ルノ水路中ニハ、土人等常ニ漁業ニ従事シ居ルヲ以テ危險物ナカルヘキコト、砲艦「ツングーズ」及ヒ大小水雷艇十隻ニコラエフスクニ在ルヘキコト、水雷艇ハ一回モブロンデ迄來リタルコトナキコト、ニコラエフスク方面ノ探照燈ハ、昨年來毎夜點燈シ居ルコト等ヲ聞知シ、次テブロンデ角ニ到リ、同地ニ鮭ノ燻肉製造所アルヲ認メ、又サバフ角ノ東方大堆洲上ニ一大帆船ノ擱坐破壊シ居ルヲ認メシヲ以テ、之ニ近ツカント欲セシモ水淺クシテ達スルコトヲ得ス、其ヨリ歸途ニ就キ、午後零時十分歸艦セシヲ以テ、兩艦ハ一時三十分拔錨シテ七時ボボバニ假泊シ、十五日午前四時拔錨シ、午後一時三十分アレキサンドロフスキーニ歸港セリ、(備考文書第(四十號參照)

越テ二十二日藤本司令ハ、更ニ山田司令官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、貴官ハ其ノ麾下第二小隊ヲシテ明二十三日早朝當地發、(編者曰クアレキサン(ドロフスキーナリ)間宮海峽ヲ溯航シツアオレ角附近ニ達シ其ノ沿岸ノ威嚇偵察ヲナサシムヘシ

二、ニコラエフスク方面ノ狀況ハ貴官カ曩日探知セル所ノ外昨今密航船廣東號鎮江號ノ二

隻在港荷揚中ナリトノ情報ニ接ス

又一昨二十日當地ヨリ解放セラレタル瘋癲者不具者等ヲ搭載スル「スクーナー」一隻今尙

海峽内ニ彷徨シ居ルコト、推考ス

三、本行動ハ天候其ノ他不意ノ異變ナキ限り往返約三日間タルヘシ

(五戰次機密
第二六號)

是ニ於テ同司令ハ、直ニ第二小隊(有明)ノ首席將校、九津見有明艦長ニ向ヒテ本訓令ヲ傳達シ、九津見艦長ハ二十三日午前六時、有明艦ヲ率テ發動セリ、而テ兩艦ハ午後五時五十六分ピリヤミフ島附近ニ假泊シ、(時々ニコラエフスク方面ニ探海燈光ヲ認メタリト云フ)二十四日午前七時出港シ、同二十四分ゾアオレ沖ニ投錨シ、十時有明乗組海軍中尉鏑木武夫ヲ指揮官トセル偵察隊ヲ陸上ニ派シ、同地ノ土民ニ就キテ訊ヌル所アリシモ要領ヲ得サリシヲ以テ、午後零時十分一旦歸艦シ、更ニ再上陸シテサバフノ露人漁村ニ赴キ、露人ニ就キテ、ニコラエフスクハ目下商業殆ト杜絶ノ有様ナレトモ、市中ハ軍隊充満シ其ノ數五千、指揮官ハシユーフスキート呼フ將官ナルコト、チラネフニハ砲臺ヲ設ケ、探照燈一臺ヲ備ヘ、守備トシテ約四千ノ兵アリト聞及ヒ居ルコト、ブロンデニモ約五千ノ兵アリテ、同地ニハニコラエフスクニ通スル通信機關ヲ有スルコト、ゾアオレニハ約十名、ラザレフニハ約四十ノ兵ヲ配備シ居ルコト、四五日前軍艦「ツングーズ」此ノ附近ニ出動シ來リタルコト、ブロンデ附近ニハ危險物ノ沈置ナキモノ、如キモ、チラネフ附近ヨリ上流ハ、水先船ノ嚮導ヲ要シ居ルヲ以テ、或ハ水雷沈置アルヤモ計ラレサルコト、「ツングーズ」號及ヒ水雷艇十隻ノ存在ハ疑ナキカ如クナルコト、ハヤロスク、ニコラエフスク間ノ交通ハ、毎月四回汽船往復シ居

ルコト等ヲ聞知シテ歸艦シ、同夜ハ兩艦ヨリ探海燈ヲ點シテ、附近沿岸及ヒニコラエフスク方面ヲ照射威嚇シ、二十五日午前四時五十五分拔錨シ、ゾアオレ電信局ヲ砲撃破壊シテ後チ歸途ニ就キ、九時二十四分ラザレフ電信局ヲモ同シク砲撃破壊シ、午後五時四十二分アレキサンドロフスキーニ歸港セリ、又此ノ第二小隊ノ本行動中、第一小隊ノ一艦ハ常ニ相交代シテ中間ニ出テ、通信聯絡ヲ保持シタリ、(有明艦長報告備考文 書第四十一號參照)

第三目 第五驅逐隊ノ樺太西岸偵察

七月二十九日第五驅逐隊司令ハ、片岡司令長官ヨリ、夕霧、陽炎ヲ率井、ゾーエヨリ出羽岬ニ至ル沿岸ヲ偵察スヘキノ命ヲ受ケタルヲ以テ、即日アレキサンドロフスキーヲ出港シ、海岸ニ沿ヒテ南下シツ、先ツ海圖上 R. Pad Vodopadnaya (アレキサンドロフスキー ノ南約十七海里ニ在リ) ト稱スル地點ヲ偵察シ、尙同地ニ在ル瀑布 (幅約四尺高 サ約三十尺) ヲ檢セシニ、水質善良ニシテ飲料ニ適シ、海岸迄水深深ク、底質モ亦砂泥ニシテ泊地ニ適シ、又海濱ハ小砂ヨリ成ルヲ以テ、容易ニ端舟ヲ著ケ得ヘク、爲メニ「ホーヅ」ヲ以テ直ニ同河水ヲ得ルノ便アルヲ認メ、次テ Pryadukhina clif (アレキサンドロフスキー ノ南約二十七海里ニ在リ) ノ北方一海里ノ海濱ニ於テ、土人ノ乗レル一小舟ヲ認メテ之ヲ招キ、陸上ノ狀況ヲ聞キタルニ、言語通セシテ要領ヲ得サリシモ、尙此ノ附近敵兵ナキコトヲ知り、次テコルサコバ灣 (アレキサンドロフスキーノ南約五十三海里ニ在リ) ニ赴キ、聯合陸戰隊ヲ上陸セシメ、廣瀬司令モ亦同陸戰隊ト共ニ上陸セシカ、アレゾオ河口ニ白旗ヲ掲クル三隻ノ大形和船アルヲ認メ、到リテ之ヲ檢スレハ、露國陸軍大尉外卒十一名アリテ降伏セシニヨリ、捕虜トシテ、夕霧、陽炎ニ分チテ收容シ、同夜ハ該地ニ碇泊ス、此ノ捕虜

大尉ハ日本語ヲ巧ニセルヲ以テ、大ニ便宜ヲ得タリ、該地ニハ右捕虜十二名ノ外、猶アレキサンドロフスキーヲ經テ、西比利亞ニ渡ラントスル目的ヲ有スル露人約百六十餘名居住スルモ、家屋トシテハ僅ニ數軒アルニ過キス、此ノ附近モ亦容易ニ端舟ヲ著岸シ得ヘク、水質モ善良ナルヲ探知シ、三十日午前四時出港シ、ノヤシ岬ニ於テ復聯合陸戰隊ヲ上陸セシメ、捕虜大尉ヲ案内トシテ偵察セシメシニ、陸上敵ナク、住民ハ戸々ニ白旗ヲ掲ケテ歸順ノ意ヲ表シ、戸數約三十、牛、鶏ニ富ムモ飲料ニ適スル水ナク、海岸ハ端舟ノ達著ニ便ニシテ、水深泊地トナスニ適ス、廣瀬司令ハ此ノ地ニテ捕虜ヲ夕霧ヨリ陽炎ニ移シ、狀況報告ノ爲メ同艦ヲシテ、先ツアレキサンドロフスキーニ歸ラシメ、夕霧一隻ノミヲ率井テ猶南下シ、トコリナ湖ハ兩湖面トモ明ニ海上ヨリ望ミ得ヘキコト、其ノ附近ハ、一帯平坦ニシテ森林ノ特ニ繁茂スルコト、兩湖間ニ在ル小丘ハ、海上數海里ヨリ明ニ見得ルノ好目標ナルコト等ヲ認メ、次テ海圖記載ノガヴリロバ岬暗礁部ヨリ海岸迄ハ、猶暗礁ノ連リ居ルコトヲ知り、出羽岬ノ北方ナルツイルメテバ灣ニハ、海岸ニ沿ヒテ燒却セラレタル村落ノ痕跡及ヒ敷板ナキ棧橋竝ニ海岸ニ近キ山腹ニ孤立燒殘セル煉瓦ノ一煙筒等ヲ認メ、爰ニ其ノ任務ヲ終リ、北上歸途ニ就キ、三十一日午後一時八分、アレキサンドロフスキーニ歸港セリ、(備考文書第四十二號及ヒ附圖參照)

越テ八月三日廣瀬司令ハ、更ニ片岡司令長官ヨリ、第五驅逐隊ヲ率井テ便宜出發シ、出羽岬ヨリ近藤岬ニ至ル沿岸ヲ偵察シ、五日中ニコルサコフニ回航スヘキノ命ヲ受ケ、直ニ麾下ノ分擔任務ヲ定メ、第一小隊 (不知火) ハ北緯四十七度以北ヲ、第二小隊 (夕霧) ハ同緯度ヨリ以南ヲ偵察ス

ヘキコト、爲シ、第二小隊ハ同日午後一時十五分、第一小隊ハ同日午後四時出港シ、第一小隊ハ四日午前六時十五分ツイルメテバ灣ニ假泊シ、陸戰隊ヲウリロ村ニ上ケ、北方及ヒ南方ノ海岸竝ニ東方密林内ヲ偵察セシメタルニ、同隊ハ邦人二名及ヒ「アイヌ」人數名ニ會シ、是等ニ就キテ、開戰當初ヨリ露兵三十名此ノ地ニ派遣セラレ、前月二十四日迄駐在セシカ、彼等ハ同日住家竝ニ倉庫等ヲ燒キテ北方ニ向ヒ遁逃シタルコト、又開戰ノ初ニ於テ、日本人四十九名帆船ニテ漂著シタルヲ捕虜トシ、アレキサンドロフスキーヲ經テ露本國ニ後送シタルコト、マウカ村ニハ露人三十五人アリテ一ノ商店ヲ有シ、同家ニハ通辯トシテ日本人一名居ル由ナルコト等ヲ聞知シ、九時五十分歸艦セシヲ以テ、第一小隊ハ拔錨シテ同地附近ヲ視察シ、ヲテスカ湖ノ西岸ハ北風ヲ避クルニ好錨地タルコトヲ認メ、午後二時五十分クSNSナイ泊地ニ漂泊シ、同村ニハ露人四名居ルノ外敵兵ナキコト、人家約二十戸アルコト等ヲ知り、七時マウカニ達シテ陸戰隊ヲ上陸セシメ、コルサコフ占領後、漁業ニ從事スルカ爲メ渡來セル本邦人約二十名ト、露人約三十名（重ナル職業ハ漁業ノ牧畜及ヒ耕作ナリ）ノ在留スルヲ認メ、露人中雜貨商ヲ營ミ居ルニコライ、クリコーレルノビチキーナル者ヲ訊問シテ、コルサコフ占領後同地ヨリ約五六十名ノ敵兵來リ、小舟ヲ掠奪シテ北方ニ逃レタルコト、同地ニハ五名ノ監視兵駐在セシカ、三十六年ノ初ニ當リテ引上ケ、其ノ後ハ來ラサルコト、同地附近ニハ砲臺等ノ設ナキコト、電信ハアレキサンドロフスキーヨリ東海岸ヲ經テコルサコフニ通シ、マウカニハコルサコフヨリ海路送達シ居ルコト、開戰前後トモ露國軍艦、水雷艇ノ碇泊セシコトナク、又通過スルヲモ認メサリシコト、開戰後糧食ハ主ニ我カ

帆船ニヨリ、我カ邦ヨリ輸入セラル、ヲ以テ、嘗テ缺乏シタルコトナキコト、冬季中ト雖モ海面結氷スルコトナキコト等ヲ知り、五日午前二時同地ヲ出港シ、午後四時コルサコフニ入港セリ、第二小隊ハ三日午後一時十五分、アレキサンドロフスキーヲ發シ、北緯四十七度迄沿岸ヲ航シテ南下セシカ、其ノ間更ニ敵影ナク、且ノト角ヨリトコンボ角ニ至ル間ニハ、和船ノ來往頗ル頻繁ナルヲ認メ、又陸岸所々ニ散在スル家屋ニハ、何レモ日章旗ヲ掲ケ居ルヲ望ミ、先ツマウカノ南約二哩ニ在ルチー村ヲ偵察シ、其ノ任ニ當レル夕霧乘組海軍中尉淺海清一ハ、甲辰義會會員官原諫速ナル者ヨリ、海岸ノ大ナル家屋ハ倉庫ニシテ、同地ニハ日本人十名、露人四名居リ、何レモ「セミノフ」會社（同會社ハ漁業ヲ營ミ本部ハ函館ニ在リ樺太西岸ノ漁業ハ主ニ此ノ會社ノ手ニ）ニ雇用セラレ居ルコト、二十日午前露兵約五六十山林中ヨリ現レ、マウカヨリ小舟ニテ對岸ニ遁レタルヲ第一回トシテ、其ノ後二回程四人及ヒ十人ノ敗兵、同シク對岸ニ渡リタルコト、海上ニハ嘗テ敵ノ艦艇ヲ見サルコト等ヲ聞知シ、又同地トトモマイ（南方ノ）間ノ海濱ハ隱礁相連リ居ルコト、トモマイニハ小ナル防波堤アリテ、十數隻ノ小艇ヲ容ル、ヲ得ヘキコトヲ認メテ歸艦シ、次テ第二小隊ハソーニ灣、ノトロ岬等ヲ海上ヨリ視察シテ、五日午後一時十五分コルサコフニ入港セリ、

（備考文書第四十三號及ヒ附圖參照）

第四目 臺南丸香港丸ノ樺太東北沿岸コル及ヒベトロフスキー方面オコ

ツク海北西沿岸及ヒ海豹島巡航偵察

臺南丸ヲ率非テ、片岡岬附近ニ坐礁セル獨國汽船「カシリー」號ノ船員ヲ救助シ、（本篇第二章第一節第三目ニ詳ナリ）

第二章

第三節

第四目

臺南丸香港丸ノ樺太東北沿岸コル及ヒベトロフスキー方面オコツク海北西沿岸及ヒ海豹島巡航偵察

七月二十六日小樽ニ歸港セル中尾第四艦隊司令官ハ、三十一日アレキサンドロフスキーニ在ル片岡第三艦隊司令長官ヨリ、左ノ電訓ヲ受領セリ、

一、貴官ハ樺太東岸及ヒ同島北部海灣巡航ノ目的ヲ以テ假裝巡洋艦臺南丸及ヒ香港丸ノ二艦ヲ率非便宜當地ヲ出發シ小樽ニ至リ炭水補充ノ後直ニ進發シ二週間以内ニ千歲灣ニ歸著スヘシ（編者曰ク小樽ニ在中尾司令官ニ向ヒ當地點ヲ發シ小樽ニ到リ云々トアルハ蓋臺南丸ハ坐礁汽船「カレリー」號船員救助任務ヲ終ラハアレキサンドロフスキーニ歸港スヘキ豫定ナリシヲ以テナリ）

二、此ノ巡航中左記ノ諸件ヲ實施スヘシ

（イ）海豹島ニ至リ現状ヲ調査シ同島及ヒ其ノ附近ニ於ル海獸ノ保護ハ如何ナル方法ニ依ルヲ便宜トスヘキヤ設備要員等ニ關スル方案ヲ具シ意見ヲ進達スルコト

（參考）從來同島ニハ浦鹽斯德鎮守府ヨリ毎年航海時期間將校一名、水兵二十名ヲ派遣シ陸上ニ於ル保護ヲ爲シ居レリト云フ

（ロ）同島附近ニ於ル密獵船ヲ搜索シ發見セハ其ノ内國船ナル時ハ獵器及ヒ捕獲物ヲ沒收スル等相當ノ處分ヲ加ヘ直ニ現場ヲ退去セシムヘシ又其ノ原籍、人名等ヲ調査シ報告スヘシ

外國船ナル時ハ之ヲ引致スヘシ

（ハ）薩哈噠海灣ノ偵察

（ニ）東岸及ヒ北部沿岸ニ於ル天候風潮流及ヒ港灣等ノ探查

（北遣艦隊機密第一二三號）

是ニ於テ中尾司令官ハ、八月一日所要ノ訓令ヲ發シテ、豫定巡航路及ヒ沿岸諸要地點ノ特定信

號等ヲ定メ、二日午前六時臺南丸、香港丸（香港丸ハ七月二十七日アレキサンドロフスキーニ於テ片岡司令長官ヨリ小樽ニ回航シ中尾司令官ノ指揮ヲ受クヘキ命ヲ受ケ三十一日小樽ニ入港シタルナリ）ヲ率井、マールロウイノフ灣ニ向ヒ小樽ヲ出港シ、午後六時半頃野寒岬望樓ニ近ツキ

シニ、軍令部次長ヨリノ左ノ電報傳達ヲ受ケタリ、

堪察加半島及ヒ樺太全島オコツク海北西沿岸ノ偵察ニ關シ片岡司令長官ニ訓令セラレシ所アリ（編者曰ク此ノ訓令ハ本節第一目ニ掲ケアリ参照ヲ要ス）貴官今、同ノ行動ヲ起スニ先タチ同長官ニ千歲灣ニ會スルヲ可ナ

リト認ム

依テ同夜ハ稚内ニ假泊シ、三日早朝出港シ、午後三時二十分先ツコルサコフニ入港セシニ、五日ニ至リ更ニ片岡司令長官ヨリ、左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、日本海ノ海權我ニ歸セシ以來敵ハ樺太ノ東方及ヒ北方航路ヲ經テ軍資ヲ輸送セントスルノ形跡アリ

二、貴官ハ之ヲ防止シ且全島ノ占領ヲ速ニスルノ目的ヲ以テ北遣艦隊機密第一一三號訓令ニ準據シ樺太ノ東方及ヒ北方沿岸ヲ巡航シ猶東經百四十六度以西ノオコツク海沿岸ヲ偵

察スヘシ

三、當地出發ヨリ千歲灣歸著ノ日時ヲ三週間以内トス

四、本訓令ニ對スル航路及ヒ日程ヲ豫定シ報告スヘシ

（北遣艦隊機密第一七一號）

是ニ於テ中尾司令官ハ六日午後一時出港シ、先ツ海豹島ニ向ヒシカ、十時半頃ヨリ濃霧ニ會セシヲ以テ目的ヲ變シ、シエグダ港（樺太北灣内ニ在リ）ニ向ヒシカ、數日ニ瀾リテ濃霧更ニ散セス、晝夜微速

警戒航行ヲ續ケタル後、十日午前七時三十六分遂ニ薩哈哩海灣水深二十尋ノ洋中ニ假泊シタリシニ、十一日午前四時四十分ニ至リ濃霧漸ク散シ、マリー岬ヲ北五十九度東ニ認メ得タルヲ以テ、六時出港シ十一時クエグダ港ニ入港セリ、仍テ同司令官ハ直ニ臺南丸分隊長海軍大尉大原俊二指揮ノ下ニ、聯合陸戰銃隊二個小隊ヲ上陸セシメ、(備考文書第四十四號參照)偵察ヲ終リテ午後四時四十分出港シ、同夜ハマリー岬ノ南微西二十三海里、水深十五尋ノ地ニ假泊シ、十二日ニ至リ臺南丸、香港丸ハ相分レ、香港丸ハ午前五時五十分出港シテベトロブスキニ向ヒ、臺南丸ハ午前六時半頃出港シテバカル灣ニ向ヘリ、

臺南丸ハ同日午後零時十七分バカル灣口ニ達シ、直ニ分隊長海軍大尉阿部恆雄指揮ノ下ニ陸戰隊ヲ上陸セシメ、(阿部大尉陸戰隊報告備考文書第四十五號參照)偵察ヲ終リテ十三日午前五時出港シ、(備考文書第四十六號參照)港ニ向フノ途上、六時四十分右舷ニ當リテ一大帆船ヲ認メシカ、臨檢ノ結果、食鹽ヲ満載シテ桑港ヨリ斜古丹海峽ヲ過キ、ニコラエフスクニ向ヘル英船「アンチオーブ」號ナルコトヲ知り、之ヲ拿捕シ、阿部大尉外下士卒十一名ヲ乗組マシメテ北灣ニ回航シ、飲料水ヲ補充シテ本隊ノ到ルヲ待タシメ、同艦ハ、午後二時十七分コル村ニ著シ、直ニ分隊長心得海軍中尉湯地定三ヲ指揮官トセル陸戰隊ヲ上陸偵察セシメタル結果、同村ハ戸數約三十ナル「ギリヤーク」人ノ部落ニシテ、露人ハ昨年一人來村セシ外絶エテ來ラサルコト、又同地ハ漠々タル外海ニ臨ミ、風波ヲ遮ルノ岬角ナキヲ以テ、安全ナル泊地ナラサルコト等ヲ認メ、(備考文書第四十六號參照)五時頃歸艦シテ此ノ旨ヲ報告セシニ依リ、臺南丸ハ四時頃來リ合セル香港丸ト共ニ、オコツク西岸亞揚港ニ向ヒ發進セリ、

香港丸ハ十二日臺南丸ト分レテヨリ、幾モナクシテ濃霧ニ襲ハレ、午前十時三十三分、推測ベトロブスキ角ノ東方約十七海里ニ投錨假泊シ、十三日午前七時頃稍霽レタルニ乗シテ拔錨シ、十時頃ベトロブスキニ近ツキ、土人ノ茅屋九軒アルト、海岸ニ流木ノ堆積シアルトヲ望ミタルノミニシテ、上陸視察ノ要ナキヲ認メシヲ以テ、去リテコル村ニ向ヒ沿岸ヲ視察シツ、午後四時頃同村沖ニテ臺南丸ト相合セリ、

是ニ於テ臺南丸、香港丸ハ、十三日午後六時コル村沖ヲ發シ、十四日午後零時四十六分オコツク海ノ西岸ニ在ル亞揚港ノ外港ニ投錨シ、直ニ香港丸分隊長海軍大尉柴内豪吉ヲ指揮官トセル聯合陸戰隊ヲ上陸セシメシカ、我カ隊ノ近ツクヲ見テ、露人及ヒ土人等皆逃去シ、灣ノ北東部ニ在ル村落内ニハ一名ノ「ツングース」人アリ、西部海濱石炭小屋附近ニハ二名ノ露人(共ニ商人)アルノミニナリシヲ以テ、柴内海軍大尉ハ之ヲ訊問シテ、同地ニハ「コサック」兵僅ニ二名アルノミナルコトヲ知り、尙遺棄シアル舊式砲一門、小銃三挺、彈藥若干、軍服、軍帽、軍刀等ヲ鹵獲セリ、又海岸ニ在ル數棟ノ倉庫ニハ糧食品ヲ貯藏シ、村落ノ戸數八十餘戸ニ過キサレトモ、頗ル宏壯ナル一寺院ヲ有シ、灣内ハ水深クシテ端舟ノ發着容易ナルコト等ヲ認メ、次テ南灣ニ到リシニ、住民ハ皆逃レテ一名モアラサルヲ以テ、單ニ視察ニ留メ九時歸艦セリ、(備考文書第四十七號參照)是ニ於テ兩艦ハ十五日午前八時亞揚ヲ出港シ、オコツク港ニ向ヒシカ、幾モナクシテ濃霧ニ會シ、十六日ニ至レトモ尙霽レス、同日午前五時四十分オコツク河口ニ近ツキシニ、流木夥シク浮流シ居ルヲ認メ、水深漸次淺キヲ加フルヲ以テ、遂ニ水深十二尋ニシテ底質沙ナル處ニ投錨セシカ、十

七日午前二時三十分頃ヨリ濃霧稍薄ラキ、八時頃ニハ明ニマレカン岬ヲ認ムルヲ得タルヲ以テ、直ニ拔錨シテ午後四時頃オコック河口ニ移泊セリ、然ルニ同三十分頃敵ノ陸兵ト思ハル、モノ、陸岸ヨリ端舟ニテ本艦隊ニ向ヒ來ルヲ認メタルニ因リ、中尾司令官ハ命シテ一時軍艦旗ヲ下サシメシニ、彼ハ遂ニ我カ軍艦タルコトニ氣附カス、臺南丸ニ到著セリ、是則チオコックノ民政長官カ、露國船舶ト誤認シテ訪問ニ來リタルナリ、仍テ端舟員ト共ニ同官ヲ抑留シ、十八日午前六時十五分ノヲ案内者トシテ、大原大尉ノ指揮下ニ聯合陸戰隊ヲ上陸セシメ、同大尉ノ上陸スルヤ、直ニ「コサック」兵十四名ヲ捕ヘ、陸戰隊附海軍少尉岩崎本彦(臺南丸乗組ナリ)ヲシテ、二個分隊ヲ率非此ノ捕虜ヲ嚮導トシテ、市街ノ西方約四分ノ一哩ナル火藥庫ニ到リ、同庫格納ノ火藥ヲ傳馬船ニ移載スヘキコトヲ命シ、爾餘ノ兵員ヲ市街適當ノ場所ニ配置シ、躬ヲ部下若干ヲ率非テ先ツ長官官衙ニ赴キ、重要書類ヲ押收シ、次テ武庫ニ到リ、小銃五十八挺、同彈藥等ヲ鹵獲シ、正午頃歸艦セリ、(民政長官ハ終始書類其ノ他ヲ隱匿セントシ且連ニ虛偽ノ中立ヲ爲セシヨリ一旦「コサック」ト共ニ正午頃解放セリ備考文書中ニ詳ナリ尙中尾司令官ノ命ニ依リ戰役中戰鬪ニ從事セリルコトノ宣誓書ヲ徵出港ヨリ同二十四日同港ニ歸著スル臺南丸香港丸ノ航跡圖ハ附圖ニ掲ク)

是ニ於テ中尾司令官ハ香港丸ニ命スルニ、薩哈噠海灣ヲ巡航シテ密輸入船ニ注意シ、二十日正午北灣ニ來リ會スヘキヲ以テシテ之ニ赴カシメ、躬ヲ臺南丸ヲ率非テ午後零時五十五分オコック港ヲ發シ、十九日午後五時二十分北灣ニ入リ、豫テ同港ニ回航シ居ル拿捕帆船「アンチオーブ」號ニ淡水ヲ補給シ、二十日午前十時同船ヲシテ阿部大尉ノ指揮下ニ、單獨コルサコフニ向ヒ出港セシメ、同五十五分香港丸ヲ合セ、共ニ出港シテ歸途ニ就キ、二十二日午後一時二十五分海豹

島ニ近ツキシニ、一帆船ノ碇泊シ居ルヲ認メ、之カ處分ヲ香港丸ニ命シ、臺南丸ヲシテ島上ニ漁獵禁止ノ制札ヲ樹テシメ、同夜ハ共ニ同島附近ニ碇泊シ、翌二十三日更ニマヌーエ偵察ヲ香港丸ニ命シテ之ト別レ、臺南丸ハ午前五時出港シテチ、メネフニ向ヒ、十一時四十五分同河口ニ到達シ、直ニ大原大尉ノ指揮下ニ陸戰隊ヲ上陸セシメシニ、村民出テ迎ヘ黑麵包及ヒ鹽ヲ卓上ニ載セ、脱帽敬禮シテ歸順ノ意ヲ表セシカ、同地ノ長官及ヒ駐屯「コサック」兵等ハ皆已ニ逃走シテ此ニ在ラス、數日前「コサック」兵約三百名來リテ掠奪ヲ逞シタルコト、昨日我カ陸兵汽船ニテ來リ日章旗ヲ樹テ、且日章旗ノ製作法ヲ教ヘタルコト、陸軍ニテ小銃、拳銃等ハ皆押收シテ歸船セシコト等ヲ知り、諸建物内ヲ檢閲シ、樺太占領ノ揭示ヲ海岸ニ樹テ、住民ニ必要ナル注意ヲ與ヘタル後、(大原大尉ノ陸戰隊報告備考文書第四十九號參照)午後三時三十分歸艦シ、同四十五分出港シテコルサコフニ向ヒ、二十四日午前九時香港丸ヲ合セ、午後二時五十八分歸港シ、無事其ノ任務ヲ完ツセリ、(備考文書第五十號參照)

是ヨリ先キ十八日オコック港外ニ於テ臺南丸ト別レタル香港丸ハ、十九日午後四時薩哈噠海灣ニ入リシニ、距岸二十海里餘ニシテ水深僅ニ十四尋ノ所アルヲ發見セシヲ以テ、其ヨリ半速力トシ、絶エス測深シツ、北泊地ニ向ヒ、七時二十分入港視察セシモ異狀ナカリシヲ以テ、同夜ハ該港ニ碇泊シ、二十日午前四時三十分出港シテ北灣ニ向ヒ、十二時同灣ニ達シテ臺南丸ト會シ、正午同艦ト共ニ出港シテエリザベス岬ヲ繞リ、樺太東岸ニ沿ヒテ南下歸航ノ途ニ就キシカ、二十日午前十一時十分、海豹島ノ近傍ニ一帆船ノ碇泊シ居ルヲ認メ、中尾司令官ノ命ニヨリ同船

ニ近ツキ臨檢セシニ、同盟丸ナルモノニシテ、七月三十一日小樽ヲ發シテセント、シヨナ島ニ到リ、同島ニテ臘臘獸約七百頭ヲ獲、本日當地ニ著セリトノ辯解ヲ爲シタルモ、海豹島上ニ人ノ居リタル形跡アリ、全ク密獵ノ目的ナルモノト認定シ、獵具、獸皮一切ヲ沒收シ、將來ヲ誠メテ解放シ、同夜ハ臺南丸ト共ニ同島ニ留リ、二十三日マヌーエ偵察ヲ命セラレ、午前四時三十分臺南丸ト分レテ單獨出港シ、午後二時同沖十二尋ノ所ニ投錨セシカ、東北東ノ風強ク、浪荒クシテ上陸偵察ヲ爲スコト能ハス、已ムヲ得ス我カ守備軍ト手旗信號ヲ交換セシニ、同守備隊ハ第四十九聯隊第十二中隊ノ一部ニシテ、小野田中尉ノ指揮下ニ屬シ、下士卒五十名アリ、而テ陸上異狀ナキコトヲ知り、海岸ニ露人ノ家屋六七戸、土人ノ住家八九戸アルヲ認メ、七時拔錨シテ重藏岬ニ向ヒ、二十四日午前九時二十分頃、同岬ノ東方約十海里ニ於テ臺南丸ニ合シ、相共ニコルサコフニ歸港セリ、(備考文書第五十號參照)

第五目 須磨和泉ノ占守島及ヒ堪察加半島南部沿岸コンマンドルスキー 列島偵察

東郷第三艦隊司令官ハ、八月五日コルサコフニ於テ、片岡第三艦隊司令長官ヨリ、左ノ訓令ヲ受領セリ、

- 一、堪察加半島方面ニ於ル敵狀ニ關シテハ大海情報ニ示スノ外得ル所ナシ
- 二、占守島ニハ目下報效義會員五戸十五名住居シ別所佐吉ナルモノ之カ主長タリト云フ
- 三、貴官ハ須磨、和泉「オークレ」ノ三隻(編者曰ク「オークレ」號ハ翌六日ニ至リテ加工セラレタルモノニシテ本行動中臨時東郷司令官ノ指揮下ニ入りタルナリ)ヲ

率非速ニ出發約三週間ノ豫定ヲ以テ占守島ヲ經テ堪察加半島南部沿岸ニ於ル敵兵所在地ニ威力偵察ヲ行ヒ竝ニコンマンドルスキー列島ノ現在ヲ偵察シ海獸等濫獲ノ弊ナキヤ否ヤ等ヲ視察スヘシ

四、昨年堪察加半島ヲ巡航セシ英國軍艦「アルゼリン」艦長ノ談ニ依レハ同艦ハ九月二十四日堪察加長官陸軍大佐某ヲベトロパウロウスクニ訪問セシ際同長官ハ軍事上ノ捕虜トシテ郡司大尉ヲ同地燈臺ノ營舎ニ收容シ居レリト語レリト云フ成シ得レハ臨機ノ處置ヲ以テ同大尉ヲ救出スヘシ

五、本訓令ニ對シ行動ヲ豫定シ報告スヘシ

(北道艦隊機密
第一七二號)

是ニ於テ同司令官ハ、六日左ノ命令ヲ發シ、午後八時須磨及ヒ和泉ヲ率非テコルサコフヲ出發セリ、

- 一、堪察加半島南部沿岸ニ於ル敵兵所在地ノ威力偵察及ヒコンマンドルスキー列島海獸ノ現狀ヲ視察スルノ目的ヲ以テ本日午後八時K地點ヲ發セントス
 - 二、堪察加方面ノ情報ハ左記ノ外得ル所ナシ
陸上ニハ二名ノ將校七名ノ「コサック」騎兵及ヒ七十ノ義勇兵アルノミ砲臺ナク又港口ニハ水雷敷設シアラサルモノ、如シ
 - 三、本行動ヲ豫定スルコト別表ノ如シ
- 航行日程ハ隨時之ヲ命ス

四、給炭船「オークレー」號ハ別紙訓令ニ依リ單獨行動セシム
(編者曰ク別紙訓令略ス但本訓令ハ便宜
ヲヘシト云フニアリ)

五、陸戦隊ハ各艦一個小隊宛ヲ準備シ置クヘシ
但必要ノ役員隊装及ヒ携帶品等ハ之ヲ特令ス
(六戰機密第
一三八號)

(別表)

堪察加方面行動豫定表

地名	著	發	行動摘要
K 地 點		八月六日午後八時	
占守島片岡灣	十日 正午	十一日午前九時	報效義會員現狀觀察(會員ヲ同地附近案内トシテ便乗セシムル豫定ナリ)
アバチヤ灣	十二日午前四時	十四日午前五時	十二日十三日威嚇砲撃及ヒ陸戦隊ヲ上陸セシメ陸上偵察ヲ爲ス此ノ時郡司大尉ノ消息ヲ確ム
ベーリング島ニコリスキー 錨地	十五日 正午	十六日午前五時	同島偵察及ヒ海獸ノ現狀觀察
マドニ島コラベルナヤ灣	十六日午後	十七日午前五時	右同
占守島片岡灣	十九日 正午	二十日午後四時	炭水ノ補充
K 地 點	二十三日 正午		

既ニシテ十日午前十時頃、占守島柏原湖地方錨地ニ入り、先ツ報效義會ノ現況ヲ觀察シ、兼ネテ堪察加半島ノ情報ヲ得シコトニ努メシモ、住民中嘗テ同方面ニ渡航セシモノナキヲ以テ、終ニ

之ヲ知ルコトヲ得ス、十一日ハ天候險惡且濃霧ノ爲メ同地ニ留リ、十二日午前九時出港シ、幌筈海峡ヲ北ヨリ南ニ通過シ、占守島ノ南岸ニ出テ、堪察加半島ノ東岸ニ沿ヒテ北上シ、午後四時左ノ命令ヲ發シタリ、

一、敵情ニ就テハ占守島ニ來ルモ尙得ル所ナシ郡司大尉ハ捕虜ト爲リタルニ角燈臺ニ收容セラル、モノ、如シ

二、アバチヤ灣ニ於ル威力偵察ノ行動ヲ左ノ如ク豫定ス

(イ)須磨ハ直ニ灣内ニ突入シペトロパウロウスク港外ニ至リ機ヲ見テ威嚇砲撃ヲナスヘシ

(ロ)和泉ハ灣口タルニ角ヲ急襲シ郡司海軍大尉ヲ救出シ了レハ可成速ニ灣内ニ在ル須磨ニ合シ共ニ威嚇砲撃ヲナスヘシ

爲シ得レハ燈臺ノ守備兵一二名ヲ捕ヘ來ルヘシ

三、敵情ニ依リ須磨、和泉ノ豫定聯合陸戦隊ヲペトロパウロウスクニ上陸セシメ陸上偵察ヲナサシムル豫定ナリ

四、豫定陸戦隊ノ指揮官ヲ平岩大尉トス

陸戦隊上陸掩護ノ爲メ艇砲ヲ用意スヘシ

辨當一食分携帶品水筒ノミ

給與部員ヲ要セス軍醫官ハ須磨ヨリ出スヘシ

豫備彈藥ハ二箱宛

百三十八
(六戰機密第
一四二號)

次テ十三日午前七時、ビルツチン灣ノ東方ニ達シタルヲ以テ、兩艦相分レ、和泉ハ速力ヲ速メ先航シテダルニー角ニ向ヒ、八時三十分同燈臺ニ近ツキ、先ツ「吾ニ投降セヨ」然ラスハ直ニ砲撃破壊スヘシ「ト」信號ヲ試ミタリシモ、遂ニ應答セザリシヲ以テ、數發ノ威嚇砲撃ヲ行ヒシニ、守兵數名附近ノ森林中ニ遁入スルヲ認メタリ、是ニ於テ石田和泉艦長ハ同地兵營ヲ急襲シ、郡司大尉救出ノ目的ヲ以テ所要ノ訓令ヲ海軍大尉廣澤恆ニ與ヘ、銃隊一個小隊、工作隊一分隊ヲ率非テ上陸セシメシモ、當ニ目的トセル郡司大尉在ラサルノミナラス、陸上「ノ」人影タモ認メザリシヲ以テ、同陸戰隊ハ已ムヲ得ス、僅ニ守燈房内ニ遺棄シアリタル小銃七挺、其ノ他劍、手斧、ペトロパウロウスクノ海圖等ヲ押收シ得タルノミニテ、其ノ附近ヲ巡視探查セシ後、午後三時歸艦セリ、燈臺ハ白色ニ塗レル圓柱形ニシテ高さ六丈餘アリ其ノ南方五十米突ノ所ニ霧中信號川ノ鐘ヲ備ヘ其ノ側ニ五ノ時十口徑許ノ銅砲ヲ据ユ之ニ近ク一小火藥庫アリ守燈房ハ六室ヲ有シ内寢室三臥臺十餘ヲ備ヘ浴室廚房等頗ル完備シ居レトモ電話電線等ノ通信裝置ハ無カリシト云フ備考文書第五十一號ニ詳ナリ）是ニ於テ同艦ハ直ニ拔錨シテ須磨ニ合スルカ爲メ、ペトロパウロウスク港ニ急航シ、四時二十分同港ニ入り、海軍中尉亥角喜藏ヲ指揮官トセル陸戰銃隊一個小隊ヲ陸上ニ派シテ、已ニ上陸セル須磨ノ陸戰隊ニ合セシメ、同陸戰隊ハ六時四十分歸艦セリ、（和泉艦長提出報告備考文書第五十二號及ヒ附圖航跡圖等參照）是ヨリ先キ須磨ノ和泉ト分ル、ヤ、直ニペトロパウロウスク港ニ向進シ、八時三十分アバチャ灣口ニ到達シ、同灣ノ左側ニ在ル信號所附近ヲ探射シ、灣内ニ進ミペトロパウロウスク市街ノ右方山野ヲ砲撃シ、十時二十二分同港ニ入りシニ、偶敵陸兵ノ出入スル一營舎ヲ發見シテ之ヲ砲撃

セシカ、白旗ヲ掲ケタルヲ以テ之ヲ止メ、（本砲擊中内務省並ニ絶東太守廳派遣官吏グレブニツキナナル者燈キ旨ヲ哀願セリ仍テ同人等ヲ訊問シテ稍一般（臺監守員學校教員ノ二名ヲ伴ヒ須磨ニ來艦シ砲撃ヲ中止セラレタ）情況ヲ知悉シ得タリ備考文書第五十三號參照）同三十四分同港ニ在泊セル米國汽船「オーストラリア」號ヲ臨檢拿捕シ、（同船ハ麥粉、茶、罐詰等ヲ滿載シ桑港ヨリ來リタルモノニシテ露領沿岸各所ニ駐在セル露國軍隊ニ糧食ヲ供給シシ、アリタルモノナリシヲ以テ之ヲ拿捕シ海軍大尉大湊直太郎ニ下士卒八名ヲ附シ十四日出港シ横須賀軍港ニ回航セシメタリ）午後三時平岩大尉ヲ指揮官トセル陸戰銃隊一個小隊及ヒ附屬隊ヲシテ同地ニ上陸セシメタリ、然ルニ同陸戰隊ノ上陸シタル時ハ、地方長官タル郡長スタニスラウ、マトヘーウ井チ、レーフヲ初トシテ、駐屯兵ノ全部及ヒ住民ノ多クハ皆已ニ逃走セリ、（レーフハ遁ル、ニ臨ミ書ヲ殘シ居レリ其ノ要ハ降伏ノ條件ハグレブニツキノ意見ニ從フヲ以テ同官ト協議セラレタク尙條件ニ服從スヘキ勸務員及ヒ人民ノ生命安全ヲ保セラレタク降服次第本官ヨリ遣察加人民一同ニ告示スヘシト云フニ在リ備考文書第五十四號參照）是ニ於テ平岩大尉ハ同地政廳ニ到リテ、公文書類及ヒ小銃若干ヲ押收シ、住民ヲ訊問シテ、郡司大尉ハ三百露里ヲ距ツルミルコワ村ニ健在シ居ル由ナルコト、同地ニ義勇兵約六十名居リタルコト、固定防禦ナキコト等ヲ知り、陸上ニハ石炭庫二棟（約二千噸藏シ居リシ）火藥庫一棟（多量ノ藏シ居リシヲ以テ悉ク露國官用糧食庫一棟、（居リシモ其ノ儘ニ放置セリ）殖産貿易會社ノ所有ナル糧食、獵具、諸皮類、日用品、材木等ヲ藏スル倉庫七棟等ヲ認メ、（戸數ハ約六十戸ハ約四百ニシ）六時四十分歸艦セリ、（備考文書第五十五號及ヒ附圖參照）斯ノ如ク東郷司令官ハペトロパウロウスクヲ偵察セシモ、遂ニ郡司大尉ヲ得ルコト能ハス、十四日午前迄同地ニ留リ、以テ地方長官等ノ歸還ヲ待チシカ、遂ニ歸還スルノ模様ナカリシヲ以テ、住民ハ我カ軍隊ノ規律整然トシテ秋臺モ犯（スナキヲ知リテ昨夕來漸次歸來シツ、アリ）同地ニ在ルグレブニツキヲ介シテ、地方長官レーフニ宛テ、郡司大尉以下我カ帝國臣民ヲ好遇スルコトニ努ムハク、若シ好意ヲ以テセサルコトアラ

ハ、報復手段トシテ當市街ノミナラス、到ル所ノ沿岸村落ヲ砲撃破壊スヘキノ警告ヲ遺留シ、午後二時兩艦ヲ率非テ出港シ、コンマンドルスキー列島ニ向ヒ、途上押収文書ヲ調査セシニ、露人カ昨三十七年堪察加半島附近ニ出獵セル我カ漁船十二隻ヲ燒棄シ、其ノ乗員百七十名ヲ慘殺セルノ事實ヲ發見セリ、已ニシテ十六日正午ペーリング島ニコリスキー港(列島中政廳ノ在ル主要地ナリ)ニ著シ、直ニ威嚇ノ爲メ空砲數發ヲ放チシカ、毫モ驚愕ノ狀ナク、我ヲ以テ英國軍艦ニシテ禮砲ヲ發スルモノト誤認シ、警察署長及ヒ醫師等來訪セシヲ以テ、直ニ之ヲ捕ヘ、次テ同人等ヲ案内トシテ、平岩大尉ヲ指揮官トセル聯合陸戰銃隊一個小隊ヲ上陸セシメタリ、平岩大尉ハ同署長ニ向ヒ該島ノ占領ヲ告ケ、敵對行爲ヲ成スニ於テハ直ニ處分スヘキ旨ヲ宣告シ、上陸スルヤ直ニ附近ノ搜索竝ニ警戒ノ任務ヲ二個分隊ニ命シ、其ノ他ヲ率非、署長ヲ案内トシテ政廳内及ヒ市街ヲ巡檢シ、公文書類及ヒ武器十挺、彈藥銃劍等ヲ押收セリ、陸上ニハ官有倉庫三棟(船舫及ヒ其ノ用スル火藥庫一棟(目下貯「コーチック」會社ノ所有ナル倉庫五棟(石油、石炭、糧食)及ヒ一病院、一學校、一寺院等ヲ認メ、四時四十五分偵察ヲ終ヘテ再同署長ヲ拉シ、五時三十分頃歸艦セリ、(但同署長ハ必要ナキヲ以テ此ノ日附近ニ來レル島民ノ船ニ乗セテ放還セリ備考文書第五十六號及ヒ附圖參照)此ノ日東郷司令官ハ和泉ニ命シ、同港在泊ノ米船「モンタラ」號(排水量二千五百噸)ヲ臨檢セシメテ之ヲ拿捕シ、(同船ハ在港加「コンマイン」ヤル、インダストリアル會社及ヒ堪察加半島沿岸所在ノ露國軍隊ニ供給シテ、アルモノナリシヲ以テ之ヲ拿捕シ和泉乘)尙左ノ命令ヲ發シタリ、

一、當隊ハコンマンドルスキー列島附近ニ於テ海獸ヲ濫獲スルノ弊ナキヤ否ヤヲ視察スル

ノ目的ヲ以テ明朝出動セントス

二、各艦ハ明朝便宜當地ヲ發シ須磨ハ該列島ノ北方沿岸ヲ和泉ハ該列島ノ南方沿岸ヲ巡

航シ密獵船ノ有無ヲ視察スヘシ

各艦以上ノ任務ヲ了ラハ午後六時メドニ島南角ノ南方ニ於テ相合スルヲ要ス

三、密獵船アル時爲シ得レハ其ノ國籍、船名及ヒ噸數等ヲ取調ヘ報告スヘシ(六戰機密第一四六號)

然ルニ十七日ハ朝來濃霧アリシヲ以テ豫定行動ヲ止メ、午後二時霧ヲ冒シテ同港ヲ發シ、再アバチャ灣ニ向進シ、十九日午後六時ベトロパウロウスクニ入港セリ、而テ二十日午前八時ヨリ、更ニ平岩大尉ヲ指揮官トセル聯合陸戰銃隊一個小隊ヲシテ上陸セシメ、邦人慘殺ノ件ヲ確ムルカ爲メ、地方長官タル郡長ノ所在ヲ搜ラシメシモ、前ニ遁逃セシ儘未タ歸還セサルノ報ヲ受ケ、已ムナク我カ漁業者ニ關スル情報ヲ得ルト同時ニ、該地方一般ノ情況ヲ調査スルノ資料ヲ得ンカ爲メ、官廳ニ殘留セル公文書類一切ヲ押收セシメ、同陸戰隊ハ正午歸艦シタルヲ以テ、午後二時出港シテ再占守島ニ向進セリ、(但二十日陸戰隊ノ上陸後間モナク前同寄港ノ時須磨ニ來艦セル狀ヲ齎セリ然ルニ同書ハ前同與ヘ置キタル我カ警告書ニ答フルノミニシテ其ノ要ハ陸兵ナク只萬一ニ備フルカ爲メ義勇兵ノミヲ有スル市街ニ向ヒ砲撃セラレシハ其ノ何ノ主意タルヤ了解シム所ナレハ了得シ得ル通告ヲ得タキ云々トノコトナリシヲ以テ同司令官ハ二十日更ニ同官ニ向ヒ堪察加半島西岸ノ義勇兵「コサツク」兵ハ我カ帝國帆船ヲ燒棄シ利ヘ我カ邦人百七十名ヲ慘殺セシコト押収書類ニ依テ知レリ苟モ今後尙我カ帝國臣民ニ對シ更ニ不法行爲ヲ重ヌルコトアラハ寸毫モ假借セス報復手段トシテ沿岸諸村落ヲ砲撃スヘキヲ以テ宜シク此ノ旨ヲ同村落ニ通シ置クヘク尙郡司大尉ハ外數名ノ帝國臣民ニ對スル待遇ノ懇切周到ナル様展注意セラレタキ旨ノ回答ヲ與ヘタリ備考文書第五十七號參照)已ニシテ二十一日正午同島柏原湖北方錨地ニ達シ、郡司大尉以下ノ消息ヲ報効義會ニ傳ヘ、兩艦ハ豫テ同地ニ待命セシメ置キタル「オークレー」號ヨリ石炭ヲ補充シ、(「オークレー」號ハ二十二日單獨出發シテコルサコフ

ニ回航
セリ
（備考文書第
五十七號及
参照）
二十二日午後三時拔錨シテコルサコフニ向ヒ、二十五日午前九時頃歸港セリ、

第六目 吾妻ノグナイチャ湖附近偵察海豹島巡視及ヒヲシヨロ附近守備

兵輸送掩護

村上吾妻艦長ハ、八月七日コルサコフニ於テ、片岡司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、機關砲數門ヲ有スル敵ノ敗兵四百名ハグナイチャ湖ノ南東ニ當レル山谷ニ據守シ目下我カ陸軍ノ一部隊ハ之ヲ攻撃中ナリ

二、貴官ハ竹内旅團長ト協議シ陸兵、野砲及ヒ舢舨若干ヲ吾妻ニ搭載シ本日當港ヲ出發シ

ツナイチャ湖附近ニ到リ陸兵ヲグナイチャ湖ノ北岸ニ上陸セシムヘシ

又グナイチャ湖口ノ測量ヲ試ミ汽艇ヲ入湖セシムルコトヲ得ハ裝砲汽艇ヲ以テ適宜陸軍

ニ援助ヲ與フヘシ

三、右了ラハ海豹島ニ到リ現狀ヲ視察シ來十一日中當港ニ歸著スヘシ（北遣艦隊機密）

是ニ於テ同艦長ハ直ニ竹内旅團長ト協議ヲ遂ケ、第二十五旅團副官陸軍歩兵大尉渡邊金造、副領事鈴木陽之助、砲兵一個小隊、工兵一個分隊、野砲、彈藥其ノ他平底船等ヲ搭載シテ、午後五時四十五分コルサコフヲ發セシカ、八日正子頃ヨリ濃霧ニ會シ、夜明クルモ尙露レサルヲ以テ、午前七時五十分グナイチャ湖沖ト想ハル、場所ニ假泊シ正午ニ至リシモ、容易ニ露ル、ノ狀見エサリシカ爲メ、午後零時三十分遂ニ錨ヲ拔キ徐々海岸ノ方ニ航シ、一時十二分水深七尋ノ處ヲ確

メテ再投錨セリ、然ルニ幾モナク、陸岸ニ方リテ汽笛ヲ聞キシヲ以テ、村上吾妻艦長ハ汽艇ヲ派シ之ヲ偵察セシメシニ、其ノ歸艦ニ先タチ、陸軍備船巴港丸ノ端舟來ルニ會シ、之ニ就テ艦位及ヒグナイチャ湖口ヲ確ムルコトヲ得タリ、依テ村上艦長ハ直ニ諸般ノ上陸準備ヲ命シ、且陸軍援助ノ爲メ艦載水雷艇一隻、汽艇二隻ヲ軍裝シ、傳馬船一隻ヲ之ニ附シ、分隊長海軍大尉關干城ヲ之カ指揮官ニ任シ、午後三時四十五分ヨリ陸揚ケヲ開始セシメタリ、而テ夕刻ニ至リ霧猶霽レサレトモ、時日許サ、ルヲ以テ、村上艦長ハ斷然海豹島ニ回航スルニ決シ、汽笛ヲ鳴ラシテ之ヲ派遣隊ニ告ケツ、出港シ、九日午前九時三十分海豹島附近ニ達セシカ、偶霧霽レタルヲ以テ、十時二十二分同島ノ西方約二海里半ノ所ニ投錨シ、直ニ將校ヲ派シテ島内ヲ視察セシムルト同時ニ、又出來得ル限り附近水路ノ測定ニ從事セシメ、午後五時拔錨シテ、再グナイチャ湖ニ向ヒ、十日午前九時同湖口沖約二海里ニ碇泊シ、直ニ歸著セル艦載水雷艇ヲ收メ、（但艦載水雷艇ハ湖口水ハサリシヲ以テ同附近水路ノ測定ニ從事シタルナリ）午後四時三十分陸軍ノ戰況及ヒ派遣艇ノ狀況視察ノ爲メ、「カッター」一隻ヲ陸岸ニ派セシニ、八時三十分陸軍負傷兵三名、見學陸軍將校二名及ヒ領事ヲ乗セテ歸艦シ、次テ九時十三分關大尉以下モ亦汽艇、傳馬船ヲ率非テ歸艦セリ、（關大尉ハ八日上陸スルヤ直ニ大隊營ニ訪ヒ敵狀竝ニ作戰模様ヲ問ヒ應援ノ方法ニ關シテ協議ヲ遂ケ十日早朝ヲ以テ攻撃開始ヲ約シ汽艇ヲシテ九日ヨリ十日未明迄ニ砲兵及ヒ野砲砲兵等ヲ搭載セルライター「ラ」曳キテ湖航シ適當ノ場所ニ陸揚ケセシメ十日早朝ヨリ砲兵ト共ニ敵陣地ニ向ヒ砲撃ヲ開始シ同時ニ砲兵ノ彈著ヲ觀測シテ一々規約信號ヲ以テ之ヲ告ケシニ八時四十五分ニ至リテ敵ハ白旗ヲ掲ケ少尉カツレキ以下百二十三名ノ敵兵悉ク投降セリ備考文書第五十八號及ヒ附圖參照）是ニ於テ吾妻ハ直ニ出港シ、十一日午後一時三十五分コルサコフニ歸港セリ、越テ十六日村上艦長ハ、片岡第三艦隊司令長官ヨリ更ニ左ノ訓令ヲ受領セリ、

- 一、須磨岬望樓間接掩護及ヒヲシヨロ(須磨岬北方ツイルメテバ)附近守備ノ目的ヲ以テ陸軍ヨリ一部隊ヲヲシヨロ附近ニ分遣シ駐屯スルコト、ナレリ
- 二、貴官ハ竹内旅團長ト協議シ陸兵及ヒ之ニ要スル糧食若干ヲ其ノ艦ニ搭載シ明十七日便宜當港ヲ發シヲシヨロニ到リ之ヲ掩護揚陸シ二十日迄ニ當地ニ歸著スヘシ
- 三、陸兵宿舍修理等ニ關シテハ相當ノ助力ヲ與フヘシ
- 四、須磨岬望樓建設及ヒ海底線陸揚ケハ其ノ艦ノヲシヨロ到達ノ後便宜著手セシムル豫定ナリ

(北遣艦隊機密)
第二四二號

仍テ同艦長ハ直ニ竹内旅團長ト協議ヲ爲シ、其ノ結果陸軍將校一名、下士卒二十名ヲ便乗セシメ、尙陸兵用ノ糧食其ノ他ヲ搭載シ、十七日午前六時五十分出港シ、十八日午前七時頃、須磨岬ノ北方約一海里半ニ達シテ投錨シ、直ニ分隊長心得海軍中尉栗原祐次ヲ指揮官トシ、陸戰銃隊一小隊ヲシテ陸上ヲ偵察セシメ、續テ陸兵及ヒ糧食ヲモ同地ニ揚ケ、尙海軍大尉溝部洋六ニ下士卒若干ヲ附シ、上陸地點ヨリ須磨岬望樓建設豫定地間ノ沿岸踏査ヲ爲サシメシカ、兩隊何レモ十一時歸艦シテ異狀ナキ旨ヲ報告セリ、依テ村上艦長ハ午後零時十分更ニ栗原中尉ニ命スルニ、ヲシヨロ村ニ到リ其ノ附近ヲ偵察スヘキコト、少尉候補生和波豐一ニ命スルニ、須磨岬ノ南方沿岸二哩間ヲ踏査シ來ルヘキコトヲ以テシ、下士卒若干ツ、ヲ附シテ出發セシメタリ、而テ和波候補生ハ四時三十分ニ、栗原中尉ハ五時三十分ニ、各歸艦シテ何レモ異狀ナキ旨ヲ報告セシヲ以テ、六時五十分拔錨シテ歸途ニ就キ、十九日午前五時三十分クسنナイニ寄港シ、栗原中

尉ヲ陸上ニ派シ、前日來ノ狀況ヲ守備隊長タル等々力中隊長ニ通報シ、且クسنナイ方面ノ敵狀ヲ問ハシメ、其ノ歸艦ヲ待チテ八時十五分出港シ、二十日午前四時三十七分コルサコフニ歸港セリ、(備考文書第五十九號參照)

第七目 八重山秋津洲ノマウカ方面偵察

西山八重山艦長ハ、八月九日コルサコフニ於テ、片岡第三艦隊司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

- 一、本日近藤岬ニ到著セシ漁夫ノ言ニ依レハ本島西岸マウカニ敵兵六百アリ八月四日本邦漁夫一名ヲ殺害シ船積荷ヲ掠奪シ本邦人ハ陸路當方ニ向ヒ避難中ナリト
- 二、奉天丸第二辰丸ハ本日午前四時BQ地點(編者曰ク小樽ナリ)出發明十日海馬島ヨリアレキサンドロフスキーニ向ヒ海底電線敷設ニ從事シ十一日須磨岬ニ達スル豫定ナリ
- 三、其ノ艦ハ明朝當地(編者曰クコルサコフナリ)出發先ツマウカ附近ニ到リ敵兵ニ對シ適宜作動シ又其ノ附近ニ在ル本邦人ノ保護ニ任スルト同時ニ奉天丸第二辰丸ノ電線敷設(須磨岬附近迄)ノ間接掩護ヲ爲シ十七日迄ニ當地ニ歸著スヘシ
- 四、歸航ノ途次沿岸ヲ南下シ成シ得レハ大ナル村落ニハ適宜兵員ヲ陸揚ケシ敵兵ノ有無及ヒ其ノ狀況ヲ視察スヘシ又本邦人及ヒ漁舟ニ會セハ敵ノ敗兵ニ對スル警戒竝ニ漁獵禁止ノ警告ヲ與フヘシ

(北遣艦隊機密)
第一八一號

西山艦長ハ、右訓令ニ基キ十日午前九時十五分コルサコフヲ發シ、午後九時五十分同地沖合

ニ達シテ漂泊シ、十一日午前五時頃同泊地ニ入りテ投錨シ、六時陸戰銃隊一小隊ヲ上陸セシメシニ、去四日來襲セシ敵ハ約二百名許ニシテペトロバフロスクヨリ來リ、日本人及ヒ土著露人ノ糧食、被服ヲ掠奪セシ上、漁舟五隻ヲ燒キ、九日朝迄暴行ヲ逞シウシツ、同地ニ留リ、後チ北方ニ向ヒ引上ケタルコト、及ヒ今尙ラクマカトノダサントノ間ニ在ルモノ、如キコトヲ知リ、直ニ出港シテラクマカニ向ヒ、午後一時十六分同沖ニ達シテ漂泊シ、陸戰隊ヲシテ上陸セシメタレトモ得ル所ナク、三時投錨シテノダサン村ニ向ヒ、五時十分同泊地ニ入り、又陸戰隊ヲシテ上陸セシメタレトモ、時既ニ黄昏ナリシヲ以テ、敵襲ヲ慮リ一旦本艦ニ引上ケシメ、十二日午前七時四十分更ニ上陸シテ偵察セシメタレトモ異狀ナク、午後一時歸艦シタリシニ、八時十五分ニ至リ、鄰灣ツブチノ漁民來リ、露兵若干ツブチノ南タラセンカニ現レ、附近ノ山ヲ燒キツ、アリト報告シ、又秋津洲モ來會セリ、

是ヨリ先キ秋津洲ハ、同月十日宗谷海峽ニ在リテ哨戒中、漁船來リ報シテ曰ク、去七日漁舟六隻マウカ附近ニ於テ約三四百ノ敵襲ヲ受ケ、僅ニ糧食ヲ與ヘタルノミニシテ、盡ク貨物ヲ掠奪シ、船ヲ燒キ追放セラレ、敵ハ後方ノ山中ニ退去セリト、仍テ直ニ此ノ旨ヲ片岡司令長官ニ報告シ、同日コルサコフニ歸港シタリシニ、其ノ後八重山等ヨリマウカ方面ニ敵出沒スルノ報頻ヤナルヲ以テ、十一日同艦ハ同司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受ケ、十二日午前三時出港シ、夕刻ノダサン沖ニ於テ八重山ニ會セリ、

其ノ艦ハ明日早朝當港ヲ出發シ宗谷海峽哨戒勤務ヲ一時驅逐艦ニ委任シマウカ方面ニ至リ

八重山ト協同シ該方面ニ於ル敵兵ニ對シ適宜行動シ十五日中ニ歸港スヘシ

是ニ於テ西山八重山艦長ハ、十三日午前五時ヨリ聯合陸戰隊ヲツブチニ上陸セシメ、以テ同地附近ノ偵察ヲ行ハシメシカ、遂ニ敵ヲ發見セスシテ十時頃歸艦セシヲ以テ、秋津洲ニ北方沿岸ノ偵察ヲ命シ、八重山モ北上シテクステンナイ泊地ニ移リ、夕刻同地ニ於テ秋津洲ヲ合セ、十四日午前五時視察員ヲシテ上陸セシメシモ、復異狀ナキヲ以テ、西山八重山艦長ハ、今ヤ二艦協カノ必要ナキヲ認メ、秋津洲ニハ沿岸ヲ偵察シツ、コルサコフニ歸港スヘキヲ命シ、(秋津洲ハ午前十時頃出港シ、コルサコフニ歸港セリ)八重山ハ八時四十分出港シ、正午ルダノフスカゴ河口ニ投錨シテ陸上ヲ視察シ、午後五時出港シ、七時三十分ヲコフナ河沖ニ假泊シ、十五日午前四時五十二分コモシロ漁村ヲ偵察シ、七時出港シ、午後三時十五分マウカニ入り、十六日午前五時二十五分出港シ、十七日午前六時二十五分コルサコフニ歸港セリ、

第八目 曉ノナイブーチ附近偵察及ヒマウカ陸兵揚陸掩護竝ニ同附近沿岸偵察

第六驅逐隊ノ原田曉艦長ハ、八月九日コルサコフニ於テ、片岡第三艦隊司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

- 一、約百五十乃至二百ヨリ成ル敵ノ一團ハ先ニオトサイ川(ナイブーチ附近)ニ添ウテ東海岸ニ出テ更ニ北進シタルヲ以テ我カ陸軍ノ一隊ハ之ニ對シ作戰中ナリ
- 二、其ノ艦ハ本日便宜當港ヲ出發シ先ツオトサイ川附近ニ到リ陸軍部隊長ト協議シタル後

敵兵ニ對シ適宜作動スヘシ

三、右了ヲハ四十九度以南ノ本島東沿岸ヲ巡航シ成シ得レハ村落ノ大ナルモノニハ適宜兵員ヲ陸揚セシメ敵兵ノ有無及ヒ其ノ現狀ヲ觀察スヘシ

四、本邦人及ヒ漁舟等ニ會セハ敵ノ敗兵ニ對スル警告ヲ與フヘシ

海豹島附近ニ於ル海獸獵ハ嚴ニ禁止中ナルヲ以テ東海岸ニ於テ海獸密獵船ニ會セハ適宜ノ處分ヲ爲スヘシ

五、來十五日中ニ歸港スヘシ

(北道艦隊機密
第一九五號)

是ニ於テ原田曉艦長ハ午後六時四十分出港シ、十日午前零時三十分ドブキーニ著シ、將校ヲ陸上ニ派シテ陸軍部隊長ト協議セシメ、其ノ結果シラロカニ在ル神津小隊ニ向ヒ、糧食ノ輸送ヲ託セラレ、十一日午前四時出港シ、九時三十分シラロカニ入り、委託糧食ヲ渡シタル後、マグシコタンニ到リ、陸上ヲ觀察シテ同夜ハ同地ニ留リ、十二日午前四時出港シ、サリチュラネスツシヲ觀察シテ夕刻ナヨロニ入り、十三日午前六時五十分陸戰隊ヲ上陸セシメ、敵兵十八名ヲ包圍シテ之ヲ捕虜トシ、十時三十分出港シ、午後七時過再ドブキーニ入り、十四日早朝捕虜ヲ陸軍ニ渡シテ午前七時頃出港シ、イヌヌシナイ、ヲチヨボカ、トンナイチャヲ觀察シテ、夜ハトンナイチャニ泊シ、十五日未明出港シ、午後コルサコフニ歸リシカ、更ニ復片岡司令長官ヨリ、マウカニ到リテ陸軍陸揚ケヲ掩護シ、又出羽岬ニ至ル沿岸ヲ偵察スヘキコト等ノ命ヲ受ケ、十六日午前八時四十分出港シ、午後九時三十分タラントマリニ入り、十七日午前五時頃出港シ、港外ニ於

テ陸軍兵ヲ搭載セル東洋丸ニ會シ、六時三十分マウカニ著シテ陸軍陸揚ケヲ掩護シ、十一時出港シ、ノダサン、チーカイナイボ、トマリヲロノ各地ヲ觀察シ、同夜ハトマリヲロニ泊シ、十八日午前四時出港シ、六時クステンナイニ入り、同地ニ在ル陸軍一小隊ヲ便乗セシメテ、八時三十分出港シ、十一時三十分ハーバシスニ入り、陸軍ヲ上陸セシムルト同時ニ、陸戰隊ヲ上陸セシメ、曉ハ一旦通信ノ爲メ、去リテ、マウカニ到リ、之ヲ終リテ午後六時再ハーバシスニ入りテ上陸隊ヲ乗セ、クステンナイニ到リテ陸兵ヲ揚ケ、十九日午前六時出港シ、須磨岬附近ニ於テ「シヤム」號ヨリ炭水ノ補充ヲ受ケ、更ニ北上シテ、エスツル埼ニ赴キ、陸上ヲ觀察シタル後、回頭シテ歸途ニ就キ、二十日午後コルサコフニ歸港セリ、(但九日以來ノ本行動中陸軍通譯一名特ニ臨時乗艦セリ)

第九目 第一第六驅逐隊ノ樺太露國住民放還掩護

山田第三艦隊司令官ハ、八月二十日アレキサンドロフスキニテ、片岡司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、陸軍輸送船江都丸及ヒ東洋丸ハ當方面在住ノ露國民約千五百名ヲ搭載シ來二十三日午後七時當港(編者曰クコルサコフナリ)ヲ發シ二十五日午後七時N地點(編者曰クアレキサンドロフスキナリ)ニ著シ夫ヨリカストリー灣ニ到リ揚陸放還ノ豫定ナリ

二、南部占領軍司令官ヨリN地點カストリー灣間ノ海上ノ護送及ヒ揚陸間ノ掩護ヲ依頼シ來リ之ニ應セリ

三、貴官ハ輸送船到著セハ乗組護衛將校ト協議シ其ノ麾下ヨリ軍艦若クハ驅逐艦ヲ出シ第

二號ノ任務ニ服セシムヘシ

四、江都丸護衛將校ハ歩兵中尉長屋尙作東洋丸ハ歩兵少尉吉澤昌樹ナリ又兩船ノ航行速力ハ九海里ナリ

(北道艦隊機密)
(第二七〇號)

仍テ同司令官ハ、二十五日藤本第一驅逐隊司令ニ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

一、陸軍運送船江都丸及ヒ東洋丸ハ對岸ニ移住ヲ出願セル露國民約三千名(編者曰ク最初ハ約一千五百名カ豫定ナリシモ漸次増加シテ斯ク約三千名ニ上リシモノナリ)ヲ搭載シ之ヲカストリー灣ニ揚陸スル目的ヲ以テ明二十六日午後六時當港ヲ出發スル筈ナリ

二、貴官ハ麾下驅逐隊ヲ率非テ右運送船ト同時ニ出港シ途中海上ノ護送揚陸點ノ指導竝ニ揚陸間ノ警衛ニ從事スヘシ

三、揚陸事業了ラハ直ニ歸港シ得ルモ若シ天候ノ異變ヲ生シタル等ノ爲メ艀舟ノ收容其ノ他困難アリト認ムル場合ニハ陸軍護衛將校ト協議ノ上適宜善後ノ手段ヲ講スヘシ

四、江都丸護衛將校ハ歩兵中尉長屋尙作、東洋丸ハ歩兵少尉吉澤昌樹ナリ又兩船ノ航行速力ハ九海里ナリ

五、本任務中春日ヲシテNA地點(クレスタールカンブ燈臺ノ東南東十海里)ニ出動シ間接掩護ニ任セシムルト同時ニ貴官ト通信ノ聯絡ヲ保タシム

六、自他細項ハ當地碇泊場司令部員坂少佐ト直接整議スヘシ

(五戰次機密)
(第二九號)

藤本司令ハ右訓令ニ基キ、二十六日午後六時四十五分第一驅逐隊ヲ率非、江都丸、東洋丸ト共ニ

アレキサンドロフスキーヲ發シ、二十七日午前四時五十五分カストリー灣内チヌボイ岬沖ニ投錨シ、五時五十一分ヨリ露國民ノ陸揚ケヲ開始セリ、次テ六時十分吹雪ヨリ陸戰隊ヲ上陸セシメ、クレスタールカンブ燈臺附近ヲ偵察セシメタルニ、同燈臺ニハ數分前マテ敵ノ守備兵屯在シタルノ形跡アルヲ認メ、七時三十分頃歸艦シタリシニ、果シテ十時十分銃劍ヲ附ケタル敵兵五六クレスタールカンブ地峽ニ現出セシヲ以テ、直ニ之ヲ擊攘セリ、此ノ日浪稍高カリシモ、幸ニ揚陸地點ノ良好ナリシカ爲メ、揚陸ノ進行極テ速ニシテ、午後三時ニハ早クモ其ノ全部ヲ終了スルコトヲ得タリ、(放還人員ハ東洋丸約千名、江都丸約二千名ニシテ船中ハ東洋丸ニ傳馬船四隻(各四十人乗リ)ニギクニ隻ノ六隻ヲ使用シ彼等ハ各自衣囊大ノ麻袋一個ヲ携帶シタル外別ニ同大ノ麻袋約千個及ヒ糧食若干ヲモ搭載シ居リタ)仍テ同十分出港ルナリ而テ春日ハ豫定ノ如クNA地點附近ニ航在シテ絶エス第一驅逐隊ト通信聯絡ヲ保持セリ

シ、八時五分アレキサンドロフスキーニ歸港シタリシニ、同日更ニ同司令官ハ山田司令官ヨリ、再露國住民ノ殘餘ヲ搭載シ、明二十八日出發ノ豫定ナル陸軍運送船江都丸及ヒ豐富丸ノ二隻(兩船各約千八百搭載ス)ヲ掩護シ、前回ト同一ナル任務ニ就クヘキ命ヲ受ケ、直ニ之ヲ覆及ヒ春雨ノ二隻ニ命シタリ、然ルニ二十八日ヨリ三十日迄ハ、天候險惡ニシテ行動ヲ起スコト能ハス、三十一日午後零時四十分始テ出發シ、同五時三十分カストリー灣口ニ到着セリ、時ニコエコック角ノ南方海岸ニ、露人ヲ載セタル一隻ノ端舟アリシヲ以テ、威嚇射撃ヲ行ヒテ之ヲ走ラセタル後、同四十七分同角ノ南西方ニ投錨シ、同夜ハ哨兵ヲ配シ、九月一日早朝ヨリ露民揚陸作業ヲ開始シ、午後零時三十分頃全部結了セシヲ以テ、同四十五分出港シ、アレキサンドロフスキーニ向ヒシモ、天候險惡ニシテ風波荒キカ爲メ元錨地ニ引返シ、二日午前六時出港シ、同十一時二十七分

アレキサンドロフスキーニ歸港セリ、斯ノ如ク前後二回ノ放還ハ第一驅逐隊之ニ當リシカ、次テ第三回ノ放還ニハ第六驅逐隊之ニ當ルコト、爲リ、久保田同驅逐隊司令ハアレキサンドロフスキーニ於テ、出羽第四艦隊司令長官ヨリ、左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、陸軍運送船萬里丸ハ露國住民歸還志願者千六百名乗船明十一日午後二時頃當地著次テカストリー灣ニ回航シ右人員ヲ放還スル筈ナリ

二、貴官ハ第二小隊(編者曰ク阜月曉ナリ)ヲ派遣シアレキサンドロフスキー港ヨリカストリー灣ニ至ル前號ノ海上輸送竝ニ揚陸掩護ヲ爲サシムヘシ

三、陸軍歩兵少尉坂本嘉内護衛將校トシテ萬里丸ニ在リ

(丁隊機密第
一八八號)

同司令ハ右訓令ニ基キ、十一日所要ノ訓令ヲ首席將校タル阜月艦長海軍少佐水科三十郎ニ與ヘ、同艦長ハ午後十時阜月、曉ヲ率非、萬里丸ヲ護衛シテ出港シ、十二日午前六時カストリー灣ニ入リ、直ニ露人陸揚ケニ著手シタリシニ、陸上衛兵之ヲ拒絕セシニ因リ、一時之ヲ中止セシメシカ、間モナク黑龍江沿海州總督陸軍大將フィシヤスキーノ命ヲ帶ヒ、陸軍大尉ステルリゴフ阜月ニ到リテ山科艦長ニ面會シ、今後露民放還ノ際ニハニコラエフスクニ送致セラレタキコト、ニコラエフスクニ送致セラル、コト叶ハサル場合ニハ、露國ニテ汽船ヲ準備シ、海上當港ヨリニコラエフスクニ輸送スヘキヲ以テ、兩三日前ニ通知セラレタキコト、今回ノ揚陸ハアレキサンドロフスキーニ於テセラレンコトヲ希望スルコト等ヲ以テセリ、然レトモ山科艦長ハ、既定ノ揚陸地點ヨリ實施スルコトニ協議シ、再揚陸ヲ開始シ、午後十時終了シ、十三日午前五時出港シ、十

時三十分アレキサンドロフスキーニ歸港セリ、(出羽司令長官ハステルリゴフ大尉ノ言ニヨリ露國ハ放還露民ニ對シ海上輸送ヲ企畫セ居ルモノ、如クナルヲ知リ念ノ爲メ十五日初霜ヲカストリー灣ニ派シ同大尉ヲ介シテ休戰條項中海上捕獲ハ依然繼續スヘキヲ以テ放還露民ノ輸送船舶トモ取除クヘキ理由ヲ有セス故ニ若シ特別ノ取除ヲ希望セラル、ニ於テハ宜シク貴國政府ヨリ我カ政府ニ協商セラルルヲ至當トストノ旨ヲフィシヤスキー大將ニ通報セシメタリ本節第一目行動概要ヲ参照スヘシ)

第十目 熊野丸第一驅逐隊ノ間宮海峽カストリー灣樺太東岸及ヒ海豹島附近 巡航

八月二十四日池中熊野丸艦長ハ、出羽第四艦隊司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、軍令部次長明二十五日午後東京出發青森函館ヲ經テ二十七八日頃小樽港ヲ發シ樺太方面ニ出張シ稚内、宗谷附近ヲモ視察ノ筈ナリ

二、其ノ艦ハ明二十五日早朝出發シ函館ニ到リ炭水補充ノ上二十七日迄ニ小樽ニ回航シ同官ノ乗用ニ服スヘシ

三、尙北遣艦隊諸部隊ノ配備變更ノ結果其ノ艦ハ爾後第五戰隊、香港丸第一、第五驅逐隊ト共ニ千歲灣ヲ本根據地トシ宗谷海峽及ヒ薩哈噠島南部ノ哨戒警備ニ任セラル、筈ナリ

(丁隊機密第
一七一號)

是ニ於テ池中同艦長ハ、二十五日午前二時四十二分熊野丸ヲ率非テ大湊ヲ發シ、先ツ函館ニ寄港シテ炭水補充ヲ爲シタル上、二十七日午前八時三十分小樽ニ入リ、二十八日伊集院軍令部次長ノ一行(大本營海軍參謀海軍大佐江頭安太郎)ヲ乗セ、午前九時五十分出港シテ、二十九日午前六時コルサ(海軍中佐子爵小笠原長生隨行員タリ)コフニ入リ、伊集院次長ノ入港スルヤ直ニ片岡司令長官ヲ八雲ニ出羽司令長官ヲ松島ニ武富司令官ヲ橋立ニ歴訪シ、次テ「アーク」ヲ浮揚工事ヲ視察シ午後五時上陸シテ竹内南部占領軍司令官ヲ訪ヒ市中ヲ巡視セリ

第二章

第三節

第十目

熊野丸第一驅逐隊ノ間宮海峽カストリー灣樺太東岸及ヒ海豹島附近巡航

午後五時五十分出港シテアレキサンドロフスキニ向ヒ、三十一日午前六時同港ニ著セリ、(伊集院長ノ入港スルヤ山田司令官及各艦長ノ來訪ヲ受ケテ山田司令官ヲ日進ニ訪ヒテ)然ルニ九月一日ハ天候上陸シ原口中將ヲ北部占領軍司令部ニ田内東宮武官ヲ其ノ旅舎ニ訪ヒ市中ヲ巡視セリ。不穩ナリシヲ以テ出港ヲ見合セ、二日稍收リシヲ以テ、伊集院軍令部次長ハ、午前六時山田司令官ヨリ、特ニ附隨セシメラレタル第一驅逐隊ノ吹雪、有明ヲ隨ヘ、間宮海峽ニ向ハントセシモ、港外ノ波濤ハ尙高ク、海峽ニ進ミ入ルニハ頗ル困難ナルヘキヲ思ヒテ、更ニ出港ヲ中止シ、三日ニ至リ愈々天候回復セシヲ以テ、同官ハ午前四時十五分吹雪ニ便乗シ、吹雪、有明ヲ率非テ海峽ニ向ヒ、熊野丸ニハカストリー灣ヲ偵察シテ後チ、タンギニ回航シ居ルヘキコトヲ命シテ之ト別レ、同官ハボゴビ沖ニテ視察ヲ遂ケ、其ヨリ回頭南下シテカストリー灣ニ向ヒ、十一時三十分頃同灣ニ達シテ灣内ヲ徐航巡視シ、次テタンギニ向ヒ午後三時同地ニ達シテ熊野丸ヲ合セ、陸上視察ヲ爲シタル後、再熊野丸ニ乗艦シテ直ニ南下シ、五日早朝コルサコフニ入港セリ、然ルニ同日池中艦長ハ更ニ片岡司令長官ヨリ、伊集院次長ヲ乗セ、同官ノ指揮下ニ樺太東岸及ヒ海豹島附近ヲ巡航スヘキ命ヲ受ケ、尙藤本第一驅逐隊司令モ、亦同司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

- 一、伊集院軍令部次長ハ假裝巡洋艦熊野丸ニ乗艦シ樺太東岸海豹島附近ヲ視察セラル
- 二、貴官ハ吹雪、霰ヲ率非直接軍令部次長ノ指揮ヲ受ケ作動シ終ラハK地點(編者曰クコルサコフナリ)ニ歸泊スヘシ
- 三、有明、春雨ハ當地點ニ在リテ本職不在中一時八重山艦長ノ指揮下ニ入り其ノ一隻ハ機關ノ手入ニ從事シ他ノ一隻ハ受命後一時間以内ニ出動シ得ル準備ヲ爲シ置クヘシ

(北道艦隊機密)
(第三七六號)

是ニ於テ藤本司令ハ、吹雪、霰ヲ率非テ六日午後零時十五分、熊野丸(伊集院長乗艦)ハ同日午前九時、何レモ稚内ニ向ヒテコルサコフヲ發シ、吹雪、霰ハ同日夕刻、熊野丸ハ七日早朝同港ニ入り、伊集院軍令部次長ハ陸上ヲ視察シ、終テ同日午後三時頃出港シ、八日午後四時四十分頃、七郎灣ボロナイ河口附近ニ達シテ投錨シ、九日午前七時三十分、軍令部次長ハ汽艇ニ乗シ、傳馬船ヲ曳キテ先ツ河口西岸ニ在ル露人ノ家屋ヲ一覽セシカ、偶同地住民ヨリ、タライカ湖方面ノ山林中ニ露國敗兵(二百五十乃至三百名位ナラント云フ)潛伏シ、時々來襲シテ物品ヲ掠奪シ、殺傷ヲ行フトノ愁訴ヲ受ケシヲ以テ、霰ニハシヲロカ角ニ到リ、同地ニ在ル守備軍支隊ニ此ノ旨ヲ通知スヘキコトヲ、吹雪ニハタライカ湖方面ヲ偵察スヘキコトヲ命セリ、(伊集院長ハ同地附近ノ水路及ヒ地勢ニ精シキヲロコ人ハルヒナ船ニ移リ支流ソリットイ河ニ入り尙二三海里ヲ進ミヲロコ人ノ村落ヲ巡視シ然ル後歸途ニ就キ午後七時歸艦セリ霰ハ午後三時二十五分ヲロカ角ニ達シ其ノ任務ヲ果シテ十日午前六時チ、メネフニ歸リ吹雪ハ九日午前十一時頃タライカニ到リテ陸戰隊ヲ上陸セシメテ偵察セシニヲロコ人來リテ昨日略同シ)十日吹雪ハ更ニ軍令部次長ヲ乗セテ再タライカニ到リ、同官ハ同方面ヲ視察シタル後舊錨地ニ歸リ、再熊野丸ニ移レリ、十一日午前零時熊野丸以下ハ一旦出港シタリシモ、天候不良ノ爲メ八時三十四分セントジョーシ角附近ニ假泊シ、十二日ハ風勢衰ヘタルモ、濃霧アリテ咫尺ヲ辨セサリシヲ以テ、其ノ霽ル、ヲ俟チ、正午頃稍薄ヲキタルニ乗シテ拔錨シ、午後一時二十五分海豹島ノ西方約二海里半ニ達シ四時片岡岬ノ東ニ出テ、北ニ變針シ、樺太北灣ニ向ヒテ進航シ、北緯五十二度十分ノ邊ヨリ、三十分毎ニ水深ヲ測量シ、十四日午前八時二十分バカル灣口ヲ距ル七海里半ニ達セシニ、一帆船

ノバカル湖中ニ碇泊スルヲ認メ、吹雪ハ之ヲ臨檢シ、(帆船ハ北魁丸(噸數二三〇噸)ニシテ船長以下邦人九名乗組ミ居レリ而テ同船ハ鹽ヲ積ミ六月二十日函館ヲ發シ擇提沙那ヲ經テ單冠灣ニ向フノ途上南ノ暴風ニ遭ヒ漂著シタルモノニシテ陸上ニ非ヲ擲リ假小屋ヲ建テ漁業ニ従事シテ今日ニ至レリト申立テシヲ以テ直ニ本港ヲ去ルヘキ旨ヲ諭告セリト云フ)熊野丸及ヒ霞ハ同灣口ニ投錨シ、軍令部次長ハ上陸シテ地勢ヲ觀察シ、了リテ午後七時投錨シ、十時三十六分ナデイダ灣ニ入リシカ、十五日ハ天候不穩ニシテ上陸スルコト能ハサルヲ以テ、艦上ヨリノ觀察ニ留メ、午後二時投錨シ、五時二十分クエダ灣ニ移泊シタリシカ、十六日午前六時三十分頃ヨリ、風力次第ニ衰ヘ、天候漸次回復シ、十一時頃北方遙ニ一帆船ヲ認メ、幾モナク復北微東ニモ、一汽船ノ南航スルヲ認メシヲ以テ直ニ出港シ、吹雪ハ汽船ニ向ヒ、熊野丸之ニ續キ、霞ハ帆船ノ臨檢ニ赴ケリ、其ノ結果帆船ハ解放セシカ、汽船ハ米國太平洋汽船會社ノ「バラコウタ」號(排水量一七四九噸)ニシテ、鹽ヲ搭載シテ桑港ヲ出テ、堪察加南方ヲ經テニコラエフスクニ向フノ途中ナルヲ知り、之ヲ拿捕セリ、(熊野丸艦長ハ海軍大尉馬島專之助及ヒ下士卒十一名ヲ回航委)十七日ハ同地ニ留リ、十八日早朝ソントル湖口ニ移リ、軍令部次長ハ湖内ニ入リテ地勢ヲ觀察シ、午前十時三十分頃歸艦シ、爰ニ北部ノ觀察ヲ終ヘ、午後零時五十分出港シ、愈歸途ニ就キ、十九日午前九時三十分ヌエ灣ノ東方約十五海里ニ達セシ時、遙ニ一帆船ヲ認メ、吹雪之カ臨檢ニ赴キ、熊野丸、霞ハ七時十五分同灣口ニ投錨シ、軍令部次長ハ直ニ上陸シテ觀察ヲ遂ケ、(軍令部次長ハ七時三十分汽船ニ乗灣内ニ入り偶碇泊セル帆船ハ幡丸、大日丸(漁業ニ従事中ノモノナリ)ノ船長等漁舟ニテ)午後一時頃歸艦シ、同四十分メノコ灣ニ向フノ途上吹雪ヲ合セ、(吹雪ノ臨檢セル帆船ハ春日丸ト云)同艦ヨリメノコ灣口ニ海圖ニ記載ナキ大ナル洲ヲ發見セシ旨、報告ヲ受ケシヲ以テ、同灣ノ觀察ヲ止メテ海豹島ニ

向ヒシニ、二十日午前八時五十分同島附近ニ於テ、遙ニ一帆船ヲ認メタルニ因リ、吹雪ニ其ノ取調ヲ命シ、熊野丸及ヒ霞ハ同島ノ南方ヲ巡リテ西方ニ出テ、十時十分片岡岬ヲ北東四分ノ一北ニ、同島中央立標ヲ南東微東ニ見ル水深十三尋ノ所ニ投錨シ、伊集院次長ハ直ニ上陸シテ同島ヲ觀察シ、正午頃歸艦セシニ、吹雪ヨリ、臨檢セル帆船ハ千葉丸ナリシコト、同船ハ同島附近ニ於テ密獵シタル形跡アリシヲ以テ、所持ノ小銃七挺及ヒ彈藥ヲ沒收シ、嚴告ヲ與ヘテ放免セシコトノ報告ヲ受ケ、午後零時五十八分ナヨロニ向ヒテ投錨シ、六時十九分同沖合ニ投錨シ、二十一日早朝更ニ泊地ヲ稍陸岸ノ方ニ移シ、軍令部次長上陸觀察ノ後、午後零時五十分投錨シ、二十二日午前十時三十分コルサコフニ歸港シ、爰ニ吹雪、霞ノ兩艦ハ軍令部次長ノ指揮ヲ離レテ本隊ニ合シ、(備考文書第六十號第一驅逐隊司令報)熊野丸ハ同官ヲ乗セテ二十三日正午出港シ、小樽、大湊ヲ經テ二十五日午後四時青森ニ入リ、二十六日軍令部次長ハ退艦シ、熊野丸ハ即日港シ、二十八日品川ニ入港セリ、(軍令部次長ハ二十六日鐵路青森ヲ發シ二十七日午前大本營ニ歸著セリ其ノ觀察ニ關スル詳細ノ記事ハ第十部第十篇雜記ノ部ニ掲ク)

第十一目 第六驅逐隊ノノダサン及ヒクスンナイ方面偵察

久保田第六驅逐隊司令ハ、八月二十六日コルサコフニ於テ、片岡第三艦隊司令長官ヨリ、左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、貴官ハ驅逐艦潮及ヒ曉、阜月ノ三隻(編者曰ク阜月ハ翌二十七日ヲ以テ追加セラレタルナリ)ヲ率井來二十八日便宜當地點ヲ發シ日地點(編者曰クアレキサンドロフスキーナリ)ニ回航シ第四艦隊司令長官ノ到著ヲ待ツヘシ

二、竹内南部占領軍司令官ヨリ別紙ノ如ク依頼シ來リ之ニ應セリ

三、貴官ハ直接同官ニ協議シ北上ノ途次ノダサン及ヒクスンナイ方面ニ在リテ敵ノ敗兵ニ對シ作動中ノ我カ陸軍部隊ニ相當ノ援助ヲ與フヘシ

(北道艦隊機密第
三一五號ノ二)

(別紙)

西海岸ハノダサン川附近ノ敵ヲ搜索及ヒ攻撃ノ爲メマウカ及ヒクスンナイノ各中隊ハ別紙ノ通り苦心致居候得共何分陸上道路不良ニシテ糧食輸送及ヒ連絡困難ニシテ甚タ遺憾ニ被存候ニ就テハ貴艦隊中驅逐艦一隻御差遣相成間敷哉此段及御依頼候也

追テ御承諾ノ上ハ御差遣艇名、出帆時日承知致度尙同艇ニハ若干ノ糧食ヲ積込ミ之ヲマウカ中隊長大多和大尉ヨリ要求スル地點ニ上陸セシメラル、様致度候(八月二十五日附南戰第五五號竹)

(内司令官ヨリ齋藤
第三艦隊參謀長宛)

是ニ於テ潮以下三隻ハ、二十七日陸軍用ノ糧食等ヲ搭載シ、陸軍將校一名ヲ潮ニ、通譯一名ヲ曉ニ各便乗セシメ、二十八日午前四時三十分出港シ、午後五時四十分マウカニ入り、直ニ各艦ヨリ將校一名宛ヲ陸上ニ派シ偵察セシメシモ異狀ナカリシヲ以テ、同夜ハ同地ニ泊シ、二十九日午前七時拔錨シ、九時ノダサンニ著シ、將校一名ヲシテ上陸偵察セシメシニ、其ノ結果マウカニ上陸セシ大多和中隊長ハ、在クスンナイ等々力中隊ヨリ一個小隊ノ増援ト、一週間分ノ糧食トヲ得、去二十七日午前五時ノダサンヲ發シ、敗兵急追ノ目的ヲ以テ、クスンナイ河ヲ溯レリトノコトヲ知リシヲ以テ、糧食ヲ同地ニ揚ケテ午後零時五十分出港シ、四時四十分クスンナイ港ニ入り、將校一名ヲ陸上ニ派セシカ、等々力中隊ノ守備トシテ駐屯シ居レルノミニシテ、敵狀ニ關シ

テハ更ニ得ル所ナク、三十日午前八時出港シ、須磨岬望樓建築工事視察ノ爲メ、午後一時十五分ヲシヨロニ寄港シタリシカ、海波高クシテ視察員ヲ上陸セシムルヲ得ス、在泊ノ「シヤム」號ヨリ、同望樓ハ今後一週間ヲ以テ完成スルノ豫定ニシテ、海底電信及ヒ望樓事務ハ已ニ開始シ居ルコトヲ聞知シ、六時三十分出港シ、三十一日午前七時アレキサンドロフスキーニ入港シ、陸軍便乗者及ヒ通譯ハ退艦シ、潮以下三隻ハ爾後九月十六日迄、出羽第四艦隊司令長官ノ指揮下ニ入りテ、同地附近ノ哨戒ニ任セリ、

第十二目 八幡丸ノ薩哈噠海灣巡航

川合八幡丸艦長ハ、明治三十八年八月二十六日コルサコフニテ、片岡司令長官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、ニコラエフスク附近ニハ砲艦二隻小形水雷艇七八隻存在スルモ活動セサルモノ、如シ
二、敵ハ中立國船舶ヲ利用シ米國及ヒ東洋諸國ノ港灣ヨリ樺太北方ヲ經テ軍資ヲニコラエフスクニ輸送セントスルノ形跡アリ

三、貴官ハ之ヲ防止スルノ目的ヲ以テ來二十九日當地點(編者曰クコルサコフナリ)ヲ發シBQ地點(編者曰ク小樽ナリ)ニ到リ炭水ヲ補充シタル後便宜進發シ薩哈噠海灣ニ到リ適宜行動スヘシ

四、此ノ行動中成シ得レハ適宜「ランニング、サーベレーイング」ヲ試ムヘシ又往復共ニ海豹島附近ヲ通航シ密獵船ヲ發見セハ適宜處分スヘシ然レトモ密獵船在ラサレハ寄港スルニ及ハス

五、BQ 地點出發ヨリ K 地點(編者曰クコレヲサコフナリ) 歸著迄ノ日時ヲ二週間以内トス

(北遣艦隊機密 第三一二號)

六、本訓令ニ對スル 航路及ヒ日程ヲ豫定シ 報告スヘシ

是ニ於テ同艦長ハ、二十八日行動豫定ヲ定メテ之ヲ片岡司令長官ニ報告シ、二十九日午前八時白井侍從武官乘艦セシニヨリ、十時出港シ、三十日午前八時小樽ニ入り、(午前八時三十分侍從武官退艦セリ) 三十一日早朝ヨリ炭水糧食等ヲ搭載シ、同日午後四時出港シ、薩哈噠海灣ニ向ヒテ發進シ、九月二日午前七時頃海豹島附近ニ達セシニ、船舶在ラサリシヲ以テ寄港セス、三日午前七時ヨリ航走測深ヲ始メ、四日午前三時十五分エリザベス岬ヲ發見シ、八時北灣ニ達セシニ、更ニ異狀ナカリシヲ以テ、九時マリ岬ヲ正南十一海里四分ノ三ニ見テ薩哈噠海灣ニ向ヒ、午後北泊地附近ヲ監視徐航シ、日没後ヨリ沖合ニ出テ巡邏セリ、五日午前北灣ヲ視察シ、次テ再北泊地沖マリ岬間ヲ警戒監視シ、夕刻ヨリマリ岬ノ南三十二度、西十一海里半ノ處ニ假泊シ、六日午前四時拔錨シ、北泊地沖ニ移リテ更ニ假泊中、午前十一時間宮海峽方面ヨリ一汽船ノ出動シ來ルヲ認め、直ニ拔錨シテ之ヲ臨檢セシニ、上海ニ於テ麥粉、罐詰等ヲ滿載シ、八月十日ニコラエフスクニ到着シ、密輸入ヲ遂ケタル獨逸汽船「カントン」號ニシテ、積荷ナク、乗客ヲ檢セシモ怪シムヘキ者ヲ認めサリシヲ以テ解放シ、續テ哨戒セシモ異狀ナク、薄暮ヨリ前日ノ地點ニ假泊シ、七日、八日ノ兩日モ北泊地沖合ニテ巡邏監視ヲ爲シ、八日午後五時頃遙ニ二條ノ煤煙ヲ認めタリシカ、其ノ距離甚タ遠ク、且時漸ク日没ニ近ツキシヲ以テ、翌朝エリザベス岬附近ニ於テ之ト會合スル如ク行動スルニ若カスト爲シ、日没頃ヨリ迂路ヲ執リテ同岬ノ北東沖合ニ向ヒ、九日午前三時半同附近ニ達

セシモ、豫期ト違ヒ會スルヲ得サリシヲ以テ、一旦北泊地ニ歸リ、夕刻ヨリ歸途ニ就キシカ、十一日ハ朝來晴雨計著シク降り、風力漸次増加シテ天候益々不穩トナルノ兆候アリシヲ以テ、同日午後海豹島ニ寄港視察スル豫定ナリシモ之ヲ中止シテ、十二日午後コルサコフニ歸港セリ、

第十三目 警戒配備

第一款 津輕海峽及ヒ小樽方面

出羽第四艦隊司令長官ハ、明治三十八年七月二十七日アレキサンドロフスキニ於テ、片岡第三艦隊司令長官ヨリ、大湊ヲ本根據地トシテ、津輕海峽及ヒ北緯四十五度以南、同四十二度以北ノ哨戒警備ニ任スヘキノ命ヲ受ケ、尙當分ノ間水雷母艦春日丸ヲ其ノ指揮下ニ屬セシメラレタルヲ以テ、二十八日麾下ニ向ヒ、左ノ命令ヲ發シタリ、

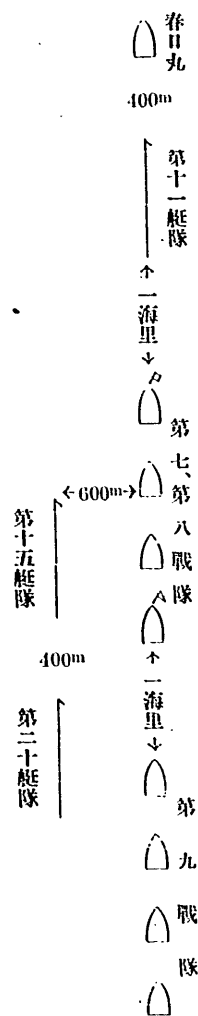
一、北遣艦隊機密第一一一號命令(編者曰ク本命令ハ本節第一目ニ掲グ)ニ基キ當艦隊ハ本根據地大湊ニ回航セン

トス

二、艦隊ハ明二十九日午後二時出港シ先ツ小樽ニ直航ス

三、航行序列竝ニ速力左ノ如シ

航行序列



原速力 八海里 微速力 五海里

四、艦隊出港後適宜ノ時機ニ於テ解列シ第九戰隊ハ先任艦長ノ指揮下ニ春日丸ハ第十一艇隊ト共ニ各隊獨立ニ回航セシム

各隊ハ小樽到着後成ルヘク速ニ炭水ヲ補充シ命ヲ待ツヘシ

五、解列後本職ハ第七第八戰隊及ヒ第十五第二十艇隊ヲ直率シ三十一日午後二時小樽著ノ豫定ヲ以テ原速十湊ニテ行進ス

六、本航海中水雷艇隊ニ炭水ノ補給ヲ要スル場合ニハ左ノ配置ニ依リ第七第八戰隊ノ諸艦ハ母艦ノ任務ヲ擔當スヘシ

嚴島 雲雀

鎮遠 鵠 鵜

松島 第六十五號 第六十二號

橋立 第六十四號 第六十三號

(丁隊機密第
一二五號)

次テ二十九日午後二時、出羽第四艦隊司令長官ハ、豫定ノ如ク諸隊ヲ率非テアレキサンドロフスキーク出發シ、三時ヨリ春日丸、第十一艇隊並ニ第九戰隊(同戰隊中宇治ノミハ運送船「シヤム」號ニ與フ三十分近藤岬ニ到リシカ同船同岬ニ居ラサリシカ爲メ更ニ稚内ニ向ヒ三十一日午後九時二)ヲ解列シテ先航セシメ、十二分同港ニ入り「シヤム」號ニ會シ其ノ任ヲ果シタル後三十一日小樽ニテ本隊ニ復セリ)ヲ解列シテ先航セシメ、三十一日午後各隊相前後シテ小樽ニ入り、出羽司令長官ハ、更ニ左ノ訓令ヲ發セリ、

一、浦鹽艦隊ノ狀況ニ就テハ更ニ得ル所ナシ

我カ樺太占領軍ノ兵站基地ハ青森及ヒ小樽ニ選定セラレタリ

二、第四艦隊ハ敵國軍資ノ輸入ヲ杜絶シ樺太占領軍ノ兵站線ヲ警護スルノ目的ヲ以テ津輕海峽及ヒ其ノ以北北緯四十五度ノ線ニ至ル北州沿岸ヲ監視警戒セントス

三、津輕海峽及ヒ沿岸ノ哨戒法並ニ之ニ服スヘキ艦艇ノ順序等ハ時々日令ヲ以テ示達ス

四、各艦艇ハ此ノ際哨戒勤務ノ餘暇ヲ以テ成ルヘク速ニ機械及ヒ罐ノ手入ヲ施行スヘシ但其ノ著手並ニ終了ノ際ハ之ヲ報告スルヲ要ス

五、前號機關手入中ニアラサル艦艇ハ受命後二時間ニシテ出動シ五分ノ一ノ速力ヲ出シ得ル準備ヲ爲シアルヘシ

六、各艦艇ハ哨戒勤務中ノモノト否トヲ問ハス勉メテ教育訓練ヲ施行シ特ニ今回戰役ノ實験ニ徴シ在來規定ノ部署操式等ニ改正ヲ加フヘキ諸點ハ此ノ際良ク研究實習シ置クヘシ又哨戒巡航ノ機ヲ利用シ初級將校ヲシテ航海術ノ實習ヲ爲サシムヘシ(丁隊機密第
一三〇號)

之ト同時ニ、警戒配備ヲ左ノ如ク定メタリ、

一、津輕海峽及ヒ北州沿岸哨戒法ヲ左ノ如ク定ム

哨區名稱	哨	戒	線	根據地	炭水補充地	哨	艦	ノ	行	動
石狩哨區	神威岬ヨリN一四二地點 (編者曰ク神威岬ノ北方五 十海里ナリ)ニ至ル線			小樽	小樽		早朝根據地ヲ發シ成ル可ク神威岬望樓ト無線電信ノ聯 絡ヲ保チツ、哨戒線ヲ巡航シ夕刻歸港シ夜間ハ根據地 ニ歸泊ス			

哨區名稱	哨戒線	根據地	炭水補給地	哨艦ノ行動
西口中央哨區	津輕海峽西口第四、第六警戒線間ノ中央警戒線	大湊函館		一、早朝根據地ヲ發シ正午IB地點附近ニテ前哨艦ト交代シ更ニIB地點ニ進ミ其間ハ其ノ附近ニ於テ哨戒シ日没ヨリ中央警戒線上ヲ西航シ適宜ノ時針路ヲ反轉シテ翌日出時IB地點ニ達スル如ク行動ス 二、數日連續哨戒勤務ニ服スル場合ニハ其間ハ常ニIB地點附近ヲ警戒シ日没ヨリ前哨ノ行動ヲ繰返シ交代ノ日ハ正午迄ニIB地點ニ復歸ス 三、哨戒勤務ヲ終リ次直艦ト交代シタル艦ハ函館ニ直行シ炭水補給ヲ終リタル後根據地ニ回航ス
惠山哨區	細目ハ函館到達後之ヲ定ム			
龍飛哨區				

二、哨艦ハ必要ニ際シ即時五分ノ一ノ速力ヲ出スコトヲ得一時間ノ後ニハ全力ヲ出シ得ル如ク準備シ置クヘシ

三、哨艦敵ヲ發見セハ彼我兵力ノ優劣ニ鑑ミ適宜行動シ勉メテ速ニ本職ニ報告スルト同時ニ附近艦艇ニ通報シ且我カ商船ニ對シ警告ヲ與フヘシ

哨艦ヨリ本職ニ宛テ發送スル電報ハ總テ津輕海峽防禦司令部氣付ニテ打電スヘシ

四、當分ノ内左ノ如ク哨艦ヲ配備ス

石狩哨區

滿州丸 宇治(順序ハ先任艦長之ヲ定ム)

西口中央哨區

(イ)左ノ順序ヲ以テ交番ニ晝夜宛哨戒勤務ニ服スヘシ

鎮遠 松島 橋立 嚴島

(ロ)初回ノ哨艦タル鎮遠ハ艦隊津輕海峽到達ノ日ヲ以テ哨區ニ就カシム

海峽哨區(惠山哨區龍飛哨區ヲ總稱ス) 第九戰隊(宇治)艇隊

哨戒勤務ノ配置及ヒ順序ハ函館到達ノ後之ヲ定ム

(丁隊日令第九號)

尙小樽在泊中ノ哨戒方法及ヒ各隊ノ函館回航ヲ規定スルコト左ノ如シ、

一、當港在泊中ノ各艇隊ヲ通シテ哨艇二隻ヲ出シ日没ヨリ日出迄左ノ線上ヲ警戒監視セシムヘシ

一隻ハ 高島岬ヨリ北東微東八海里ニ至ル線上

一隻ハ 石狩川口ヨリ北西微西十海里ニ至ル線上

先任司令ハ其ノ順序ヲ定メ報告スヘシ

二、艦隊ハ八月三日夕刻迄ニ函館集合ノ目的ヲ以テ來二日早朝當地ヲ出發シ各隊獨立ニ回航セントス

三、第九戰隊(宇治)先任艦長及ヒ各艇隊司令ハ當地出發竝ニ函館到達ノ時刻ヲ豫定シ報告スヘシ

四、第七第八戰隊及ヒ春日丸ハ本職之ヲ率井二日午前七時出港シ三日午前函館ニ入港セントス

原速 十海里 微速 五海里

五、本航海中春日丸ハ第七第八戰隊ニ列セシメ其ノ艦船番號ヲ五番トス(丁隊日令第一〇號)

然ルニ八月一日鎮遠ノ汽機ニ故障ヲ生シタルヲ以テ、修理ノ爲メ直ニ函館ニ回航セシメ、(鎮遠日函館ニ入り直ニ修理ニ著手シテ)哨戒配備中、右哨區ヨリ滿州丸ヲ除キテ之ヲ西口中央哨區ニ加日之ヲ終リ八日ニ試運轉ヲ行ヘリ)哨戒配備中、右哨區ヨリ滿州丸ヲ除キテ之ヲ西口中央哨區ニ加ヘ、哨艦順序ヲ松島滿州丸、橋立、嚴島ト改メタリ、次テ二日ニ至リ、各戰隊及ヒ艇隊ハ豫定ノ如ク小樽ヲ發シテ函館ニ向ヒ、松島ハ奥尻島ノ南方ニ於テ列ヲ離レテ哨區ニ就キ、他艦艇ハ三日相前後シテ函館ニ入りシカ、同日出羽第四艦隊司令長官ハ、伊集院海軍軍令部長ヨリ左ノ電報ヲ受領セリ、

米國汽船「センテナアル」號露領ニコラエフスクヨリ室蘭ニ入港シ詳細問合セ中ノ旨津輕海峽防禦司令官ヨリ報告ニ接セリ貴官ハ適宜一艦ヲ急派シ同船ヲ臨檢セシメ且同船ニ就キ敵狀其ノ他參考ニ資スヘキ情報ヲ得シメラレシコトヲ希望ス

仍テ同司令長官ハ、直ニ荒川春日丸艦長ニ所要ノ訓令ヲ與ヘテ同任務ニ就カシム、(春日丸ハ即日室蘭ニ入り直ニ「センテナアル」號ノ臨檢ヲ行ヒシカ同船ハ漁業用貨物ヲ搭載シ桑港ヨリニコラエフスクニ行キタルモノニシテ今ヤ載貨ナク又同貨物ハ悉クニコラエフスクヲ距ル約六十五海里ノ沖ニテ受取ニ來レル千噸位ノ汽船ニ移載シタリトノコトニシテ敵情ニ就テハ一モ得)四日見島及ヒ沖島ハ艤裝修理ヲ了リテ佐世保ヨリ入港シ來リタルル所ナク五日函館ニ歸港セリ)又官ヲ以テ第七戰隊ノ編制ヲハ、第一小隊ヲ嚴島沖島、見島、第二小隊ヲ鎮遠、壹岐ト定メタリ、又官岡津輕海峽防禦司令官ト協議シ、津輕海峽哨區ニ於ル哨戒法ヲ左ノ如ク改正セリ、

一、丁隊日令第九號ノ哨戒法中海峽哨區ニ關スル部ヲ左ノ如ク定メ惠山、龍飛ノ兩哨區ハ官岡津輕海峽防禦司令官ノ區處ヲ受ケ服務セシム

哨區名稱	哨戒線	根據地	炭水補給地	哨艦ノ行動
惠山哨區	第三警戒線及ヒ第一警戒線	函館	函館	官岡津輕海峽防禦司令官ノ區處ヲ受ケ行動ス
龍飛哨區	第二警戒線及ヒ其ノ以四第警戒線ニ至ル中央線	函館	函館	官岡津輕海峽防禦司令官ノ區處ヲ受ケ行動ス
陸奥哨區	陸奥灣日明崎ヨリ大崎ニ至ル線	大湊	大湊	日没迄哨區ニ就キ得ル如ク根據地ヲ發シ夜中哨戒線ニ至リ適宜巡視シ主トシテ陸奥灣ニ入航スル船舶ニ對シテ警戒監視シ翌日天明ニ至リテ哨區ヲ去リ根據地ニ歸ル

二、惠山哨區、陸奥哨區ノ哨戒ニハ水雷艇隊ヲ一隊宛交番服務セシメ龍飛哨區ニハ第九戰隊

(宇治)ノ諸艦ヲシテ交番之ニ任セシム

但海峽哨區ノ哨戒開始ノ時期ハ更ニ令示ス

(丁隊日令第十三號)

尙此ノ日出羽司令長官ハ、矢代滿州丸艦長ニ向ヒ、來七日ノ哨戒ヲ終ラハ直ニ小樽ニ回航シ、宇治ト共ニ石狩哨區ニ行動スヘキヲ命シ、(時ニ滿州丸五日出港シ七日午前進ミテ津輕海峽ノ哨區ニ就キ八日早朝小石狩哨區ニ就クコトナシテ)又鎮遠艦長海軍大佐毛利一兵衛ニハ、戰利艦「バヤーン」曳船ノ爲メ、修理竣成次第佐世保ニ回航シ、聯合艦隊司令長官ノ指揮ヲ受クヘキノ訓令ヲ與ヘタリ、(此ノ命令ハ隊司令長官ヨリ電命アリタルニ基ケルモノナリ然ルニ六日ニ至リテ更ニ同司令長官ヨリ鎮遠ハ佐世保ニテ準備整ヒ次第大連灣ニ到リ回航任務ニ關シテハ旅順口鎮守府司令長官海軍大將柴山矢八ノ指揮ヲ受ケシムヘキ命ニ接シテ以テ此ノ旨ヲ鎮遠ニ傳達シ同艦ハ九日函館ヲ發シ佐世保ヲ經テ十七日青泥窪ニ入り二十三日同港外ヨリ「バヤーン」曳船キテ二十八日舞鶴ニ著シアレキサンドロフスキーニ歸港シテ本隊ニ合シタルハ九月十日ナリ)次テ五日ニ至リ、片岡司令長官ヨリ左ノ電訓アリ、

聯合艦隊司令長官ノ命ニ依リ春日丸ヲ竹敷ニ回航セシムヘシ當方面ニ於ル各水雷艇隊ノ母艦ヲ熊野丸トシ同艦及ヒ第九艇隊ヲ大湊ニ回航シ貴官ノ指揮下ニ入ヲシム

然ルニ當時春日丸ハ、汽機、汽罐ノ手入ニ著手シ居リシヲ以テ、之ヲ終リテ後、成ルヘク速ニ竹敷ニ回航セシムルコト、定メタリ、(然ルニ八日ニ至リテ伊集院軍司令部次長ヨリ春日丸ハ聯合艦隊司令官ト交官ハ熊野丸來著シ任務ヲ繼承セシメタル上横須賀ニ回航セシムルコトニ改メ同艦ハ)又見島ハ佐世保出發以來、腸室扶斯患者ノ發生絶エサルヲ以テ、完全ナル消毒ヲ行フカ爲メ舞鶴軍港ニ回航セシメ、(同艦ハ六日テ八日舞鶴ニ入り消毒ヲ行ヒタル後修理及ヒ小銃射的等ヲ行ヒ九月七日)第十五艇隊、第十一艇隊ニハ、大湊ニ出港シ小樽ヲ經テ十二日アレキサンドロフスキーニ著シ本隊ニ合セリ)於テ順次入渠シテ修理ニ著手セシメタリ、(修理ハ先ツ第十五艇隊ヨリ著手シ二十一日完成シ第十一艇隊ハ船ノカヲ以テシテハ四艇ノ修理ヲ完ウスルニ四週間餘ヲ要スヘキ現狀ナルヲ以テ横須賀及ヒ舞鶴ノ兩軍港ニ於テ修理セシムルコトニ改メ第二小隊(第七十四號、第七十五號)ハ十九日函館ヲ發シ二十一日舞鶴ニ著シタリシカ二十日附ヲ以テ同艇隊ハ第四艦隊ヨリ除カレ佐世保鎮守府警備艇ト爲リシヲ以テ二十三日同軍港ヲ發シ)七日出羽司令長官ハ片岡司令長官ヨリ、戰利艦、ボルターワノ回航掩護ニ充ツルカ爲メ滿州丸ヲ佐世保ニ回航シ、直接聯合艦隊司令長官ノ指揮ヲ受ケシムヘキ命ヲ受ケシヲ以テ、直ニ同艦ニ向ヒテ此ノ旨ヲ傳ヘ、來九日ヲ以テ佐世保ニ回航スヘキヲ命シ、(滿州丸ハ九日小樽ヲ發シテ十二日佐世保ニ著シ十八日出港シ二十日青シ曙ト共ニ同艦ヲ護衛シテ二十九日舞鶴ニ著シ其ノ任ヲ完ウセリ而テ九月)其ノ結果石狩哨區ハ宇治一隻ノ擔當ト爲レリ、八日熊野丸及ヒ第九艇隊ハ壽都ヨリ函館ニ著シ、又宮岡司令官ノ區處ヲ受ケテ哨戒勤務ニ服スヘキ第九戰隊(宇治)ハ、同日ヨリ龍飛哨區ニ就キ、惠山哨區ニ就クヘキ水雷艇隊ニ於テモ、第四艇隊先ツ之ニ當レリ、十一日從來第六驅逐隊中ニ在リテ第三艦隊ニ屬セル皐月及ヒ曉ハ、新ニ第十驅逐隊ト爲リテ第四艦隊ニ屬セシメラレタリ、(當時曉ハホルサコフ方面ニ在リテ哨戒ニ從事シ皐月ハ佐世保ニ在リテ修

理將ニ終ラントセシカ十二日片岡司令長官ヨリ(既ニシテ十四日ニ至ルヤ、出羽司令長官ハ、十七日以後ニ當分ノ間依然窮ラ之ヲ指揮スヘキ電命ニ接ヒリ)於ル哨戒勤務配置及ヒ順序ヲ左ノ如ク定メタリ、

一、本月十七日以後哨戒勤務ノ配置及ヒ順序左ノ如シ、

哨區		哨區		哨區		哨區		哨區		哨區	
哨區	哨艇	哨區	哨艇	哨區	哨艇	哨區	哨艇	哨區	哨艇	哨區	哨艇
宇治(臺南丸歸著迄一艦ニテ適宜哨戒ス)	十七日十八日十九日二十日二十一日二十二日二十三日二十四日二十五日二十六日二十七日二十八日二十九日三十日三十一日	嚴島	出	出	歸	出	出	出	歸	出	歸
西口	出	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸
中央	出	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸
飛龍	出	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸
摩耶	出	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸
赤城	出	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸
惠山	出	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸	出	歸
第十一艇隊	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨
第十五艇隊	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨
第九艇隊	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨	哨

越テ二十日同司令長官ハ、海軍軍務局長海軍中將齋藤實ヨリ、赤城、摩耶、鳥海、宇治、第一、第十、第十一、第十二、第二十艇隊ハ第四艦隊ヨリ除カレ、所管鎮守府ノ警備艦艇ト爲リタル旨ノ電報

アリシヲ以テ、二十一日之ヲ上記各艦艇隊ニ傳達シ、石狩哨區ハ宇治ニ代フルニ、當時オコツク海方面巡航中ニテ、遠カラス來著スヘキ臺南丸ヲ以テセント欲シ、同艦ニ在ル中尾司令官ニ向ヒ、豫メ此ノ旨ヲ訓令シ、宇治ノ外上記ノ艦艇ハ、二十三日ヨリ相前後シテ、各所管鎮守府軍港ニ向ヒ出發セリ、(宇治以下各艦艇ノ所屬軍港ニ到著ノ月日等ハ本節第一目ニ掲ケアリ)已ニシテ二十四日ニ至ルヤ、片岡司令官ハ、北海ニ於ル我カ重要ノ地點竝ニ新領土ノ哨戒警備、敵ノ軍資輸入杜絶ニ對スル用兵ノ利及ヒ教育訓練ノ便等ヲ計リテ艦隊ノ配置ヲ變更シ、(本節第二目參照)津輕海峽ノ哨戒ハ、東郷司令官ノ指揮下ニ第六戰隊(香港丸)及ヒ第九、第十五艇隊之ニ當リ、出羽司令官ハ第四艦隊(第十五艇)及ヒ第六驅逐隊ヲ率非テ北上シ、アレキサンドロフスキニ到リテ山田司令官ト交代シ、同地ヲ根據トシテ同方面ノ警戒ニ任シ、山田司令官ハ其ノ麾下ヲ率非テコルサコフニ回航シ、(山田司令官ハ七月三日ヨリ第五戰隊ノ第二小隊(日進、春日)及ヒ八幡丸第一驅逐隊ヲ指揮シアレキサンドロフスキ方面ノ哨戒勤務ニ在リタルナリ)片岡司令官ハ直率スル第一小隊(八雲)ニ合シ、第五戰隊香港丸、熊野丸、第一、第五驅逐隊ハ同司令官ノ指揮下ニ、宗谷海峽及ヒ樺太南部ノ哨戒ニ任スヘキコト、爲レリ、(第十驅逐隊ハ第四艦隊ニ復歸シ第六驅逐隊ハ臨時同艦隊ニ屬シ熊野丸、第九艇隊ハ第三艦隊ニ復歸シ第十五艇隊ハ臨時第四艦隊ヲ離レテ東郷司令官ノ指揮下ニ屬ス)是ニ於テ出羽司令官ハ、即日河瀬第九艇隊司令ニ向ヒ、明二十五日中ニ函館ニ回航シ、東郷司令官ノ來著迄官岡司令官ノ區處ヲ受ケ、津輕海峽ノ哨戒勤務ニ服スヘキコキ等ヲ命シ、二十五日ニハ中尾司令官ニ向ヒ、臺南丸ヲ率非アレキサンドロフスキニ回航シテ、本隊ニ合スヘキ旨ヲ訓令シタル後同日大湊ヲ發シ、函館、コルサコフヲ經テ、三十一日アレキサンドロフスキニ著シ、山田司令官ト交代セリ、

又東郷司令官ハ、須磨、和泉ヲ率非テ堪察加方面ノ行動ヲ終リ、八月二十五日午前コルサコフニ歸港シタリシニ、同日片岡司令官ヨリ左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、貴官ハ第六戰隊(香港丸)ヲ率非便宜當港ヲ發シE地點(編者曰ク)ニ回航シ北遣艦隊機密第

二九一號(編者曰ク本節第一目ニ掲ク)北遣艦隊命令第五號ノ任務ニ服スヘシ

二、貴官ノ宗谷海峽及ヒ同海峽西口外附近ノ警戒任務ハ明後二十七日ヲ以テ之ヲ解ク

(北遣艦隊機密第三〇三號)

仍テ同司令官ハ、二十六日左ノ訓令ヲ發シタリ、

一、當隊及ヒ第九、第十五艇隊ハ函館ヲ根據トシ津輕海峽及ヒ北緯四十五度以南、同四十二度以北ニ於ル日本海ヲ哨戒警備スルノ任務ヲ有ス

二、哨戒方法ヲ左ノ通り定ム

(イ)第六戰隊ハ一艦宛第一日午前六時E地點ヲ發シ津輕海峽西口中央幹線ヲ航シ日沒時I G地點ニ到リ之ヨリ北上シ第二日未明一〇五二地點(編者曰ク後志國辨慶岬ノ西方四十五海里ナリ)ヨリ再南下シ第六警戒線附近ヲ巡邏シ第三日午前十時第二警戒線ニ於テ次直艦ト交代シE地點ニ歸港スルモノトス

但哨艦勤務ハE地點到著ノ翌日和泉ヨリ開始ス

(ロ)須磨ハ哨艦勤務ニ出動セサルヲ例トス出動ノ際ハ隨時之ヲ令ス

(ハ)第九、第十五艇隊ハ先任艇隊司令所定ノ順序ニ依リ對艇ヲ以テ晝夜トモ第二警戒線

附近ヲ警戒スヘシ

但一晝夜交代トス

三、第六戰隊ハ時々北緯四十五度以南、同四十二度以北ノ海面ヲ巡邏シ小樽ニ回航スルコトアルヘシ此ノ場合ニ於テハ津輕海峽ハ專ラ艇隊ヲシテ警戒セシム

四、哨艦艇出動中ハ附近望樓ト聯絡ヲ保持スルヲ要ス

哨艦第二日第六警戒線附近ヲ巡邏スル時ハ可成龍飛崎望樓ト通信シ異狀ナキヤヲ報告スヘシ

五、艇隊ノ次直對艇ハ受命後一時間ニシテ出動シ得ル準備ヲ爲シ置クヘシ(六戰機密第一
一四九號)

然ルニ同日更ニ片岡司令長官ヨリ、千代田ヲ便宜横須賀ニ回航シ、完全ナル修理ヲ施行セシムヘキ旨ノ訓令アリシヲ以テ、東郷司令官ハ直ニ千代田艦長海軍大佐依仁親王ニ所要ノ訓令ヲ與ヘ、二十七日午後第六戰隊ヲ率非テコルサコフヲ出港シ函館ニ向ヒ、二十八日午後ヨリ千代田ヲ分離シテ横須賀ニ向ハシメ、(千代田ハ三十一日
横須賀ニ著セリ)他艦ハ二十九日函館ニ入り、豫定ノ如ク艇隊ハ同日ヨリ、哨艦ハ三十日ヨリ警戒ヲ開始セシカ、三十一日同司令官ハ更ニ左ノ命令ヲ發セリ、

一、第九、第十五艇隊ハ從來實施セル豫定ノ掃海研究事項ヲ了ル迄海峽西口警戒方法從前ノ通り施行スヘシ

二、津輕海峽防禦司令官麾下ノ艇隊ハ專ラ東口惠山哨區ヲ警戒スル筈ナリ

三、須磨ハ九月三日秋津洲ニ次キテ哨艦勤務ニ服スヘシ

(六戰日令
第三三號)

仍テ第九艇隊ハ、九月一日掃海法研究ノ爲メ大湊ニ回航シ、(第九艇隊ハ同日大湊ニ入り三日掃海實驗
ニ從事シ同地附近ニテ諸種ノ訓練及ヒ手
入ヲ爲シ六日函
館ニ歸港セリ)第十五艇隊モ同目的ヲ以テ七日同港ニ向ヒ、(第十五艇隊ハ同日掃海實驗ニ從事シタル後
大湊ニ入り翌八日ヨリ同地附近ニテ諸種ノ
訓練及ヒ手入ヲ爲シ十
二日函館ニ歸港セリ)同日東郷司令官ハ第六戰隊ヲ率非テ出港シ、八日小樽ニ入り、各艦ヲシテ交、
港外ニ於テ自差測定ヲ行ヒ、傍ヲ諸種ノ訓練ヲ施行セシメ、十一日六戰機密第一四九號命令中、
左ノ如ク改正セリ、

第二項

(イ)第六戰隊ハ一艦宛第一日午前六時E地點(編者曰ク
函館ナリ)ヲ發シ津輕海峽西口第二、第四警戒
線附近ニ到リ哨艇及ヒ龍飛望樓ト能ク聯絡ヲ保持シ適宜ノ行動ヲ爲シ專ラ密輸入船ヲ
警戒スヘシ

第三日午前六時哨區ヲ發シE地點ニ歸港ノ途次次直艦ト交代スルモノトス

又受命後一時間ニシテ出動シ得ル姿勢ニ在ラシメE地點ニ待命セシムルコトアルヘシ
此ノ場合ハ特令ス

(ハ)對艇ヲ以テ「一艇宛」ニ改ム

第四項ノ後段ヲ削除ス

第五項中ノ次直對艇ヲ次直艇ニ改ム

(六戰機密第一
四九號ノ二)

已ニシテ十三日午前同港ヲ發シテ、十五日函館ニ入り、(此ノ航海中艦隊運動ヲ行ヒ十三日夜ハ壽都港
ニ泊シ十四日午前聯合陸戰隊陸上操練ヲ行ヒ
午後出港シテ函館
ニ回航シタルナリ)翌日左ノ命令ヲ發シタリ、

- 一、須磨ハ明朝當港ヲ發シA地點(編者曰ク青森ナリ)ニ到リ十八日A地點(編者曰ク大湊ナリ)ニ回航ノ豫定ナリ
- 二、和泉ハ本日便宜A地點ニ回航シ十八日午前六時同地ヨリ哨區ニ就キ秋津洲ト交代シ二十一日未明哨區ヨリB地點(編者曰ク函館ナリ)ニ到リ石炭ヲ補充シ直ニA地點ニ來ルヘシ
- 三、秋津洲ハ本日正午ヨリ哨區ニ就キ十八日午前六時哨區ヲ發シA地點ニ到ルヘシ
- 四、第九艇隊ハ本日便宜A地點ニ回航スヘシ
- 五、第十五艇隊ハ(哨區ニ就クヘキ艇ヲ除キ)明朝便宜A地點ニ回航スヘシ
- 六、明十七日ハ黃海海戰記念日ニ付乗員ヲ休養シ祝意ヲ表セシムヘシ
- 七、哨艇任務ヲ了レハB地點ニ寄港シ各艦艇ノ郵便物等ヲ集メA地點ニ來ルモノトス

(六戰日令
第三六號)

是ニ於テ秋津洲ハ即日出港シテ哨區ニ向フ、次テ同司令官ハ出羽司令長官ノ命ニ依リ、十七日ヨリ麾下艦艇ノ根據地ヲ大湊ニ移セリ、(和泉、第九艇隊ハ十六日、第十五艇隊ハ十七日、須磨ハ十八日、秋津洲ハ十九日何レモ大湊ニ入港セリ)然ルニ二十日ニ至リ、片岡司令長官ヨリ、和泉ヲシテ第九、第十五艇隊ヲ率非横須賀ニ回航セシメ、和泉ハ同地ニ於テ、艇隊ハ海軍次官ノ指示スル所ノ工廠ニ於テ、各完全ナル修理ヲ施行セシムヘク、又香港丸ヲ其ノ指揮下ニ復歸セシムヘシトノ訓令ヲ受ケ、尙同日北遣艦隊機密第四五四號命令(本節第一目參照)ニ接シ、依然大湊ヲ根據トシテ第六戰隊(千代田、和泉ヲ缺ク)及ヒ第一驅逐隊ヲ指揮シ、津輕海峽方面ノ警備ニ任スルコト、爲リシヲ以テ、同日所要ノ訓令ヲ發シ、二十一日ヨリ和泉及ヒ

第九、第十五艇隊ノ哨戒任務ヲ解キ、便宜横須賀ニ回航スヘキヲ命シ、(和泉以下ハ二十二日出港、古釜石ヲ經テ二十六日横須賀ニ入)第一驅逐隊及ヒ香港丸ハ、何レモ當時コルサコフニ在ルヲ以テ、其ノ來著迄須磨、秋津洲ノ二艦ニテ哨戒ニ任シツ、アリシカ、二十三日香港丸來著セシヲ以テ、同日ヨリ同艦ヲ加ヘ、哨艦順序ヲ須磨、秋津洲、香港丸トシ、二十五日須磨、秋津洲ノ二艦ヲ率非テ出港シ、諸種ノ訓練ヲ施行シツ、青森ニ回航シ、(不在中香港丸ハ大湊ニ泊シ港務部所掌ノ事務ヲ掌ルヘキヲ命セリ)二十八日大湊ニ歸リシカ、越テ十月二日片岡司令長官ヨリ、第六驅逐隊及ヒ曉(當時コルサコフニ在リ)ヲ、當分其ノ指揮下ニ入ラシムヘキヲ以テ、到著ノ上ハ專ラ教育訓練ニ從事セシムヘシ、トノ電訓ヲ受ケシカ、(七日大湊ニ入港セリ)同驅逐隊ハ即日來著セシニ因リ、香港丸ノ次位ニ加ヘテ哨艦任務ニ服セシメ、又當分ノ間哨艦ハ大湊ニ於テ待命スヘキコト、爲シ、主トシテ教育訓練ヲ厲行セシメタリ、然ルニ九日ニ至リ片岡司令長官ヨリ、八幡丸、臺南丸ノ外艦隊ハ、來十六日ヲ期シ、館山灣ニ集合スヘシ、トノ命令(北遣艦隊機密第四節第一目)ニ接シタルヲ以テ、即日所要ノ訓令ヲ發シ、十二日須磨、秋津洲及ヒ香港丸ヲ率非、館山灣ニ向ヒ出港セリ、(第一、第六驅逐隊ハ十一日出港、館山灣ニ向ヒ先發セリ)

是ヨリ先キ九月二十六日、アレキサンドロフスキーニ在リテ同方面ノ警備ニ在リタル中尾司令官ハ、二十日附ナル北遣艦隊機密第四五四號命令(本節第一目參照)ヲ受領シ、尙同日出羽司令長官ヨリ、沖島(中尾司令官旗艦)見島、鎮遠ヲ率非テ小樽ニ回航シ、同灣ヲ根據トシテ同方面ノ警備ニ任シ、傍ヲ諸般ノ訓練ニ從事スヘキコト、當方面ノ警戒ハ躬ヲ滿州丸(出羽司令官旗艦)臺南丸ノ二艦ヲ指揮シテ之ニ任スヘキコト等ノ訓令ヲ受ケ、(但滿州丸、臺南丸ハ數日ノ後コルサコフニテ揚子江ノ修理ニ著手セシカ、二日ニ至リ出羽司令長官ハ片岡司令長官ヨリ第四艦隊ヲ率非當分ノ内小樽ヲ根據地

トシテ同方面ノ警備ニ任シ易メテ教育訓練ヲ履行スヘキ訓令ヲ受ケタルヲ以テ八日兩艦ヲ率非テ小樽ニ入リシニ九日
更ニ同司令長官ヨリ臺南丸ヲシテ當分青森若クハ函館ヲ根據トシテ津輕海峽ノ監視ニ任セシムヘキ訓令ヲ受領セリ
中尾司令官ハ即日出港シ、二十九日小樽ニ著シ、諸種ノ操練ヲ行ヒシカ、十月十日ニ至リテ出羽
司令長官ヨリ、左ノ命令ヲ受領セリ、

一、平和克復ノ上ハ艦隊ヲ東京灣ニ凱旋セシメラレ横濱沖ニ於テ觀艦式舉行ノコトニ内定
セラル

二、北遣艦隊ハ八幡丸ヲ宗谷海峽方面ニ臺南丸ヲ津輕海峽方面ニ留メ各其ノ海峽ノ監視ニ
任セシメ其ノ他ハ來十六日ヲ期シ館山灣ニ集合ノ筈

三、臺南丸ハ本日當地(編者曰ク小樽ナリ)出發大湊ニ直航シ、東郷第三艦隊司令官ヨリ津輕海峽方面警
備ノ任務ヲ繼承シ爾後何分ノ命アル迄青森ヲ根據トシ前號ノ任務ニ服スヘシ

四、本職ハ第七戰隊ヲ率非明十一日午前十一時當地出發館山ニ直航ス(航行速力十海里)

五、本航海中戰隊ハ主トシテ中尾司令官ヲシテ嚮導セシメ旗艦滿州丸ハ列中若クハ列外ニ
於テ便宜ノ位置ヲ執ル

然ルニ幾モナク出羽司令長官ハ、聯合艦隊司令長官ヨリ、伊勢灣ニ回航スヘキ訓令ヲ受ケシヲ
以テ、十一日午前旗艦滿州丸ノミヲ率非テ單獨津ニ向ヒ、中尾司令官ハ第七戰隊ヲ率非テ館山
灣ニ向ヒ、何レモ小樽ヲ出港セリ、

第二款 樺太南部及ヒ宗谷海峽方面

北遣艦隊ハ七月二十七日ヲ以テ、樺太占領軍ニ對スル應援助力ノ任務ヲ終リタルニ因リ、アレ

キサンドロフスキーニ在ル片岡第三艦隊司令長官ハ、第三艦隊ヲシテ千歲灣ヲ本根據地トシ、
宗谷海峽及ヒ樺太ノ哨戒警備ニ任セシムルコト、爲シ、アレキサンドロフスキーニハ、山田第
三艦隊司令官ノ指揮下ニ、第五戰隊ノ第二小隊タル日進(同司令官旗艦)春日及ヒ八幡丸、第一驅逐隊、給
炭船彦山丸ヲ留メ、其ノ他ノ諸隊ハ悉クコルサコフ方面ニ集ムルコト、爲セリ、是ニ於テ東郷
第三艦隊司令官ノ率非ル第六戰隊及ヒ第五驅逐隊ノ第一小隊(不知火)ハ八月一日ニ、第五戰隊
ノ第一小隊タル八雲(片岡司令官旗艦)吾妻及ヒ八重山、第五驅逐隊ノ第二小隊(夕霧)ハ三日ニ、何レモ
アレキサンドロフスキーヲ發シ、五日相前後シテコルサコフニ入港シ、(第六戰隊不知火、叢雲ハ此ノ途
次ポート・イム・ペラトリスカヤ
ヨリ北緯四十六度ニ至ル黒龍江沿岸州沿岸ヲ偵察スヘキ等ナリシ
モ連日濃霧アリシカ爲メ遂ニ其ノ任務ヲ遂クルコト能ハサリキ)片岡司令長官ハ同地ニ於ル艦下艦艇ノ豫定
錨泊位置ヲ定メ、(卷末附圖ニ掲ク)又東郷司令官ハ麾下ニ向ヒ、左ノ訓令ヲ發シタリ、(但コルサコフトアレキ
丸ヲ以テス)

一、第六戰隊及ヒ第五驅逐隊ハ北遣艦隊機密第一三七號(編者曰ク本命令ハ
本節第一目ニ掲ク)ニ依リ宗谷海峽及
ヒ同西口外附近ヲ警戒スルノ任務ヲ有ス

二、須磨(編者曰ク東郷司令官旗艦)及ヒ和泉ハ本職之ヲ率非約三週間ヲ以テ明後七日遼察加方面ニ出動ス
ルノ豫定ナリ

三、本職不在中ハ首席艦長ノ指揮下ニ在リテ左ノ要領ニ依リ第一項ノ任務ニ服スヘシ

四、警戒區域方法及ヒ順序左ノ通り定ム

順序

- 一、千代田及ヒ第五驅逐隊第一小隊
 - 二、秋津洲及ヒ第五驅逐隊第二小隊
- 警戒區域

海馬島ト禮文島ヲ連ヌル一線(編者曰ク第四警戒線ナリ)ト宗谷岬ト近藤岬ヲ連ヌル一線(編者曰ク第二警戒線ナリ)ト

但右ノ如ク定ムルト雖モ時トシテハ驅逐艦ヲ其以外ニ派遣シ樺太西岸ニ渡來スル本邦人ヲ取締ラシムヘシ

警戒方法

哨艦ハ首席將校之ヲ率井正午第二警戒線ニ於テ交代スル如クK地點(編者曰クコレヲサコフナリ)ヲ發スヘシ

哨艦ノ交代ヲ二日トス

哨艦出動中ハ哨區ヲ巡邏シ附近ノ望樓ト聯絡ヲ保持スヘシ天候ノ如何ニヨリテハ常ニ哨區ヲ巡航スルヲ要セス又常ニ全艦同時ニ出動スルニ及ハス

五、千代田、秋津洲ハ左ノ人員ヲ可成速ニ宗谷岬ニ派遣セシムヘシ

秋津洲

松下水雷長(編者曰ク海軍大尉松下芳藏ナリ)

千代田

秋津洲

可成無線電信證狀ヲ有スルモノ

以上ノ人員ハ寢具ヲ携帯セシムルヲ要ス

給與ハ金給ヲ便ナリトス

六、松下秋津洲水雷長ハ千代田及ヒ秋津洲ヨリ選出セル人員ヲ指揮シ宗谷岬望樓ニ到リ同

望樓無線電信機ノ狀態ヲ檢查シ其ノ通信距離三十海里以上ニ達セサル原因ヲ調査シ尙

其ノ改善ノ方法ヲ研究シ之ヲ片岡第三艦隊司令長官ニ報告スヘシ(編者曰ク是片岡司令長官ノ訓令ニ基キタルモノナリ)

リ

(六戰日令第三〇號)

斯テ六日右ノ哨艦ハ第一項ヨリ哨戒ヲ開始シ、次直ノ哨艦ハ、受命後二時間以内ニ二十海里ノ速力

ヲ出シ得ル如ク準備ヲ整ヘツ、待命シ、東郷司令官ハ豫定ヲ繰リ上ケ、同夜八時ヨリ須磨、和泉

ヲ率井テ堪察加方面ニ行動シ、(本節第五目ニ詳ナリ)八雲、吾妻、八重山ハコレヲサコフニ在リテ警戒シツ、

待命シ、傍ラ六時間以内ニ復舊シ得ル程度ノ各部ノ開放檢査竝ニ手入ニ從事セリ、越テ二十

五日ニ至リ、東郷司令官ハ片岡司令長官ヨリ、第六戰隊(香港丸)及ヒ第九、第十五艇隊ヲ指揮シ、

函館ヲ根據トシテ津輕海峽方面ヲ哨戒警備スヘキ命ヲ受ケ、宗谷方面及ヒ樺太南部ノ警戒ハ

第五戰隊、第五驅逐隊、香港丸(香港丸ハ此ノ時コレヲサコフニ在リシモ修理ヲ要スル箇所アリテ二十八日函館ニ發シ小樽ヲ經テ十五日コレヲサコフニ入港セシモ幾モナク命ヲ受ケ二十一日東郷司令官熊野丸ハ此ノ時大湊ニア

官ノ指揮下ニ復スル爲メ出港シ二十三日大湊ニ入港セルヲ以テ終ニ警戒ニ從事セス)熊野丸ハ此ノ時大湊ニア

キ伊集院軍令部長ノ乗艦ニ充テラレ二十五日出港シ函館ヲ經テ二十七日青森ニ著シ二十八日軍令部長ヲ乗セテ九月

二十六日迄同官ノ指揮下ニ行動シ尋テ品川回航ノ命ニ依リ同日青森ヲ發シテ二十八日同海ニ入港セルヲ以テ遂ニ警戒ニ

從事)第一驅逐隊同驅逐隊ハ此ノ時アレキサンドロフスキー方面ニ在リ其ノ第二小隊、春南ハ九月四日ニ第一小隊

ニ六日ヨリ二十五日迄行動ヲ共ニ第二小隊ハ一隻宛交代シテ機關ノ手入ニ從事シ他ノ之ニ任スヘキコト、爲

リ、同日第五驅逐隊司令ハ同司令長官ヨリ、左ノ訓令ヲ受領セリ、

一、當分ノ間其ノ隊ヨリ順次驅逐艦一隻ヲ宗谷海峽ニ出シ晝夜第二警戒線附近ニ哨戒セシメ他ノ一隻ハ當港ニ在リテ受命後一時間以内ニ出動シ得ルノ準備ヲ爲シアルヘシ其ノ方法順序等ハ適宜之ヲ定ムヘシ

二、天候不良ナル時ハ便宜海峽附近ノ港灣ニ避泊セシムルコトヲ得

二、明後二十七日ヨリ之ヲ實施スヘシ

(北道艦隊機密
第三〇五號)

是ニ於テ東郷司令官ハ、二十七日午後第六戰隊ヲ率非テコルサコフヲ去リ、同日ヨリ第五驅逐隊專ラ同方面ノ警戒ニ任シタリシカ、越テ九月五日ニ至リ、同驅逐隊ハ第五戰隊(八重山)ト共ニ、七日午前七時ヨリ約六日間ノ豫定ヲ以テ、教育訓練ノ爲メ近海ニ出動スルコト、爲リ、尙本行動結了後叢雲ハ、横須賀ヲ經テ佐世保ニ派遣シ、成ルヘク速ニ完全ナル修理ヲ施行セシムヘキ訓令ヲ受ケタリ、斯テ同驅逐隊ハ、七日ヨリ同司令長官ノ指揮下ニ第五戰隊(春日)ト共ニ、修理ノ爲メ横須賀ヲ經テ吳軍港ニ向ヘリト共ニコルサコフヲ發シテ諸操練ニ從事シ、八日午後小樽ニ入りシカ、偶片岡司令官ハ大本營ヨリ、上京登營スヘキノ命ヲ受ケシヲ以テ、同隊ハ山田司令官ノ指揮下ニ置カレ、叢雲ハ同日函館ヲ經テ横須賀ニ向ヒ、第五戰隊(八重山)春日、八日午後小樽ヲ發シ、十二日青森ニ著シテ日コルサコフニ入ル、第五驅逐隊(叢雲)ハ十一日同司令官ノ指揮下ニ於テ同港ヲ發進シ、豫定行動ヲ終リテ十二日午後コルサコフニ歸港シ、十三日ヨリ復以前ノ哨戒ニ服セリ、蓋山田司令官ハ八月三十一日アレキサンドロフスキー方面ノ哨戒任務ヲ出羽司令長官ニ引繼キ、九月三日早朝日進、

(同司令官)春日及ヒ第一驅逐隊ノ第二小隊、春雨ヲ率非テアレキサンドロフスキーヲ發シ、(第一驅逐隊)春日及ヒ第一驅逐隊ノ第二小隊、春雨ヲ率非テアレキサンドロフスキーヲ發シ、

隊ノ第一小隊吹雪有明ハ視察ノ爲メニ來レル伊集院軍司令部次長ノ乘艦熊野丸隨行行動中ナリ又出羽司令長官ニ任務繼承後直ニ出港セシテ九月三日迄留リシハ其ノ當時恰モ震春雨ハ解放露國民ヲ乘セタル陸軍運送船ヲカストリー灣ニ輸送揚陸援助中ニテ在ラス二日)四日午後コルサコフニ入港シ、片岡司令長官ノ直接指揮下ニ復歸シ、七日ニ歸港シタルヲ以テナリ

ヨリ前記ノ如ク行動シタルナリ、而テ此ノ行動中、八重山及ヒ有明、春雨ハコルサコフ方面ノ警戒ニ任セリ、已ニシテ十七日片岡司令長官ハ東京ヨリ歸リ、青森ニテ八雲ニ乘艦シ、二十日午前コルサコフニ入り、同日ヨリ一時宗谷海峽ノ哨戒ヲ撤シ、有明、吹雪中ノ一隻ヲシテ、受命後一時

間以内ニ於テ、十海里ノ速力ヲ出シテ出動シ得ルノ準備ヲ成シ置カシムルニ止メ、又北道艦隊機密第四五四號北道艦隊命令(本節第一)ヲ發シテ、警戒配備ヲ改メタリ、即チコルサコフ方面ノ

警戒ハ、同司令長官第五戰隊、(春日、八重山、缺ク八重山ハ修理ノ爲メ十七日コルサコフニ入港セリ)第六驅逐隊及ヒ曉ヲ率非、同港ヲ根據トシテ之ニ當ルコト、爲レリ、(第一驅逐隊及ヒ香港丸ハ東郷司令官ノ指揮下ニ入り津輕海峽

スル工廠ニ於テ修理ニ著手スヘキヲ命セラレ相前後シテコルサコフヲ出發セリ又第六驅逐隊及ヒ曉ハ此ノ時アレキサンドロフスキー方面ニ在リシヲ以テ二十三日同地ヲ發シ二十四日コルサコフニ入港セリ是ニ於テ片岡司令長官ハ同驅逐隊中一艦ヲ、ヲシテ受命後二時間以内ニ出動シ十海里ノ速力ヲ出シ得)次テ二十四日同司令長官ハ、八幡丸ヲシ

テ、當分宗谷海峽ヲ根據トシ、コルサコフニ在ル八雲又ハ宗谷望樓ノ無線電信ト通信聯絡ヲ保チツ、適宜同海峽附近ヲ巡航セシム、是則チ當時島村司令官ノ露國委員ト休戰條款ヲ協定スルノ際、同委員長イエスセン少將ノ請願ニ應シ、特ニ許容セル糧食ト日用品トヲ搭載シテ、浦鹽斯德ヨリペトロパウロウスクニ航スル露國運送船一隻ヲ逸セサル様監視セシメ、之ニ會セ

ハ臨檢シ、指示以外ノ物品ヲ輸送スルノ行爲アラハ、之ヲ抑留セシメント欲セルヲ以テナリ、是ニ於テ八幡丸ハ、即日出港シテ其ノ任務ニ就キ、十月一日一旦コルサコフニ歸港シタリシニ、四日近藤岬望樓ヨリ、一露國汽船海峽ヲ東過ストノ報ヲ得タルヲ以テ直ニ出港シ、重藏岬ノ南西約十海里ニテ之ニ追及シ臨檢セシニ、果シテ島村司令官ノ通航免狀ヲ有スル露國政府ノ運送船「アングン」號ナリシカ、指示以外ノ物品ヲ搭載シ居ラサリシヲ以テ解放セリ、越テ八日ニ至リ、片岡司令長官ハ伊東軍令部長ヨリ、平和克復ノ上ハ艦隊ハ東京海灣ニ凱旋セシメ、横濱沖ニテ觀艦式舉行ノコトニ内定セラレタルニ因リ、津輕、宗谷ノ監哨ニ任スル大汽力艦船ヲ除キ、他ハ皆便宜横濱以外ノ東京海灣諸錨地又ハ館山灣、清水港等ニ凱旋セシムヘシ、トノ電命アリシヲ以テ、九日北遣艦隊機密第四九七號命令(本節第一目參照)ヲ發シ、宗谷海峽ノ監哨ニハ八幡丸一隻ヲ留ムルコトニ決シ、同日川合同艦長長ニ此ノ旨ヲ傳ヘ、十日同司令長官ハ、八雲、吾妻、日進ヲ率非、館山ニ回航スルノ目的ヲ以テコルサコフヲ出港シ、十二日青森ニ寄港中、聯合艦隊司令長官ヨリ伊勢灣ニ來會スヘキ命ヲ受ケ、十三日同灣ニ向ヒ出港セリ、

第三款 アレキサンドロフスキー方面

北遣艦隊中、七月二十七日樺太北部占領軍ノアレキサンドロフスキー上陸以來、引續キ同方面ニ留リテ哨戒ニ任セシハ、山田第三艦隊司令官ノ率非ル第五戰隊ノ第二小隊タル日進(同司令官旗艦)、春日及ヒ八幡丸第一驅逐隊ナリトス、而テ山田司令官ハ、第一驅逐隊ヲシテ間宮海峽ニ出テ、警

戒ニ任セシムルト同時ニ、同方面ノ陸上偵察竝ニ水路探究ニ從事セシメ、又傍ラ日進、春日ノ航海長以下ヲ委員トシテ、同港附近海圖ノ補測ヲモ行ハシメ、八月十二日ヨリハ引續キ、同驅逐隊ニ命シテ半數ハ警戒ニ從事シ、通信聯絡ヲ保持セシメツ、他ノ半數ヲ以テ或ハボゴビ角附近、或ハラザレバ角以北ニ於ル黑龍江沿岸水道ノ航路探究、竝ニ同沿岸ノ敵情偵察ヲ行ハシメ、或ハ解放露國民ノ輸送掩護、揚陸援助等種々ノ行動ニ從事セシメタリシカ、(第一驅逐隊ノ上記及ヒ第九目詳ナリ)二十四日ニ至リテ片岡司令長官ヨリ、日進、春日、第一驅逐隊ヲ率非コルサコフニ歸港スヘシトノ命ヲ受ケ、三十一日交代トシテ出羽第四艦隊司令長官到著セシヲ以テ、之ニ其ノ任務ヲ引繼キ、九月三日早朝日進、春日、第一驅逐隊ノ第二小隊霞、春雨(第一小隊ノ吹雪、有明ハ伊集院軍令部ヲ共ニシ)ヲ率非テ出港シ、四日午後コルサコフニ入り、片岡司令長官ノ直接指揮下ニ復歸セリ、

是ヨリ先キ八月二十四日、出羽第四艦隊司令長官ハ、北遣艦隊機密第二九一號命令(本節第一目參照)ヲ受領シ、第四艦隊(鎮遠第十五艇)及ヒ第六驅逐隊(第六驅逐隊ハ神風、初霜、潮瀨生ノ四隻ニシテ第十驅逐隊ノ早瀬、現ニ樺太方面ニ在ルハ潮瀨生月ノ三隻ナリトス)ニテ山田司令官ト交代シ、アレキサンドロフスキー方面ノ警戒任務ニ服スヘキコト、爲リシヲ以テ、二十五日左ノ訓令ヲ發シタリ、

一、北遣艦隊諸部隊ノ配備ヲ左ノ如ク變更セラル

(イ)第五戰隊、香港丸熊野丸第一、第五驅逐隊ハ千歲灣ヲ本根據地トシ宗谷海峽及ヒ薩哈

津島南部ノ哨戒警備ニ任ス

(ロ)第六戰隊^(香港丸)及ヒ第九第十五艇隊ハ函館ヲ根據地トシ津輕海峽ノ哨戒ニ任ス
(ハ)第四艦隊^(第十五艇)及ヒ第六驅逐隊ハアレキサンドル港ヲ根據地トシ同方面ノ警備ニ任ス

二、本職ハ當方面ニ在ル麾下ノ諸艦ヲ率非明二十六日午前十時當地出發途次九春古丹ニ到リ白井侍從武官ヲ迎ヘタル後アレキサンドルニ回航シ山田第三艦隊司令官ト交代シ同方面ノ警備ニ任セントス

三、目下第七第八戰隊ノ過半修理中若クハ特別任務ニ服スルノ現況ト現任務ノ需ニ應スル爲メ當分兩戰隊ヲ合シテ本職之ヲ直率ス

四、第十五艇隊ハ宮岡津輕海峽防禦司令官ノ區處ヲ受ケ現任務ヲ續行シ東郷第三艦隊司令官著ノ上ハ同官ノ指揮下ニ入ルヘシ

五、修理中若クハ特別任務ニ服スル諸艦ハ事故終了ノ上ハ成ルヘク速ニ本隊ニ來會スヘシ

(丁隊機密第一七四號)

艦隊區分

(一)松島

(二)沖島

(三)橋立

原速

十海里

而テ同司令長官ハ二十五日嚴島、沖島ヲ率非、大湊ヨリ函館ニ回航シテ松島、橋立ヲ合セ、同日

旗艦ヲ松島ニ移シ、二十六日嚴島ヲシテ修理ノ爲メ横須賀ニ回航セシメ、^(二十八日横須賀ニ著シ直ニ修理ニ著手セリ)松島、沖島、橋立ヲ率非テ出港シ、コルサコフヲ經テ三十一日アレキサンドロフスキーニ入り、山田司令官ヨリ警戒任務ヲ繼承シ、第六驅逐隊モ亦二十八日早朝コルサコフヲ發シ、マウカ、ノダサシ、クスンナイヲ經テ、同シク三十一日アレキサンドロフスキーニ入港セシヲ以テ、同日左ノ命令ヲ發シタリ、

一、浦鹽艦隊及ヒ在ニコラエフスク兵力ノ現情ニ就テハ北遣艦隊告示第三十九號及ヒ第四十號所載ノ外得ル所ナシ從テ浦鹽艦隊竝ニニコラエフスク水雷艇隊ハ今ヤ隨時活動シ得ルモノト認ムルヲ要ス

又敵ハ依然ニコラエフスクヲ經テ軍費輸送ヲ企圖シツ、アルカ如シ

二、第四艦隊^(第十五艇隊ヲ缺キ第六驅逐隊ヲ加フ)ハアレキサンドル港ヲ根據地トシ當方面ノ警備ニ任ス其ノ警戒配備等ハ別ニ日令ヲ以テ示達ス

三、現ニ哨戒勤務ニ服スル艦ハ常ニ十海里ノ速力ニ對スル汽力ヲ保チ一時間ノ後全力ヲ出シ得ヘク其ノ他ノ艦ハ受命後一時間以内ニ出動シ二時間ノ後全力ヲ出シ得ル如ク準備シアルヘシ

四、碇泊若クハ航海中ヲ論セス内膳砲射撃ヲ厲行シ射撃術竝ニ其ノ指揮法ノ訓練ヲ爲スヘシ

(丁隊機密第一七五號)

之ト同時ニ又警戒配備ヲ左ノ如ク定メタリ、

一、N地點方面ノ警戒配備ヲ定ムルコト左ノ如シ

名 稱	哨 戒 線	目 的	哨 艦	行 動
北 方 哨 區	三〇九地點(編者曰ク海州シユラカム岬ノ東方約七海里ナリ)ト三二五地點(編者曰クシユラカム岬ノ東方約二十五海里ナリ)ヲ連ナル直線上	主トシテ敵艦ノ侵入ヲ監視シ、必要時ハ攻撃ス	三〇九地點(編者曰ク海州シユラカム岬ノ東方約七海里ナリ)ト三二五地點(編者曰クシユラカム岬ノ東方約二十五海里ナリ)ヲ連ナル直線上	一、早朝N地點ヲ發シ正午二四四地點(編者曰クアレキサンドロフスキーノ南西四十海里ナリ)附近ニテ前哨艦ト交代シ哨戒線ニ違ハ其ノ中央附近ニ漂泊ス。ハ徐航シ日没時三三三地點ヨリ日出時二六二地點(編者曰クアレキサンドロフスキーノ西微南四分ノ三三三地點ヨリ)ニ達スル如ク適宜北航ス。二、日出時ヨリ七海里ノ速力ヲ以テ南航シ三三三地點ヲ經テ哨戒線中央附近ニ至リ爾後前哨艦ト交代ス。三、次直哨艦根拠地ニ出發セハ適宜無線電信ヲ以テ前哨艦ニ其ノ旨ヲ通報スヘシ。四、次直哨艦根拠地ニ出發セハ適宜無線電信ヲ以テ前哨艦ニ其ノ旨ヲ通報スヘシ。
南 方 哨 區	三〇九地點(編者曰ク海州シユラカム岬ノ東方約七海里ナリ)ト三二五地點(編者曰クシユラカム岬ノ東方約二十五海里ナリ)ヲ連ナル直線上	主トシテ敵艦ノ侵入ヲ監視シ、必要時ハ攻撃ス	三〇九地點(編者曰ク海州シユラカム岬ノ東方約七海里ナリ)ト三二五地點(編者曰クシユラカム岬ノ東方約二十五海里ナリ)ヲ連ナル直線上	一、早朝N地點ヲ發シ正午三三〇地點(編者曰クアレキサンドロフスキーノ北東微東二十三海里ナリ)附近ニテ前哨艦ト交代シ哨戒線ニ違ハ其ノ中央附近ニ漂泊ス。ハ徐航シ日没時三三三地點ヨリ日出時二六二地點(編者曰クアレキサンドロフスキーノ西微南四分ノ三三三地點ヨリ)ニ達スル如ク適宜北航ス。二、日出時ヨリ七海里ノ速力ヲ以テ南航シ三三三地點ヲ經テ哨戒線中央附近ニ至リ爾後前哨艦ト交代ス。三、次直哨艦根拠地ニ出發セハ適宜無線電信ヲ以テ前哨艦ニ其ノ旨ヲ通報スヘシ。四、次直哨艦根拠地ニ出發セハ適宜無線電信ヲ以テ前哨艦ニ其ノ旨ヲ通報スヘシ。
備 考	一、哨艦敵艦艇ノ近邊ヲ報スルニハ無線電信其ノ他ノ通信法ニ依ルノ外左ノ信號ヲ爲スヘシ 敵ノ軍艦 火箭二發又ハ探海燈ヲ上下ニ振ル 敵ノ驅逐艦若クハ水雷艇 火箭一發又ハ探海燈ヲ水平ニ振ル 二、南方哨艦ハ八點鐘毎ニ其ノ位置ヲ電報スヘシ			

二、哨艦順序ヲ定ムルコト左ノ如シ

南方哨艦 九月三日ヨリ左ノ順序ヲ以テ交番ニ晝夜宛服務ス

沖島 橋立 松島

北方哨艦 九月一日ヨリ第六驅逐隊ノ諸艦交番服務ス司令ハ其ノ順序ヲ豫定シ報告スヘシ

シ

(丁隊司令
第二六號)

已ニシテ九月九日神風及ヒ初霜襲撃工事ヲ終リ、横須賀ヨリ來著セシヲ以テ、第六驅逐隊ノ哨戒法ヲ改メ、同隊ノ一半ヲアレキサンドロフスキーニ留メ、一半ヲシテ間宮海峡南口附近ヲ根據トシツ、以前ノ如ク北方哨區ノ哨戒勤務ニ服セシムルコト、爲シ、(單月、曉ハ十一日ヨリ十三日迄解ヲカストリ、灣迄護送シ揚陸援助)十日中尾司令官ニ向ヒ、現任務ヲ終リ次第、臺南丸(同司令官旗艦)ヲ率非テニ從事セリ本節第九目ニ詳ナリ

一、休戰條件ノ細目ニ就テハ未タ何等ノ命令ヲ受領セサルモ日露兩國全權委員ハ本月五日ヲ以テ媾和條約ノ調印ヲ了シ休戰ニ關スル議定書ハ同日ヨリ實施セラル

二、麾下艦艇ハ何分ノ命アル迄露國ニ屬スル領土ヲ砲撃スヘカラス

三、海上ノ捕獲ハ休戰ノ爲メニ停止セラル、コトナキヲ以テ露國軍資輸送ノ船舶ニ對シテハ從來ノ通り嚴密ナル監視ヲ要ス

四、自今N地點方面ニ於テハ哨戒勤務中ニアラサル艦ハ受命後三時間以内ニ出動シ十海里ノ速力ヲ出シ得ル如ク準備シアルヘシ

五、第六驅逐隊ハ明十一日ヨリ半數宛間宮海峡南口附近ヲ根據トシ警戒ニ任ス(丁隊機密第一八七號)

越テ十八日同司令官ハ片岡司令官ヨリ、滿州丸ヲ率非テ速ニコレヲ來リ、本職ト會合スヘシト、ノ電訓ヲ受ケシヲ以テ、同方面ニ在ル麾下艦艇ノ指揮ヲ中尾司令官來著迄、一時毛利鎮遠艦長ニ命シ、中尾司令官ニハ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

一、休戰條約第五條ニ依リ協定セラルヘキ細目ニ就テハ何等ノ命令ニ接セス

本職ハ第三艦隊司令長官ニ會合ノ爲メ滿州丸ヲ率井一時九春古丹ニ回航ス

二、貴官ハ本職不在中アレキサンドル方面ニ在ル麾下諸隊ヲ率井アレキサンドル港ヲ根據地トシ該方面ノ警備ニ任スヘシ

三、北遣艦隊ニ於テ鹵獲シタル左記ノ戰利物件ハ目下川浪鎮遠副長(編者曰ク海軍中佐川浪安勝ナリ)ヲシテ後送準備ヲ爲サシメアルヲ以テ萬田山丸到着次第成ルヘク速ニ九春古丹ニ回送スヘシ

小蒸氣船

一隻

「ライター」

四隻

錨 鎖

若干

(丁隊機密第
一九七號)

斯デ出羽第四艦隊司令長官ハ滿州丸ニテ同日出發シ、二十日コルサコフニ入り、中尾同司令官ハ臺南丸ニテ同日アレキサンドロフスキーニ到着シ、北遣艦隊機密第四五四號命令(本節第二目參照)ヲ受領セリ、即チ同方面ノ警備ハ出羽司令長官滿州丸、臺南丸ノ二隻ヲ指揮シテ之ニ任シ、中尾司令官ハ見島沖島、鎮遠ヲ指揮シ、小樽ヲ根據トシテ同方面ノ警備ニ任スルモノナリ、是ニ於テ同司令官ハ二十一日其ノ旗艦ヲ沖島ニ移セシカ、同日出羽司令長官ヨリ、驅逐艦ハ哨區ヲ引上ケ、艦隊ハ總テアレキサンドロフスキーニ集合シ居ルヘキコト、及ヒ二十一日ニハ、同驅逐艦隊ハ便宜コルサコフニ回航シ、片岡司令長官ノ指揮下ニ入ラシムヘキコト等ノ電訓ヲ受ケシヲ以テ、所要ノ訓令ヲ久保田第六驅逐隊司令ニ與ヘ、二十六日沖島鎮遠、見島ヲ率井テ出港シ、二十九日

小樽ニ入レリ、而テ第六驅逐隊ハ二十三日出港シテコルサコフニ向ヒ、(二十四日午後同港ニ入ル)出羽司令長官ハ二十五日アレキサンドロフスキーニ著セシカ、二十八日暴風アリ、同地方ノ家屋、棧橋、在港ノ船舶等悉ク損害ヲ蒙レリ、此ノ際滿州丸、臺南丸モ亦雙錨泊ニテ機關ヲ徐轉シツ、アリシモ、尙危險ヲ感セシニ因リ、拔錨出港セントセシカ、激浪船體ヲ撃チ、動搖烈シカリシカ爲メ、滿州丸ハ揚錨機ノ齒輪ヲ、臺南丸ハ「コントローラー」ト揚錨機ノ「ブレーキ」トヲ破損シ、行動上一日モ速ニ修理ヲ要スルニ至リシヲ以テ、臺南丸ハ二十九日、滿州丸ハ三十日、何レモ修理ノ爲メ出港シテコルサコフニ向ヒ、兩艦トモ十月一日同港ニ入り、二日ヨリ工作船關東丸ニテ修理ニ著手シタリシカ、同日片岡司令長官ヨリ、第四艦隊ヲ率井、當分ノ間小樽ヲ根據トシテ同方面ノ警備ニ任シ、傍ヲ助メテ教育訓練ヲ厲行スヘキ訓令ヲ受ケタルヲ以テ、七日出港シテ八日小樽ニ入港シ、(滿州丸ハ四日臺南丸ハ六日修理完成)アレキサンドロフスキー方面ハ九月三十日以來、一ノ警備艦艇ナキニ至レリ、

第三章 日本海海戰後ヨリ平和克復ニ至ル北遣艦隊以外艦隊ノ行動

第一節 行動概要

日本海海戰ニ於テ、露國太平洋第二、第三艦隊中數隻ノ艦艇ハ逃逸シ、浦鹽斯德艦隊モ尙現存スルヲ以テ、未タ警戒ヲ緩ウスヘカラサルモノアリ、是ニ於テ佐世保軍港ニ在ル東郷聯合艦隊司令長官ハ、五月三十日同軍港ニ在泊中ナル上村第二艦隊司令長官ニ向ヒ、損害少キ第二戰隊ノ各艦ヲ率井テ鎮海灣ニ回航シ、同地ニ在ル第一、第二艦隊及ヒ特務艦隊ヲ指揮スヘキコトヲ

命シ、竹敷ニ在ル片岡第三艦隊司令長官ニハ、麾下艦隊ヲ率テ對馬海峽ヲ哨戒シ、敗殘ノ敵ニ對シテ警戒スルト共ニ、浦鹽方面ニ北航スル密航船ノ拿捕ニ任セシメ、一面ニハ、増遣艦隊東航ノ爲メ、久シク蓄手スル能ハサリシ麾下艦艇ノ修理ニ順次著手セリ。(修理ノ状況詳細ハ、卷末附表ニ掲ク)次テ六月一日伊集院軍令部次長ニ向ヒ、上海、吳淞等ニ入港通竄セル敵ノ特務艦竝ニ軍用船ハ、當然外交手段ヲ以テ處分シ得ヘシト信スレトモ、若シ武力手段ヲ用フルノ必要アラハ、直ニ麾下ノ二三艦ヲ急行セシムヘシトノ意見ヲ提出セシニ、之ニ對シテ即日同次長ヨリ、支隊派遣ヲ望ムコト、及ヒ同隊ヲ福建省沿岸マテ南下遊弋セシメラレタシ、トノ返電アリシヲ以テ、二日上村第二艦隊司令長官ニ向ヒ、一等巡洋艦一隻、二等巡洋艦二隻、驅逐艦二隻ヨリ成ル一支隊ヲ編成シ、瓜生第二艦隊司令官ノ指揮下ニ直ニ揚子江口ニ直航セシメ、舟山叢島ニ敵ノ殘艦ナキヤヲ搜索シ、且上海、吳淞ニ在ル敵ノ假裝巡洋艦、軍用船等ヲ威嚇シ、以テ聲援ヲ我カ外交ニ與ヘ、同時ニ機ヲ見テ南清福建省沿岸迄遊弋シ、目下柴棍ニ集合シツ、アリト傳フル敵ノ運送船ヲ威脅セシムヘキコト、同支隊ハ南遣支隊ト稱スヘキコト、給炭用運送船ヲ伴フ必要アラハ特務艦隊司令官ト協議スヘキコト等ヲ命セリ。(瓜生司令官ハ常磐浪速高千穂東雲漣ノ五隻ト給炭船ハ特務艦隊司令官ト協議スヘキコト等ヲ命セリ、嚴島丸トヲ率非テ其ノ任ニ赴ケリ本章第二節ニ詳ナリ)已ニシテ四日東郷聯合艦隊司令長官ハ、佐世保ヨリ鎮海灣ニ回航シ、親シク聯合艦隊ヲ指揮スルコト、ナリシカ、哨戒ノ方法等ハ概ネ上村司令長官ノ定メタルモノヲ襲用セリ、十四日戰時編制改定セラレ、第四艦隊新ニ成リシヲ以テ、日本海ヲ以テ若干作戰區域ニ劃定シ、各艦隊ノ配備ヲ定メ、(東郷聯合艦隊司令長官ノ劃定シタル作戰第一章ニ掲ケアリ)之ヲ大本營ニ報告シテ其ノ意見ヲ問合セシニ、十七日ニ

至リ伊集院軍令部次長ヨリ、左ノ返電ニ接シタリ、

今後海軍作戰ノ方針ハ一面敵ノ敗殘艦隊ヲシテ海上ニ活動スルヲ得サラシメ機ヲ見テ之ヲ殲滅セントスルノ目的ヲ以テ我カ艦隊ヲ配備スルト同時ニ努メテ速ニ艦艇ノ修理ヲ竣リ更ニ兵力ヲ充實シテ戰局ノ變化ニ應セントスルモノニシテ此ノ大方針ニ甚シク背馳セサル限リ陸軍作戰ノ進捗ニ應シ海陸ノ協同作戰ニ從事セントスルモノナリ

此ノ方針ニ基キ北韓方面ニ進出スルハ見合セ此ノ際先ツ樺太コルサコフヲ略取シ次ニアレキサンドロフスキヲ攻略スルコトニ帷幄ノ議一決ス而テ此ノ任務ニ當ルヘキ獨立第十三師團ノ輸送船隊ハ六月三十日頃迄ニ陸奥灣ニ集合シ艦隊ノ指導ニ依リ進發スルコトニナルヘキ筈不取敢本日獨立第十三師團作戰計畫ヲ郵送ス尙之ニ關スル詳細ノ命令輸送計畫等ハ何レ決定次第送付スヘシ艦隊ヲ以テ右船舶輸送及ヒ上陸實施ヲ掩護スルコトニ關シテハ更ニ何分ノ命令アル筈ナレトモ豫メ之ニ應スルノ心算ヲ立テ置カレンコトヲ希望ス

現下ノ狀況以上ノ如クナルヲ以テ日本海ヲ確然タル作戰區域ニ分チ受持ヲ確定スルコトハ先ツ見合セ全艦隊中ヨリ相當ナル兵力ヲ分遣シテ樺太方面ノ任務ニ當ラシメ主力ハ矢張り朝鮮海峽方面ニ在リテ敵ニ備ヘ之ト同時ニ艦艇ノ修理ハ依然進行セシムルノ方針ヲ取ラシメンコト希望ノ至リニ堪ヘス尙海軍第三期作戰方針其ノ他ニ就テハ今明日中貴地ニ到著スヘキ山下參謀ヨリ聞取ラレタシ

是ニ於テ東郷聯合艦隊司令長官ハ、前記ノ計畫ヲ已メ、同時ニ出羽第四艦隊司令長官ヲシテ片岡